

池田大作全集

27

講義

目次

凡例	6
序	9

「撰時抄」講義

序 講

第一 御述作の由来	17
第二 本抄の大意	25
第三 本抄の元意	55

撰時抄

第一章 時を要となすを標す	63
第二章 仏教は時によるを明かす	87

第三章	機教相違の難を会す……………	101
第四章	正像末に約し滅後の弘教を明かす……………	117
第五章	經文を引いて証す……………	133
第六章	釈の文を引いて証す……………	149
第七章	正法の初めの五百年の弘教……………	167
第八章	正法の後の五百年の弘教……………	179
第九章	像法の初めの五百年の弘教……………	187
第十章	像法の後の五百年の弘教……………	199
第十一章	日本に六宗の伝来……………	213
第十二章	天台宗の弘通……………	223
第十三章	妙法流布の必然を明かす……………	237
第十四章	能弘の師徳を顕す……………	249
第十五章	総じて問答料簡す……………	263
第十六章	竜樹・天親の弘通……………	271
第十七章	天台大師の弘通……………	291

第十八章	伝教大師の弘通	311
第十九章	末法について料簡す	331
第二十章	浄土宗を破す	343
第二十一章	禅宗を破す	355
第二十二章	真言の善無畏を破す	361
第二十三章	真言の弘法を破す	373
第二十四章	聖覚房を破す	385
第二十五章	慈覚を破す	395
第二十六章	慈覚の本師違背の失	401
第二十七章	問答解釈して慈覚を破す	415
第二十八章	閻浮第一の法華經の行者	429
第二十九章	閻浮第一の智人	439
第三十章	智人たるの証文	445
第三十一章	閻浮第一の聖人	457
第三十二章	聖人たるを広く釈す	463

第三十三章	日本第一の大人	481
第三十四章	外難を遮す	489
第三十五章	現証の文を引く	501
第三十六章	御身の符合を明かす	509
後記	「池田大作全集」刊行委員会	521

凡 例

一、本書は、『新編日蓮大聖人御書全集』（第五十九世日亨上人編、創価学会発行）に収録の「撰時抄」を原典とした講義録である。

一、本書の構成は第二十六世日寛上人の「撰時抄愚記」（本書では「文段」と記す）によって三十六段に分け、各段を章とし、本文、通解、語訳、講義とした。

一、御書の引用は『新編日蓮大聖人御書全集』により、原文通りとした。また、御書のページ数は（御書 ㊦）で示した。

一、『日寛上人文段集』（聖教新聞社発行）からの引用は（文段集 ㊦）で示した。

一、『六卷抄』（日寛上人著、聖教新聞社発行）からの引用は（六卷抄 ㊦）で示した。

一、『富士宗学要集』（日亨上人編、創価学会発行）からの引用は（富要 卷 ㊦）で示した。

一、法華経の引用は『真訓両読・妙法蓮華経並開結』（第六十六世日達上人編、創価学会発行）により、（妙法蓮華経並開結 ㊦）で示した。

一、経・論・釈等の引用は原則として『大正新脩大藏経』により、（大正 卷 ㊦）で示した。なお、読みやすくするために、漢文を書き下し文に改め、漢字をひらがなに直したものもある。

一、『卍大日本統藏経』からの引用は（卍統 卷 ㊦）で示した。

一、その他の引用は、そのつど書名を掲げた。

池田大作全集

第二十七卷

講義

序

私は、若いころ、日道上人の御伝土代ごでんどうだいを読みましたとき、三祖日目上人伝の最後のところの、

「目もく云わく暫しばらく置くべくば法然ほうねん已然いぜんの念仏時過ときぎたるに、沙汰さたすべきは法然ほうねん已後いごの念仏身に当たり時に当たれり云云、万人ああ道理と称美讃歎しょうびさんたんす云云」（日蓮正宗聖典六〇四頁）

の文を読み、理解できなかったものでありましたが、後のちに撰時抄の

「如来の教法は必ず機に随うという事は世間の学者の存知なり、しかれども仏教はしからず、中略されば機に随つて法を説くと申すは大なる僻見びやっけんなり」（御書二六七頁）の御文と、

「せん詮ずるところ機にはよらず時いたらざれば・いかにもとかせ給はぬにや」（御書二五七頁）

の御文を拝して、日目上人が十宗房道智を破された意味が了解りようかいできたのであります。

宗祖日蓮大聖人は、

「夫れ仏法を学せん法は必ず先づ時をならうべし」（御書二五六ページ）とも、

「仏教を弘めん人は必ず時を知るべし」（教機時国抄四三九ページ）

ともおおせになって、今日の末法の時が、仏教を修行する人々にとって、いかに大切であるかを御教示になっているのであります。

この時にあたって、創価学会会長池田大作先生が、本年春に報恩抄の講義を物せられて出版せられたのに次いで、ここにまた、撰時抄の講義を完成せられ、出版せられることになったのであります。先の報恩抄の講義は、従来の講義書と比較できないほど、詳細に、しかも世界の思想までを取り入れて講義せられているのに、深く感銘したのであります。

撰時抄は、報恩抄と、ほとんど同じ紙数をもつ長文の御書でありますゆえに、この講義を書くことは心労のことであつたろうと推測するのであります。

日蓮大聖人は末法の本仏として、

「今正しく是れ其の時なり、決定して大乘を説く」（方便品一七三ページ）

このために撰時抄を御書きになり、南無妙法蓮華經を宣説せられたのであります。

しかるに、今日の仏教徒は、いまだに時を解せず、しかも正法誹謗の徒党をなしている観があります。

かかる時期に、池田先生は、世界の人々に謗法ほうぼうを撰捨せんしやし正法の南無妙法蓮華經を撰取せんしゆせしむるため、進んで本撰時抄講義を出版せられたことを、私は深く感謝するのであります。

要するに、池田先生は、久遠くおん元初がんじよ本因妙ほんにんみょうの南無妙法蓮華經を、今の時に広宣流布せしめようとする念願のほか、なにもないのであります。

世の識者、よろしく、この意を知られて、本講義を読まれることを勧すすめる次第であります。

昭和三十九年十一月一日

総本山六十六世 日 達

「撰時抄」講義

序

講

第一 御述作の由来

「撰時抄」の講義にあたり、まずその序講じょこうとして、

第一に本抄御述作ごじゆつさくの由来ゆらいを明かし、

第二に本抄の大意を論じ、

第三に本抄の元意がんいについて論ずることとする。

本抄は建治元年けんじ、聖寿五十四歳の時の御述作である。そのことは本抄に、「第三には去年いぬるとし文永ぶんえい四月八日さんもんのかよう左衛門尉に語つて云く、王地おうちに生れたれば……」（御書二八七頁）と記されて、文永十一年の事を去年と仰せられているので、御執筆の当年は文永十二年であることが明白である。そして文永十二年は四月に改元されて建治元年となったのである。

文永十一年五月には、日蓮大聖人は身延山みのぶさんへ入られているので、本抄は身延山において、御入山の翌年に御執筆されたことになる。

1 御正筆ごしようひつの所在

本抄の御正筆は、玉沢たまざわの妙法華寺に、全体が五軸じくとして保存されており、若干じやつかんの欠紙けつしもあるが、ほと

んど完全に近いものである。

玉沢の妙法華寺は、日昭にっしょうの系統である。日昭は鎌倉の浜戸はまどにいて、ここが日昭門流の本拠であったが、後に兵乱の災わざわいなどにより、伊豆の玉沢へ移転したものである。

さて、富士においては、日興上人が、日蓮大聖人の御入滅後、御抄を集められたことが「富士一跡門徒存知とぞんちの事こと」に記録されており、その「撰時抄」の項は、次のようになっている。

「一、撰時抄一卷、今開して上中下と為す。

駿河国西山由井某するがのくにしやまゆ いぼう たまわに賜る、正本日興に上中二巻之れ在り此中に面目下巻に於いては日昭が許に之れ在り（御書一六〇四）と。

右の「富士一跡門徒存知の事」の記録によれば、日興上人のもとに上中二巻があり、日昭のもとには下巻しかなかったはずである。しかし、富士の上巻と中巻は、その後どこへ行ったのかは不明のままである。

そのほか、中山の記録（中山宝蔵にある富木常忍と きじょうにんの常修院本尊聖教事という記録）には、上下二巻よりなる「撰時抄」があったといい、身延の記録には上下二巻に分かれているもののうち、上巻だけ身延にあったと伝えている。しかし、身延の上巻は明治八年の大火で焼失してしまったといわれている。

このように「撰時抄」は、御草案ごそうあんと御正本ごしょうほんのように、二種類があったのかもしれない。

対告衆たいごうしゆの西山由井某については、芝川しばかわが富士川に合流する河合かわいに住していた由井氏は日興上人の外戚がいせき

にあたる人で、この人以外には考えられない。

最近の日蓮宗学者のなかには、「撰時抄」のごとき重要な御抄は、富木、四条氏等のような有力な檀那^{だんな}へ賜^{たまわ}るべきで、西山由井某というような人が対告衆^{たいごしゅう}となるはずがないとの意見もあるが、それはいつべん片を知って全体を知らない者の偏見^{へんけん}であろう。弘安三年の「諫曉八幡抄」のごとき、長文の、しかも重要な御抄が、宛名^{あてな}は明確でないが、富士大石寺に厳存^{げんそん}している例もあるのである。

2 御述作^{ゆらい}の由来

日蓮大聖人の御抄を拝するには、日蓮大聖人の出世の本懐^{ほんがい}が三大秘法の御建立^{ごこんりゆう}にあり、御一代の化導はすべて三大秘法の御建立を中心として行われていたことを知らなくてはならない。

三大秘法とは、本門の本尊、本門の戒壇、本門の題目である。日蓮大聖人はまず、建長五年四月二十八日、三十二歳にして南無妙法蓮華經の本門の題目を立てられ、弘安二年十月十二日には、本門戒壇の大御本尊を御建立あそばされた。そして、この大御本尊とともに、本門戒壇の建立を弟子の日興上人に相伝され、弘安五年十月十三日、六十一歳で御入滅されたのである。

三大秘法の説示の順序は、このような次第であるから、御抄にもまた佐渡以前と佐渡以後のごとき相違があるのは当然である。

文応元年七月には、「立正安国論」をもって幕府を諫められたが、八月二十七日には松葉ヶ谷の法難に遭い、翌文応二年（改元して弘長元年となる）五月十二日には、伊豆の伊東へ流された。「立正安国論」の肝要は、邪法を禁じて正法を立て、国を安んずべきことであると仰せられているが、いまだ三大秘法の名も出だされず、表面は法然の念仏を破折されており、権実相對が主となっている。弘長二年に赦されて鎌倉へ帰られ、翌文永元年十一月には、安房へ行かれて小松原の法難に遭い、弟子は打ち殺され、御自身も傷を負われた。

文永五年、いよいよ蒙古襲来の近いことを観ぜられ、十一通の書状をもって、幕府の要人、七大寺等に警告を発するとともに、公場対決を迫られた。

文永八年九月十二日、捕らえられて竜の口に送られ、斬罪に処せられるところを免れて、佐渡へ流される。文永十一年、佐渡から御赦免になるまで在島二年五カ月の間、「開目抄」を述作されて人本尊の開頭をなされ、「観心本尊抄」においては法本尊の開頭をなされた。

佐渡から帰られた大聖人は文永十一年四月、鎌倉において、平左衛門尉に対し、第三回目の国主諫暁をされたが、ついに容れられないため、翌五月十二日、鎌倉を出て身延山に入られた。

その身延入山二年後の建治二年には、清澄寺の師道善房の死去を聞かれて、「報恩抄」を撰述され、清澄寺へ送られている。

「三沢抄」には「法門の事はさどの国へながされ候いし已前の法門は・ただ仏の爾前の経とをぼしめ

せ……」(御書一四八九ジ)と仰せであり、「開目抄下」には「日蓮といふし者は去年九月十二日子丑ねうしの時に頸くびはねられぬ、此れは魂魄こんぱく・佐土の国にいたりて返年かえるとしの二月・雪中にしるして……」(御書二二三ジ)と仰せのように、佐渡以後においては、日蓮大聖人こそが末法まつぽうの御本仏であらせられ、三大秘法の御本尊を立てられて、末法万年のほか未来永遠に民衆を救われることを明かされたのである。

そして、五重ごじゆうの相對そうたい、五重三段を立てられ、「開目抄上」には「一念三千文底秘沈もんでいひちん」(御書一八九ジ、趣意)と判ぜられ、「觀心本尊抄」には「彼は脱だつ此れは種しゆなり」(御書二四九ジ)等と判ぜられている。

権実相對の段階では、爾前にぜんごんきやう權教たる念仏や禪の破折はしやくが中心となるが、真言宗は比叡山ひえいざんの天台法華宗と合体したようなかたちでもあり、あるいは表面は天台宗と称しつつ、その内容は真言の邪法というような実態であつた。そこで、佐渡以後においては、とくに真言を破し、さらに真言の邪法へと転落した天台宗の邪義を破折されている。とくに、「撰時抄」「報恩抄」においては、徹底的にこれを究明されているのである。

「撰時抄」には「真言宗と申すは上の二のわざはひ災にはにるべくもなき大僻見なり」(御書二七五ジ)と仰せられ、さらに「伝教大師は三論・法相・華嚴等の日本の碩徳せきとく等を六虫とかかせ給へり、日蓮は真言・禪宗・浄土等の元祖さんちゆうを三虫となづく、又天台宗の慈覺じかく・安然あんねん・慧心えしん等は法華經・伝教大師の師子の身の中の三虫なり」(御書二八六ジ)と破折されている。

その上で本抄においては、別して末法の時を撰取せんしゆすべきことを明かされているが、それは、一には末

法において必ず文底深秘もんていじんひの大法が広宣流布こうせんるふすべきこと、二には末法において日蓮大聖人をもつて下種の本尊となすべきことを明かすためであると、日寛上人にちかんしょうにんは仰せられている（文段集二一七ページ）。この点については、次の「第二 本抄の大意」において、詳論しょうろんする。

本抄に「天台・伝教のいまだ弘通しましまさぬ最大の深密じんみつの正法経文おもてげんぜんの面に現前げんぜんなり、此の深法じんぽう・今末法の始はじめごとひやくさい五五百歳いちえんぶに一閻浮提だいいに広宣流布すべき」（御書二七二ページ）と仰せられているが、「最大の深密の正法」とは、もとより三大秘法である。ゆえに翌年に御述作の「報恩抄」には、本尊、戒壇、題目と、明らかに三大秘法の名を示されているのである。

そして本抄では正像末しょうぞうまつの三時にわたる三国仏教さんごくの流布の歴史を論じられているが、しかも、その元意がんい、すなわち御内証ごないしやうは、末法の広宣流布にあり、しかも未来の世界広布を予言されている。すなわち「前代未聞みもんの大闢諍とうじやう・一閻浮提に起るべし其の時・日月所照の四天下てんげの一切衆生……一の小僧ひとりを信じて無量の大僧等八万の大王等、一切の万民・皆頭を地につけ掌たなごころを合せて一同に南無妙法蓮華經となうべし」（御書二五九ページ）等と仰せられており、その予言のとおりに創価学会が出現し、世界広布の実現に着々と邁進まいしんしつつあることは、「第三 本抄の元意」に論ずるとおりである。

第二 本抄の大意

1 題号だいごうの意義

「撰時抄」とは「時を撰えらぶ御抄」という意味である。ここでいう「時」とは、現代人の考える「時間」をいうのではなく、衆生の機根と仏とが相あ応おうする時をいうのである。

衆生の機根とは、その衆生全体が、たとえば仏教に縁があるかないか、大乘に縁があるか、小乗に縁があるか、というように、どのような教法によって得道できるかという衆生の性分をいう。

衆生にはこのような機があつて、仏の出現を感ずるのであり、仏は機を受けて応ずるゆえに感かん応おうといふ。

「御義口伝上」には「衆生に此の機有つて仏を感ず故に名なづけて因なと為す、仏機を承うけて而しかも応おず故に名けて縁となす、是これを出世の本意と為す」（御書七一六頁）と仰せられている。

法華經序品第一に「一時いちじ、仏、王舎城耆闍崛山おうしやじようぎしやくつせんの中に住したまい……」（妙法蓮華經並開結一一九頁）等とあるが、すべての經典の冒頭はこのようになっている。また方便品第二には「未いまだ曾かつて説とかざる所以ゆえんは説時せつじ未だ至らざる故なり 今正まさしく是これ其の時なり 決定けつじようして大乘を説く」（妙法蓮華經並開結一七三頁）とあるが、これは法華經を説くべき「時」がきたか、こなかったかを示しているのである。

また「御義口伝下」には「第十四時我及衆僧俱出靈鷲山じがぎゆうしゆそうくしゆつりようじゆせんの事 御義口伝に云く靈山りようせん一いち会儼然未散いげんねんみさんの文

なり、時とは感応末法の時なり」(御書七五六頁)と仰せであり、さらに「時を待つ可きのみ」(御書一〇二二頁他)とも仰せられているが、これらはすべて機感相応の時を示されたものである。

爾前経は機に応じて種々の説法をするから、機が主体である。法華経は説くべき時がくれば、信じて信じてなくても、強いてこれを説くので、時が主体となるのである。

「撰時抄」においては、正法、像法、末法のそれぞれの時代を通じて、機感相応の正法を説き示し、結論としては、末法には必ず寿量品文底秘沈の三大秘法が広宣流布すべきこと、その三大秘法の末法の御本仏が、日蓮大聖人であらせられることを明かされている。

以下、この「撰時抄」の題号そのものの解釈を、日寛上人の文段によって明らかにしよう。

まず、この題号には通別があり、その通別に、また次のような三意がある。

一には、撰時の二字は別である。別してこの抄に題するゆえに。抄の一字は通である。諸御抄に通ずるゆえである。

二には、撰の字は通である。宗教の五箇に通ずるゆえ、次のようになる。第一に、権迹を撰び捨て本門を撰び取るのは、教を知ることになる。第二に、権迹の機を撰び捨て本門の直機を撰び取るのは、機を知ることになる。第三に、権迹の時を撰び捨て本門の時を撰び取るのは、時を知ることになる。第四に、権迹流布の国を撰び捨て本門流布の国を撰び取るのは、国を知ることになる。第五に、前代権迹を撰び捨て末法適時の本門を撰び取るのは、教法流布の先後を知ることになる。ゆえに、撰の一字

は宗教の五箇に通ずるので、通というのである。時の一字は別して第三にあるゆえ、別というのである。

三には、文通・意別という立て分けがある。文通というのは撰は撰捨と撰取とに通じ、時は正像末に通ずる。ゆえに文通というのである。意別とは、撰はただこれ撰取であり、時はただこれ末法であるゆえに、本意は別して末法の時を撰取するにある。ゆえに「撰時抄」というのである。

問う、別して末法の時を撰取するとは、いかなる意味か。

答う、ここにまた二意がある。一には、末法においては、必ずまさに文底秘沈の大法が広宣流布するのである。二には、いま末法においては、まさに日蓮大聖人をもつて下種の本尊となすべきである。

当抄には末法広宣流布の文は多いが、次に三文を引いて、これを証明しよう。

「彼の大集経の白法隠没の時は第五の五百歳当世なる事は疑ひなし、但し彼の白法隠没の次には法華経の肝心たる南無妙法蓮華経の大白法の一閻浮提の内・八万の国あり其の国に八万の王あり王王ごとに臣下並びに万民までも今日日本国に弥陀称名を四衆の口口に唱うるがごとく広宣流布せさせ給うべきなり」(御書二五八頁)と。

右の御文は、附文の辺は権実相対であつて、ただ「法華経」といっている。しかし、元意の辺は文底深秘の大法である。ゆえに、その趣旨は、法華経の本門寿量品の肝心・南無妙法蓮華経の大白法の広宣流布である。肝心とは即文底の意である。

二には「上行菩薩じようぎようの大地より出現し給いたりしをば弥勒菩薩・文殊師利菩薩・觀世音菩薩・藥王菩薩等やくおうの四十一品の無明むみようを断だんぜし人人も元品がんぽんの無明を断ぜざれば愚人といはれて寿量品の南無妙法蓮華經の末法に流布せんずるゆへに、此の菩薩を召し出されたとはいしらざりしという事なり」(御書二八四ページ)と。

右の御文は、附文の辺は本迹相對ほんじやくそうたいである。ゆえに、ただ寿量品という。しかし、元意の辺は文底深秘の大法である。ゆえに、じつには、法華經の本門寿量品の肝心・南無妙法蓮華經が末法に流布するとの意味である。

三には「仏滅後に迦葉・阿難・馬鳴・竜樹・無著・天親・乃至天台・伝教のいまだ弘通しましまさぬ最大の深密じんみつの正法經文の面に現前おもてげんぜんなり、此の深法・今末法の始はじめ五五百歳に一閻浮提いちえんぶだいに広宣流布すべき」(御書二七二ページ)と。

右の御文は種脱相對しゆだつである。天台末弘みぐの最大深秘の大法とは、寿量文底の大法である。すなわち、この文も略されており、その意味は本門寿量の文底・最大深秘の大法ということである。

妙樂大師みょうらくは「もし文もんに随ずいつて解げを生ぜば、すなわち前後雜乱ぞうらんす。もし文の主旨たいしを得れば、すなわち元由がんゆに暗くらからず」と述べている。いま文の主旨を得て、この当抄の三つの文についてつぶさにこれを行うならば、法華經の本門寿量品の文底・最大深秘の大法、後五百歳に一閻浮提に広宣流布すべしという意味である。

問う、文底深秘の大法、その体いかん。答う、すなわちこれ天台末弘の大法であり、三大秘法随一の本門戒壇の大御本尊の御事である。

「顕仏未来記」には「本門の本尊・妙法蓮華經の五字を以て閻浮提えんぶだいに広宣流布せしめんか」（御書五〇七七）と仰せである。ゆえに、この本尊は、広宣流布の根源なのである。

次に、末法においては、日蓮大聖人をもつて下種の本尊となすべしとの御文を挙げれば、「法華經をひろむる者は日本国の一切衆生の父母なり（中略）されば日蓮は当帝とうていの父母・念仏者・禅衆・真言師等が師範しはんなり又主君なり」（御書二六五五）と。「法華經」とは意の法華經即ち本門の本尊の妙法蓮華經の五字であり、これは成仏の種子しゆしである。この種子の妙法五字をひろめて、日本国の一切衆生の心田しんでんに下種をなす。ゆえに父母というのである。ゆえに日蓮大聖人は一切衆生の父母である。またこれ師範であり、主君である。ゆえに、末法においては、まさに日蓮大聖人をもつて下種の本尊となすべしというのである。

これがこの御文の元意がんいであり、「開目抄」の始終と同意である。（以上、文段集二二七七―二二九九より）

2 釈子しやくし日蓮述ぶについて

本抄には「釈子日蓮述ぶ」との御署名ごしよめいがある。かつて流布した本の奥書おくがきには、「建治二年六月十日、

甲州波木井身延山に於て末代後学こうがく仏法興隆の為に作り畢おわんぬ、天台沙門しやもん日蓮之を撰せんす」とあるという。しかし、このような奥書があるうはずがない。第一に当抄は文永十一年のことを去年と仰せであるから、建治元年の御述作であつて、建治三年ではない。

また佐渡以前の立宗の初めの御抄なら、「天台沙門」の御署名もありえようが、身延入山後の当抄に、「天台沙門」などと仰せられるはずがない。じつには「釈子日蓮」云々との御署名であつて、この「釈子日蓮」の句の中にも重々のいわれがある。次に日寛上人の文段に準じて、その大要を述べる。

まず釈子に四句の分別がある。一には、身は釈子に似て心は釈子でない。すなわち禅宗、念仏宗、真言宗等の出家しゆつけがこれである。二には、身心ともに釈子でない者は、禅宗、念仏宗、真言宗等の在家の者がこれである。三には、身心ともに釈子である者は、日蓮大聖人、日興上人および末弟の出家の僧侶たちがそれである。四には、身は釈子でないが、心は釈子である者は、日蓮大聖人、日興上人の流れをくむ在家の者がそれである。

なかにおいても、日蓮大聖人こそ、身心ともに真実の釈子である。ゆえに「釈子日蓮述ぶ」と仰せになつてゐるのである。その意味を、次に五義のうえから論じてみよう。

第一に、日蓮大聖人は本化ほんけの再誕であるゆえに。法華經の涌出品ゆじゆつぽん第十五に「此等これらは是れ我が子なり是の世界に依止えしせり」(妙法蓮華經並開結四八七ページ)と。妙楽大師いわく「子、父の法を弘む。世界の益やくあり」と。ゆえに、日蓮大聖人は文字どおり真実の釈子である。また大聖人、日興上人の教えを正しく継

ぐ出家たちは、みなこれ本化である。なんとなれば、本化の菩薩は久遠より已来ただ本門寿量品の肝心を行ずるゆえである。「下山抄」には「五百塵点劫より一向に本門寿量の肝心を修行し習ひ給へる上行菩薩」(昭和新定第二卷一六八四頁)と仰せられている。すでに僧侶たちは、みなこれ一向に本門寿量の肝心を行ずるゆえに、所行の法は、まったくこれ本化に同じである。ゆえに、これ本化である。上行等は昔の本化であり、大聖人、日興上人の教えを正しく継ぐ僧は今の本化である。ただちに上行等をいうのではない。外典の「彼れは古の堯舜、此れは今の堯舜」と同じ用例である。

また大聖人、日興上人の教えを正しく継ぐ在家も、一向に本門寿量の肝心を修行するゆえに、みなこれ本化である。もししからば、当門流の在家も出家も、ともにこれ本化である。ゆえに「此等は是れ我が子」の涌出品の文にあてはまり、ならびにこれ真実の釈子となる。出家は身心ともに釈子であり、在家は心の釈子である。

第二に、日蓮大聖人は法の邪正を糾されるゆえに。章安大師の涅槃經会疏三にいわく「仏法を壊乱するは仏法中の怨なり(中略)能く糾治する者は是れ護法の声聞、真の我が弟子なり」(正統三十六卷三八四頁)と。禅宗の教外別伝とか、念仏宗の捨閉閑抛とか、真言宗の第三戯論などは、仏法を壊乱するものである。もししからば「仏法中怨」の責めを、どうして免れえようか。彼らはすでに仏法中の怨敵である。どうして釈子と名づけられようか。ゆえに出家、在家ともに釈子ではない。

しかるに、日蓮大聖人は、横に権実の奥旨をきわめ、豎に本迹の淵底を尽くされている。むしろ「能

く糺治する者」というべきではないか。ゆえに「真の我が弟子」であり、真実の釈子なのである。

また大聖人、日興上人の教えを正しく継ぐ行者は、在家も出家もともに仰いで大聖人の仏法を信じ、わずかの己義もない。ゆえに法の邪正においては、ほんの少しの乱れもない。ゆえに真のわが弟子であり、真の釈子である。なかにおいても、わが創価学会こそ、最もよき弟子であり、釈子であると確信してやまない。また疏の中に「声聞しょうもん」というのは、大乘の声聞である。「仏道の声をもつて一切に聞かむ」とはこれである。このゆえに大菩薩であり、小乗の声聞ではないのである。

第三に、日蓮大聖人は能く謗法ぼうぼうを呵責かしやくされるゆえに。涅槃經第三にいわく「若し善比丘ぜんびくあつて法を壊る者を見て置いて呵責し、駈遣くけんし、挙処こしょせずんば、当に知るべし、是の人は仏法の中の怨あだなり。若し能く駈遣し、呵責し、挙処せば、是れ我が弟子、真の声聞なり」(大正十二卷三八一頁)と。「法を壊る者」とは禪、念仏、真言等である。しかるに、彼らの謗法を見て置いて呵責しなければ、仏法中の怨である。たとえば、叛逆はんぎやくの人を見てこれを責めなければ、自分も叛逆者となるのと同じである。

ただ、わが日蓮大聖人のみが、もっぱら如来の勅命ちよくめいを仰いで、身命も惜しまず、日々夜々にこれを呵責し、月々年々にこれを駈遣された。これこそ真の声聞であり、真実の釈子ではないか。もし当門流の行者といえども、謗法を呵責しなければ、「仏法中怨」の責めを免れることはできないであろう。どうして身命を惜しんで無上道を惜しまないでいられようか。

ところが、日蓮大聖人の破折はしやくにあい、怨嫉おんしつをいなく逆縁ぎやくえんの徒は国中にあふれたが、いまだ順縁じゆんえん広布、

本門戒壇の建立は実現せず、日蓮大聖人はこれを後世に託された。わが学会は、この仏意仏勅を奉じて、広宣流布をめざす大折伏を敢行し、今日の大発展を遂げた。ゆえに、創価学会員こそ眞の弟子であり、眞の釈子といえよう。

第四に、日蓮大聖人は能く此の經を讀持されるゆえに。法華經見宝塔品第十一にいわく「能く来世に於いて 此の經を讀み持たんは 是れ眞の仏子 淳善の地に住するなり」（妙法蓮華經並開結四一九頁）と。「来世に於いて」とは末法である。「讀み持たん」とは本門の題目である。「讀」とは行であり、「持」とは信心である。信ずるゆえにこれを持つ、もし信じなければどうして持てようか。ゆえに「持」はこれ信である。「此の經」とは法華經である。法華經とは、いま末法においては即これ本門の本尊、妙法蓮華經の五字である。これすなわち広略要の中には要の法華經である。文義意の中には意の法華經である。種熟脱の中には下種の法華經である。

ゆえに、よく末法において本門の本尊を信じて、南無妙法蓮華經と唱える人は、すなわち眞実の釈子であり、「眞の仏子」というのである。

「淳善の地に住す」とは、すなわち本門の戒壇である。およそ戒とは、非を防ぎ惡を止むるの義である。「淳」とは朴である。すでに非を防ぐゆえに淳である。惡を止むるゆえに「善」である。ゆえに戒壇の地をさして淳善の地というのである。ゆえに本門の本尊・妙法蓮華經の五字を、われもこれを信行し、人をしてこれを信行せしむるのは、眞の釈子であり、本門戒壇の地に住するのである。ゆえに大聖

人の真実の弟子でしだんな檀那は、真実の仏子であり、真実の釈子なのである。

第五に、日蓮大聖人は本因ほんにん妙の釈子なるゆえに。これは内証ないしやうの深秘じんびの相承そうじやうである。「釈」とは釈尊であり、「子」とは因いんの義のゆえに、釈尊の本因であり、それは日蓮大聖人になるのである。ゆえに釈子日蓮というのである。すなわち久遠くおん名字みょうじの釈尊の御身おんみの修行を、末法まっぽう今時こんじの日蓮大聖人の御身に移すゆえ、信行ともまったく同じとなるのである。

また日文字ひもじについては、甚深の御相伝がある。釈尊の童名どうみょうを日種太子にっしゆたいしといい、日蓮大聖人の童名は善日磨ぜんにちまろである。釈尊の仏としての果位かゐの御名おんなを慧日大聖尊えにちだいしやうそんといい、わが師の御名を日蓮大聖人という。国はすなわち日本国、山はすなわち大日蓮華山だいにちれんげざん、自然みやうじやうの名号は不思議に一致している。

問うていわく、だれびとが日蓮という御名を立てられたのか。答えていわく、大聖人御在世をもつて論ずるならば、御みずから日蓮と号されたのであるが、その本もとを尋ねるならば、釈尊の勅号ちよくごうというべきである。經文には明らかにこれを示しているが、ここでは秘す。(以上、文段集二一九ページ―二二二ページの趣意による)

3 本抄の大意

本抄は、まず時が肝要であることを明かされている。宗教の五箇ごかはいずれも大事であるが、とくに時

を誤つては、余の四をいかに論じて、なんにもならない。日寛上人は「若し時の一字を離れては、これを論ずること能わざるが故なり」（文段集二二三二）と述べられているとおりである。釈尊の在世においては、爾前にぜんの四十二年の間は、衆生の機根きこんに応じて頓・漸・秘密・不定とか、蔵・通・別・円えんのよう

に、種々の説法がなされた。

しかし、後八年の法華経には、「今正まさしく是これ其の時」（妙法蓮華経並開結一七三二）として、随自意ずいじいの法華経を説いている。もしいまだ時のいたらないうちに法華経を説いたならば、かえって誹謗ひぼうし惡道へ墮おちるばかりであり、反対に法華経を説くべき時がきているのに、あいかわらず阿含あごんや方等ほうとうを説いていたのでは、出世の本懐ほんがいを遂げることができなくなってしまうのである。

さて本抄においては、正像末しょうぞうまつにわたり、インド、中国、日本の三国にわたって滅後の弘教くきやうを明かされ、それぞれの時代で、それぞれの国における機感きかん相應そうおうの正法を明かされている。

釈尊の入滅の年代や、正像末の三時等については、仏教研究者の間で、いろいろの異説を生じ論争していることは、次節に述べるとおりである。いま日蓮大聖人が本抄に説き示される、三時、三国にわたる仏教の様相は、その時代相應の正法がひろまった時には、国も平和に民衆も幸福を楽しんできたが、反対に、たとえば仏教を信じて、時代相應の教えでなければ、国は衰亡し民衆も苦悩の底へ沈んでいったという事実の姿である。しかもこのことは、釈尊の予言どおりであり、經典にも明らかに示されているとおりなのである。

すなわち、インドにおいては、正法の初めの五百年に、迦葉、阿難等が小乗教を流布した。次いで正法の後の五百年には、竜樹、天親等が出現して権大乘教をひろめた。

次いで仏滅後千十五年に、仏教は中国へ伝来し、像法ぞうぽうの中期には、天台大師が中国において法華經の迹門しやくもんを広宣流布し、像法の終わりにには、伝教大師が同じく法華經の迹門を日本に広宣流布した。これらはすべて、仏の予言でもあり、歴史の事実が示すところでもある。

さて仏の予言によれば、滅後二千年を過ぎると末法となり、白法隱没びやくぽうおんもつの時代となる。この時に、上行菩薩が世に出現して、三大秘法を広宣流布し、一切衆生を救われるというのである。

日蓮大聖人の御出現は、仏滅後二千二百余年にあたるが、はたして当時の世相は、念仏宗、禪宗という邪教がはびこり、とくに真言宗が害毒を流していた。ゆえに大聖人は、まず「立正安国論」等において主として念仏を破し、次いで禪、真言を破折し、天台宗をも過時の教えとして廃し、天台の迹門に対して、独一本門どくいちほんもんの三大秘法を立てられたのである。

本抄においては、別して真言を破されている。中国における善無畏ぜんむゐが一行阿闍梨いちぎやうあじやりとともに、理同事勝りどうじしやうという邪義をかまえたこと。日本においては、弘法こうぼうが「戲論けろん」とか「無明の辺域へんいき」といった、釈尊や法華經を誹謗ひぼうしていること。聖覚房しょうがくぼうが釈尊を「牛飼うしかい・履物取りはきものとりにもたらず」といって、大謗法ほうぼうを犯おかしていること。とくに比叡山ひえいざんにおける天台第三の座主ざす、慈覚じかくは、身は天台座主として伝教大師の跡あとを継ぎながら、心は真言の邪義におち、一国謗法げんきやうの元凶げんきやうとなったこと等を挙げて破折されている。

ゆえに、当抄には「これよりも百千万億倍・信じがたき最大の悪事はんべり」（御書二七九ページ）と仰せられ、「報恩抄」には「蝙蝠へんぶく鳥のごとし鳥にもあらず・ねずみにもあらず梟きょう鳥ちようきん・破鏡はけい獣のごとし、法華經の父を食くらい持者の母をかめるなり日を射いとゆめ夢に・みしこれなり」（御書二一〇ページ）と、慈覺の謗法逆罪を徹底的に強折てつていてき とうしゃくされたのである。

そうして、「1 題号の意義」で述べたように、日寛上人の仰せのごとく、結論としては、末法には寿量品文底秘沈の三大秘法が広宣流布すべきこと、その三大秘法の御本尊は、即日蓮大聖人であることを明かされるのである。

ゆえに、当抄には「彼の大集經の白法びやくほう隱没いんもつの時は第五の五百歳当世なる事は疑ひなし、但し彼の白法隱没の次には法華經の肝心たる南無妙法蓮華經の大白法だいひつぽうの一閻浮提いちえんぶだいの内・八万の国あり其の国に八万の王あり王王ごとに臣下並びに万民までも今日日本国に弥陀みだ称名しょうめいを四衆の口口に唱うるがごとく広宣流布せさせ給うべきなり」（御書二五八ページ）、「天台・伝教のいまだ弘通くわうつうしましまさぬ最大の深密じんみつの正法經文の面おもてに現前げんぜんなり、此の深法・今末法の始はじめ五五百歳に一閻浮提に広宣流布すべき」（御書二七二ページ）、「日蓮は当帝とうていの父母・念仏者・禅衆・真言師等が師範しはんなり又主君なり」（御書二六五ページ）、「日蓮は閻浮提第一の者としるべし」（御書二八三ページ）、「日蓮は日本第一の法華經の行者なる事あえて疑ひなし……一閻浮提の内にも肩をならぶる者は有るべからず」（御書二八四ページ）、「此の国に智人あり国主此れを悪にくみてあだす怨」（御書二八五ページ）、「南無日蓮聖人となえんとすとも南無計はかりにてやあらんずらん」（御書二八七ページ）、「当

世には日本第一の大人だいじんなり」(御書二八九頁)等と仰せられているのである。

これらの御文はすべて、三大秘法の仏法が全世界に広宣布することと、日蓮大聖人が下種の主師親しゅししんの御本仏であり、世界の救世主きゅうせいしゅであることを宣言されているのである。

4 仏教史上の諸問題

「撰時抄」においては、インド、中国、日本の三国にわたり、正・像・末の三時にわたって仏教史を通観つうかんされ、末法まつぽうに三大秘法の広宣布と、日蓮大聖人が下種の主師親として、三大秘法を弘通くわつうされるところを明かされていることは、前項までに述べてきたとおりである。

さて仏教史の研究にあたり、教義上の問題とは別に、史実として古来こらい幾多の説が立てられている問題がある。いま「撰時抄」の講義にあたって、これらの問題を概略検討がいりゃくけんしてみたい。

(1) 仏滅の年代について

仏教を説いた釈尊は、一体いつ生まれ、いつ入滅したのか。その年代について数十種類の説がある。

西紀前四百年か五百年ごろという説もあれば、西紀前二千四百年というような説もある。

釈尊の入滅の年代が、このように二千年近い違いを生じている原因は、いろいろと考えられる。まず

インドにおいては釈尊の当時は年代をいちいち書きつけることをしなかった。仏教經典もいちいち釈尊が筆をとって書いたものではなく、後世になって弟子たちが、口伝くでんされてきたものを結集けつじゅうした。そうしている間に、年代があいまいになってきたものとも考えられる。

さらに、仏教は中央アジアから、チベットへと流布し、中国へ伝えられた。この流布していく途中においても、開祖の釈尊が遠い昔の存在であるということが、仏教に一つの權威をもたせる結果ともなった。したがって、この場合には年代を遠くにしがちであったものと思われる。

その結果、インド、ビルマ（現ミャンマー）、セイロン（現スリランカ）、チベット等から数十種の異説を生じた。仏教が中国へ伝来してからは、中国の僧は仏典を求めてインドへ旅行し、盛んに漢訳かんやくするとともに、仏滅の年代についても、それぞれ研究の結果を発表した。法顕ほつけん、法琳ほうれん、費長房ひちやうぼう、羅什らじゆ、玄奘げんじやう等がこれである。

しかし、こうした多くの説があるなかで、中国の隋ずい、唐時代とうの仏教隆盛期以後は、天台大師も、妙楽大師も、伝教大師も、日蓮大聖人も、また浄土宗等の開祖たちも、釈尊の入滅は西紀前九四九年という法琳の説を取り、『周書異記』しゅうしよいぎをその根拠としている。

次いで西欧人が東洋へ進出し、なかでもイギリス人はインドを統治する必要からも、盛んに古代インドについて研究し、また仏教についても研究を進めた。その結果、釈尊入滅の年代についても、アレキサンダー大王のインド攻略の時期や、アシヨーカ大王の遺跡から推定し年代を発表した。

次に、これら多くの説のうち、代表的なものを少し掲^かげて検討してみよう。

見出しの数字は、すべて西暦紀元前の年数である。

① 法顕伝の一〇八七年説

法顕が中国の都長安^{ちやうあん}を出発し、十五年にわたってインドを旅行した。その時、セイロン島で聞いた話として、一四九七年前に釈尊が入滅したとの伝説を書いている。これが西紀前一〇八七年にあたる。

② 『周書異記』の九四九年説

法琳が九四九年と定めた。『周書異記』（著者等詳細不明）には、周の昭王^{しやうおう}二十四年四月八日生誕、同じく穆王^{ぼくおう}五十二年二月十五日入滅とある。これが西紀前九四九年にあたる。日蓮大聖人は、「開目抄下」（御書二二五頁）に引用されているとおり、この説を用いられている。また天台、伝教大師や、浄土宗その他でも、中国、日本を通じて、この説に従っているものが多い。

③ 費長房の六〇九年説

中国の費長房は『歴代三寶紀』^{れきだいさんぽうき}に、この説を述べている。

④ 衆聖点記しゆせいてんきの四八五年説

釈尊滅後、毎年の雨期に安居あんごして、毎年一点を加えてきたものが、優婆離うぱり（十大弟子の一人）いらい九七五点を数えたというところから、この説ができた。衆聖点記は中国の古書であるが、セイロン島の宗教伝説によったものである。しかし①の法頭伝と比較して、同じセイロン島でも、なにゆえこのように年数の差を生じたのか。おそらく一年に雨期が二度ある地方があり、そこでは一年に二度の安居をしたであろう。そして一年を二年に数えたために、異なってきたのではないかとしている。（山川智應）

⑤ 西洋学者（二）四七七—八年説

西洋のインド研究学者が、次第に仏教の研究をはじめ、アレキサンダー大王がインドに侵入した年代から、アショールカ王即位の年代を推定すいていし（西紀前二五九年）、セイロン島の伝説から釈尊滅後二一八—九一年にアショールカ王が即位したものととして（ $259+218=477$ となる）、多くの学者は、釈尊の入滅が西紀前四八〇年前後であるとの説を発表している。（マックス・ミュラー、カニングラム等）

⑥ 西洋学者（二）三八五—六年説

アショールカ王がその勅令や事跡を石や岩に彫りつけた石柱や磨崖まがいが多くインドで発見され、そのなかから歴史上に現れている五人の王の在位年代から、アショールカ王の年代を推定し、西紀前二七〇—二七

一年とした。また釈尊入滅の年からアシヨーカ王の即位までは、セイロン島の伝説は前記のように二一八年等としているが、インドの伝説の多くは一〇〇年ぐらいであり、なかには一一六年としているものもある。いま仮に一一六年をとれば、西紀前三八五―六年(270+116)に釈尊は入滅したことになる。

なお、東大名誉教授の中村元氏は、同じような算出の仕方では、アシヨーカ大王即位の年代がその後の研究で少し動いたことを理由として、仏滅年代は西紀前三八三年とするのがよいとしている。

西洋学者の多くは、西紀前四―五百年をとり、小乗教の伝説の中にも、西紀前五百年ぐらいとするものが多い。これで数えると、釈尊入滅は今から二千五百年前となる。

しかし、日蓮大聖人の用いられた年代からすれば、釈尊の滅後はすでに三千年になる。現代の学者は、この『周書異記』の説は科学的でないというが、大乘仏教の隆盛時代に各宗派ともこれを用いていたのであるから、まったく根拠がないとはいえないであろう。

なお釈尊の誕生については、次のような違いがある。

「開目抄下」にいわく「周の第四昭王しゅうの御宇二十四年甲寅きのえとら・四月八日の夜中に天そらに五色ごしきの光氣こうき・南北に亘わたりて昼のごとし、大地・六種に震動しんどうし(中略)昭王・大に驚たいしき大史たいし・蘇由そゆう・占うらなつて云く『西方に聖人生れたり』(御書二二五頁)と。

この御文は『周書異記』をもとにされたものだが、この『周書異記』の昭王二十四年甲寅きのえとらに対し、『仏祖統紀』(中国宋代の志磐撰)では昭王二十六年甲寅きのえとらが正しいといっている。御書鈔しやう(室町時代後期、

京都で活躍した日健等による御書講述録、御書註（安土桃山時代、京都要法寺日性の著）、啓蒙（江戸時代、不受施派の開祖・日講の著）等も、干支等から推して二十六年が正しいといっている。二十六年ならば、西紀前一〇二七年誕生、西紀前九四七年仏滅となる。

また出家成道しゅつげじょうどうについても、西洋学者の多くは二十九出家、三十五成道とする。しかし、これでは無量義經の「四十余年未顕眞実」の文と、年数が合わなくなる。日蓮大聖人は、もとより十九出家、三十成道、八十入滅とされている。

(2) 仏教經典の結集けつじゆう

釈尊滅後に行われた大きな事業として經典の結集が挙げられる。その概要を次に述べるが、この点について諸説があつてまちまちである。

第一回結集。釈尊は五十年間の説法で多くの教えを説き示したが、これを筆記しなかつたので滅後すぐ仏典の結集が行われた。この時は摩訶陀國王舎城まかたこくおうしやじやうの南にある畢波羅窟ひつぱらくにおいて、國王阿闍世あじやせの外護のもと、摩訶迦葉まかかしやうの司会で行われ、阿難あなんは經藏きやうぞうを、優婆離うぱりは律藏りつぞうを、迦葉かは論藏ろんぞうをそれぞれ結集したという。これを窟内結集くつないという。この結集に参加しなかつたものは、窟外の西四哩りの地で婆師迦ばしかを司会として、經・律・論・雜集・梵咒ぼんじゆの五藏を結集したといわれる。これを窟外結集という。この第一回結集に千人が集まつたと『大論』にあるが、小乗では五百人と伝えている。「四条金吾殿御返事」には

「阿闍世王・或は夢のつげにより・或は耆婆がすすめにより……命をのべて四十年なり、千人の阿羅漢をあつめて一切経・ことには法華経を・かきをかせ給いき、今我等がたのむところの法華経は阿闍世王のあたへさせ給う御恩なり」(御書一一四九)と仰せられており、これを王舎城の結集ともいう。

第二回結集。仏滅後百年ごろ、耶舎陀阿羅漢等七百人によつて毘舍離城の大林精舎で、第二回仏典結集が行われた。当時、戒律を破る者が出てきたので、律蔵を吟味し、その誤謬を正したという。毘舍離の結集ともいう。

第三回結集。仏滅後二百年ごろアシヨーカ王の外護のもと、波吒釐子城(華子城)において目犍連帝須の司会で千人の比丘が参加して、第三回結集が行われたという。当時は外道の徒が衣食のために仏道に入門するようになり、仏の教えが正しく守られなくなってきたので、アシヨーカ王が援助してこの結集が行われたと伝えられる。この時期については、大乘教の系統とくに馬鳴、竜樹などはアシヨーカ王は仏滅後百年に出現したとしている。華子城の結集ともいう。

第四回結集。仏滅後四百年ごろ、カニシカ王が出て北方インドにも進出し、強大な勢力をもった。王は熱心な仏教信者だったが、このカニシカ王の外護によつて、迦淫弥羅国において協尊者の司会で世友、馬鳴などを含む五百の小乗学者、五百の大乗学者、五百の居士が集まり十二年かかつて、経・律・論の三蔵を結集した。この時から大乘の經典が加えられるようになった。迦淫弥羅の結集ともいう。ただし、五百年ごろ、七百年ごろとの説もある。

このようにして經典の結集が行われたが、釈尊入滅の年代が定まらないように、結集の年代も不確定のものが多い。しかし仏典の結集が多くの聖僧と賢王の外護^{げご}によって行われたことは疑う余地がない。なお經典結集の過程において、保守主義の上座部と進歩主義の大衆部とが分かれたことから、大乘教が発生したとするいわゆる根本仏教の考え方があがあるが、本抄で日蓮大聖人が仰せのように、あくまでも解脱堅固^{げだつけんこ}、禪定堅固^{ぜんじやう}の時に従って小乗と大乘がひろめられたのである。

(3) 正像末の三時について

仏の滅後における三種の時を、正法^{しやうぽう}、像法^{ぞうぽう}、末法^{まつぽう}という。

正法とは、正しく教法が行われて証果^{しやうか}を得る時をいう。像法の像は似^じの意で、時は濁りが増してきて正法には及ばなくなるが、なお正法に似ている時代である。末法とは、末は損滅滅無^{そんけんめつむ}の意で、仏の教法は世にあっても、その行果^{ぎやうか}のない時代である。

正像末を理教行果^{りきやうぎやうか}で立て分ける場合と、教行証^{きやうぎやうしやう}で立て分ける場合とがある。すなわち理教行果の具備^{ぐび}する時代を正法、理教行のみあつて果のない時代を像法、理教のみあつて行果のない時を末法という。

あるいは、教行証の三つともに具備^{そな}わっている時代を正法、教行のみあつて証のないのが像法、教のみあつて行証のないのが末法である。

「教行証御書」には「正法には教行証の三つ俱に兼備せり、像法には教行のみ有つて証無し、今末法に入りては教のみ有つて行証無く」（御書一二七六ページ）と仰せである。

さて釈尊の滅後の正像末の三時についても種々の異説がある。日好（江戸期、玉沢妙法華寺）の『録内扶老』には、この正像末の三時の研究が、きわめて詳細に発表されている。正像末の年数については、だいたい次の五説となる。

第一に正法千年、像法千年（善見律）

第二に正法千年、像法五百年（悲華經・大悲芬陀利經）

第三に正法五百年、像法五百年（菩薩本行經・大乘三聚懺悔經）

第四に正法五百年、像法千年（月藏經・摩耶經）

第五に正法四百年、像法千五年（法苑珠林）

天台宗においては南岳大師なんがくの願文に「正法世に住すること五百、像法世に住すること一千年、末法世に住すること一万年」とあり、天台大師は『法華文句』に「但當時大利益を獲るのみにあらず、後の五百歳遠く妙道に沾うるおわん」（大正三十四卷二ページ）といい、妙樂大師はこれをうけて「しかるに五五百、且く一往に従う、末法の初め冥利みよりなきにあらず、且く大教の流行るぎようすべき時に拠る、ゆえに五百という」（大正三十四卷一五七ページ）といっている。以上あとの二文とも、法華經藥王品第二十三の「後五百歳中。

広宣流布」（妙法蓮華經並開結六〇五ページ）と同様に、釈尊の滅後二千年を過ぎて末法に入った時の広宣流

布を予言している。この場合は正像各千年となる。

伝教大師は『守護章』に「正像稍過ぎややおわって末法太だ近きはなはにあり」（『伝教大師全集』巻二、三四九頁）
といい、『法華秀句』には「代を語れば像の終わり末の始めはじ」（『伝教大師全集』巻三、二五一頁）
といい、さらに『末法燈明記』に自分の時代を「像法最末の時なり」（『伝教大師全集』巻一、四一七頁）
と云っている。伝教大師の出世は仏滅後千八百年にあたるから、像法の終わりにあたるわけである。これらの文意
も、すべて、仏滅後二千年を過ぎて末法に入ることを示している。

日蓮大聖人は、正法千年、像法千年、末法万年と立てられ、日蓮大聖人の御出世は仏滅後二千二百年
にあたるから、末法の初めの五百年に御出現されたことになる。

「教機時国抄」には「仏の滅後の次の日より正法一千年は持戒じかいの者は多く破戒の者は少し正法一千年
の次の日より像法一千年は破戒の者は多く無戒の者は少し、像法一千年の次の日より末法一万年は破戒
の者は少く無戒の者は多し」（御書四三九頁）、「当世は末法に入つて二百一十余年なり」（御書四三九頁）
等と仰せられている。

また「曾谷入道殿許御書」には「正像二千余年には猶下種なおの者有り例せば在世四十余年の如し根機こんきを
知らずんば左右無く実経を与う可からず、今は既に末法に入つて在世の結縁けちえんの者は漸漸ぜんぜんに衰微すいびして権実ごんじつ
の二機皆悉く尽きぬ彼の不輕菩薩末世に出現して毒鼓どくこを撃たしむるの時なり」（御書一〇二七頁）と仰せ
であり、さらに末法万年については、「報恩抄」に「日蓮が慈悲曠大じひこうだいならば南無妙法蓮華経は万年の

外・未来までもな^{流布}がるべし」(御書三二九)と仰せである。一往は末法一万年と区切るけれども、日蓮大聖人の御内証としては、未来永遠と拝すべきである。

(4) 五箇の五百歳

釈尊は大集経において、滅後を予言して、次のように、五百年ずつ五つに区切っている。

- 第一の五百歳——^{げだつけんご}解脱堅固
 - 第二の五百歳——^{ぜんじよう}禅定堅固
 - 第三の五百歳——^{どくじゆたもん}読誦多聞堅固
 - 第四の五百歳——^{たぞうとうじ}多造塔寺堅固
 - 第五の五百歳——^{とうじよう}鬪諍堅固
- 正法千年
- 像法千年
- 末法の始め

この大集経の予言と、インド、中国、日本の三国における仏法流布の歴史とを照合すると、まさしく符合している。

正法前五百年(解脱堅固)

解脱堅固の時とは、釈尊滅後五百年において、衆生が小乗経を修し、戒律をたもって解脱を求めた時代である。滅後正法千年は^{ふほうぞう}付法蔵の二十四人が正法を弘通したが、^{まかかしよう}摩訶迦葉から付法蔵第十の^{ふなしや}富那奢まで

では小乗経をひろめた。迦葉二十年、阿難二十年、商那和修二十年、優婆崛多二十年、提多迦二十年の最初の百年は、まったく小乗経のみをひろめ、次の弥遮迦、仏陀密多、脇比丘、富那奢等は、大乘経の法門を少しは含めたが、大部分は小乗経を表として弘通した。この解脱堅固の時には、四回の仏典結集があり、阿闍世王、アショーカ王、カニシカ王などの守護のもと仏法が興隆した。

正法後五百年（禪定堅固）

この時代は権大乘経がひろめられ、衆生は大乘を修して、深く三昧に入り、心を静めて思惟の行を行つた。付法藏第十一の馬鳴から二十四の師子尊者にいたるまで大乘をひろめたが、とくに諸小乗を破し、大乘を宣揚した論師に、馬鳴、竜樹、無著、天親などがいる。馬鳴は仏滅後六百年ごろに出て、『大乗起信論』を著し、滅後七百年ごろの竜樹は『大智度論』百卷、『中論』四卷、『十二門論』一卷等を著した。その弟子提婆も『百論』二卷を著している。滅後九百年ごろに出た無著、天親の兄弟は、無著は『攝大乘論』三卷、『瑜伽師地論』百卷等を、天親は千部の論師として『攝大乘論釈』『唯識三十論頌』など小乗五百部、大乘五百部を著して、大乘の教えを大いに称揚した。

像法前五百年（誦誦多聞堅固）

この時代で、まず特筆すべきことは、後漢の明帝の永平十年（西紀六七年）仏滅後一千十五年）に仏教

が中国へ渡来したことである。これをきつかけとして、読誦多聞堅固の名の示すとおり、經典の翻譯事業や講説こうせつ、解釈などがひんばんに行われた。パルチアの太子であつた安世高あんせいこう、また月氏国の支婁迦讖しるかせんや康僧鎧こうそうがい、支謙しけんなど、翻譯にたずさわる人がふえてきた。敦煌出身の竺法護じくほうごは、優秀な助力者とともに、正法華經など百五十四部三百九卷の經典を訳した。

このようにして盛んになってきた經典翻譯は、鳩摩羅什くまらじゆにいたって頂点に達した。羅什はそれまでの誤訳、抄訳の多かったものとは比べものにならない完全な訳を数多く行い、なかでも珠玉のごとき名訳といわれているのが「妙法蓮華經」である。羅什以後、法顯ほつけん、仏陀跋陀羅ぶつだばつだら、曇無讖どんむしん、真諦しんだい、玄奘げんじようなどが出ている。

この時代の終わりのころ、五三八年、荊州けいしゅうで生まれた天台大師は、南岳大師に師事して法華の奥義を悟り、瓦官寺がくあんに八年間住して、『大智度論』などを講義した。その後、有名な『法華文句』『法華玄義』『摩訶止観』を講述して、理の一念三千の法門を立てた。読誦多聞堅固は、このように多数の經典翻譯と天台大師の出現に代表されるが、その他、仏図澄ぶつとちよう、道安どうあん、羅什などにより、大いに仏教講義が行われた。

像法後五百年（多造塔寺堅固たぞうとうじ）

唐代に入り、玄奘がインドから經典を持ち帰り漢訳した（これをそれまでの旧訳に対して新訳という）。

以後、法相宗^{ほっそう}、三論宗、華嚴宗^{けごん}、真言宗^{しんごん}が中国全土にひろまり、多くの寺塔が建立された。この像法時代は形だけは正法時代と似ているが、内容的には仏法の墮落^{だらく}であつた。やがて唐朝は衰亡^{すいぼう}し、北宋^{ほくそう}の時代に入つて、太宗は詔勅^{しやうちよく}を出して廃寺^{はいじ}を修治し仏像の造立を許し、アシヨールカ大王の造塔^{ぞうとう}にならつて八万四千の塔を造立した。しかし、仏法の中心は日本に移り、この時代の特徴^{とくちよう}はむしろ日本において顕著^{けんちやく}にあらわれている。

五五二年（五三八年説もある）すなわち仏滅後千五百年ごろ、人王三十代^{きんめい}の欽明天皇の代、百濟^{くだら}の聖明王の使者により経論、釈迦像、僧尼等が日本の朝廷に献上された（『日本書紀』による）。この仏教伝来以後、本格的に信奉されるようになったのは聖徳太子の時からである。太子は勝鬘^{しょうまん}経、維摩^{ゆいま}経、法華経の義疏^{ぎしよ}を著し、この三経を鎮護^{ちんご}国家の法と定めて篤敬^{とくぎやう}三宝を根底とする十七条憲法を制定した。このころから造寺造仏が盛んになっている。崇峻^{すしゆん}天皇から推古^{すいこ}天皇時代にかけて建立された飛鳥^{あすか}寺（法興寺）、太子建立の七寺といわれる四天王寺^{はうりやう}、法隆寺、中宮寺、橘寺^{はうきやう}、蜂丘寺（広隆寺）、池後寺^{いけじり}（法起寺）、葛木寺（妙安寺）などが有名である。

その後、奈良時代に入ると、聖武天皇は仏教を重んじ諸国に国分寺、国分尼寺を建てて鎮護^{ちんご}国家の道場とし、総国分寺として東大寺を建立した。またこの時代に苦勞して来日した鑑真^{かんじん}は小乗^{かいだん}の戒壇^{かいだん}を建立している。平安の桓武^{かんむ}天皇の代には伝教大師が南都六宗を公場対決で破り、八二七年に叡山^{えいざん}に迹門^{しやくもん}の戒壇を建立した。（この項、以上までの記述は『池田大作全集』第二十五卷より）

末法とうじょうけんご (闘諍堅固)

末法の初めは一〇五二年とされる。釈尊滅後、年がたつにしたがつて内容が失われ、ますます形式化した釈尊の仏法は、このころから不思議にも「闘諍言訟・白法隱没とうじょうごんしょう びやくほうおんもつ」の姿を現出するようになった。わが国では摂関政治が衰え、代わって武士が台頭しつつある時代で、仏教も退廃たいはいし、天台宗でさえも慈覚、智証のために謗法ぼうぼうと化し、叡山の僧は僧兵となつて東大寺、興福寺の僧兵とともに争い合う醜状を呈ていした。『中右記』長治元年(一一〇四年)の条には「近日叡山の衆徒相乱る、東西の塔僧合戦す、あるいは火を放つて房舎を焼き、あるいは矢にあたりて身命を亡う、修学みぎりの砌、かえつて合戦の庭となる、仏法の破滅すて已にこの時なるべきか」と嘆いている。

康平二年(一一〇五九年)、あまりに放火が多いので諸門を警護。永保三年(一一〇八三年)、動乱の世を象徴するかのよう富士山が噴火。一一五六年、保元の乱、一一五九年、平治の乱。これらは天皇家の間で同族が争い合う姿であつた。仏教の慈悲の精神から約三百四十年間(嵯峨さか天皇の時代から)廃止されていた死刑も復活(『保元物語』)。このような時代の民衆は、あきらめと退廃的な気分きぶんに満ち、それに乗じて浄土宗がひろまって自殺者を大量に出している。『栄華物語えいがものがたり』『小右記』『方丈記ほうじょうき』等、当時の文献はその時代の無常観を伝えている。『方丈記』には京都の三分の一が焼けた治承元年(一一七七年)の大火、治承四年(一一八〇年)のつむじ風、養和年間(一一八一年―八二年)の全国的大飢饉ききん、大洪水等こうすいの

惨状がなまなましく表現されている。

栄華をきわめた平家は西海の果てに沈み、一二二一年の承久じようきゆうの変で三上皇は流罪るざい。それらしい盤石の体制をしいていた北条幕府も一三三三年に全滅し、その次に展開された歴史も南北両朝の対立、さらには一四六七年から七年にわたる応仁おうにんの乱、つづいて戦国時代と、まさに末法の初めの五百年は、対立、いがみ合い、怒号、殺戮さつりくの充満した時代であつた。

とくに日蓮大聖人御出現の時代は、天変地天ちようが盛んであり、世界的にも蒙古（元）の侵入でインド、中国は見る影もなかったのである。これらは三大秘法の大正法興隆の瑞相ずいそうであつた。

以上が五箇ごの五百歳についての提要であるが、これらについては本抄に詳しく論述されている。また、それぞれの時代に出現して、正法を弘通する指導者についても、やはり本抄に詳説しょうせつされているが、次の御抄も参照されたい。

「四依しえに四類しるい有り、小乗の四依は多分は正法の前の五百年に出現す、大乘の四依は多分は正法の後の五百年に出現す、三に迹門しやくもんの四依は多分は像法一千年・少分しょうぶんは末法の初なり、四に本門の四依は地涌千界末法の始に必ず出現す可し今の遣使還告けんしげんごうは地涌じゆなり」（御書二五一ページ）と。

第三 本抄の元意

「撰時抄」においては、仏法は時を肝要とすることを明かし、釈尊の在世と、滅後の正像末の三時に
ついて、それぞれ論じられているが、別しては、末法の時を撰取することにある。末法の時を撰取する
なかに、また二意があり、一には文底深秘の大法の広宣流布を明かし、二には日蓮大聖人が下種の主師
親である旨を明かされている。これらの点については、すでに述べてきたとおりである。

そして、本抄の元意、すなわち日蓮大聖人の御内証は、未来の広宣流布の予言にあるのである。じつ
に「撰時抄」は、世界広布の予言書であると信ずるものである。しかも、日蓮大聖人が世界広布を予言
されてから、すでに七百年の間、世界広宣流布を祈願して丑寅勤行をつづけてきたのである。しかる
に、広宣流布の実現は将来の遠い夢のようにしか考えられていなかった。もしも、このまま時が過ぎ
去っていくならば、ついに日蓮大聖人の御予言は虚妄になるところであつたらう。しかし、この御予言
に応えて、世界広布の実現に立ち上がったのが、わが創価学会である。ゆえに創価学会こそが、「撰時
抄」を身をもって拝読し、身をもって実践していくところの、唯一の団体であると確信する。

「聖人御難事」には「仏の大難には及ぶか勝れたるか其は知らず、竜樹・天親・天台・伝教は余に肩
を並べがたし、日蓮末法に出でずば仏は大妄語の人・多宝・十方の諸仏は大虚妄の証明なり、仏滅後二
千二百三十余年が間・一閻浮提の内に仏の御言を助けたる人・但日蓮一人なり、過去現在の末法の法華
経の行者を輕賤する王臣万民始めは事なきやうにて終にほろびざるは候はず、日蓮又かくのごとし」

（御書一一八九頁）と仰せである。

このような日蓮大聖人の御確信にお応えした、わが創価学会の広宣流布への活動は、竜樹・天親・天台・伝教はいうにおよばず、大聖人以後においても、だれひとり肩を並べるものはないといえよう。創価学会が出現しなかったならば、釈迦・多宝・十方の諸仏はもとより、日蓮大聖人までが大虚妄の仏となってしまうのである。仏滅後二千九百十余年、全世界において、釈尊および日蓮大聖人の御言を助けた人は、ただ創価学会のみであるといっても決して過言ではないだろう。

「諸法実相抄」に「日蓮一人はじめは南無妙法蓮華經と唱へしが、二人・三人・百人と次第に唱へつたふるなり、未来も又しかるべし、是あに地涌の義に非ずや、剩へ広宣流布の時は日本一同に南無妙法蓮華經と唱へん事は大地を的とするなるべし」(御書一三六〇)と、この御予言のごとく、創価学会は、じつに五百万世帯、千数百万の会員を数えるにいたった。

そして地涌の菩薩の出現については、「観心本尊抄」に「今末法の初小を以て大を打ち権を以て実を破し東西共に之を失し天地顛倒せり迹化の四依は隠れて現前せず諸天其の国を棄て之を守護せず、此の時地涌の菩薩始めて世に出現し但妙法蓮華經の五字を以て幼稚に服せしむ」(御書二五三)と、つづいて「当に知るべし此の四菩薩折伏を現ずる時は賢王と成つて愚王を誡責し授受を行ずる時は僧と成つて正法を弘持す」(御書二五四)と仰せである。

賢王となって愚王を誡責するとの予言は、「三大秘法抄」の「有徳王・覚徳比丘の其の乃往を末法濁悪の未来に移さん時」(御書一〇二二)の御文に相当する。問題は、いつ、だれが、どこへ出現し

て、広宣流布を達成するかである。その答えは前述のとおり、創価学会によって実践されている。賢王として、また有徳王として、兵馬弓箭へいばきゆうせんの代わりに、言論戦を通じ、文化活動を通じて、広宣流布の大道を前進しているのである。

ふたたび「撰時抄」にもどって、本文を拝読するに、「一閻浮提いちえんぶだいの内・八万の国あり其の国に八万の王あり」云云（御書二五八頁）と、八万の国の王臣万民一同に南無妙法蓮華経と唱えたと仰せられている。これこそ全世界広宣流布の明白な予言である。

さらに、また「国主等・其のいさめを用いずば鄰国にをほせつけて彼彼の国国の悪王・悪比丘等をせめらるるならば前代未聞みもんの大闘諍だいつじよう・一閻浮提いちえんぶだいに起るべし……彼のにくみつる一ひとりの小僧を信じて無量の大僧等八万の大王等、一切の万民・皆頭を地につけ掌たなごころを合せて一同に南無妙法蓮華経となうべし」（御書二五九頁）と御断言である。

この御文に仰せの「前代未聞の大闘諍」とはなにを指されるのか。御仏意に照らし、これは第二次世界大戦であると確信するものである。なぜなら、東洋においては日本が、欧州においては独伊の両国が、連合国軍と数年にわたって死闘し、ついに潰滅的な打撃をこうむり、敗戦亡国の悲運をたどった。しかも敗戦国として、世界最初の原爆被災国ともなった日本の国から、三大秘法広宣流布の旗印のもと、ついに創価学会が五百万世帯の折伏を成し遂げたからである。

さらに、第五章の講義でも述べるが、「前代未聞の大闘諍」云云とは、仏法の一大原理を説かれたも

のであり、一往は七百年前の日蓮大聖人御在世にも当てはまるし、また未来において第三次世界大戦が一閻浮提（全世界）に起こることであるという考え方もあろう。しかし、もし第三次世界大戦が起こったならば、核兵器の保有国が増加しつつある現在、五十数億の人類の終末は必至である。われわれは断じて第三次世界大戦を起こしてはならない。そのためにも、「前代未聞の大闘諍」とは、第二次世界大戦を指すものとし、絶対平和世界の建設のため、広宣流布の道を力強く前進すべきことを主張してやまないものである。

さて、日寛上人の時代には、この広宣流布の御文はいかに解釈されていたのであろうか。日寛上人の「撰時抄愚記」には、広宣流布には逆縁ぎやくえんと順縁じゆんえんとがある。逆縁に約す時は、日蓮大聖人の御在世時代において、すでに日本国中に広宣流布したのである。なぜなら、日本国中の王臣万民が、ことごとく日蓮大聖人に対して怨嫉おんしつをいだき迫害を加え、こぞって逆縁を結んだからである。

そして順縁に約すときは「当流漸々ぜんぜんに流布す。一葉落つる時は皆秋を知る。一華開ける日は天下の春なり。豈あに広宣流布に非ずや」（文段集二三四六）と仰せられている。すなわち日寛上人の時代は、江戸時代封建制度のもとで、各藩で尾張法難おわりほうなん、金沢の法難のごとき、迫害がつづいていた。ゆえに、折伏を行ずるといっても、一葉の落ちる程度、一花の開く程度の折伏しかできなかったものといえよう。しかしその一葉、一華によって季節を知ることができるよう、大聖人の仏法は「漸々に流布」し、「春の後に夏の来るが如く、秋毫しゅうこうも差たがうこと」なく「終ついには上一人より下万民に至るまで、一同に他事を捨てて

皆南無妙法蓮華經と唱うべし」(文段集二三四頁)と仰せのごとくなりゆくのである。そして、その御言どおりの姿がいま現実となりつつあるのである。

第二次世界大戦後の日本は、あたかも宗教戦争のごとく、幾多の宗教が巷ちまたに氾濫はんらんして、人心を迷わし、思想の混乱は、その極に達した観を呈した。この中にあって創価学会は、日蓮大聖人の最高哲理によつて、一切の宗教を批判し、破折はしやくし、大衆をして邪教の害毒から脱せしむるために、懸命の努力をつづけてきた。同時に、恩師戸田城聖先生が叫ばれた思想の統一をめざして、絶えざる奮闘を重ねて、今日にいたったことを忘れてはならない。

また、とくに現今の世界の情勢は、ますます多難を加え、混乱への危惧きぐの声は日ごとに険きしくなつてきている。この時にあたり、世界の恒久平和こうきゅうと人類永遠の幸福をめざして、SGIならびに創価学会が、力強く世界広布への大前進を開始している。御本仏日蓮大聖人はじめ三世諸仏のお歓びよろこびくださることとは絶対なりと確信してやまないものである。

撰時抄

釈子日蓮述ぶ

第一章

時を要となすを標す

夫れ仏法を学せん法は必ず先づ時をならうべし、過去の大通智勝だいつうちしやうぶつ仏は出世し給いて十小劫じつしやうこうが間一經も説き給はず經に云く一坐十小劫又云く「仏時ほとけときの未だ至らざるを知り請しやうを受けて默然もくねんとして坐す」等云云、今の教主釈尊は四十余年の程法華經を説き給はず經に云く「説く時未だ至らざるが故」と云云、老子らうしは母の胎たいに処して八十年、弥勒菩薩みろくは兜率とそつの内院に籠こもらせ給いて五十六億七千万歳をまち給うべし、彼の時鳥ほととぎすは春ををくり鷄鳥にわとりは暁あかつきをまつ畜生ちくしやうすらなをかくのごとし何いかに況いはんや仏法を修行せんに時を糾たださざるべしや、

通解

—— 仏法を修学しようとしたならば、必ずまず時を習わなければならない。

過去の大通智勝だいつうちしやうぶつ仏は、出世されてから十小劫じつしやうこうの間、一經も説かれなかった。このことを法華經化城喻品けじやうゆほん第七には「一坐十小劫」と説き、また「仏は法を説くべき時がいまだ来ていないことを知っていたから、説法を請こい願われても默然もくねんと坐していた」等と説かれている。次に、今の教主釈尊は成道してから四十余年の間、法華經を説かれなかった。このことを法華經方便品第二には「説く時がいまだ来ていなかったから」といっている。

外道げどうでも、老子らうしは母の胎たいに八十年いて時を待ったという。また弥勒菩薩みろくは兜率とそつの内院にこもり、五十六億七千万歳の間、出世の時を待っているといわれている。彼の時鳥ほととぎすは春の終わろうとする初夏を待って鳴き、鷄鳥にわとりは暁あかつきを待って鳴く。畜生すらこのように時を違えないのであるから、まして仏法を修行しようと

する者が時をたださないでよいだろうか。

語 訳

釈子しゃくしにちれん日蓮

釈子とは、①釈迦仏の弟子のこと。釈尊の教化によって一族が出生するゆえに釈子と名づける。仏子、

釈家、釈氏などと同義。②仏門に入つた僧尼の通称。日本では法名のうえに釈子または釈と冠する習いがある。

「釈子日蓮」について、日寛上人は「撰時抄愚記」において、次の四種類があることを明かされている。一には、身は釈子に似て、心は釈子ではない者。すなわち禅宗や念仏宗や真言宗などの僧侶。二には、身心ともに釈子ではない者。すなわち、禅、念仏、真言などの在家の信者や檀徒だんと。三には、身心ともに釈子の者。すなわち日蓮大聖人、御開山日興上人ならびにその御遺志を正しく継ぐ末弟の僧侶。四には、身は釈子とはいえないが、心は釈子である者。すなわち日蓮大聖人、日興上人の流れを汲む在家の信者のこと。このなかにおいて、わが日蓮大聖人こそ身心ともに真実の釈子であられる。ゆえに御みずから「釈子日蓮」と仰せられたのである。また日寛上人は、この「釈子日蓮」の真実の義を明かすのに、次の五義を示されている。第一には、日蓮大聖人は本化再誕ほんげさいたんなるゆえ真実の釈子であらせられる。第二は、日蓮大聖人は能く法の邪正を糺ただされるゆえである。第三には、日蓮大聖人は能く謗法を呵責かしやくされるゆえである。第四には、日蓮大聖人は能くこの下種の法華經を誦持どくじされるゆえである。第五には、日蓮大聖人は本因妙ほんにんみょうの釈子であられるゆえである。なお詳しくは、序講を参照。

大通智勝だいつちしょうぶつ仏

三千塵点劫の昔に法華經を説いた仏。法華經化城喻品第七によると大相という時代に好成世界こうじょうに出現

した王で十六人の王子がいた。魔軍を破し終わった後、十小劫じつと坐つてついに悟りを得た。成道後、十六王子や諸梵天王の請いに応じて法華經を説いた。その後八千劫の間法華經を説いたが、十六王子と少数の声聞以外

はだれも信解せず、ついに静室じやうしつに入り八万四千劫の間、禪定に住した。その間、十六王子はそれぞれの場所で広く法華經を説き、おのおの六百万億那由他恒河沙等の衆生を成仏させた。これを大通覆講ふくこうといい、この時に法を聞いた衆生を大通結縁の衆という。この十六王子の第十六番目が釈尊である。

十小劫じっしょうじやく 劫は梵語カルパ(kalpa)の音写で、分別時節、大時、長時、時などと漢訳する。日時で測りがたい、極めて長い時限の意で、仏法では時間を示す単位として用いられる。劫の分類については經論によつて諸説がある。『大智度論』では大劫と小劫の二種に、『大毘婆沙論』では中間劫、成壞劫、大劫の三種に、『俱舍論』では成劫、住劫、壞劫、空劫の四種に分けている。『俱舍論』卷十二によると、人寿無量歳から百年に一歳を減じ、ついに人寿十歳に至り、これを第一減劫とする。次に人寿十歳から百年に一歳を増して人寿八万歳に至り、これを第一増劫とし、また人寿八万歳から百年に一歳を減じて人寿十歳に至る。これを第二の増減劫とする。以下第十九に至るまで増減すること十八回、最後に人寿十歳から百年に一歳を増して無量歳に至る。これを第二十の増劫とする。第一はただ一減、第二十はただ一増であるが、その長さは各中間の一増減に等しい。この一増減を一の中劫としている。またはこれを一小劫とし二十小劫を一の中劫とする説もある。そのほか、長寿の人が四千里四方の石山を百年ごとに細軟の衣で拭いて石山が磨耗まうし尽くしても劫は尽きないとする払石劫や、四千里四方の大城を芥子けしで満たし、百年に一度、一粒を取って取り尽くしてもなお劫は尽きないとする芥子劫の説などがある。

經に云く一坐十小劫 法華經の化城喻品第七の文。すなわち、「世尊は甚だ希有けうなり 一たび坐ひとして十小劫 身体及び手足しゆそく 静然じやうねんとして安んじて動ぜたまわす」(妙法蓮華經並開結二二五)と。大通智勝仏は、魔軍を破しおわつて後、十小劫の間、坐したまま説法しなかつたということ。

又云く「仏時の未だ……坐す」 法華經化城喻品第七の文。「仏時未だ至らずと知しめして 請しやうを受けて默然もくねんとして

坐したまえり 三方及び四維 上下亦復爾なり」(妙法蓮華經並開結三四八ページ)と。

教主釈尊「教主釈尊」とは、一切衆生の教主である仏のこと。一般には釈迦牟尼仏をさす。釈迦文尼、奢迦夜牟尼、釈迦文とも書き、略して釈迦、釈尊ともいわれる。また能仁、能忍、能寂、能満等と意識される。釈迦は種族の名で、能、すなわち能力の意。牟尼は尊称で聖者を意味し、仁、忍と訳す。仏すなわち仏陀は真理、実理を悟った者、覚者の意。すなわち釈迦牟尼仏とは釈迦族出身の聖者のこと。釈尊の姓はガウタマ Gautama (瞿曇。最もすぐれた牛の意)で、更に幼名をシッダールタ (Siddhartha、悉達多。目的を達成するの意)といったことからガウタマ (ゴータマ) シッダールタともいう。また釈迦族の中でも日種 (太陽氏族) の出身で、ヴェーダ以来の聖王イクシュヴァーク王 (甘蔗王) の後裔とされるところから、日種、甘蔗の姓を用いることもある。釈尊は釈迦族の王である迦毘羅衛城主浄飯王を父、隣国の拘利国王女摩耶夫人を母として、夫人が出産のために帰国する途中、国境付近の藍毘尼苑で生まれた。まもなく生母と死別し、叔母の摩訶波闍波提によって養育された。文武両道にわたり教育を受け、恵まれた少年時代を送ったが、成長するにしたがって深い思索にふけることが多くなった。やがて耶輸陀羅女を妃に迎え、一子羅睺羅をもうけた。跡継ぎができると、やみがたい生老病死の問題解決への熱情を感じて、十九歳の時、かねてからの志であった出家を決意した。出家した釈尊は摩訶陀国に至って、多くのバラモンを訪ねた。当時、禅定の大家であった阿羅羅迦蘭と鬱陀羅摩子という二人について学んだが、その説にあきたらず、兩人のもとを去って尼連禪河の畔、優楼頻螺村の林に住んで、苦行を行った。父王は釈尊の身を案じて阿若憍陳如ら五人の侍者をつけて共に修行をさせた。しかし苦行によって解脱の法を体得できないと悟った釈尊は苦行を捨て、父王のつけた五人とも別れて伽耶城に至り、三十歳の時、菩提樹の下で沈黙想を続け、ついに大悟を得て仏陀となった。仏陀となった釈尊は波羅奈国の鹿野苑におもむき、かつて別れた阿

若僑陳如らの五人の比丘を化導した。摩訶陀国の王舎城では頻婆娑羅王を教化して竹林精舎の寄進をうけ、舍利弗や目犍連を弟子に加えた。更に従弟の阿難、阿那律、一子羅睺羅、父の浄飯王、養母の摩訶波闍波提、妃の耶輸陀羅女のほか、舎衛国の波斯匿王、祇園精舎を供養した須達長者など、階層、種族の差別なく、あらゆる人を化導したが、この間多くの迫害（九横の大難という）も受けた。こうして釈尊は成道して以来、華嚴・阿含・方等・般若・法華各部の諸経を説き、五十年間に説いた法門は莫大な量で、後に八万法蔵と称された。そして、八十歳の時、拘尸那城外の沙羅林で入滅した。なお日寛上人の「末法相応抄」「観心本尊抄 文段」などには、「観心本尊抄」の義をもとに六種の釈尊が明かされている。インド応誕の釈尊は蔵・通・別・円の四教を説くごとにそれぞれの仏身を示現し円教である法華経では迹門・本門の仏身を現している。更に末法今時には、法華経本門・寿量品文底に秘沈された南無妙法蓮華経を説く末法の教主釈尊がある。

四十余年 無量義経説法品第二の「四十余年には未だ真実を顕さず」（妙法蓮華経並開結八八）の文をさす。四十余年とは、釈尊が十九歳で出家し、三十歳で成道してから、七十二歳までの期間をさすところから、その間に説いた経教をいい、それらの経教は未顕真実であることをいう。

法華経 大乘仏典の極説。釈尊の一代五十年の説法中、最も勝れた經典である。漢訳には「六訳三存」といわれ、六訳（法華三昧経六卷・薩曇分陀利経六卷・正法華経十卷・方等法華経五卷・妙法蓮華経八卷・添品法華経七卷）あつたが現存するのは三訳（正法華経・妙法蓮華経・添品法華経）である。その中で後秦代の鳩摩羅什（三四四年―四〇九年）訳「妙法蓮華経」八卷二十八品は、古来から名訳とされて最も普及している。八卷と二十八品あるところから一部八卷二十八品という。釈尊が成道して四十二年後、「四十余年未顕真実」（妙法蓮華経並開結八八）と説いた無量義経のあと、八年間にわたって説かれた。説処は序品第一から見宝塔品第十一の「諸の大衆を接して、皆虚空

に在きたもう」(妙法蓮華經並開結四一一節)までが靈鷲山、見宝塔品第十一の「大音声を以って、普く四衆に告げたまわく」(妙法蓮華經並開結四一一節)から囑累品第二十二までは虚空の多宝塔中、藥王菩薩本事品第二十三から最後の普賢菩薩勸発品第二十八までは再び靈鷲山であり、これを二処三会という。天台大師は『法華文句』卷一上(大正三十四卷二節)で迹門と本門とに分けている。迹門は序品第一から安樂行品第十四まで、本門は從地涌出品第十五から普賢菩薩勸発品第二十八までである。内容は迹門には方便品第二に説かれる諸法実相を中心に二乗作仏、惡人成仏、女人成仏等が説かれ、本門には釈尊の本地を明かした久遠実成を中心に、本因妙・本果妙・本国土妙の三妙を合論して仏の振る舞い、また末法に妙法蓮華經を弘通する上行菩薩等の地涌の菩薩に結要付囑されたこと等が説かれている。

經に云く「説く時未だ至らざるが故」と云云 法華經方便品第二の文。「未だ曾て説かざる所以は 説時未だ至らざる故なり 今正しく是れ其の時なり 決定して大乘を説く」云云(妙法蓮華經並開結一七三節)と。

老子 生没年不明。中国周代の思想家。道德經を著す。『史記』(列伝)によると、楚の苦県の人。姓は李、名は耳、字は伯陽。周の守蔵の吏(蔵書室の役人)。周末の混乱を避けて隠棲しようとして、関所を通る時、関の令(関所の長官)尹喜が道を求めたので、道德經五千余言を説いたという。老子の思想の中心は道の觀念であり、道には、一・玄・虚無の義があり、それが万物を生み出す根源の一者として、あらゆる現象界を律しており、人は道の原理に法って事を行えば現実的成功を収めることができるとする。

弥勒菩薩 未来に釈尊の仏位を継ぐとされる菩薩。梵名マイトレーヤ(Maitreya)の音写で弥勒、梅低梨なども書き、慈氏と訳す。名は阿逸多(Ajita)といふ無勝、無能勝と訳す。南インドのバラモンの子であったが釈尊の弟子となり、その後、釈尊に先立って入滅して天界の兜率天に生じ、現在は弥勒の浄土である兜率の内院で

天人のために法を説いているとされる。そして人寿八万歳、釈尊滅後五十六億七千万年の時、再びこの世に下生して竜華樹の下で成仏し、三会にわたって法を説き釈尊の説法にもれた衆生を済度するという。このように来世で釈尊の処（地位）を補って仏位を継ぐので「一生補処の菩薩」とも弥勒仏とも称することがある。また弥勒をパーリ語ではメッテヤー（Metteya）と云い、西洋のメシヤ（救世主）思想に影響を与えたという説もある。

兜率の内院 兜率天の内院のこと。兜率天は内院と外院に分かれ、内院には兜率天宮（兜史多天宮）があつて弥勒菩薩が住んでおり、弥勒菩薩の浄土とされる。

五十六億七千万歳 釈迦仏の入滅から弥勒仏の出世までの年数である。弥勒菩薩は、五十六億七千万歳の後に釈迦仏の位を継ぎ、賢劫千仏のなかの第五仏として娑婆世界に生まれるという。そして、華林園の竜華樹下で正覺を成じ、人天を済度するといわれる。それまで兜率の内院にこもっているわけで、この五十六億七千万歳は、兜率天では四千歳にあたるといふ。

時鳥 トビ

ホトトギス科の鳥。翼長が一五センチ―一六センチほどあり、尾も長い。ヒマラヤ地方や中国の北部から中

部にかけて、また日本で繁殖し、冬季には台湾、インド、中国の南部等で越冬する。わが国では夏鳥といわれ、

春の若葉の候に南方からわたってきて森林地方や山地地方に多くすむ。郭公より少し小さく、背面は灰黒色であ

り、腹面は白く黒色の横斑がある。脚は黄色く保護鳥の一種である。梅雨のところから夏にかけて鳴き、その鳴き

声は古来から歌人に珍重されている。日寛上人は、「時鳥は時を知る鳥である。この鳥の異名は多く、子規、杜

鵑、杜宇、蜀魂、蜀魄、不如帰などと書く。このなかで、いま、時鳥の字を用いるのは、意味があるのである。

すなわち撰時抄に引用されるゆえんであり、耕作の時を知り人々に鳴いて教えるゆえに、時鳥と書くという」

（文段集二二四頁、要旨）と。さらにその鳴き方について「また我等が耳には『本尊掛けたか』と聞くなり。御遺

状に云く『日興が身に宛て給わるところの弘安二年の大本尊、日目に之を授与す。本門寺に掛け奉るべし』と云云。この鳥の意に云く『最早、広宣流布の時も来るべし、本門寺を建立して本尊掛けたか、本尊掛けたかと鳴くなり』と。然れば広宣流布の時を待つ鳥なるが故に時鳥というか云云。これはこれ観心の釈の意なるのみ」(文段集二二五頁)と仰せである。

鶏鳥 にわとり 日寛上人の「撰時抄愚記」には、次のようにある。「またこれ時を知る鳥なり。即ち第五の徳なり。事文後集に云く『雞に五徳あり。冠を戴くは文なり。距を以て搏つは武なり。敢んで闘うは勇なり。食を見て相呼ぶは仁なり。夜を守って時を失わざるは信なり』と云云」(文段集二二五頁)

講義

この章は、仏法を修学するものは、必ず時を学びわきまえるべきことを明かされている。その理由として、過去の大通仏、現在の釈迦仏、未来の弥勒菩薩について述べ、また外道の聖賢たる老子、畜生たる時鳥、鶏等も時を待つことを例証として引かれている。

なにゆえに「必ず先づ」と時を重視するかといえ、次のように、宗教の五綱がそれぞれ時代によって相違するがゆえである。すなわち、第一に教についていえば、正法時代は小乗教・権大乘教、像法時代は法華経の迹門、末法は独一本門の流布すべき時である。第二に機については、正像は本已有善の機であり、末法は本未有善である。第三に時はいまの論点であり、第四に国については、正像にはインド

の釈尊の仏法が東に伝えられ、末法まつぽうに入っては日本の日蓮大聖人の仏法が西へ還る。第五に教法流布の先後とは、末法においては正像に流布した大小権実がことごとく無益むやくとなり、ただ寿量品文底下種の大白法が流布すべき時である。このように時によつてすべてが決定されているゆえに「必ず先づ時をならうべし」と仰せられたのである。

日蓮大聖人はそのことを「されば国中の諸学者等仏法をあらあら学すと云へども時刻じこく相応そうおうの道をしらず四節・四季・取取に替かわれり、夏は熱く冬はつめたく春は花さき秋は菓このみなる春種子たねを下して秋菓みを取るべし秋種子たねを下して春菓みを取らんに豈あに取らる可けんや、極寒ごくかんの時は厚あつき衣きぬは用もちなり極熱の夏はなにかせん、涼風は夏ゆうの用もちなり冬はなにかせん、仏法ぶつぽうも亦復またまた是くの如し小乗の流布して得益とくやくあるべき時もあり、権大乘の流布して得益あるべき時もあり、実教の流布して仏果を得べき時もあり、然しかるに正像二千年は小乗権大乘の流布の時なり、末法の始めの五百年には純円じゆんえん・一実いちじつの法華経のみ広宣流布の時なり」〔如説修行抄〕御書五〇三六と仰せられている。

まことに、時の一字を離れては、宗教の五箇を論ずることもできないし、また次のように判教はんきやうの浅深も論ずることができない。すなわち、正法の初めの五百年はもっぱら内外ないげ相對を用い、次の五百年はもっぱら大小相對を用い、像法一千年はもっぱら権実こんじつ相對を用いた。そして、末法は本迹ほんじやく相對が中心になるのである。ここに仰せの「純円・一実の法華経」とは、本門寿量品の文底秘沈もんていひちんの大法のことである。

衆生の機根もまた同じである。正像二時の機は本ほん已有善いうぜんであり、末法は本未有善である。国もまた同じで、「諫曉八幡抄」に「月は西より東に向へり月氏の仏法の東へ流るべき相そうなり、日は東より出づ日本ほんの仏法の月氏へかへるべき瑞相ずいそうなり」（御書五八八頁）と仰せのとおり、正像弘通の權迹ごんしゃくは月氏がつし、震旦しんたんを初めとし、末法流布の本門は、日本国を初めとするのである。

このように、仏法はすべて時を本として論じなければならない。末法には、法華經本門壽量品の文底の三大秘法が流布され、本未有善の機に対し折伏を行すべき時なのである。そして日蓮大聖人の仏法においても、また「時」がある。日蓮大聖人は、三大秘法のうち、建長五年四月二十八日には、本門の題目を立てられ、弘安二年十月十二日には本門戒壇の大御本尊を御ご図ず顕けんあそばされた。御一代の法門においても「三沢抄」に「法門の事はさ佐渡どの国へながされ候いし已い前ぜんの法門は・ただ仏の爾前にぜんの經とをぼしめせ」（御書一四八九頁）と仰せのように、順序、段階をふまれている。そして、本門戒壇の建立は「時を待つ可きのみ」（御書一〇二二頁）として、後世の弟子への御遺命ごゆいめいとされたのである。

日蓮大聖人の滅後においても、幾多の時代の変遷を経て今日にいたっているが、大きく分けると、逆縁ぎやくえんの広宣流布の時代と、順縁じゆんえんの広宣流布の時代とに分けられるであろう。

日蓮大聖人御在世時代の弾圧、迫害に始まり、その後、数百年にわたる悲運の時代がつづいた。この時代は逆縁の衆生のみが日本国中に充満し、国を挙げて正法流布を妨害した。そして第二次大戦中、創価学会の牧口初代会長は、みずから折伏戦の陣頭に立たれて、国難を救い、世界人類の平和と幸福のた

めに、三大秘法の広宣流布を叫ばれた。ところが軍部と神道主義者たちは、誕生して間もない創価学会に弾圧を加え、昭和十八年七月に幹部二十一人が投獄、牧口会長は十九年十一月十八日に牢死^{ろうし}され、御身を大御本尊に捧げられたのであった。その大謗法^{ほうぼう}の結果、日本の国は戦いに敗れ、数百万にのぼる戦死者を出し、国土は爆撃を受けて廃墟^{はいきょ}と化し、指導者たちは戦争犯罪人として極刑に処せられ、国民大衆は苦痛のどん底へおちたのである。

しかし、これを転機として、いよいよ順縁^{じゆんえん}広布の時がきたのである。牧口会長の遺志を受け継いだ戸田会長は、創価学会を再建し、昭和三十三年の三月までに、八十万世帯を突破する大折伏を達成し、総本山には大御本尊の御威光を荘厳し奉り、奉安殿、大講堂を新築し、全国に多数の新寺院を建立。さらに各種の文化活動を推進し、広宣流布の具体的活動を開始された。こうして広宣流布のいっさいの基盤を築かれたうえで、昭和三十三年四月二日、逝去^{せいきよ}されたのである。

私は恩師戸田先生の遺命のままに、第三代会長に就任して、広宣流布へさらに一歩前進すべく活動を開始した。そして、昭和三十九年四月二日、恩師の七回忌を迎えるにあたり、総本山には世界の銘材を集めて大客殿を新築御供養し、折伏数は五百万世帯を突破し、日本国内はもとより、遠く世界の各国にもメンバーが誕生し、日夜、信心に励んでいるのである。

いまや日本国中、どこの地域にも、どこの職場にも学会員がいるようになった。これこそ順縁の広宣流布の姿といえよう。日寛上人は、「観心本尊抄文段」に「兼ねて順縁^か広布の時を判ずるか」(文段集五

四六〇）と述べられているが、この「順縁広布の時」とは、「観心本尊抄」の「此の四菩薩折伏を現ずる時は賢王けんおうと成つて愚王を誠責かいしやくし授受しやうじゆを行ずる時は僧と成つて正法を弘持くじす」（御書二五四〇）の「時」である。

この御文を日寛上人は、法体ほつたいの折伏と化儀けぎの折伏に判ぜられている。すなわち日蓮大聖人の行じられた折伏は法体の折伏であつて、化儀の折伏に相對する時は授受しやうじゆになる。化儀の折伏とは、広宣流布の達成という、総体革命である。この場合には涅槃經に「威儀いぎを修せずまさ応に刀劍弓箭鉞とうけんきゆうせんむさく樂を持すべし」（大正十二卷三八三〇）とあるように、昔は武力をもつて戦つたが、今日では言論戦やあらゆる文化活動を通じて、広宣流布を實現していくのである。いまこそ順縁広布の時代であり、化儀の折伏を行じ、広宣流布を實現すべき時代なのである。

「時」について

仏法における「時」は、衆生の機根と仏とが相応あいずる「時」や正像末しやうぞうまつの三時さんじ、五時八教等ごじの「時」がある。そのほか、生命は永遠であり無始無終であるという哲理、あるいは法華經涌出品ゆじゆつぽんにおける「五十小劫……半日の如ごとし」（妙法蓮華經並開結四七六〇）等、まことに仏法では多種多様にわたり、時について説かれている。

とくに日蓮大聖人の仏法で説く、久遠元初くおんがんにじよ、久遠即末法くおんそくまつぽう、久末一同等くまついちどうの時に對する考え方は、それ自

体、偉大なる最高の哲理である。

ここで、第一に物理学的時間と日常生活に用いられている時間について、第二に物理学的時間の中でも、アイザック・ニュートン（一六四二年―一七二七年）の絶対時間と、アルベルト・アインシュタイン（一八七九年―一九五五年）の相対時間とについて、第三に仏法で説く時間の本質について、簡単に触れてみたい。

第一に、われわれが、ふつう日常生活で使っている時間とは、どんなものであろうか。時間は、第一に「午前八時十分に出勤した」というようなその時の時刻と、第二に「試験時間は三時間である」というような継続した時間とがある。いずれも、地球の公転と自転によって定めた時間である。

われわれの日常生活は、ニュートンの絶対的時間で、ほとんど不自由はない。すなわち時間は同じ速さで進み、もし外界からの力がなければ地球は同じ速度で自転、公転をつづけているとして、約束のうでで定めた共通な時間である。太陽のまわりを地球が公転し、春夏秋冬を繰り返すのを一年と定め、地球の自転で昼と夜を繰り返すのを一日と考え、これを等分して時間を定めた。

現代のように、一日を二十四時間に分けたのは、古代エジプト人である。すなわち太陽を中心に生活した古代エジプト人は、西紀前四〇〇〇年ごろ、三百六十五日を一年とする太陽暦を用い、西紀前三〇〇〇年ごろには、昼と夜を、それぞれ十二時間に分けた。同じくバビロニアにおいても西紀前八世紀ごろには昼夜をおのおの十二時間に分けて、時間を定めていた。また一日を十二時に分ける方法も行われ

た。これらの思想がギリシャ、ローマにおいて発展して、いろいろな形を経て今日にいたっている。日本や中国では、十二支による十二分法が長い間使われてきた。

現在の時間は、同じように、一日を二十四時間として、一時間を六十分、一分を六十秒としているが、一日の時間、一時間の時間に、それぞれ平均太陽日、平均太陽時を用いている。なぜなら、昔のように、太陽がある地点の子午線しごせん（北極と南極を結ぶ大円）を通過してから、また同じ子午線を通過するまでの時間を一日とする真太陽日（太陽日）を用いることは、地球の軌道が円ではなく楕円だえんであるため、一日の長さが一年を通じて一定でなくなるからである。平均太陽日は、一年を通じて同じ速さで黄道上を運動している仮想の太陽を考えてつくった時間であり、平均太陽時は、その二十四分の一の時間である。実際には、恒星を観測して得た真恒星時から、平均恒星時を算出し、平均太陽時に換算している。そうすると一年は三百六十五・二四二二平均太陽日であり、それは三百六十五日五時間四十六分四十八秒となる。

また、最近では、地球の自転速度には、なお原因不明な変動があるため、不規則をまぬかれず、より正確を期して、地球の公転周期にもとづく定義にかえられた。すなわち一九〇〇年初めの時点で計った一太陽年（太陽が春分点から春分点までかえる時間）の三二五五六九二五・九七四七分の一を一秒と決めた。さらに正確な時間の決定のために、アンモニア分子の中の窒素原子の振動や、セシウム原子の中の振動の周期を利用した原子時計の研究等も進められている。いずれにしても、地球の公転と自転、あ

るいは原子の振動などによって定めた時間であるから、絶対的客観的な時間とはいいいがたい。

次に平均太陽がイギリスのグリニッジ天文台にあるグリニッジ子午線しごせんを通過する時刻の十二時間前を午前零時として、これをグリニッジ標準時間といい、全世界の地域標準時の基準としている。各国では、グリニッジ標準時と整数時間の差をもつ標準時を定めている。日本では東経一三五度を標準時としているため、グリニッジ標準時より九時間だけ早い。

第二にアインシュタインの相対性理論というものは、いかなるものであろうか。ニュートン以来の古典物理学では、時間、空間は絶対的なものとされてきた。ところが、アインシュタインの特殊相対性理論、つづいて一般相対性理論によって、時間、空間はすべて絶対的なものではなく、相対的なものであるという、新しい概念におきかえられた。

アインシュタインが相対性理論を発表するまでは、ニュートンの古典力学が用いられていた。ニュートンは『プリンキピア』という有名な著書に、時間と空間の絶対性を説いて「Ⅰ 絶対的な、真実な、数学的な時間は、みずから、自身の本質にしたがって、外部の何ものとも無関係に一樣に流れていく」「Ⅱ 絶対的な空間は、それ自身の本質からして、外部の何ものにも無関係に、いつも同一のまま、不動のままである」(岡邦雄・市場泰男訳『世界大思想全集』所収、河出書房新社)といった。そして、これだれも疑うものはなかった。

ところが、アインシュタインは、時間と空間は、決してこのように別個に独立して存在するのではな

く、きわめて密接に関連しあっている。すなわち、時間も空間も、どちらかの一方だけでは存在できないで、お互いに関係しあっているものである。そして、宇宙のすべてのものは、時間と空間をもちながら、つねに休むことなく運動と変化をつづけており、われわれも時間を第四の次元とする四次元の世界に住んでいるという。四次元とは、空間が、タテ、ヨコ、高さをもつ三次元で、時間の概念を加えると四次元になるというわけである。

これを具体的にいえば、時間は相対的であり、あらゆる場所で、まったく同様には測定されない。相対性理論の世界は、光速度に関係が深い。光速度は一秒に約三十万キロであるが、宇宙のかなたの星は何万何億光年も遠い先にある。すなわち十萬光年の星の光は、十萬年前に輝いた星の光を、いまわれわれがようやく眺められるわけである。しかし地球上では、この光速度が、われわれの生活の各速度と比べてあまりにも大きいので、ほとんど相対性理論の影響を感じないが、実際には光速度が関係して、わずかでも次のような奇妙なことがおこるという。

すなわち特急列車の中で、二人の人が同時に別の場所で、それぞれタバコに火をつけたとする。しかし地面に立っている人からみれば、決して火のつけ方は同時ではないというのである。これは宇宙の天体間の出来事に拡大して考えれば納得なつとくできるであろう。このように、異なった場所に起こった二つの事件が、ある場所からみて同時であったとしても、他の場所からみれば同時ではなくなり、一定の時間だけへだたっていることになる。

そのほか、光速度以上の速度は絶対に出せない。また、速度が増すにつれて、時間は遅れるようになり、光速度に近づけば近づくほど、時間が遅れるようになり、光速度の速さの物体では生命の変化や運動が感じられないから時間も感じられないことになる。また、科学解説者ガモフ（『現代物理学の世界』伏見康治・鎮目恭夫訳、白揚社）によれば、例えば宇宙船が地球から太陽系の他の惑星^{わくせい}や、銀河系内でも近くの他の恒星の惑星を訪れ、そして地球に帰ってきた操縦士や乗客は、地球上にいた人よりも年をとらないで若いこともありうるという。そして、これは帰ってくる時の方向転換のための大きな加速度をうけることを考えれば、数学的に証明できるといふ。

たとえば、非現実的ではあるが、八光年離れているシリウス星まで、光速度の九八パーセントに達する宇宙船に乗れば、九年で帰ってこられるが、地球上に住む人からみれば、十六年後にやっと帰ってくるといふ計算になるという。また銀河系宇宙の中心まで往復旅行をすれば、地球上の暦では四万年かかるが、宇宙船自体の時計では、わずか三十年しかかからないという。

もちろん、これらは時間と空間の相対論的性質を示す一つの話にすぎない。現実には、いかにイオンロケットや原子力を用いても、遠い恒星まで旅行できるような宇宙船は作ることができないからである。しかし、このような時間と空間の相対性は、もはや否定することはできない。そして、宇宙時代の展開とともに、種々の分野に影響を与えずにはおかないであろう。また、この相対性理論における時間、空間の問題は、哲学、思想上にも、大きな影響を与えずにはおかなかった。ただ、東洋仏法の真髓

のみが、相対性理論いな、それ以上の時間空間論を説いていることが、偉大なる大仏法を究明することによって知られるのである。

結論的にいえば、相対性理論が唱えられたことによって、仏法の説く時間論の正しさが、証明されることになるのである。そして、あくまでも宇宙生命の存在、変化、運動が時間の主体であるから、光速以上の速度を考えて、時間がマイナスになる、すなわち歴史を逆行させるといような空論が、事実として成立するわけのものではないことは当然である。自然界にあつても、因果の理法によって成り立つ現象が、逆戻りすることはありえないから、とうぜん時間の可逆性^{かぎやくせい}は成り立たない。

第三に、仏法においては、それぞれの生命の感ずる時間をもつて、その時間としている。たとえば、非常に楽しいとき、たとえば十界の中では天界の時には、じつに時間の進み方が早い。このような時には、数時間も二、三時間ほどにしか感じないものである。このことは、われわれの生活感情から、容易に首肯^{しゅくこう}できるのであろう。

その反対に、非常に苦しい悩みの多い日常生活にあつては、苦痛の一日が早く終わればよいと感じながら、一日が非常に長く感じられるものである。すなわち時間のたつのが遅く感じられる。ゆえに、地獄界にあつては、時間のたつのが遅く感じられ、それだけ苦痛が多いわけである。

このように、生命活動の果報として得られる時間は、時計で計る時間とは違って、すべての時間の長短は、その時の十界三千の果報によって決定される。たとえば、深い眠りに入っているような時は、

生命活動のうえに意識が消えて、時間がまったく感じられない。死んだ後にわが生命が宇宙生命に冥伏した時も同様であろう。そして、翌朝眠りから覚めて、縁によって思い出すように、過去を感じるのである。

たとえば、法華経涌出品第十五に「亦皆、默然たること五十小劫、仏の神力の故に、諸の大衆をして半日の如しと謂わしむ」(妙法蓮華経並開結四七六)とある。大聖人はこれに対して天台大師の釈を引用されて「『解者は短に即して長・五十小劫と見る惑者は長に即して短・半日の如しと謂えり』(中略)釈の意分明なり爾前迹門の菩薩は惑者なり地涌の菩薩のみ独り解者なりと云う事なり」(「当体義抄」御書五一七)と仰せである。

この法華経の文は、涌出品で大地より涌出した地涌の菩薩が、五十小劫のあいだ釈尊を讃嘆したが、その間釈尊は默然として坐しており、仏の神力のゆえに諸の四衆は半日のようにしか思わなかったが、解者である地涌の菩薩は、半日のように思える期間が、じつに五十小劫という長い年月であったということを知っていたというものである。

五十小劫という年月を、半日と思うか長い年月と感じるか、これが惑者と解者の違いであり、このように時間の長さは感ずる人によってさまざまなのである。

次に「久遠」について述べるならば、「御義口伝下」には「第三我実成仏已来無量無辺等の事 御義口伝に云く我実とは釈尊の久遠実成道なりと云う事を説かれたり、然りと雖も当品の意は我とは法界の

衆生なり十界已已を指して我と云うなり、実とは無作三身の仏なりと定めたり……仏とは此れを覺知するを云うなり已いとは過去なり来らいとは未来なり已来の言の中に現在是有るなり、我実と成ひらけたる仏にして已いも来らいも無量なり無辺なり」（御書七五三二）と仰せられ、さらに「久遠とははたらかさず・つくろわす・もとの儘ままと云う義なり、無作の三身なれば初めて成ぜず是れ働かざるなり、卅二相八十種しゅど好を具足ぐそくせず是れ繕つくろわざるなり本有常住ほんねの仏なれば本の儘ままなり是を久遠と云うなり、久遠とは南無妙法蓮華經なり実まことに成無作と開けたるなり云云」（御書七五九二）と仰せである。まことに甚深じんじんの法門であると拝する。

過去、現在、未来という時間について「已いとは過去なり来らいとは未来なり已来の言の中に現在是有るなり、我実と成ひらけたる仏にして已いも来らいも無量なり無辺なり」（御書七五三二）とは、現在の一念、現在の一瞬の中に、過去も未来も、すべて含まれているという重大な御教示と拝するのである。また、「総勘文抄」には「過去と未来と現在とは三なりと雖いふも一念の心中の理なれば無分別なり」（御書五六二二）と、過去、現在、未来と一往は區別することができが、生命の本源からみれば、區別できないと仰せられている。

生命活動の本源をたどれば、究極は現在の瞬間の生命にあることがわかる。過去というものを考えれば、あるものを縁として過去を思い出すゆえに、過去の実在を知りうるのである。思い出すということがなかったら、過去があったのか、なかったのか、まったくわからない。記憶を再現することは、一瞬

の生命の働きであり、一瞬の生命を成いて過去の生命活動を湧現するのである。ゆえに現在の一瞬の生命活動があるゆえに過去があり、過去は現在の一瞬にすべて包含ほうがんされる。また、将来起ることを考え、未来を認め、未来を確信するのも、現在の一念の働きであり、現在の一瞬の生命活動の働きといえる。たしかに、いま現在と思つた刹那せつなはすぐ過去となり、未来もたちまち現在となり、過去となる。したがってこの瞬間の生命に、過去、現在、未来があるのである。

さらに一瞬の生命に因果を有しており、過去のすべての因が現在の果となり、現在の因が未来の果を生ずる。そして因果俱時ぐじ不思議の一法を南無妙法蓮華經と名づけるのである。「御義口伝」には「元初がんじょの一念一法界より外に更に六道四聖とて有る可からざるなり所謂南無妙法蓮華經は三世一念なり」(御書七八八ページ)と仰せであり、「百六箇抄」には「久遠一念元初の妙法……」(御書八六七ページ)、また「本因妙抄」に「久遠一念の南無妙法蓮華經」(御書八七一ページ)等と仰せである。

このように、過去も未来も、すべて現在の一瞬に含まれ、一瞬一瞬の生命活動が変化しつつ連続するのが永遠である。現在の一瞬の生命のうちに、過去永遠の生命を包含し、未来永劫えいごうの生命を包含する。久遠の生命も一念の生命におさまるのである。

次に久遠即末法とは、すなわち「久遠とははたらかさず・つくろわず・もとの儘まま」であり、本然のありのままの姿を久遠といい、それはそのまま現在の諸法実相になるのである。ゆえに生命活動の本質をたどってみれば、究極はすべて一瞬であり、それをさして久遠元初ともいい、末法ともいう。そして、

久遠元初も末法も、ともに三大秘法の南無妙法蓮華經がひろまる時なるがゆえに久遠即末法、久末一同というのである。

所詮^{しよせん}、仏法よりみれば、われわれの生命活動なくして、時間はない。われわれの生命活動を根本として、宇宙生命の運動、変化から感じ取っていくのが、真実の時間なのである。以上が仏法で説く時間論の一断面である。

第二章

仏教は時によるを明かす

寂滅道場の砌には十方の諸仏示現し一切の大菩薩集會し給ひ梵帝・四天王は衣をひるがへし竜神・八部は掌を合せ凡夫・大根性の者は耳をそばだて生身得忍の諸菩薩・解脱月等請をなし給ひしかども世尊は二乗作仏・久遠実成をば名字をかくし即身成仏・一念三千の肝心、其義を宣べ給はず、此等は偏にこれ機は有りしかども時の来らざればのべさせ給はず經に云く「説く時未だ至らざるが故」等云云、靈山會上の砌には閻浮第一の不孝の人たりし阿闍世大王座につらなり、一代謗法の提婆達多には天王如来と名をさづけ五障の竜女は蛇身をあらためずして仏になる、決定性の成仏は焦種の花さき果なり久遠実成は百歳の叟・二十五の子となれるかとうたがふ、一念三千は九界即仏界・仏界即九界と談ず、されば此の經の一字は如意宝珠なり一句は諸仏の種子となる此等は機の熟不熟はさてをきぬ時の至れるゆへなり、經に云く「今正しく是れ其の時なり決定して大乘を説かん」等云云。

通解

——寂滅道場の時には、十方の諸仏が示現し、いっさいの大菩薩はその會座に來集され、大梵天、帝釈天、四天王は衣をひるがえして集まり、竜神、八部衆は掌を合わせて仏を礼拝し、凡夫、大根性の者は耳をそばだて、生身得忍の諸菩薩、解脱月菩薩等が懇ろに説法を請われたが、仏は二乗作仏、久遠実成の名字すらかくして説かず、即身成仏、一念三千の法門については、その義を述べられなかった。これら

はその機はあつたかもしれないが、ひとえに時がきていなかったので述べられなかったのである。法華經方便品第二に「説時未だ至らざる故」と説かれているとおりである。

そして、靈鷲山会りょうじゆせんえにおいては、世界第一の不孝者となつた阿闍世王あじやせもその会座えざに連なり、一生の間、謗法ぼうほうを犯しつづけた提婆達多だいばだつたには天王如来てんのうにょらいの記を授けられ、五障ごしようの竜女りゆうにょは蛇へびの身を改めないで即身成仏の現証を示した。決定性けつじやうしやうの二乗が成仏したことは、あたかも焦いれる種がふたたび芽を出し花が咲き果がなつたようなものであり、また久遠実成が明かされたことは百歳の老人が二十五の若者になつたのかと疑わせた。一念三千は九界即仏界・仏界即九界と説いている。だから、この法華經の一字は如意宝珠にょいほうしゆであり、その一句は諸仏の種子である。

これらはすべて、衆生の機根きこんの熟じゆく・不熟ふじゆくではなく、時のいたれるゆえなのである。ゆえに法華經方便品第二には「今正しく是れ其の時なり、決定けつじやうして大乘を説く」と説かれているのである。

語訳

寂滅道場じやくめつどうじやう

釈尊が初めて正覺を得た場所。寂滅は涅槃ねはん、道場は道みち（菩提）を得る場所の意。華嚴經卷一には「一

時仏、摩竭陀国寂滅道場に在りて始めて正覺を成ず」（大正九卷二九五頁）とある。寂滅道場は、摩訶陀（摩竭陀）

国に尼連禪河畔れんぜんがはん、伽耶城南がやじやうの菩提樹下をいう。

十方の諸仏 十方とは東西南北の四方と東南・東北・西南・西北の四維しゐに上下の二方を加えたもの。「十方の諸仏」

とは十方の仏土に住する諸仏のこと。また総じて一切無量の諸仏をさす。各経々に十方の諸仏が説かれるが、華嚴經では、東方善徳仏・東南方無憂徳仏・南方栴檀徳仏・西南方宝施仏・西方無量明仏・西北方華徳仏・北方

相徳仏・東北方三乗行仏・上方広衆徳仏・下方明徳仏の十仏。

梵帝 梵天と帝釈天のこと。梵天は梵名マハーブラフマン (Mahābrahman) の訳。古代インド思想では万有の根

源とされるブラフマン(梵)を神格化したものであったが、仏教では色界の初禪天に住する三天(大梵天・梵輔天・梵衆天)の総称。また一般には初禪天の主である大梵天をさしている。娑婆世界を支配する善神。帝釈天は梵名シャクロデヴァーナーナム・インドラ (Sakro Devānam Indrah) の訳。釈提桓因ともいう。もともとヴェーダ神話の雷神であったが、仏教では欲界第二忉利天の主として須弥山の頂の喜見城に住し、他の三十三天を統領していると説かれる。ともに護法の諸天善神の中心的存在とされる。法華経では、梵天、帝釈は、眷属二万の天子とともに法華経の会座につらなり、法華経の行者の守護を誓っている。

四天 四天王の略。帝釈天の外将で、須弥山の中腹にある四王天の主のこと。東は持国天、南は増長天、西は広目天、北は多聞天である。

竜神・八部 竜は種々の神秘的な力を持つので竜神と呼ばれる。畜生類の代表であり八部衆の一つである。八部は仏法を守護する八種類の諸天のことで、法華経譬喻品第三等にある。天竜八部ともいう。これは①天(天界に住む諸天)②竜(海、池に住む畜類)③夜叉(鬼神の一つ)④乾闥婆(天の音楽の神)⑤阿修羅(須弥山下の海底に住む鬼神の一つ)⑥迦楼羅(竜を主食とする鳥で、翼、頭が金色をしている)⑦緊那羅(楽器を奏する天の音楽の神)⑧摩睺羅伽(人身、蛇頭の大蟒神)をいう。

凡夫・大根性の者 愚かで凡庸な人間のこと。仏法の道理を未だ理解せずに煩惱・業・苦に束縛され、迷いの世界(六道)で生死を繰り返す者。日蓮大聖人は「御義口伝」に「末法の仏とは凡夫なり」(御書七六六頁)と述べられ、薄地の凡夫である名字即位から即身成仏する凡夫即極の原理を明かされた。大根性の者とは、凡夫のなかで

機根きこんのすぐれているものをいい、とくに大乘教を受持するのにたえる機根をいう。

生身得忍 現実の身のままで無生法忍むしょうほうにんという悟りの極果ごくかを得ること。生身は父母から生じた肉体にくたいとさし、忍とは無生法忍のこと、涅槃の法理に安住し心が動じない位のこと。

解脱月げだつがつ 解脱月菩薩のこと。華嚴經の第六会え（他化自在天宮会）に金剛藏菩薩を上首として来集し、諸菩薩の一人。金剛藏菩薩はこの会座で十地の名を説き、それを詳説しなかつたので、解脱月菩薩は大眾を代表して更に説法を請うたとある。金剛藏菩薩はこの請法に対して十地品を説いた。

二乗作仏さぶつ 二乗（声聞、縁覺）が成仏すること。法華經迹門で初めて説かれる。爾前の諸經では、自己の解脱に執著し利他に欠けていた二乗は、永久に成仏できないと仏から彈呵だんかされたが、法華經迹門では一、念三千の法門が説かれ、初めて成仏の記別が与えられたことをいう。

久遠実成くおんじつじょう 法華經如来寿量品第十六で釈尊が始成正覺の迹をはらって、五百塵点劫じんてんごうという久遠の昔に成道したことを。と。

即身成仏 衆生が凡夫の身のままで仏に成ること。当意即妙、凡夫即極などと同意。妙法の功力によって、長期の歴劫修行によらず、凡夫の肉身のままで仏の境界を得ること。法華經で初めて説かれた法門。爾前の諸經では、衆生は無量無數劫の修行を経歴きようりやくし（歴劫修行）九界の姿を脱して仏になると説かれた。しかし法華經提婆達多品第十二に至って、八歳の童女の即身成仏が明かされた。

一念三千 衆生の一念の心に三千の諸法を具足するという法門。一念とは一瞬一瞬のわずかな心とさし、三千とは現象世界のすべてをいう。法華經迹門方便品に説かれる十如是を中心とする円融円満の教理。本門に説き顕される本因・本果・本国土の三妙合論を中心とする釈尊の久遠以来の振る舞いを所依として、天竺大師が『摩訶止

『觀』に体系化した仏教の最高峰に位置する法門。

機 機根のこと。仏の説法を聞き、受け入れて発動する衆生の生命の可能性をいう。釈迦仏法では衆生の機根に利鈍純雑があるとして、それぞれの機根に応じて別々の教えを説いた。しかし末法の衆生は独一本門、日蓮大聖人の三大秘法の南無妙法蓮華經によって久遠元初の下種を覚知し、成仏できる機根である。

靈山会上^{りようぜんえじょう} 釈尊が法華經を説いたとされる靈鷲山の會座のこと。二処三會^{にしよさんね}の中、二処の一つである。二処三會とは法華經を説法した二つの場所と三つの法會（説法のための集會）のことで、二処は靈鷲山と虛空（大空）、三會は前靈山會・虛空會・後靈山會のこと。法華經二十八品のなかで、法華經序品第一から同見宝塔品第十一の前半までの法會は靈鷲山、同見宝塔品の後半から同囑累品第二十二までの法會は虛空、同藥王菩薩本事品第二十三から同普賢菩薩勸發品第二十八までの法會がまた靈鷲山で説かれる。この間の説法の場所が二つ、法會が三つあるところから二処三會の名がある。また法華經の説法全体を総稱して靈山會という場合もある。

閻浮^{えんぶ} 閻浮提の略。一閻浮提とも南閻浮提ともいう。閻浮提は梵名ジャンブードヴィーパ（Jambū-dvīpa）の音写。閻浮とは樹の名。提は洲と訳す。古代インドの世界觀では、世界の中央に須弥山^{しゆみせん}があり、その四方に東弗婆提^{ぼつぱだい}、西瞿耶尼^{くやに}、南閻浮提、北鬱單越^{うったんのつ}の四大洲があるとす。南閻浮提は本来、インドを中心とする世界であつたが、転じて全世界という意味をもつようになった。

阿闍世大王^{あじやせ} 阿闍世とは梵名アジャータシャトウル（Ajātasattu）の音写。末生怨^{みしやうおん}と訳す。釈尊在世における中インド摩訶陀国の王。父は頻婆娑羅王^{びんばしやらおう}、母は韋提希夫人^{いだいけ}。提婆達多^{だいばだつた}と親交を結び、仏教の外護者であつた父王を監禁し獄死させて王位についた。即位後、摩訶陀国をインド第一の強国にしたが、半面、釈尊に敵対し、醉象^{すいぞう}を放つて釈尊を殺そうとするなどの惡逆を行った。後、体中に惡瘡^{あくそう}ができ、改悔^{かいげ}して仏教に帰依し、壽命を延ばし

た。仏滅後は第一回の仏典結集の外護の任を果たすなど仏法のために尽くした。

座につらなり 法華經序品第一の列衆の最後に「韋提希の子阿闍世王、若干百千の眷屬と俱なりき」（妙法蓮華經並開結一二二二）とある。「乙御前御消息」には「阿闍世王と申せしは父をころせし惡王なれども法華經の座に列りて一偈一句の結縁衆となりぬ」（御書一二一八）と仰せである。

一代謗法の提婆達多 謗法とは正法を誹謗すること。日寛上人は、一義には釈尊一代の經教を謗したから一代謗法といい、また一義には提婆は一代を通じて徹底的に仏教を謗したから一代謗法というとされている。提婆達多は梵名デーヴァダッタ (Devadatta) の音写。略して提婆、達多、調達ともい、漢訳して天授、天熱という。『大智度論』卷三によると、斛飯王の子で、阿難の兄、釈尊の従弟とされるが異説もある。また仏本行集經卷十三によると釈尊成道後六年に出家して仏弟子となり、十二年間修行した。しかし惡念を起こして退轉し、阿闍世王をそそのかして父の頻婆娑羅王を殺害させた。釈尊に代わって教団を教導しようとしたが許されなかったので、五百余人の比丘を率いて教団を分裂させた。また耆闍崛山上から釈尊を殺害しようと大石を投下したが果たすことができなかった。更に蓮華色比丘尼を殴打して殺すなど、破和合僧、出仏身血、殺阿羅漢の三逆罪を犯した。そのため、大地が破れて生きながら地獄に墮ちたとある。しかし法華經提婆達多品第十二では釈尊が過去世に國王であつた時、位を捨てて出家し、仕えた阿私仙人が提婆達多の過去の姿であるとの因縁が説かれ、未來世に天王如来となるとの記別が与えられた。

天王如来 法華經提婆達多品第十二で、提婆達多が釈尊から未來成仏の記別を受けた時の仏の名号。

五障の竜女 五つの障りを持った竜女の意。法華經提婆達多品第十二に説かれる。五障とは女人に備わるとされる五つの障害のこと。爾前經において女人は、一には梵天王、二には帝釈、三には魔王、四には轉輪聖王、五には

仏になることができないとされたことをいう。五礙ともいう。竜女は沙竭羅竜王の八歳の娘。法華經提婆達多品第十二には、そのような竜女が文殊師利菩薩の説法を聞いて菩提心を発して不退の位に住し、法華經の会座に詣でて即身成仏の相を現じ、更に衆生を化導したことが説かれている。

決定性 法相宗で説く五性のなかで、阿羅漢果、辟支仏果、仏果を得ることが決定している三つの種性、すなわ

ち声聞種性、縁覚種性、菩薩種性のこと。決定は不定に対する語で、定まって動じないこと。このなかで声聞種性と縁覚種性は、それぞれ阿羅漢と辟支仏になれるが永久に成仏できない（決定性の二乗）と説かれている。

焦種の花さき果なり 焦種とは火で焦られた種子のこと。焦種とも書く。焼かれてもはや芽の出なくなった種子をまいて、花が咲き果がなるのと同じくらい不思議なことをいう。焦種とは、声聞、縁覚の二乗が灰身滅智の小乗教に執著して、仏の種を焦り殺したことにたとえ、焦った種は芽を出さないように二乗は絶対に仏になれないとされたが、法華經において成仏の記別を与えられたこと。

百歳の叟・二十五の子 法華經涌出品第十五で、地涌の菩薩が出現した時に、会座の大衆は地涌の菩薩の威儀堂々たる姿をみて、おそらくこれは釈尊の師匠か親でもあらうと思ったが、これに対し釈尊は地涌の菩薩は自分の弟子であると説いた。この時に、会座の大衆が百歳の叟のような地涌の大菩薩が、二十五の青年のような釈迦仏の子供であらうかと疑ったことをいう。「開目抄下」には「此の大菩薩は彼等にはにるべくもなき・ふりたりげにまします定めて釈尊の御師匠かなんとおぼしきを令初發道心とて幼稚のものども・なりしを教化して弟子となせりなんど・をほせあれば・大なる疑なるべし（中略）外典に申す或者道をゆけば路のほとりに年三十計りなる・わかものが八十計りなる老人を・とらへて打ちけり、いかなる事ぞと・たとえば此の老翁は我が子なりなんど申すと・かたるにもにたり」（御書二二二）とも仰せである。

九界即仏界・仏界即九界　九界は地獄界から菩薩界までの九種の界々で、迷いの衆生の境界をさし、仏界は悟りの境界をさす。迷いの衆生（九界）にも悟りの仏の境界があり、もともとそなわっている仏界を悟ることができるといふ法理。九界も仏界も各別ではなく一体不二であること。十界互具と同義。法華經方便品の「舍利弗、云何なるをか諸仏世尊は、唯一大事の因縁を以っての故に、世に出現したもうと名づくる。諸仏世尊は、衆生をして仏知見を開かしめ、清浄なるを得せしめんと欲するが故に世に出現したもう」（妙法蓮華經並開結一六六頁）等が九界即仏界の依文で、この妙理が明らかにされることによつて九界の衆生の即身成仏が可能となる。「仏界即九界」とは、仏界にも九界がそなわっており、仏界も九界も各別の存在ではなく一体不二であること。十界互具と同義。爾前の諸經では十界が各別に説かれ、九界と仏界との間には越えられない断絶があつたが、法華經に至つて九界即仏界・仏界即九界が説かれることによつて十界互具の法理が明かされた。法華經如来寿量品第十六の「或は己身を説き、或は他身を説き、或は己身を示し、或は他身を示し、或は己事を示し、或は他事を示す」（妙法蓮華經並開結四九九頁）等が仏界即九界の依文。特に如来寿量品第十六では「我成仏してより已来、甚だ大いに久遠なり。寿命無量阿僧祇劫なり。常住にして滅せず。諸の善男子、我れ本、菩薩の道を行じて成ぜし所の寿命、今猶未だ尽きず。復上の数に倍せり」（妙法蓮華經並開結五〇〇頁）とあり、本有の仏界に菩薩界（総じて九界）がそなわっていることが説かれ、仏界即九界と共に九界の常住不滅が明かされている。

如意宝珠　意のままに宝物や衣服、食物等を取り出すことのできるという宝珠。如意珠、如意宝ともいう。『大智度論』には仏舎利の変じたものとか竜王の脳中から出たものといひ、雜寶藏經には摩竭魚の脳中から出たものといひ、また帝釈天の持ち物である金剛杵の碎け落ちたものなど諸説がある。

一句は諸仏の種子　法華經の一字一句は一念三千の宝珠である。ゆゑに三世の諸仏を出生する種となる。

熟不熟 熟とは衆生の機根がしだいに成長して、仏の説く法を開悟かいごできるようになっていること。不熟とは衆生の機根がととのわず、仏の説く法を聞けない状態のこと。

經に云く「今正しく是れ其の時なり決定して大乘を説かん」 法華經方便品第二の文。（妙法蓮華經並開結一七三六）

講義

この章では、仏が説法するにあたってどのような法門を説くかは、衆生の機根によって決定されるのではなく、時がきたか否かによって決定されることを明かされている。

その例として、寂滅道場じやくめつどうじょうすなわち華嚴經の説法と、靈山會上りようぜんえじょうすなわち法華經の説法とを比較ひかくされている。華嚴經の時は、十方の諸仏、一切の大菩薩、梵帝ぼんたい四天等が集まったにもかかわらず、二乗作仏、久遠実成くおんじつじょう、即身成仏、一念三千等の肝要の法門は一つも説かれなかった。

それに対して法華經の説法の時には、世界第一の不孝者といわれる阿闍世王あじやせおうや、一代を通じて仏を誹謗ひぼうした提婆達多だいばだつたや、畜生の竜女さえその座につらなり、二乗作仏、久遠実成、一念三千を説いて、一切衆生の即身成仏を説き明かしたのである。要するに華嚴經の時には「説時未だ至らざる故」（妙法蓮華經並開結一七三六）に説かなかったたのであり、法華經の時には「今正しく是れ其の時なり」（妙法蓮華經並開結一七三六）で、時がきたゆえ、一念三千、即身成仏という釈尊出世の本懷ほんがい、一代仏教の肝要、真髓しんずいを説き明かしたのである。このように、仏は、善人のためではなく、むしろ悪人のために大法を説

いたゆえに、仏教は機によらず、もっぱら時によるといのである。

このように、仏は時に相応する教法を説き、また時代相応の教法を定めたのである。仏道修行者は、まずその時代相応の教を求め、時代相応の修行をしなくてはならない。だから爾前四十余年に法華經を修行したり、後八年に爾前經を修行しても、得道のできるわけがない。仏滅後においても、次の御書に御教示のように、時代によって機法相応に相違があるのである。「正法一千年の機の前には唯ただ小乗・權大乘相叶あいかへり、像法一千年には法華經の迹門・機感相応せり、末法の始の五百年には法華經の本門・前後十三品を置きて只寿量品の一品を弘通すべき時なり機法相応せり」(御書一〇二一ページ)と。

同じように日蓮大聖人の滅後においても、三大秘法のうち、まず題目が流布し、ついで本尊が流布し、最後に本門戒壇の建立となるのである。創価学会の出現した当時は、日本国中に題目が流布し、南無妙法蓮華經を知らない者は一人もないまでになっていた。しかし、本尊の雜乱ぞうらんがはなはだしく、稻荷いなりや竜神や先祖の戒名かいみょうや釈迦像や帝釈天たいしゃくてんなどと、なにに向かってでも南無妙法蓮華經と唱えさせていた。これでは功德のあろうはずがない。

そこで戸田第二代会長は、第二次世界大戦後の創価学会の再建にあたり、弘安二年十月十二日御出現の本門戒壇の大御本尊が流布されなければならぬと叫ばれ、折伏戦を展開された。題目には信と行があり、本門の大御本尊を信じて南無妙法蓮華經と唱えることを、本門の題目というのである。こうして、正しい御本尊が全国にひろまり、一人一人が宗教革命した時に、広宣流布が成就し、本門戒壇の建

立も完成するのである。

とくに民主主義の時代にあつては、一人一人を折伏し、その功德の体験や人間革命が国主諫曉こくしゅかんぎょうに通じ、さらにあらゆる文化活動を通じて広宣流布が実現されるのである。このように、時を知り、時代に応じた活動でなければ価値がないのである。

「今正しく是れ其の時なり」との法華經方便品の文は、まさしく広宣流布を達成すべき現代のための經文であることを痛感する。政治の根底に、教育の根底に、あらゆる文化の根底に、偉大なる思想、理念、偉大なる宗教を求める声が、今日ほど強い時はない。

その時にあたり、悠久ゆうきゆうなる大河のごとく、峨々ががたる大山のごとく、伝承されてきた東洋仏法の真髓が、よく人類を救う指導理念であることを確信してやまない。この大法が、いよいよ時に応じて、すべての民衆の宝珠ほうしゆとして用いられる黎明れいめいが到来したのである。

一字は如意宝珠なり一句は諸仏の種子となる

法華經には一念三千が説かれており、天台大師は一念三千を止観に「如意珠の如き、天上の勝宝なり」とたとえているように妙の一字は如意宝珠であり、一字一句が一念三千の宝珠のゆえに諸仏の種子となるのである。爾前にぜん經には一念三千がないから、どんなに立派なことが説いてあつても、成仏の種子とはならない。それでは、法華經一部八卷が、そのまま末法の下種本門となるかというところ、そうではな

い。およそ末法下種の正体とは、久遠名字の妙法・事の一念三千である。すなわち文底深秘の大事で、日蓮大聖人の出世の御本懷である。「一念三千の法門は但法華經の本門・壽量品の文の底にしづめたり」(御書一八九ページ)と仰せのとおりである。

本章の御文は権実相對の文であって、華嚴と法華とを比較して、勝劣浅深を判ぜられている。同様の御文で、「觀心本尊抄」に「爾前迹門の円教尚仏因に非ず」(御書二四九ページ)と判ぜられているのは、本迹相對である。さらに同抄の「彼は脱此れは種なり彼は一品二半此れは但題目の五字なり」(御書二四九ページ)の御文は、まさしく種脱相對である。

さらに「秋元御書」には「種熟脱の法門・法華經の肝心なり、三世十方の仏は必ず妙法蓮華經の五字を種として仏になり給へり」(御書一〇七二ページ)と仰せであり、「曾谷入道殿許御書」には「而るに今時の学者時機に迷惑して(中略)題目の五字を以て下種と為す可きの由来を知らざるか」(御書一〇二七ページ)等と仰せである。

以上の御抄のうちで、「觀心本尊抄」では「但」と判じ、「秋元御書」では「必ず」と判ぜられているが、いずれも壽量品文底下種の大御本尊によってのみ成仏がかなうことを御教示されているのである。そして、その文底下種の御本尊とはいうまでもなく、弘安二年十月十二日の本門戒壇の大御本尊である。

第三章

機教相違の難を会す

問うて云く機にあらざるに大法を授けられば愚人は定めて誹謗をなして惡道に墮るならば豈説く者の罪にあらずや、答えて云く人路をつくる路に迷う者あり作る者の罪となるべしや良医・藥を病人にあたら病人嫌いて服せずして死せば良医の失となるか、尋ねて云く法華經の第二に云く「無智の人の中に此の經を説くこと莫れ」同第四に云く「分布して妄りに人に授与すべからず」同第五に云く「此の法華經は諸仏如來の秘密の藏なり、諸經の中に於て最も其の上に在り長夜に守護して妄りに宣説せざれ」等云云、此等の經文は機にあらざれば説かざれというか、今反詰して云く不輕品に云く「而も是の言を作さく我深く汝等を敬う等云云四衆の中に瞋恚を生じ心不淨なる者有り、惡口罵詈して言く是の無智の比丘○又云く衆人或は杖木瓦石を以て之を打擲す」等云云、勸持品に云く「諸の無智の人の惡口罵詈等し及び刀杖を加うる者有らん」等云云、此等の經文は惡口・罵詈・乃至打擲すれどもととかれて候は説く人の失となりけるか、求めて云く此の兩説は水火なりいかんが心うべき答えて云く天台云く「時に適うのみ」章安云く「取捨宜きを得て一向にすべからず」等云云、釈の心は或る時は謗じぬべきにはしばらくとかず或る時は謗ずとも強て説くべし或る時は機は信ずべくとも万機謗べくばとくべからず或る時は万機一同に謗ずとも強て説くべし、初成道の時は法慧・功德林・金剛幢・金剛藏・文殊・普賢・弥勒・解脱月等の大菩薩、梵帝・四天等の凡夫・大根性の者かずをしらず、鹿野苑の苑には俱鄰等の五人・迦葉等の二百五十人・舍利弗等の

二百五十人・八万の諸天、方等大会だいえの儀式には世尊の慈父の浄飯大王じようはんねんごろに恋せさせ給いしかばほとけ仏・宮に入らせ給いて觀仏三昧經をとかせ給い、悲母ひもの御ためにとうりてん忉利天に九十日が間こも籠らせ給いしには摩耶經をとかせ給う、慈父・悲母などにはいかなる秘法か惜ませ給うべきなれども法華經をば説かせ給はずせん詮ずるところ機にはよらず時いたらざれば・いかにもとかせ給はぬにや。

通解

——問う、その機根きこんでないのに大法を授けられると、愚人は定めて誹謗ひぼうし、そのために惡道へ墮おちるであらう。それは説くものの罪ではないのか。

答う、ある人が路みちを作った。その路に迷うものがあるからといって、路を作ったものの罪だといえるだろうか。また良医が藥を病人にあたえても、病人が藥を嫌って服さずに死んだとする。それは良医の過失であらうか。

尋ねていわく、法華經の第二には「無智の人のなかにおいて、この經を説いてはならない」とあり、同じく法華經の第四には「この經を分布して妄みだりに授与してはならない」とあり、また同じく法華經の第五には「この法華經は諸仏如来の秘密の藏であり、諸經の中において、もっともその上にあるものである。ゆえに長夜に守護みだして妄りに宣説してはならない」等とある。これらの經文は、その機根でなければ説いてはならないということではないのか。

いま反詰していうには、法華經の不輕品には「不輕菩薩はしかも会う人ごとに我れ深く汝等を敬うといて礼拝した。これに対し四衆の中には不輕菩薩に対して瞋恚しんにを生じたり、心が不淨の者があり、不輕

を惡口罵詈あつくめりして無智の比丘だといひ、また衆人は杖木瓦石じょうもくがしやくで不輕菩薩を打った」とあり、また勸持品には「多くの無智の人が惡口罵詈等し、および刀杖を加える者があるであろう」と説かれている。これらの經文では惡口罵詈され刀や杖で打たれても法を説けといっている。相手が信じないからといって、どうして説法者の失とがとなるであらうか。

求めていわく、この両説は水火のごときものであるが、どのようにこれを心得たらよいのであらうか。答えていわく、天台は「時に適かなうのみ」といひ、章安は「取捨宜しゆしやよろしきを得て、一向にしてはならない」といっている。この釈の心は、ある時は謗ずるならばしばらく説かず、ある時はどんなに誹謗しても強いて説くべきであり、またある時は一機が信じて万機が謗そしるならば説いてはならず、ある時は万機が一同に謗しても強いて説くべきである。

釈尊の初成道の時には、法慧ほうえ、功德林くどくりん、金剛幢こんどうどう、金剛藏こんどうぞう、文殊もんじゆ、普賢ふげん、弥勒みろく、解脱月げだつがつ等の大菩薩を初めとして、梵天ぼんてん、帝釈たいしやく、四天王等の諸天や、凡夫ぼんぷ、大根性の者が数知れず集まっていた。また鹿野苑ろくやおんの苑そのには、俱鄰等くりりんの五人の比丘、迦葉等の二百五十人、舍利弗等の二百五十人、八万の諸天が集まってきた。方等大会の儀式には、釈迦牟尼世尊の慈父たる淨飯大王じようばんがねんごろに仏を恋慕したので、仏は王宮へ入られて觀仏三昧經を説かれた。また悲母のためには、忉利天とうりに九十日間もられて摩耶經まやを説かれた。自分の慈父、悲母のためにはどんな大法をも惜しむだらうか。けれども法華經をば説かれなかったのである。結局のところ、衆生の機根によるのではなくて、時がいまだこなかったゆえに法華經を説かれなかったのである。

人路をつくる 日寛上人は「愚人に大法を授くる所以は、彼をして信を生じ仏果に至らしめんが為なり。然るに却つて誹謗を作して惡道に墮せんは、これ彼の者の過にして説く者の罪に非ざるなり。記五末五十八に云く『仏の元意に従るに、唯福を生ぜんが為のみ。是れ迷者の過にして路の咎に非ざるなり』と」（文段集二二九頁）と仰せである。

良医・藥を病人にあたう 日寛上人は、良医とは日蓮大聖人、藥とは法華經壽量品の肝要・名体宗用教の南無妙法蓮華經であり、病人とは、日本国中の三毒強盛の惡人のことをいうのであると示されている（文段集二二九頁）。遺教經には「我は良医の病を知つて藥を説くがごとし、服すと服せざるとは、医の咎にあらず」（大正十二卷一一二頁）とある。

法華經の第二に云く「無智の人……」 法華經第二の卷譬喻品第三、長者偈中の文。（妙法蓮華經並開結二四六頁）

同第四に云く「分布して……」 同じく法華經第四の卷法師品第十、長行の文。（妙法蓮華經並開結三九〇頁）

同第五に云く「此の法華經……」 同じく法華經第五の卷安樂行品第十四の文。（妙法蓮華經並開結四六五頁）

秘密の蔵 凡夫には思議できない甚深微妙な仏の教法を包含した法門のこと。蔵は収め持つ意。仏が胸奥に秘めた深遠の教法のこと。秘密の奥蔵ともいう。『法華玄義』序に「此の妙法蓮華經は、本地甚深の奥蔵なり」とある。

また法華經安樂行品第十四に「文殊師利、此の法華經は、諸仏如来の秘密の蔵なり」（妙法蓮華經並開結四六五頁）と説かれるように法華經をさす。森羅万象ことごとく妙法に収められているゆえに蔵という。また仏がいまだ説いたこともなく、しかも仏のほかだれも知らないゆえに秘密という。『法華文句』卷九下に「秘密とは……昔より説かざる所を名づけて秘と為し、唯仏のみ自知するを名づけて密と為す」（大正三十四卷一二九頁）とある。

長夜 非常に長い期間のこと。もともとは『唯識論』に「仏説いて生死の長夜となす」とあるように、長く無明の眠りからさめないことをいった。

我深く汝等を敬う 法華經の不輕品第二十の文であるが、この下に「敢えて輕慢せず。所以は何ん。汝等皆菩薩の道を行じて、当に作仏することを得べし」(妙法蓮華經並開結五六七べ)とあり、いわゆる不輕菩薩の二十四文字の法華經のことである。

四衆 一意は、四部衆すなわち比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷をいう。比丘は梵語ビクシュ (bhikṣu) の音写で、仏門に帰依して具足戒を受けた男子、すなわち僧である。乞士、破煩惱などと訳す。比丘尼は梵語ビクシュニ (bhikṣuṇī) の音写で、出家して具足戒を受けた女子。尼僧。除瞋女、薰女などと訳す。優婆塞は梵語ウパーシカ (upāsaka) の音写で、俗家にあつて仏法を信行する男子。清信士、近事男と訳す。優婆夷は梵語ウパーシカ (upāsikā) の音写で、仏門に入つた在家の女子。すなわち俗家にあつて仏法僧に近事し、諸の善法に親近して修習し、過去の罪業を離れて清く、しかもよく仏道に入る信を立て、破戒を離れる女性をいう。清信女、近事女と訳す。他意は、説会の四衆すなわち發起衆、影響衆、當機衆、結縁衆をいう。ここでは一意の四部衆をさしてゐる。

天台云く「時に適うのみ」 天台大師の『法華文句』の文。(大正三十四卷一一八頁)

章安云く「取捨宜きを得て……」 章安大師の『涅槃經疏』の文。(大正三十八卷八四頁)

法慧・功德林・金剛幢・金剛藏 これを華嚴經の四菩薩といい、華嚴經の会座に來集した諸菩薩の上首。法慧菩薩は第三会(切利天会)で十住の法門を説き、功德林菩薩は第四会(夜摩天会)で十行を説き、金剛幢菩薩は第五会(兜率天宮会)で十回向を、金剛藏菩薩は第六会(他化自在天宮会)で十地の法門を、それぞれ説いた。

文殊^{もんじゆ} 文殊師利菩薩^{もんじゆしり}という。文殊師利は梵名マンジュシュリー^(Mañjuśrī)の音写。文殊尸利、曼殊室利などとも

書き、妙吉祥、妙徳等と漢訳する。諸経では般若^(大乘仏教の悟りの智慧)を体現する菩薩で、諸仏要集経巻下では博聞第一とある。迹化の菩薩の上首であり、普賢とともに釈尊の脇士となる。獅子に乗って釈尊の左脇に侍し、智・慧・証の徳を司る。普賢が理を表すのに対し、文殊は智を表す。法華経提婆達多品第十二では、沙竭羅竜王の王宮へ行き、八歳の竜女を化導して、法華経の会座に伴って現れた。

普賢^{ふげん} 普賢は梵名をサマンタバドラ^(Samanta-bhadra)といい、文殊師利菩薩とともに迹化の菩薩の上首で釈尊の脇士。普賢は六牙の白象に乗って右脇に侍し、理・定・行の徳を司る。普は普遍、遍満、賢は善の義。普賢は、この菩薩の徳が全世界に遍満し、しかも善なることをあらわした名号である。

鹿野苑^{ろくやおん} 古代インド波羅奈国^{はらな}にあった園林で、釈尊の初転法輪の地。鹿野園、鹿苑、施野苑とも記す。また仙人住处、仙人墮処、仙人墮処施鹿林などともいう。現在のサルナートにあたり、ベナレスの北方にある。

俱鄰等^{くりん}の五人 釈尊が成道の後、最初の弟子として済度^{さいど}した五人の比丘。五比丘ともいう。俱鄰^(阿若憍陳如)、頽鞞^{あび}、跋提^{ばつだい}、十力迦葉^{じゆりきかしやう}、拘利太子^{くりたいし}（摩訶男^{まかなん}）の五人。諸経によって五人に多少違いがある。『法華文句』では摩訶男が跋提であるとする。

迦葉等^{かしやう}の二百五十人 迦葉は梵名マハーカーシャパ^(Mahākāśyapa)の音写である摩訶迦葉の略。釈尊の十大弟子の一人。摩訶迦葉波などとも書き、大飲光^{だいおんこう}と訳す。付法蔵の第一。王舎城のバラモンの出身で、釈尊の弟子となつて八日目にして悟りを得たという。衣食住等の欲に執著せず、峻厳な修行生活を貫いたので、釈尊の声聞の弟子のなかでも頭陀^{ずだ}第一と称される。法華経授記品第六で未来に光明如来になるとの記別を受けている。鹿野苑の会座に二百五十人をひきつれて参加したのは、摩訶迦葉とは別人で優樓頻螺迦葉^{うるびんら}、伽耶迦葉^{がや}、那提迦葉^{なだい}の兄弟

三迦葉の一人だという説もある。

舍利弗等の二百五十人 舍利弗は梵名シャーリプトラ (Śāripūtra) の音写。身子、鶖鷲子等と訳す。釈尊の声聞十大弟子の一人。摩訶陀国王舎城外のバラモンの家に生まれた。初め六師外道の一人である刪闍耶に師事したが、後、同門の目連とともに釈尊に帰依した。智慧第一と称される。法華経譬喻品第三で未来に華光如来になるとの記別を受けている。二百五十人をひきいて鹿野苑の会座に参加した。

八万の諸天 雑阿含経には「爾の時に世尊、この法を説きたもう、尊者憍陳如および八万の諸天、遠塵離垢し、法眼淨を得たり」(大正三卷一〇四六)等とある。正法念経によれば、八万の諸天は六欲天の中の炎摩天衆という。『大論』には「また八万の諸天は小乗の法を聞いて大乘の悟を得た」とも説かれている。

方等大会の儀式 方等は大乘の異名でもあるが、ここでは天台大師が釈尊一代の説法を五時に立て分けたなかの第三時である方等部の經典を説いたときの儀式をさす。欲界・色界の中間大宝坊において、十六年間(一説には八年間)にわたり、大集経、深密経、淨土三部経、真言三部経、楞伽経、觀仏三昧経などの権大乘経が説かれた。

淨飯大王 淨飯は梵名シュッドーダナ (Suddhodana) の訳。中インド迦毘羅衛国の王。釈尊の父。釈尊の出家に反対したが、釈尊が成道後、迦毘羅衛城に帰還した時、仏法に帰依した。

觀仏三昧経 十卷。中国・東晋の仏陀跋陀羅の訳。正しくは觀仏三昧海経で略して觀仏経ともいう。十二品から成り、仏が迦毘羅衛城尼拘樓陀精舎で父王の閼頭檀(淨飯王)、叔母の憍曇弥(摩訶波闍波提)のために説いたとされる。三十二相・八十種好が示され、仏の相好を觀することが説かれ、更に念仏三昧の功德が明かされている。

忉利天 梵名トラーヤストウリンシャ (Trāyastriṃśa) の音写。三十三天と訳す。六欲天の第二。須弥山の頂上にある。城廓は八万由旬、喜見城と名づけ、帝釈天が住む。城の四方に峰があり、各峰の広さが五百由旬、峰ごと

に八天があり、合わせて三十二天、喜見城を加えて三十三天といわれる。この天の有情は身長一由旬、壽命一千歳といわれるが、それについては、『俱舍論』卷十一に「人の百歳を第二天（即ち三十三天）の一昼一夜とし、此の昼夜に乗じて、月及び年を成じて彼の寿は千歳なり」（大正二十九卷六一頁）と説かれている。賢愚經卷十二、『瑜伽師地論』卷四等にも同様の記述がある。この天の壽命を人間の壽命に換算すると、三千六百万歳にあたる。

摩耶經 二卷。摩訶摩耶經、仏昇忉利天為母說法經ともいう。中国・齊代（四七九年—五〇二年）曇景の訳。釈尊が生母摩耶夫人の恩を報ずるために九十日間にあたりて忉利天に上って説いたとされる。上巻には、釈迦が忉利天に上り摩耶夫人のために説法して初果の益を得させたこと、三カ月後に天宮から閻浮提にかえったことが述べられている。下巻には、釈尊が諸国を巡遊した後、涅槃に入ったとき、摩耶夫人が棺所に行くと仏棺が開いて千の化仏が現れて光明を放ち、母子が再び相見した。そして釈尊滅後六百年ごろに馬鳴、七百年ごろには竜樹が出世して仏法を伝えていくことが記されている。また釈尊滅後一五〇〇年までの法を弘める人の出世年代、事跡等も記されている。

講義

この章は、仏教が機によらず、もっぱら時によることを明かされる中で、初めの「問うて云く機にあらざるに……」からが料簡（そのことについて考えをめぐらすこと）であり、次に「初成道の時は……」からが「寂滅道場の砌」（御書二五六頁）以下の結文である。

料簡の項では、初めに機教相違の難を会される。すなわち大法を聞くべき機根でない衆生に対して

も、なぜ強いて大法を説き聞かせるか。また強いて大法を説き聞かされて惡道に墮ちたとしても、決して説法者の罪ではないことを明かされている。次に「尋ねて云く法華經の第二……」からは經說相違の難を会される。すなわち同じ法華經の中にも、摂受と折伏の両説が説き示されているのは、時代によって異なるのであり、例せば正像二千年は摂受であり、末法は一向に折伏であるようなものである。そして「釈の心は或る時は」と四種の或る時を挙げられている。初めの二つは未謗・已謗の機に配し、未謗の者には摂受、已謗の者には折伏なることを明かされている。すなわち「謗じぬべきにはしばらくとかず」が未謗の場合であり、摂受になり、「謗ずとも強て説くべし」が已謗の場合で折伏になるのである。未謗・已謗といえどもその機根は時によって異なるのであり、これは「時に適うのみ」の文意なのである。また次の二つは、釈尊は本已有善の衆生に対しては小乗教をもつてこれを將護し、不輕は本未有善の衆生に対しては大乘教をもつてこれを強毒するの意である。すなわち「一機は信ずべくとも万機謗べくばとくべからず」が釈尊の小乗教による將護であり、「万機一同に謗ずとも強て説くべし」が不輕の大乘教による而強毒之に相当するのである（以上、文段集二三〇頁より）。これも本已有善、本未有善という衆生の機根によっているようにみえるが、その機根もじつは時によって決定されるのである。ある時に衆生がおり、その衆生に応じて仏が出現して法を説く、これが仏法の原理である。あくまで時によつて衆生も仏も法も決まるのである。日寛上人いわく「而るに五箇の中に於ては時を以て本と為す」

次に「初成道の時……」以下は第二章の「寂滅道場……」（御書二五六頁）からの意を結する文である。

機にあらざるに大法を授けられば等

折伏をした場合に、相手が入信しないのみか、かえって誹謗^{ひぼう}をし、罰を受けてさらに苦悩へとおちていく人がある。こういう人を見ると、初めから折伏されないほうが幸福だったのではないかなどという疑問も生ずる。しかし日蓮大聖人は、はっきりと「人路をつくる路に迷う者あり作る者の罪となるべしや」等の譬え^{たと}を挙げて、折伏する者に罪はないと断定されている。ゆえに、われわれは確信をもって折伏を行すべきである。

なお摂受と折伏については、次の各御抄にも詳しく論じられ、末法には折伏を行すべきことを御教示されている。

「佐渡御書」に「仏法は摂受・折伏時によるべし譬^{たと}ば世間の文・武二道の如しされば昔の大聖は時によりて法を行ず雪山童子^{せつせん}・薩埵王子^{さつた}は身を布施^{ふせ}とせば法を教へん菩薩の行となるべしと責しかば身をすつ、肉をほしがらざる時身を捨つ可きや紙なからん世には身の皮を紙とし筆なからん時は骨を筆とすべし」（御書九五七頁）と。

「開目抄下」に「無智・悪人の国土に充満の時は摂受^{さき}を前とす安樂行品のごとし、邪智^{じやち}・謗法^{ぼうぼう}の者の

多き時は折伏を前とす常不輕品のごとし、譬へば熱き時に寒水を用い寒き時に火をこのむがごとし」
(御書二三五ページ)と。

「如説修行抄」に「末法の始めの五百年には純田・一実の法華經のみ広宣流布の時なり、此の時は
闘諍堅固・白法隱没の時と定めて權実雜亂の砌なり、敵有る時は刀杖弓箭を持つ可し敵無き時は弓箭兵
杖何にかせん、今の時は權教即実教の敵と成るなり、一乘流布の時は權教有つて敵と成りて・まぎら
はしくば実教より之を責む可し、是を撰折二門の中には法華經の折伏と申すなり、天台云く『法華折
伏・破權門理』とまことに故あるかな」(御書五〇三ページ)と。

このようにして折伏を行ずる時は、多くの迫害を受けることは必至であり、迫害を加える者が謗法の
現罰を受けることもまた必定である。しかし結局は、地によって倒れた者は地によって立ち上がるのと
同じで、大御本尊を誹謗して惡道へ墮ちた者は、ふたたび大御本尊の功德によって救われるのである。
これを逆縁の功德とも、毒鼓の縁ともいい、御抄には次のように仰せである。

「教機時国抄」には「謗法の者に向つては一向に法華經を説くべし毒鼓の縁と成さんが為なり、例せ
ば不輕菩薩の如し」(御書四三八ページ)と。「上野殿御返事」には「天竺に嫉妬の女人あり・男をにくむ故
に(中略)年来・男のよみ奉る法華經の第五の巻をとり・両の足にてさむざむにふみける、其の後命つ
きて地獄にをつ・両の足ばかり地獄にいらす・獄卒鉄杖をもつて・うてどもいらす、是は法華經をふみ
し逆縁の功德による、今日蓮をにくむ故にせうぼうが第五の巻を取りて予がをもてをうつ・是も逆縁と

なるべきか」(御書一五五五)と。

さらにいったんは罰を受けても、それがかえって功德に転ずるという大御本尊の功德がある。これを
変毒へんどく為薬やくといい、御抄には次のように御教示されている。「太田入道殿御返事」には「竜樹菩薩の大論
に云く『(中略) 譬たとえば大薬師の能く毒を変じて薬と為すが如し』云云、天台此の論を承うけて云く『譬え
ば良医の能く毒を変じて薬と為すが如く乃至今經の得記は即ち是れ毒を変じて薬と為すなり』」(御書一
〇〇九)と仰せであり、「始聞しもん仏乘義」には「竜樹菩薩・妙法の妙の一字を釈して譬えば大薬師の能く
毒を以て薬と為すが如し等云云、毒と云うは何物ぞ我等が煩惱・業・苦の三道なり薬とは何物ぞ法身・
般若・解脱げだつなり、能く毒を以て薬と為すとは何物ぞ三道を変じて三徳と為すのみ」(御書九八四)と仰
せられ、さらに「新池殿御消息」には「毒薬変じて薬となり衆生変じて仏となる故に妙法と申す」(御
書一四三七)等と仰せである。

無智・悪人の国は摂受しやうじゆを前とする

創価学会においては、日蓮大聖人の御遺命のままに折伏を行すべきことは当然であるが、ここでまた
重要なことは、その国によって折伏を前さきとすべき国と、摂受を前とすべき国のあることである。

その点に関して「開目抄下」には「無智・悪人の国土に充満の時は摂受を前さきとす安楽行品のごとし、
邪智・謗法ばうぼうの者の多き時は折伏を前とす常不輕品のごとし(中略) 末法に摂受・折伏あるべし所謂いわゆる悪

国・破法の両国あるべきゆへなり、日本国の当世は悪国か破法の国かと・しるべし」(御書三三五)と仰せである。

要するに、日本の国のように、邪智・謗法ほうぼうの者が多く、真言、念仏、禪のごとき権教をもつて実教の法華経を破り、法華経の中においても、本迹相對、種脱相對のあることを知らず、せっかく末法の御本仏日蓮大聖人が三大秘法を御建立あそばされているのに、かえって正法を破り、折伏を行ずる人に怨嫉おんしつをいだく。このような邪智・謗法の多い国においては、折伏を行じなくてはならないのである。

ところが、最近は、とくに欧米諸国や東南アジア諸国に日蓮大聖人の仏法がひろまり、題目を唱える人が多くなってきた。これは、宗教に国境なく、正しい仏法はあらゆる民族、全人類を幸福にしていくという何よりもの証拠である。これらの諸国においては、謗法払いすべき対象となるような神や仏の像などがほとんどなかったり、民衆の間に慣習的な宗教行事が行われていても、外道の低い教えにすぎない。このような国の場合は、「無智・悪国」といって、「邪智・謗法」の国と区別される。このような諸国においては破折すべき対象もないので、折伏精神を根本とすることは当然であるが、相手の立場を尊重しつつ、次第に誘引ゆういんしていくという姿勢でのぞむべきであらう。

あくまでも各国の国是こくぜや立場を尊重しつつ、かつ各国の国民がみずからの手で、正法による幸福と繁栄を得るよう努力していくことである。これらは決して信心の妥協たきようではない。折伏精神を根本にした、折伏のうえの摂受である。最近の海外発展がとくにめざましいゆえんも、このように日蓮大聖人の仰せ

のままに実践し、慈悲の精神を根底としているからにほかならないと確信するものである。

なお、この点について、日寛上人は、宗教の五義に約すと、次のように、「開目抄愚記」に示されている。まず第一には教法に約す。法華は正しく折伏の教法である。法華の開頭は爾前の権理を破し、法華の実理を顕すゆえである。玄文第九上には「法華折伏・破権門理」(大正三十三卷七九二ページ)とある。同じように、本迹においても、種脱においても、本、種をもって、迹、脱を破するのである。

第二には機縁に約す。本已有善の衆生のためには摂受門をもってこれを將護するのであり、本未有善の衆生のためには折伏門をもってこれを強毒するのである。このゆえに、疏の第十には「本已有善、釈迦小をもってこれを將護す、本未有善、不輕大をもってこれを強毒す」(大正三十四卷一四一ページ)といっている。

第三には時節に約す。日蓮大聖人は「顕仏未来記」には「末法に於ては大小の益共に之無し、小乗には教のみ有つて行証無し大乘には教行のみ有つて冥顕の証之無し(中略)小を以て大を打ち権を以て実を破り国土に大体謗法の者充滿するなり(中略)此の時に當つて(中略)本門の本尊・妙法蓮華經の五字を以て閻浮提に広宣流布せしめんか、例せば威音王仏の像法の時・不輕菩薩・我深敬等の二十四字を以て彼の土に広宣流布し一国の杖木等の大難を招きしが如し(中略)彼の像法の末と是の末法の初と全く同じ」(御書五〇六ページ)と仰せであり、「開目抄下」には「設い山林にまじわつて一念三千の觀をこらすとも空閑にして三密の油をこぼさずとも時機をしらず摂折の二門を弁へずば・いかでか生死を離るべ

き」(御書二三六ページ)と仰せである。それ以外にも末法に折伏を行ずべしという御文は限りなく、末法に生まれているわれわれが、折伏を行じなければならないのは当然である。

第四には国土に約す。「開目抄下」の「末法に摂受・折伏あるべし」(御書三三五ページ)の御文は、国土に約す文である。末法は折伏の時代であるとはいいながら、もし横に余国を尋ねるならば、悪国があるであろう。その悪国においては摂受を前とするのである。日本の国は破法の国であるから、折伏を行じなければならぬのである。

第五には教法流布の先後に約す。すでに竜樹、天親、天台、伝教等は前代流布の教法を破して、その時に合った教法をひろめた。いま日蓮大聖人もまた、前代流布の爾前迹門を破して、末法適時の法華本門の大法、本門寿量の肝心をひろめられるのである。(以上、文段集二二ページより)

第四章

正像末に約し滅後の弘教を明かす

問うて云くいかなる時にか小乗・權經をときいかなる時にか法華經を説くべきや、答えて云く十信の菩薩より等覺の大士だいしにいたるまで時と機とをば相知りがたき事なり何に況いかや我等は凡夫なりいかでか時機をしるべき、求めて云くすこしも知る事あるべからざるか、答えて云く仏眼をかつて時機をかんがへよ仏日を用て国土もつをてらせ、問うて云く其の心如何、答えて云く大集經に大覺世尊・月藏菩薩に對して未來の時を定め給えり所謂我が滅度の後の五百歲の中には解脫堅固げだつけんこ・次の五百年には禪定堅固ぜんじやうけんこ已上いじやう一次の五百年には讀誦多聞堅固どくじゆたもんけんこ・次の五百年には多造塔寺堅固とうじ已上いじやう二次の五百年には我法の中に於て鬪諍言訟とうじやうごんしやうして白法隱没びやくほうおんもつせん等云云、此の五の五百歲・二千五百余年に人人の料簡りやうけんさまざまなり、漢土の道綽どうしやく禪師が云く正像二千・四箇の五百歲には小乗と大乘との白法盛さかんなるべし末法に入つては彼等の白法皆消滅して淨土の法門・念仏の白法を修行せん人計り生死をはなるべし、日本国の法然が料簡りやうけんして云く今日本國に流布する法華經・華嚴經並びに大日經・諸もろもろの小乘經・天台・真言・律等の諸宗は大集經の記文の正像二千年の白法なり末法に入つては彼等の白法は皆滅めつじんすべし設い行ずる人ありとも一人も生死をはなるべからず、十住毘婆沙論びばしやと曇鸞法師どんらんの難行道・道綽どうしやくの未有一人得者みういちにんとくしや・善導ぜんどうの千中無一これなり、彼等の白法隱没の次には淨土三部經・彌陀稱名みだしやうみやうの一行ばかり大白法として出現すべし、此これを行ぜん人人はいかなる惡人・愚人なりとも十即十生・百即百生・唯淨土の一門のみ有つて路に通入すべしとはこれなり、されば後世を願はん人

人は叡山・東寺・園城・七大寺等の日本一州の諸寺・諸山の御帰依をとどめて彼の寺山によせをける田畠郡郷をうばいとつて念仏堂につけば決定往生・南無阿弥陀仏とすすめければ我が朝一同に其の義になりて今に五十余年なり、日蓮此等の悪義を難じやぶる事はことふり候いぬ、彼の大集経の白法隠没の時は第五の五百歳当世なる事は疑ひなし、但し彼の白法隠没の次には法華経の肝心たる南無妙法蓮華経の大白法の一閻浮提の内・八万の国あり其の国に八万の王あり王王ごとに臣下並びに万民までも今日日本国に弥陀称名を四衆の口口に唱うるがごとく広宣流布せさせ給うべきなり。

通解

——問うていわく、どのような時に小乗経や権経を説き、どのような時に法華経を説くのか。答えていわく、下は十信の菩薩から上は等覺の大菩薩にいたるまで、時と機とをば知り難いのである。ましてわれらは凡夫であるから、どうして時機を知ることができようか。

問うていわく、少しも知ることができないのか。答えていわく、仏眼たる経文を借りて時機をかんがえよ。仏日を用いて国土をてらしてみよ。

問うていわく、それはどういう意味なのか。答えていわく、釈迦仏は大集経において、月蔵菩薩に対して未来の時を定められている。それによれば、釈尊滅度の日から最初の五百年は解脱堅固であり、次の第二の五百年は禪定堅固である以上一。次の五百年は読誦多聞堅固であり、次の五百年は多造塔寺堅固である以上二。そして次の五百年はわが仏法の中において鬬諍言訟が盛んとなり白法が隠没するであろうと予

言している。

ところがこの五箇の五百年・二千五百余年について人々の料簡がさまざまである。中国の道綽禪師がいうには「正像二千年・四箇の五百歳には小乗と大乘の白法が盛んになるが、末法に入っては、それらの白法が皆消滅して浄土の法門たる念仏の白法を修行する人だけが生死を離れるであろう」と。また日本の法然が料簡していうには「今日本国に流布している法華經、華嚴經をはじめ大日經や諸の小乗經、天台、真言、律等の諸宗は大集經の予言に記された正像二千年の白法である。末法に入っては、それらの白法は皆滅尽するであろう。たとえ行ずる人があっても一人も生死を離れることはできない。『十住毘婆沙論』と曇鸞法師の難行道、それに道綽の『未有一人得者』、善導の『千中無一』等がそれである。それらの白法が隠没した次には浄土の三部經と弥陀称名の一行だけが大白法として出現するのである。これを修行する人々はいかなる悪人、愚人であつても十即十生・百即百生である。すなわちただ浄土の一門のみあつて路に導入すべしというのがそれである。されば後世を願う人々は比叡山、東寺、園城寺、七大寺等の日本一州の諸寺や諸山の御帰依をやめて、彼の諸寺諸山に寄進した田畠郡郷をとりかえして念仏堂へ寄進するならば決定往生疑いなし。ただひたすら南無阿弥陀仏をとなえよ」とすすめたので、わが日本国は一同にその義に染まって今に五十余年になる。日蓮はまたこの念仏の悪義を破りつづけて多くの年月を經てゐる。

彼の大集經の白法隠没の時は第五の五百歳であり今日当世であることは疑いない。ただし彼の白法隠没の次には法華經の肝心たる南無妙法蓮華經が、一閻浮提の内に八万の国があり、その国々に八万の王があり、これらの王が全部また王の臣下万民までも、今日本国で弥陀の称名を四衆が口々に唱えているように広宣流布するのである。

小乗 仏典を二つに大別したうちの一つ。乗とは運載うんさいの義で、衆生を迷いの此岸しがんから悟りの彼岸ひがんに運ぶための教法を乗り物にたとえたもの。菩薩道を教えた大乘に対し、小乗とは自己の解脱のみを目的とする声聞、縁覚の道を説き、阿羅漢果を得させる教法。四諦の法門、十二因縁を説く。

権經 仏が衆生を化導するために、その機根に応じて権かりに説いた經のこと。爾前の經をいう。実經に対する語。

十信の菩薩より等覺の大士 「十信の菩薩」とは大乘の菩薩が最初に菩提心を起こしてから修行を積み、仏果に至るまでの五十二種類の階位（十信・十住・十行・十回向・十地の五十位と等覺・妙覺の二位）のうちの最初の位である十信の菩薩のこと。未だ見惑、思惑を断じていない、不退位に住する以前の位の菩薩。「等覺の大士」とは五十位の等覺の位まで達した菩薩のこと。すなわち菩薩としての最高位まで到達した菩薩。なお五十二位の妙覺は一切の煩惱を断じつくした仏果のこと。

仏眼をかつて 仏眼とは五眼の一つ。仏がそなえている眼のこと。三世十方の一切の事物、事象を正しく見通す仏の眼をいう。ここでは仏の經文を借りて時機を知れとの意である。いま直接には大集經をさす。日寛上人は「意は經文を借かって時機を知るべしとなり。凡そ眼は物を見るを以てその用もちと為す。仏は未来永々の時機を見たまひ、即ちその事を以て經文を説とき顯あらわす。故に經文はこれ直ただちに仏眼なり」（文段集二三二頁）と仰せられている。

仏日 仏のこと。仏を太陽にたとえていったことば。日（太陽）が暗闇を払うように、仏は衆生の煩惱の暗闇をよく払うので仏日という。日寛上人は「日は照明を以てその用と為す。經文明々たること宛あたも日天の如し。故に經文の明々たるを借かって以て機を照し、時を照し、国を照せ等云々。『經文明々たり』とは即ち大集經の文これな

り」(文段集二三二頁)と仰せられている。

大集經 大方等大集經の略称。六十卷。方等部に属する經典。大集部の諸經を集めて一部の經としたもの。欲界と色界の中間・大宝坊等に広く十方の仏・菩薩を集めて説かれた大乘の法が収められている。なお、大集經六十卷の漢訳は①大方等大集經二十九卷(北涼の曇無讖訳)②大乘大方等日藏經十二卷(隋の那連提耶舎訳)③大方等大集月藏經十一卷(高齊の那連提耶舎訳)④大乘大集經二卷(高齊の那連提耶舎訳)⑤明度五十校計經二卷(高齊の那連提耶舎訳)⑥無尽意菩薩經四卷(宋の智嚴・宝雲共訳)の六種ある。

大覺世尊 仏のこと。釈尊の別称。大覺は仏の悟り、世尊は仏の十号の一つで、万徳を具えており、世間から尊ばれるので世尊といわれる。

月藏菩薩 大集經に説かれている菩薩。仏が佉羅帶山で、比丘、菩薩、魔王、阿修羅、天、鬼神等に説法した時の發起衆・影響衆の役目をし、仏の化導を助けた。

我が滅度の後の五百歳の中には 大集經卷五十五に「わが滅後の五百年の中、諸の比丘衆なおわが法において解脱堅固なり、次の五百年には我が正法の禪定三昧住することを得て堅固なり。次の五百年には誦誦多聞住することを得て堅固なり。次の五百年にはわが法の中において、闕諍言訟し白法隱没し損滅すること堅固なり。(中略)これより以後わが法の中において、また鬚髮を剃除し身に袈裟を著くといえども、禁戒を毀破し、如法を行なわず」(大正十三卷三六三頁)とある。

解脱堅固 釈尊滅後第一の五百年の間には、仏道修行する者が盛んで解脱し悟りを開くことができたこと。大集經卷五十五で説く五箇の五百歳の第一。正法時代の前半にあたる。堅固は変化、變動しない様をいい、定まっている。

ることを意味する。インドでは迦葉、阿難などが小乗教を弘通した。

禪定堅固 ぜんじょうこ 衆生が大乗を修して禪定三昧に入り、心を静めて思惟しゆいの行に励んだ時代のこと。大集經卷五十五に説かれる五箇の五百歳の中の第二。正法時代の後半にあたる。この期間は権大乘教が広まり、衆生はそれを修行して禪定ぜんじょうを持った。

讀誦多聞堅固 どくじゆ 大集經卷五十五に説かれている釈尊滅後の五箇の五百歳の第三で、經典の讀誦と説法を多く聞くことが中心に行われる時代のこと。像法時代の前半にあたる。

多造塔寺堅固 たぞうとうじ 多くの塔や寺院が造営される時代のこと。大集經卷五十五に説かれる五箇の五百歳の中の第四。像法時代の後半にあたる。

鬪諍言訟して白法隱没せん とうじやうごんしやう びやくほうおんもつ 大集經卷五十五の文。釈尊の仏法のなかにおいて争いが絶えず起こり、正しい教え（白法）が隠没する時代のこと。大集經に説かれる釈尊滅後の五箇の五百歳の第五で、末法の初めの五百年にあたる。

料簡 りやうけん 了簡、了見とも書く。思いをめぐらし考えること。思索すること。

道綽禪師が云く どうしやく 道綽が『安樂集』でいったことば。道綽（五六二年―六四五年）は中国の隋・唐代の浄土教の祖師の一人。并州汶水（山西省太原）の人。姓は衛氏。十四歳で出家し、涅槃經を学んだが、玄中寺で曇鸞どんらんの碑文を見て感じ浄土教に帰依した。曇鸞の教説を承けて、釈尊の一代聖教を聖道門・浄土門に分け、法華經を含む聖道門を「未有一人得者」の教えであるとして排斥し、浄土門以外の諸大乘教を捨てて浄土門に帰すべきことを説いた。弟子に善導などがある。

法然が料簡して云く ぽうねん りやうけん 法然が『選択集』で述べたことば。法然（一一三三年―一二二二年）は平安時代末期の日本浄

土宗の開祖。諱は源空。いみな美作みまさか（岡山県北部）の人。幼名を勢至丸せいしまるといった。九歳で菩提寺の観覺の弟子となり、十五歳で比叡山に登って功德院の皇円に師事し、更に黒谷の叡空に学び、後、二十四歳の時に京都、奈良に出て諸宗を学んだ。再び黒谷に帰って報恩蔵に入り、大蔵經を閲覧した。承安五年（一一七五年）四十三歳の時、善導の『觀經散善義』及び源信の『往生要集』を見るに及んで専修念仏に帰し、浄土宗を開創した。その後、各地に居を改めつつ教勢を拡大。八十歳で没した。著書に、念仏の一門のみが往生成仏の正行であるとし浄土三部經以外の一切の經を捨閉闍しゃへいかくぼう抛すべきだと説いた『選択集』せんちやくしゅう二卷をはじめ『浄土三部經釈』三卷、『往生要集釈』一卷等がある。

大日經 だいびる大毘盧遮那成仏神變加持經しやなじようぶつじんべんかじききようの略。中国・唐代の善無畏三蔵訳。七卷。一切智を体得して仏果を成就するための菩提心、大悲、種々の行法などが説かれ、胎藏界曼荼羅たいざうかいまんだらが示されている。金剛頂經、蘇悉地經そしつじきようと合わせて大日の三部經、また三部秘經といわれ、真言宗の依經となっている。

天台・真言・律等の諸宗 天台宗は法華經を依經として中国・隋代に天台大師智顗ちぎが開創した宗派。法華宗、天台法華宗、天台法華円宗ともいう。教相には五時八教を立て、觀心には円融の三諦をとえ、一念三千・一心三觀の理を証することにより即身成仏を期することを説く。日本では伝教大師最澄が入唐して中国天台宗の道邃どうすい、行滿ぎようまんから相承を受け、延暦二十五年（八〇六年）日本天台宗を開いた。

真言宗は大日經、金剛頂經、蘇悉地經等そしつじきようを所依とする宗派。大日如来を教主とする。中国においては、善無畏三蔵が唐の開元四年（七一六年）にインドから渡来し、大日經を訳し弘めたことから始まる。金剛智三蔵、不空三蔵を含めた三三蔵が中国における真言宗の祖といわれる。日本においては、弘法大師空海が入唐して真言密教を招来して開宗した。顕密二教判を立て、自宗所依の大日の三部經を大日法身が自受法樂のために内証秘密の境

界を示し真実の秘法を説いた密教であるとし、他經を応身の釈尊が衆生の機根に応じてあらわに説いた顯教と下している。弘法は『十住心論』のなかで、第八・一道無為住心は法華經にあたり、第九・極無自性住心は華嚴經にあたり、第十・秘密莊嚴住心は大日經にあたるとし、大日經が最も勝れ、法華經はそれに比べて三重の劣であるとしている。弘法は大同元年（八〇六年）に唐から帰朝し、弘仁七年（八一六年）高野山に金剛峰寺を創建した。なお、弘法系の真言宗を東密（東寺の密教の意）といい、慈覺、智証によつて天台宗に取り入れられた密教を台密という。

律宗は戒律を受持する修行によつて涅槃の境地を得ようとする宗派。南都六宗の一。中国では、四分律によつて開かれた学派とその系統を受けるものをいい、代表的なものに唐代初期に道宣律師が開いた南山宗がある。日本では南山宗を学んだ鑑真が天平勝宝六年（七五四年）に来朝し、奈良の東大寺に戒壇院を設けた。その後、天平宝字三年（七五九年）に唐招提寺を開いて律研究の道場として以来、律宗が成立した。平安朝時代には次第に衰退し、鎌倉時代に一時復興したが、その後、再び衰退した。

十住毘婆沙論 十七卷。竜樹著。鳩摩羅什訳。略して、十住論ともいう。華嚴經十地品に説かれた菩薩の修行の位である十地のなかの初地（歡喜地）と二地（離垢地）について注釈したもの。三十五品から成る。その第五卷に、菩薩が初地に入る方法として難行道と易行道の二種があると説かれている。

曇鸞法師（四七六年―五四二年）。中国浄土教の祖師の一人。初め竜樹系統の教理を学び、後、神仙の書を学んでいた時、洛陽で菩提流支に会い、觀無量寿經を授かり浄土教に帰した。『十住毘婆沙論』にある難行道・易行道を解釈し、念仏を易行道とし、その他の諸行を難行道として排した。著書には『往生論注』二卷、『略論安樂浄土義』一卷、『讚阿弥陀仏偈』一卷等があり、道教的医書として『療百病難方丸』『服氣要訣』があ

る。

道綽の未^み有^{いう}一人得^{いちにんとくしや}者 「未だ一人も得る者有らず」と読む。道綽の『安樂集』卷上の文。(大正四十七卷二三頁)

善導の千中無一 善導(六二三年―六八一年)は、中国・初唐の人で、中国浄土教善導流の大成者。姓は朱氏。泗州^{ししゅう}(安徽省)の人(一説に山東省・臨淄^{りんし})。幼い時に出家し、経蔵を探つて観無量寿経を見て、西方浄土往生を志した。後、貞観年中に石壁の玄中寺(山西省)に赴いて道綽^{どうしやく}のもとで観無量寿経を学び、師の没後、光明寺で称名念仏の弘通に努めた。浄土の法門を説くこと三十余年、自らの極樂往生を証しようと柳の木にのぼつて身を投げた。「千中無一」は「千が中に一無し」と読む。善導の『往生礼讃偈』(大正四十七卷四三九頁)にある言葉。善導は『観無量寿経疏』卷四散善義のなかで「行に就きて信を立てるとは、然るに行に二種あり。一には正行、二には雑行なり」(大正三十七卷二七二頁)と修行を正行と雑行に分け、浄土三部経によって修行するのが正行であるとし、浄土三部経以外の経教による雑行では「千中無一」であるとした。

浄土三部経 念仏宗が依経としている三部の經典。無量寿経二卷、観無量寿経一卷、阿弥陀経一卷をいう。

弥陀称名 阿弥陀仏の名を称^とえ^なること。称名念仏と同意。浄土宗では弥陀称名によって西方極樂浄土に往生できるとしている。

十即十生・百即百生 善導の『往生礼讃偈』の中の文で、阿弥陀仏を信じ、その名号を称^とえ^なれば、十人が十人、百人が百人、ことごとく極樂浄土へ往生できるということ。

叡山・東寺・園城・七大寺等 叡山^{えいざん}は比叡山延暦寺のこと。滋賀県大津市にある日本天台宗の総本山。比叡山は山

号。延暦四年(七八五年)伝教大師最澄が比叡山に草庵を結び、同七年(七八八年)根本中堂を建て開創。伝教大師は延暦二十三年(八〇四年)に入唐して道邃^{どうすい}、行満に天台の相承を受け、順曉^{じゆんぎょう}から密教の付法を受け、帰朝後、

日本天台宗を開創。弘仁十四年（八三三年）に延暦寺の勅号を受けた。東寺は京都市南区にある真言宗東寺派の本山。金光明四天王教王護国寺秘密伝法院と称し、略して教王護国寺、また弥勒八幡山総普賢院ともいう。延暦十五年（七九六年）桓武天皇が平安京の鎮護として、羅城門の左右に東西両寺を建立したのが始まりである。弘仁十四年（八三三年）嵯峨天皇が弘法大師空海に東寺を下賜し、以来真言密教の根本道場となった。園城とは滋賀県大津市にある天台宗寺門派の総本山。長等山と号す。比叡山延暦寺を山門さんもんというのに対して、寺門といい、また三井寺みいでら（御井寺）ともいう。白鳳時代に弘文天皇の遺志を継いで、皇子の太友おおとも与多王おとが建立したと伝えられる。天台座主記等によると、貞観元年（八五九年）九月三日、慈覚大師円仁を導師として落慶供養を行い、同年（八六六年）五月十四日、延暦寺別院となった。同十年（八六八年）六月、智証大師円珍が延暦寺座主になると、園城寺を仏法灌頂道場とし、御井を改めて三井とした。後に慈覚門徒と智証門徒の対立が次第に激化するに及んで、正暦四年（九九三年）智証門徒が比叡山を離れて園城寺に移り、分立して寺門派を立てた。七大寺とは奈良の七大寺で、東大寺とうだい、興福寺こうふく、元興寺げんどう、大安寺だいあん、薬師寺やくし、西大寺さいだい、法隆寺ほうりゅうをいう。

田畠郡郷 田畠とは土地や田園、畠などのこと。そのうち勢力ある寺社じしゃや官人かんじんの所有地を莊園しょうえんといった。郡郷とは、地方行政区画の称。律令制では、郡は国に次ぐ区画、郷は末端の区画単位となっている。

今に五十余年 法然が死んだのは順徳帝じゆんとくの建暦二年（一二二二年）であり、「撰時抄」の御執筆（一二七五年）までおよそ五十余年である。

法華經の肝心 法華經本門寿量品の肝心、久遠名字の南無妙法蓮華經のこと。

八万の国 世界中の国々のこと。八万とは多数、無数の意。

広宣流布 仏法を広く宣べ流布すること。

この章からは、正像末に約して滅後の弘教を明かされるが、この章は略して末法は三大秘法が広宣流布する時であることを明かされている。最初の問いで「いかなる時に法華經を説くべきや」という「法華經」は、元意の法華經であり、下種の法華經たる三大秘法である。

五の五百歳・二千五百余年に人人の料簡りようけんさまざまなり

正像末の三時についての異説は序講に述べたとおりである。

ここでは、念仏でも時をよく論ずるので、道綽どうしやくと曇鸞どんらん、善導ぜんどう等を挙げてその邪義を破折されている。

念仏では權教を以て実教を破し、法華經を難行道なんぎやうどうといい、聖道門しょうどうもんといい、雜行ぞうぎやうといい、千中無一などと

いつている。日蓮大聖人は、その中で特に法然に対して「守護国家論」では「道綽禪師の安樂集の意は

法華已前の大小乗經に於て聖道淨土の二門を分つと雖も我私に法華・真言等の実大・密大を以て四十余

年の權大乘に同じて聖道門と称す『準之思之』じゆんししの四字是なり」(御書五二二)と指摘されている。つまり

道綽は法華經を直接破折してはいなかったが、法然は『選択集』せんたくしゆで、「準之思之」の句で法華經を爾前にぜん

權經と一まとめにして、聖道門なりとしているのである。

また次に、念仏のごまかしがたくさんあるなかで、ひどいのは、雙觀經の下には、「此の經を留めて

百歳ならん」とあるのに、念仏宗ではこの経を根拠に末法万年に念仏が流布して、衆生を救済するなど
といている。「一代五時じけいす繼図」には「雙觀経の下に云く当来の世に経道滅尽きやうどうめつじんせんに我慈悲を以て哀愍あいみん
して特に此の経を留めて止住しじゆうすること百歳ならん、(中略)往生礼讃おうじようらいさんに云く万年に三宝・滅して此の経
住すること百年(中略)慈恩大師の西方要決ようけつに云く末法万年に余経ことごと悉く滅して弥陀の一教のみ」(御書
六八七ジ)と、そのありさまが述べられている。

また「法華初心成仏抄」では「本経には『当来の世・経道滅尽ひとし特り此の経を留めて止住する事百歳
ならん』と説けり、末法一万年の百歳とは全く見えず」(御書五四九ジ)と破折されている。

次に、なぜここでとくに念仏を破折されるのかについて、日寛上人は、総別そうべつありとされている。すな
わち、総じていえば念仏がもっぱら盛んであったからである。そして別していえば、次の三意がある。
第一に所破しよはのためである。第二には一分所用いちぶんしよゆうのためである。すなわち念仏においても大集経の白法隠
没、第五の五百歳は当世であるとするゆえである。第三は所例となす。すなわち日本国中が念仏を称え
ているように、南無妙法蓮華経を唱えるようになるとの例として用いられている。(文段集二三二ジ)

法華経の肝心たる南無妙法蓮華経

これについて他宗派では、如是我聞によぜがもんのうへの妙法蓮華経であるとか、本地甚深の南無妙法蓮華経であ
る等といっているが、みな誤りである。正意は法華経本門寿量品の肝心・久遠名字の南無妙法蓮華経で

ある。久遠名字の南無妙法蓮華經とは、すなわち本門の本尊の中央にお認めしたたの南無妙法蓮華經である。「顕仏未来記」に「此の人は守護の力を得て本門の本尊・妙法蓮華經の五字を以て閻浮提に広宣流布せしめんか」(御書五〇七ページ)と仰せである。

このように法華經の肝心たる南無妙法蓮華經とは本門の本尊であり、「四衆の口口に唱う」とは本門の題目であり、本門の戒壇はその文が略されている。しかし広宣流布の暁には、必ず本門の戒壇が建立されなければならないのであり、しかも、その地が富士山であることは疑いないのである。

そのことは「三大秘法稟承事」ぼんじょうじの「戒壇とは王法仏法に冥じ仏法王法に合して王臣一同に本門の三秘密の法を持ちて有徳王・覺徳比丘うとくおう かくとくびくの其の乃往むかしを末法濁惡の未来に移さん時勅宣並に御教書を申し下して靈山淨土に似たらん最勝の地を尋ねて戒壇を建立す可き者か時を待つ可きのみ事じの戒法と申すは是なり」(御書一〇二二ページ)との仰せや、「日蓮一期弘法付嘱書」(身延相承書)の「国主此の法を立てらるれば富士山に本門寺の戒壇を建立せらるべきなり」(御書一六〇〇ページ)との御教示に明白である。(以上、文段集二三三二ページより)

八万の国あり其の国に八万の王あり

これこそ全世界広宣流布の御予言である。日本の国だけであれば「八万の国」とは仰せられないであろう。

「撰時抄」を学ぶということは、過去の歴史において、機感相応の仏法により、民衆の平和と幸福が実現されてきたということを知ることでも大切であるが、その元意、御内証は、序講でも触れたように、じつに日蓮大聖人の仏法が、未来において「時」がくるならば、全世界に広宣流布するという予言書として拝さなければならぬということである。

しかも、その「時」はいまであり、創価学会によって実践されつつあることも、現実の姿として示すところである。創価学会の目的とするところは、あくまでも三大秘法の広宣流布、すなわち慈悲と道理による平和無血革命によって真の世界平和と民衆の繁栄を達成することである。心ある士は勇躍して、この広布の大業に参加すべきであると訴えるものである。

第五章

經文を引いて証す

問うて云く其の証文如何、答えて云く法華經の第七に云く「我が滅度の後後の五百歳の中に広宣流布して閻浮提に於て断絶せしむること無けん」等云云、經文は大集經の白法隱没の次の時をとかせ給うに広宣流布と云云、同第六の卷に云く「惡世末法の時能く是の經を持つ者」等云云又第五の卷に云く「後の末世の法滅せんとする時」等・又第四の卷に云く「而も此經は如来現在にすら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」又第五の卷に云く「一切世間怨多くして信じ難し」又第七の卷に第五の五百歳闍諍堅固の時を説いて云く「惡魔魔民諸の天竜・夜叉・鳩槃荼等其の便を得ん」大集經に云く「我が法の中に於て闍諍言訟せん」等云云、法華經の第五に云く「惡世の中の比丘」又云く「或は阿蘭若に有り」等云云又云く「惡鬼其身に入る」等云云、文の心は第五の五百歳の時・惡鬼の身に入る大僧等・国中に充滿せん其時に智人一人出現せん彼の惡鬼の入る大僧等・時の王臣・万民等を語て惡口罵詈・杖木瓦礫・流罪死罪に行はん時釈迦・多宝・十方の諸仏・地涌の大菩薩らに仰せつけ大菩薩は梵帝・日月・四天等に申しくだされ其の時天変・地天・盛なるべし、国主等・其のいさめを用いずば鄰国にをほせつけて彼彼の国国の惡王・惡比丘等をせめらるるならば前代未聞の大闍諍・一閻浮提到起るべし其の時・日月所照の四天下の一切衆生、或は国ををしみ或は身ををしむゆへに一切の仏菩薩にいのりをかくともしるしなくば彼のにくみつる一の小僧を信じて無量の大僧等八万の大王等、一切の万民・皆頭を地につけ掌を合せて一同に南無妙法蓮華經とならうべ

し、例せば神力品の十神力の時・十方世界の一切衆生一人もなく娑婆世界しやばに向つて大音声おんじやうをはなちて南無釈迦牟尼しやかむにぶつ仏・南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經と一同にさけびしがごとし。

通解

——問う、その証文はどこにあるか。

答う、法華經の第七には「我が滅度の後、後の五百歳の中に広宣流布して、この閻浮提えんぶだいに於て断絶させてはならない」と。このように經文には大集經の白法隱没の次の時を説き示して広宣流布といっている。また同第六の卷には「惡世末法の時能く是の經を持つ者」とあり、また第五の卷には「後の末世の法が滅せんとする時」とあり、また第四の卷には「而も此の法華經は如来の現在にすらなのお怨嫉が多い。いわんや滅度の後には」とある。また第五の卷には「一切世間には怨が多くして信じがたい」とあり、また第七の卷に第五の五百歳・闍諍堅固の時代相を説いていうには「惡魔や魔民や諸の天、竜、夜叉やしや、鳩槃荼くはんだ等の惡鬼、惡魔が其の便を得るであらう」とあり、また大集經には「我が仏法の中に於て互に闍諍言訟とうじやうごんしやうするであらう」とあり、さらに法華經の第五には「惡世の中の比丘」とか「或は閑靜かんせいな処に居て」とか、また「惡鬼が其の身に入る」等とある。

さて、これら諸文の意は、次のようなものである。すなわち（第一に）第五の五百歳・白法隱没の時、惡鬼がその身に入つた高僧名僧が国中に充滿する。（第二に）その時に智人が一人出現する。（第三に）彼の惡鬼の身に入る大僧等が、時の王臣、万民等を語らいて、その一人の智人を惡口罵詈めりし杖木瓦礫じやうもくがりやくを加え流罪るざい、死罪に行うであらう。（第四に）その時に釈迦・多宝・十方の諸仏が地涌の大菩薩らに仰せつけ、大

菩薩はまた梵天、帝釈、日月、四天等に申し下されて、その謗法ほうぼうを責めるから天変地天ちようちようが盛んに起こるであらう。それでも国主等がその諫めいさめを用いないで謗法をつづけるならば、隣国りんごくに仰せつけて彼々の国々の悪王、悪比丘等を責めるならば、前代未聞の大闘諍ぜんだいみもん とうじようが一閻浮提に起こるであらう。(第五に)その時に日月所照しよしやうの四天下の一切衆生は、この大闘諍に襲われて、あるいは国を惜しみ、あるいはわが身を惜しむゆえに、一切の仏菩薩に祈りをかけるとも一向にそのしるしがなく、ますます不幸のどん底へ沈むならば、ついに彼の憎んでいた一人の小僧を信じて、無量の大僧、八万の大王、一切の万民等ことごとく頭を地につけ、掌たなごころを合わせて南無妙法蓮華經と唱うるであらう。例せば神力品じんりきの十神力の時じゆうじんりき、十方世界の一切衆生が、一人も残らず娑婆世界に向かつて大音声を放ち南無釈迦牟尼仏・南無釈迦牟尼仏、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經と一同に叫んだようなものである。

法華經の第七に云く「我が滅度の後……」法華經第七の卷、藥王品第二十三の文。引証の經文の十文のうちの第一文。この經文は、大集經の白法隱没の時そくは、即南無妙法蓮華經の広宣流布の時であることをあらわしている。後の五百歳とは、最後の五百歳すなわち第五番目の五百歳(末法)のことである。くわしくは「我が滅度の後、後の五百歳の中に、閻浮提に広宣流布して、断絶して、惡魔、魔民、諸天、竜、夜叉、鳩槃荼等くはんたに、其の便たよりを得せしむること無かれ」(妙法蓮華經並開結六〇五頁)である。

同第六の卷に云く「惡世末法の時……」法華經第六の卷、分別功德品第十七の文。(妙法蓮華經並開結五二八頁)又第五の卷に云く「後の末世の……」法華經第五の卷、安樂行品第十四の文。(妙法蓮華經並開結四五七頁)

又第四の巻に云く「而も此経は……」法華經第四の巻、法師品第十の文。（妙法蓮華經並開結二九〇頁）

又第五の巻に云く「一切世間……」法華經第五の巻、安樂行品第十四の文。（妙法蓮華經並開結四六四頁）

又第七の巻に第五の五百歳闍諍堅固の時を説いて云く「惡魔魔民諸の天竜・夜叉・鳩槃荼等其の便を得ん」法華

經藥王品第二十三の文（妙法蓮華經並開結六〇五頁）。惡魔とは魔のことであり、殺者、奪命、能奪命、障礙などと

訳す。人命を害し、善事を妨げる性質をもち、三魔、四魔、十魔等に分け、首領は欲界の第六、他化自在天に住

む第六天の魔王である。魔民とは、魔界の衆生。魔王の眷属の衆生のこと。仏道修行を妨げる働きをするもの

のこと。天竜とは、天と竜。ともに天界の衆生で、天は天神等の諸神王衆、竜は竜神で竜王およびその眷属をい

う。雨を支配するといわれている。夜叉は梵名ヤクシャ（Yakṣa）の音写。勇健、能瞰鬼などと訳す。本来は、

形貌醜怪で猛惡なインドの鬼神。仏教では八部衆の一つとされ、飛行自在で人を害し食う鬼と考えられた。ま

た、毘沙門天の眷属として北方を守護するとされた。そして鳩槃荼は梵名クンバーンダ（Kumbhanda）の音写。

俱槃荼、恭畔荼、究般荼、吉般荼、拘弁荼、鳩滿荼、また般查等とも書く。陰囊、形卵、甕形、冬瓜、厭眉と訳

す。人の精気を吸い、変幻自在で動作の機敏な惡神のこと。形像は白馬頭人身で、男は鉢を叩き、女は太鼓を

打っている。これらはいずれも正法の修行をさまたげる働きをするが、逆に強信者を守る働きもする。

法華經の第五に云く「惡世の中の比丘」「惡世の中の比丘」「或は阿蘭若に有り」「惡鬼其身に入る」は、ともに

法華經勸持品第十三の二十行の偈の文（妙法蓮華經並開結四四一頁〜四四二頁）であり、三類の強敵の相を述べたも

のである。

阿蘭若 梵語アーランニヤ（āraṇya）の音写で、阿蘭若、阿蘭若迦などとも書く。寂靜処、無諍声と訳す。山林、

原野などを意味し、閑靜で比丘が修行するのに必要な場所をいう。

智人一人 智人とは地涌の大菩薩のことで、一人とは地涌の菩薩の棟梁とうりよう、末法の御本仏日蓮大聖人のことである。地涌の大菩薩 釈尊の説法を助け滅後の法華經弘通の付嘱を受けた本化の菩薩のこと。法華經從地涌出品第十五で大地から涌出した。すなわち滅後末法の弘教を勧める釈尊の呼びかけに応えて、迹化・他方の諸菩薩が発願したが、釈尊はこれを退け、涌出品で本化の菩薩を召し出し、如来神力品第二十一で地涌の菩薩に妙法蓮華經を結要付嘱し末法弘通を託した。

十神力の時 十神力とは法華經神力品第二十一に説かれる、吐舌相とぜつ、通身放光つうしんほうこう、警歎きようがい、彈指だんじ、地六種動ちろくしゆどう、普見大ふけんだい会え、空中唱声しやうしやう、咸皆歸命げんかいきみよう、遙散諸物ようさんしよもつ、十方通同じつぱうつうどうの十種の仏の神通力のこと。いま十神力の時とは、十神力の第八の咸皆歸命の文をさす。すなわち神力品にいわく「彼の諸の衆生、虚空の中の声を聞き已おわつて、合掌がっしやうして娑婆世界しやば 娑婆は梵語サハー (saha) の音写で、堪忍かんにん、能忍と訳す。三毒及び諸の煩惱を耐え忍んでいかなければならない所という意。煩惱が充滿している人間世界のこと。忍土、忍界、堪忍土ともいう。

講義

前章は、第五の五百歳に、法華經の肝心たる大白法が広宣流布すると決定されたのに対し、本章はその証文として十箇の經文を引き、その意を釈されている。その証文の意は、大略次の五意となる。

第一に、大集經の白法隱没の時は、即法華經広宣流布の時となることを顕されている。これは法華經藥王品第二十三の「後五百歳中。広宣流布」(妙法蓮華經並開結六〇五び)の文である。第二に、後の五

百歳末法の初め地涌の菩薩が出現すべきことを顕されている。これは分別功德品第十七の「惡世末法の時 能く是の經を持たん」（妙法蓮華經並開結五二八頁）の文である。第三に、この末法の初めに地涌の菩薩が弘教するには、怨嫉おんしつの多いことを顕されている。これは第五の卷、第四の卷、第七の卷等と引き続き挙げられている文である。第四に怨嫉によって鬪諍の起るべきことを明かされている。これは大集經の鬪諍言訟とうじょうごんしょうの文である。第五に、その怨嫉の人は惡鬼あくき入其身の大惡僧であることを明かされている。これはすなわち、引用されている勸持品の三文である。

また証文を釈された文にまた五意を明らかにされていることは通解にあるとおりであるから、本文に照らして精読されたい。

前代未聞の大鬪諍……一の小僧を信じて等

これもまた広宣流布予言の御文である。前代未聞の大鬪諍とは何を指されるのか。日蓮大聖人の時代にも蒙古襲来もうこしゅうらいという大鬪諍があつた。しかし、この時には「一切の万民・皆頭を地につけ掌を合せて一同に南無妙法蓮華經ととなう」ようにはならなかつた。

それでは広宣流布は虚妄こもうなのかというと、そうではない。すでに述べたように、日寛上人は逆縁ぎやくえんの広布と順縁じゆんえんの広布を説かれている。日蓮大聖人の御在世時代は、日本国中が大聖人に対し怨嫉を懷いだき謗法を犯しており、その姿を逆縁の広布とされている。大聖人の御入滅後においても、わずか入信する者も

いたが、折伏が行われても、すぐに迫害され弾圧された。鎌倉時代に引きつづき、南北朝時代、室町時代、戦国時代と、日本国中は戦乱に次ぐ大戦乱がつづいた。江戸時代は三百年の泰平がつづいたけれども、それも表面だけであって、民衆が真に平和と幸福を楽しめるような時代ではなかった。こうしてみると、前代未聞の大闘争はまだ起きていないし、広宣流布もまだ実現されなかったといえるであろう。日寛上人はその姿を「若し爾らば終には上一人より下万民に至るまで、一同に他事を捨てて皆南無妙法蓮華經と唱うべし。順縁広布、何ぞこれを疑うべけんや。時を待つべきのみ」(文段集二三四頁)と未来に託されている。

その後起きた第二次世界大戦は、全世界を戦乱の惨禍にまきこんだ。とくに広島と長崎には原子爆弾が投下され、東京、大阪をはじめ大都市がごとく焼き払われた敗戦国日本の惨状は、じつに目をおうものがあつた。創価学会もまたこの大戦中に弾圧を受け、初代牧口会長は昭和十九年十一月十八日に牢死された。そして昭和二十年七月三日、二年間投獄されていた第二代戸田会長が釈放された。戸田会長はいまこそ広宣流布の時がきたとの御確信のもとに、創価学会の再建にとりかかれた。国が滅んで広宣流布できないような宗教なら、それは真の宗教ではない。仏語が真実ならば、必ず広宣流布できるはずであるとの御確信であつた。

その後の創価学会の発展の経過を見ると、じつに順縁広布の時がきたと確信せざるをえない。すでに五百万世帯の学会員が誕生し、三大秘法の信行学に励んで、大御本尊の功德に浴している。しかもなお

将来にわたって、限らない展望が開けているのである。

しかしまた、わが国の広宣流布はこのように実現しても、世界各国にまで広宣流布していくには、さらに原水爆戦争のような、未曾有の大闘争が世界広布への過程として起きるのではないかという人もいる。しかし、われわれ日蓮大聖人の末弟子としては、そのような惨禍は絶対あってはならず、そのためにも「前代未聞の大闘争」はこの第二次世界大戦なりと決めて、いまこそ世界広布実現の時と確信して、人類の永遠の平和と繁栄とを祈願し実践していかねばならないのである。

次に「一の小僧」とは、いうまでもなく末法の御本仏、本門寿量の当体蓮華の仏、本因妙の教主、日蓮大聖人であらせられる。しかし、すでに大聖人は入滅されて、七百年も過ぎた今日、どうすればよいのか。それに対して日蓮大聖人はありがたいことに「日蓮がたましひをすみ^魂にそめながして・かきて候ぞ」（御書一一二四頁）と仰せられ、弘安二年に、末法万年のほか未来永遠の衆生を救われる本門戒壇の大御本尊を御建立になられたのである。

しかも御入滅に先だち、第二世として日興上人にすべてを付嘱され、日興上人は、また第三世の日目上人にすべてを付嘱されて、以来、現在にいたっている。

このように日蓮大聖人は、末法万年のほか未来永遠の衆生を救われるのである。それにもかかわらず、邪宗日蓮宗の徒は、大聖人の仏法はすでに尽きて新しい仏法が起きるとか、大聖人の滅後何百年過ぎれば、大聖人がふたたび生まれてくるなどといっているが、すべて邪義であり妄説である。大御本尊

を信じ奉り、仏意仏勅のままに折伏を行じていくとき、御本仏日蓮大聖人の眷属^{けんぞく}として即身成仏がかなうのである。

南無釈迦牟尼仏……南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經と一同にさけびしがごとし

次に「例せば神力品」の下は在世をもつて末法に例されるのである。しかし、經の神力品には、一同に南無釈迦牟尼仏と唱えているが、南無妙法蓮華經と唱えた文はない。これについて、諸宗では次のような異解^{いげ}を唱えている。日寛上人はこれらの異解を挙げて後、さらに正義を示されている。

「能例^{のうれい}・所例^{しよれい}合してこれを挙ぐるなり云云。或は云く、既に人法体一なり。故に仏名即ち經名なるが故なり云云。或は云く、法子尚これを敬^{うやま}う。況や仏母の經をや。或は云く、空中の勸信既に人法あり。歸命^{きみよう}の文豈爾らざらんや。或は云く、既に能説の教主を信じてその名を唱う。何ぞ所説の法を信じてその名を唱えざらんや」(文段集二三五ページ)と。

以上のような謬解^{びゆうげ}は、みな人情であつて、日蓮大聖人の御正意には何の關係もない。いまここに正意を示すならば、それは寿量文底の意によるがゆえになのである。すなわち「釈迦牟尼仏」には大小、權実、迹本等の違いがあり、この神力品の文は正しく寿量品の意をもつて解すべきなのである。さて寿量顕本に略して二意があり、一に文上の意は、すなわち久遠本果の三身を顕す。この仏は色相莊嚴^{しきそうそうごん}の尊容^{そんよう}であつて、在世脱益^{だつちやく}の教主である。この仏の名号を南無釈迦牟尼仏というのである。彼の十方世界の一

切衆生は文上本果の三身を信ずるがゆえに南無釈迦牟尼仏と唱えたのである。二に文底の意は本地無作ほんちむさ三身を顕す。この仏は凡夫の当体本有のままであられる。すなわち本因妙の教主であり、この仏の名号を南無妙法蓮華經というのである。彼の十方世界の一切衆生は、文底の無作三身を信じて南無妙法蓮華經と唱えたのである。

いまはこの第二の意をもつて末法に例しているのである。末法下種の教主日蓮大聖人は即本地無作三身の南無妙法蓮華經仏である。ゆえに一の小僧ひとりを信じて南無妙法蓮華經と唱うべしと判じ給うたのである。

「御義口伝下」には「されば無作の三身とは末法の法華經の行者なり無作の三身の宝号を南無妙法蓮華經と云うなり」（御書七五二ページ）と仰せである。また本門戒壇の大御本尊を信じ奉る者は、みなことごとく本地無作三身の南無妙法蓮華經仏である。「御義口伝下」に「無作の三身の当体の蓮華の仏とは日蓮が弟子檀那等なり南無妙法蓮華經の宝号を持ち奉る故なり」（御書七五四ページ）と仰せのとおりである。

また寿量顕本に二義ありとなす証文如何との問いに対し、日寛上人は「天台云く『此の品、詮量せんりょうして通じて三身と名づく』とは、即ちこれ久遠本果の三身にして文上の意なり。『若し別意べついに従れば正に報身ほうしんに在り』とは、即ちこれ本地無作の三身にして久遠元初の自受用報身なり。これ文底の意なり。これはこれ天台の内鑒ないかん冷然の意なり云云。これ深秘の相伝なり」と仰せられている。（以上、文段集二三五

広宣流布実現の時

日蓮大聖人の御仏意を拝し、世界の動向を見ると、いまこそ三大秘法の仏法の広宣流布の時であると断ぜざるをえない。すなわち世界の広宣流布をいま達成しなければ、世界動乱、人類滅亡の恐れが十分にあることを憂うるのである。

折伏に二意がある。いわゆる法体ほつたいの折伏と化儀けぎの折伏である。総本山第二十六世日寛上人は、「観心本尊抄」の「当に知るべし此の四菩薩折伏しやくぶくを現ずる時は賢王と成つて愚王を誠責かいしやくし授受しやうじゆを行ずる時は僧と成つて正法を弘持ぐじす」（御書二五四頁）の御文において、聖僧と成つて正法を弘持するのは法体の折伏であり折伏が家の授受であり、賢王と成つて愚王を責め誠めるいましのは化儀の折伏であると仰せである。

（文段集五四六頁）

ゆえに、法体の折伏とは、七百年前、日本に御出現の御本仏日蓮大聖人が、弘安二年十月十二日に、本門戒壇の大御本尊を御建立あそばされて出世の本懐ほんがいを遂げられたことであり、また、化儀の折伏とは、三大秘法の大御本尊を広宣流布して本門戒壇を建立することである。

不思議にも、法体の折伏の時にも、化儀の折伏の時にも、全世界にわたる一大闘争とうじやうが広布の先相として、巻き起こったのである。しかし、われわれの宗教革命は、慈悲と道理による無血平和革命である。その人類の興亡をかける世界的動乱の時には、必ず大仏法が流布して人類を救わんとする御仏意である。

「観心本尊抄」にいわく「此の釈に鬭諍の時と云云、今の自界叛逆・西海侵逼の二難を指すなり、此の時地涌千界出現して本門の釈尊を脇士と為す一閻浮提第一の本尊此の国に立つ可し」（御書二五四ページ）。これは大聖人御在世時の鬭諍、すなわち北条幕府の内乱と、大蒙古国の襲来をさすことは明らかである。

また、本抄の前章では「彼の大集経の白法隠没おんもつの時は第五の五百歳当世なる事は疑ひなし、但し彼の白法隠没の次には法華経の肝心たる南無妙法蓮華経の大白法の一閻浮提の内・八万の国あり其の国に八万の王あり王王ごとに臣下並びに万民までも今日本国に弥陀称名を四衆の口口に唱うるがごとく広宣流布せさせ給うべきなり」（御書二五八ページ）と仰せである。「八万の王」とは、現在においては世界各国の指導者をさすといえよう。

さらに、本章に入って、法華経の多くの文証を挙げられて後に「文の心は第五の五百歳の時」云々と仰せられ、この三大秘法の南無妙法蓮華経が広宣流布する時には「前代未聞の大鬭諍・一閻浮提に起るべし」と仏法の一大哲理を示されたのである。すなわち、これ、七百年前における法体の折伏による広宣流布の時にも、さらに今日における化儀の折伏による広宣流布にも通ずるのである。

七百年前の法体の折伏の時における大鬭諍とは、いうまでもなく、文永、弘安の二回にわたる蒙古襲来である。蒙古は後に元と称し、有史ゆうしいらいの最大国家といわれるほど強大な国家であった。すでに武力によって、中国大陆を中心に、ヨーロッパ方面ではオーストリアのウィーン、ロシアのモスクワまで

も版図^{はんと}をひろげ、中央アジア、朝鮮半島、インドの北部、東南アジア等すべて手中におさめ、最後に国を挙げて日本を席捲^{せつけん}せんとして襲いかかったのである。まさに前代未聞の大闘諍であり、一閻浮提をおおう闘諍というべきであつた。

しかし、当時は全世界八万の国々に三大秘法の南無妙法蓮華經をひろめることは、交通や通信の未発達という社会情勢からも、所詮^{しよせん}は無理であつた。すなわち法体の折伏なるがゆえに、日蓮大聖人は「万里をわた^渡て宋に入らずとも」(御書二二三)と仰せられ、嚴然と日本にとどまれながら全世界を掌中におさめられ、大御本尊を御建立あそばされたのである。そして、世界広布は、なお大きい「前代未聞の大闘諍」における未来に、ゆずられたものといえよう。

「国主等・其のいさめを用いずば鄰国^{りんごく}にをほせつけて彼彼の国国の惡王・惡比丘等をせめらるるならば」とは、まさしく一つには法体の折伏における、隣国の蒙古の襲来である。さらにもう一つは、第二次世界大戦の姿といえよう。日蓮大聖人の仏法を聞こうとしないばかりか、創価学会を弾圧、迫害した日本の軍部は、アメリカ、隣国たるソ連、中国にも敗れ去る結果になつたのである。

「或は国ををしみ或は身ををしむゆへに一切の仏菩薩にいのりをかくともしるしなくば」とは、時の軍部や為政者等が、国を惜しみ身を惜しむゆえに、あるいは天照太神に、あるいは高野山で大日如来に、あるいは神社仏閣にと、一国を挙げて祈りをかけたけれども、少しもしるしなく日本は敗れたのである。しかし敗戦後、創価学会の再建とともに「彼のにくみつる一の小僧^{ひつちやう}」日蓮大聖人を信ずる人々

は、急激に増加している。昭和三十九年十月において五百余万世帯、一千数百万人が、日蓮大聖人の仏法を信ずるようになったのである。いまこそ、まさに日本の広宣流布近きにありの姿でなくてなんだろうか。さらに、世界を見渡した時、東南アジアでも、欧米諸国でも、海外諸国でメンバーが嬉々として力強く信心に励んでいるのである。

このような現実の姿を見る時、「前代未聞の大闘争」とは、すでに述べたように第二次世界大戦であり、いまこそ化儀の折伏の時であると、あらためて強く主張するものである。

日蓮大聖人の仏法は、日本だけの仏法ではなく、全人類の仏法である。日本民族の安泰のみを願うものではなく、世界全人類の幸福と平和と繁栄を築くべき大仏法である。われわれが「核兵器の絶対使用禁止」「地球民族主義」を叫ぶゆえんも、じつにここにある。地球民族主義とは、全世界の民族が同じ地球民族として相互扶助の精神で、共に繁栄することをいうのである。

世界は狭くなった。交通、通信の発達、各民族の交流は、あたかも世界が一国のごとき様相を呈している。そして、民族の如何を問わず、過去に仏法の縁の深かった東洋諸民族はいうにおよばず、欧米の諸民族にも、東洋哲学を求める声が日々に強まっている。

このことは、私が海外諸国を歴訪して、直接に見聞したわずかな体験からも、確信をもっていえることである。東南アジア諸国も、欧米先進国もさまざまな問題や矛盾をかかえて相克し、人間疎外、人間の抑圧という共通の致命的欠陥は、ついに今日の世界的危機を招来するにいたったといえよう。思

想、哲学の貧困こそ、現代社会における病理の根源であつて、いまこそ失われた人間性を恢復し、現代科学を指導して、あらゆる人々に幸福をあたえ、世界に恒久平和の秩序を築きうる大思想、大哲学の出現を待たなければならぬ重大な時がきたのである。

この大思想こそ、東洋仏法の真髄、日蓮大聖人の仏法であり、全人類の求める最高唯一の大生命哲理であることを、強く訴えるものである。

広宣流布とは、別言すれば仏法民主主義の流布した社会ということである。民主主義は政治の正統理念として待望されながら、西欧民主主義、人民民主主義等いずれも民主主義とは名ばかりで、現実には人間的に政治的に経済的に、不平等と束縛と生命軽視の風潮が支配的であるといわざるをえない。それに対して人間生命の尊厳と慈悲を根底とする仏法民主主義こそ、真の自由、真の平等を達成する真実の民主主義なのである。

また、現在、社会福祉を唱え社会主義的な政策をとろうとしている国々もある。しかし、いままでの社会主義は、機構、制度のみを重視し人間性は無視されていた。それに反して仏法を根底にした政治の理念は、大衆福祉であり人間性社会主義である。個人の尊厳を根本に、真の人間形成を図りつつ、すべての大衆の福祉を達成する新社会主義である。

いよいよ、人類の新しい時代が到来した。真実の民主主義、真実の社会主義を掲げて、全民衆の永遠の平和と幸福を確立する。これこそ仏法の目的であり、世界広宣流布なのである。

第六章

釈の文を引いて証す

問うて曰く経文は分明ふんみんに候・天台・妙楽・伝教等の未来記の言はありや、答えて曰く汝が不審さかしま逆さかしまなり釈を引かん時こそ経論はいかにとは不審ふしんせられたれ経文に分明ならば釈を尋ねべからず、さて釈の文が経に相違そういせば経をすてて釈につくべきか如何、彼云く道理どうり至極しごくせり、しかれども凡夫ならいの習経は遠し釈は近し近き釈分明ならばいますこし信心をますべし、今云く汝が不審ふしんねんごろなれば少少釈をいだすべし天台大師云く「後の五百歳遠く妙道に沾うるわん」妙楽大師云く「末法の初め冥利みょうり無きにあらず」伝教大師云く「正像稍過ややぎ已つて末法太だ近きに有り法華一乗の機今正しくは是れ其の時なり、何を以て知ることを得る、安樂行品に云く末世法滅の時なり」又云く「代を語れば則ち像の終り末の初め地を尋ねれば唐の東・羯かつの西・人を原たずねれば五濁の生・鬭諍とうじやうの時なり、経に云く猶多怨嫉ゆた おんしつきやうめつど況滅度後まことと此の言良に以有ゆえるなり」云云、夫れ釈尊その出世じゆうこうは住劫第九の滅・人壽百歳の時なり百歳と十歳との中間ちゆうけん・在世五十年・滅後二千年と一万年となり、其の中間に法華経の流布の時・二度あるべし所謂在世の八年・滅後には末法の始の五百年なり、而に天台・妙楽・伝教等は進んでは在世法華経の時にも・もれさせ給いぬ、退しりぞいては滅後・末法の時にも生うまれさせ給はず中間なる事をなげかせ給いて末法の始をこひさせ給う御筆なり、例せば阿私陀あしだ仙人が悉達しつた太子の生れさせ給いしを見て悲んで云く現生には九十にあまれり太子の成道を見るべからず後生には無色界むしきかいに生れて五十年の説法の坐にもつらなるべからず正像末にも生るべからずとなげきしがごとし、道心あ

らん人人は此を見ききて悦ばせ給え正像二千年の大王よりも後世ををものはん人人は末法の今の民にてこそあるべけれ此を信ぜざらんや、彼の天台の座主よりも南無妙法蓮華經と唱うる癩人とはなるべし、梁の武帝の願に云く「寧ろ提婆達多となて無間地獄には沈むとも鬱頭羅弗とはならじ」と云云。

通解

——問う、經文はじつに分明であることがわかった。それでは天台、妙樂、伝教等の未来を予言したとばはあるのか。

答う、汝の疑問はさかさまである。釈を引いて話を進める時には、經論にそのようなことが説かれているかどうかを反問するのは当然であるけれども、經文に分明であるならば、いまさら釈を尋ねる必要はないのである。もし釈の文が經文と相違した場合には、經を捨てて釈につくのか。

なるほどその道理は至極である。しかし凡夫の習いとして經は幽玄であり、その意義を得ることが遠いけれども、釈はその意義を得ることが近い。その近い釈が分明ならば、もう少し信心を増すことができるであらう。

答えていわく、汝の不審はなかなか真剣なので少々釈を出そう。天台大師いわく「後の五百歳から遠く尽未来際にいたるまで三大秘法の妙道が流布し利益するであらう」と。妙樂大師いわく「末法の初めは下種の大利益があるであらう」と。伝教大師いわく「正像二千年はほとんど過ぎおわって末法がはなはだ近づいている。法華一乘の機は今正しくその時である。何をもってこれを知ることができるかといえ、安

樂行品に末世法滅の時と予言しているからである」と。またいわく「その時代は像法の終わり末法の初めであり、その国土は中国の東、羯^{かつ}の西であり、その衆生は五濁^{じよく}が強盛な鬭諍堅固の時である。法華經に、如来の現在すら猶怨嫉^{なのおんしつ}が多い、況^{いは}んや滅度の後をやと予言されているが、まことに理由のある言葉である」と。

さて、釈尊の出世は住劫第九の滅・人寿が百歳の時であつた。この百歳から人寿十歳にいたるまでの間というものは、釈尊の在世五十年と滅後の二千年と末法一万年である。その間に法華經流布の時が二度ある。いわゆる釈尊在世の八年と、滅後には末法の初めの五百年である。しかるに天台、妙樂、伝教等の私たちは釈尊在世の法華經説法の時にも生まれあわないし、また後の滅後末法の時にも生まれあわず、その中間に自分たちが生まれたことを嘆いて末法の初めを恋慕^{こほ}つてこのように書かれたのである。

そのような例としては、阿私陀仙人^{あしだ}が悉達太子^{しつた}の生まれたのを見て悲しんでいうには、自分は現在九十歳になり、太子が仏道を成ずるのを見ることができないし、また後生には無色界^{むしきかい}に生まれて、釈尊五十年の説法の坐にもつらなることができない。さらに正像末にも、生まれてこられないといつて、嘆いたようなものである。

仏道を求めようと願う人々ならば、このことを見聞きしてお悦びなさい。後世の成仏を願うならば、正像二千年の大王と生まれるよりも、末法の今の庶民である方がよいのである。どうして、そのことを信じないでいられようか。像法時代に彼の天台の座主^{ざす}になるよりも、末法において南無妙法蓮華經と唱える願人^{らいにん}となるべきなのである。梁の武帝の発願^{はつがん}の文には「たとえ提婆達多となつて無間地獄^{むけんじごく}に沈んだとしても、鬱頭羅弗外道^{うづらふぼつ}にはなりたくない」とある。

天台（五三八年―五九七年）。中国・南北朝から隋代にかけての人で中国天台宗の開祖。諱は智顗。字は徳安。姓は陳氏。智者大師ともいう。荊州華容県（湖南省）に生まれる。十八歳の時、湘州果願寺の法緒について出家し、ついで慧曠律師に仕えて律を修し、方等の諸経を学んだ。陳の天嘉元年（五六〇年）大蘇山に南岳大師を訪れ、修行の末、法華三昧を感得した。その後、おおいに法華経の深義を照了し、『法華玄義』『法華文句』『摩訶止観』の法華三大部を完成した。

妙楽（七二一年―七八二年）。中国・唐代の天台宗中興の祖。諱は湛然。姓は戚氏。常州晋陵県荊溪（江蘇省）の人。蘭陵の妙楽寺に住したことから妙楽大師と呼ばれ、また出身地の名により荊溪尊者ともいわれる。開元十八年（七三〇年）左溪玄朗から天台教学を学び、天宝七年（七四八年）三十八歳の時、宜興浄楽寺で出家した。当時は禅、華嚴、真言、法相などの各宗が盛んで、天台宗は衰退していたが、妙楽大師は法華一乘真実の立場から各宗を論破し、天台大師の法華三大部の注釈書を著すなどおおいに天台学を宣揚した。晩年は国清寺で布教に努め、仏隴道場で没した。著書には『法華玄義釈籤』十卷、『法華文句記』十卷、『止観輔行伝弘決』十卷、『五百問論』三卷等多数ある。

伝教（七六七年―八二二年）。平安時代初期の人で、日本天台宗の開祖。諱是最澄。伝教大師は諡号。叡山大師、根本大師、山家大師ともいう。俗姓は三津首。幼名は広野。近江国（滋賀県）滋賀郡の生まれ。後漢の孝献帝の末裔といわれる。十二歳で近江国分寺の行表について出家。延暦四年（七八五年）東大寺で具足戒を受け、その後、比叡山に登り、諸経論を究めた。延暦二十一年（八〇二年）高雄山寺で南都の碩学を前に天台三大部を講じ

た。延暦二十三年（八〇四年）に入唐して道邃、行滿、脩然、順曉等について学ば、翌年帰国して延暦（八〇六年）法華經を所依とする日本天台宗を開いた。その後、嵯峨天皇の護持僧となり、大乘戒壇実現た。没後、大乘戒壇が建立されている。おもな著書に『法華秀句』三卷、『顕戒論』三卷、『守護国界章』がある。

未来記 みらいき 仏が未来世の予見を書き記した書。例えば、大集經（五箇の五百歳の仏法流布を予見）、「立正安国大聖人が自界叛逆難・他国侵逼難を予見」などがこれにあたる。

釈 一般的には文意の解釈、注釈の意。仏法では經論の義を解釈することで、天台等の大師の選述したう。天台大師の『法華文句』など。

經論 仏法に関する一切の体系のこと。經とは仏が説いた教法。論とは仏自ら論議した哲理、また菩薩がじ注釈したもの。一例をあげれば、法華經一部八卷二十八品を經といい、世親の著した『妙法蓮華經憂（法華論）二卷（大正二十六卷二）』が論である。

經は遠し釈は近し 日寛上人は「經はこれ幽玄なり。故に義意を得ること遠し。故に『經は遠し』というれ經を解す。故に義意を得ること近し。故に『釈は近し』というなり」（文段集二三・七）と仰せである。

「後の五百歳遠く妙道に沾わん」 天台大師の『法華文句』の文。

「末法の初め冥利無きにあらず」 妙樂大師の『法華文句記』の文。

「正像稍過ぎ已つて……」 伝教大師の『守護国界章』上の文。

正像 仏滅後の時代区分である正法時、像法時の二時のこと。正法時とは仏の教えが正しく実践され伝え代。像法時とは次第に仏教が形式化し、その正しい教えが失われていく時代。大集經に説かれる五五百

第一の五百年（解脫堅固）と第二の五百年（禪定堅固）の一千年間が正法時代であり、第三の五百年（読誦多聞堅固）と第四の五百年（多造塔寺堅固）の一千年間が像法時代である。

法華一乘 一仏乗を説き示した法華經のこと。

又云く「代を語れば……」 伝教大師の『法華秀句』下の文。「願仏未來記」には「此の伝教大師の筆跡は其の時に当るに似たれども意は當時を指すなり」（御書五〇六頁）と仰せられている。當時とは、すなわちこれ末法である。末法の初めには三大秘法が広宣流布するのである。

唐の東・羯の西 平安朝の頃、日本の位置を示したことば。日本は唐の東方、羯の西方に位置すると考えられていた。唐とはいまの中国、羯とは靺鞨のこと、六世紀半ばから約一世紀間、中国東北部の松花江流域に住したツングースの一種族を中国では隋、唐時代にこう呼んだ。

五濁 生命の濁りの諸相を五種に分類したもの。劫濁、衆生濁、煩惱濁、見濁、命濁の五つをいう。劫濁とは時代の濁りで、環境、社会に悪い現象が重なり起こること。衆生濁とは有情濁ともいい、衆生の生命が濁り身心ともに資質が低下すること。煩惱濁とは貪瞋癡慢疑等の思惑によって精神が濁ること。見濁とは思考の濁りで、身見、辺見、邪見、見取見、戒禁取見等の見惑をいう。命濁とは生命自体の濁りである。

住劫第九の減 住劫の中の九番目の減劫のこと。住劫とは世界の成立から消滅までを四期に分けた四劫（成・住・壊・空）の一つで、成立した世界が安定継続している時期をいう。この住劫は二十小劫からなるとされるが、そのうちの第九の減劫の人寿百歳の時に釈尊は出現したとされる。

阿私陀仙人 梵名アシタ（Asita）の音写。阿私多、阿斯陀とも書き、略して阿私ともいう。無比、端正、端嚴と訳す。バラモンの長老で、中インド迦毘羅衛国の仙人。過去現在因果經卷一（大正三卷六二〇頁）等によると、悉

達太子（後の釈尊）誕生の時、その相を見て「三十二相をそなえているから、在家のままであれば二十九にして転輪聖王となり、出家すれば一切智を悟ってかならず仏になる人である。しかし、私は今、九十歳であるから太子の成道を見ることなく死なねばならぬのは悲しい」（大正三卷六二六頁、趣意）と予言したという。

悉達太子 悉達は、梵名シッダールタ（Siddhartha）の音写である**悉達多**の略。釈尊の出家前、太子であった時の名。

無色界 物質を超越した純粹な精神世界のこと。三界（欲界・色界・無色界）の一つ。天界の最上部をさす。
空無辺処、**識無辺処**、**無所有処**、**非想非非想処**の四処からなる。

天台の座主 座主とは①学徳ともに勝れて一座中の上首となる者のこと。②大寺の管長を呼ぶ公称。天台宗では義真が延暦寺初代の座主に任ぜられ、以降、像法時代の日本仏教界の最高に權威ある地位となった。

梁の武帝の願に云く「寧ろ提婆達多……」 中国の南北時代、**梁の武帝**（在位五〇二年―五四九年）が道教をすてたときの勅文である。提婆達多となれば長く地獄に沈んでも法華經の下種によって成仏を許されている。しかし**鬱頭羅弗**外道となつてはしばらく天に生ずることができても成仏することができない。ゆえに提婆達多とはなつても**鬱頭羅弗**にはなりたくないとの意。

提婆達多 前出、第二章の「一代謗法の提婆達多」の項（九二頁）参照。

無間地獄 八大地獄（八熱地獄ともいう）の一つ。大阿鼻地獄ともいう。阿鼻は梵語アヴィーチイ（avīci）の音写で、漢訳して無間という。間断無く大苦に責められることから名付けられた。『俱舍論』卷十一に「阿鼻旨の中には樂の苦に間ること無きが故に、無間と名づく」（大正二十九卷五八頁）とある。欲界の最底部にあり、周囲は七重の鉄の城壁、七層の鉄網に囲まれているところから阿鼻大城、無間大城ともいわれる。殺父、殺母、

殺阿羅漢、出仏身血、破和合僧の五逆罪を犯した者と誹謗正法の者が墮ちるとされる。

鬱頭羅弗 梵名ウドウラカラーマプトラ (Udraka-Rāmaputra) の音写。鬱陀羅摩子、鬱頭藍子、鬱陀羅伽仙人ともいう。雄傑、極喜と訳す。摩訶陀国の首都王舎城近郊の森林中に住んでいた外道の仙人。数論派の人ともいう。釈尊が出家した時、まず阿羅邏と迦藍を訪れ、ついでこの鬱頭羅弗について法を求めた。彼は非想非非想処を眞実の悟達としていた。

講義

この章は、釈の文を引いて、末法に三大秘法の仏法が広宣布することを明かされている。初めに天台、妙楽、伝教大師の文を引き、次に「夫れ釈尊の出世……」からは釈の文意を述べ、「例せば阿私陀仙人……」からは例を引き、「道心あらん人人……」からは結論となっている。

妙道に沾うとは三大秘法の広宣布

「後の五百歳遠く妙道に沾わん」とは、天台大師の『法華文句』の文である。いまこの文を引かれたのは、末法の初めより万年の外、遠く未来際までも三大秘法の仏法が流布するであろうとの意を示すためである。さて妙道の道とは、なぜ三大秘法なのか。これについて日寛上人は「これはこれ内鑒冷然の奥旨、当流深秘の法門なり」として、次のように示されている。

道に三の義あり、即ち三箇の秘法である。第一に虚通の義、即ち本門の本尊である。文句二にいわく
「中理虚通、之を名づけて道と為す」と。中はいわく、中道即ち妙法蓮華經である。理はいわく、実相
即ち一念三千である。およそ妙法の三千は法界に周遍して、さらに壅ぐところがない。ゆえに虚通とい
うは即ち本門の本尊、事の一念三千の南無妙法蓮華經である。ゆえに「日女御前御返事」に「是全く日
蓮が自作にあらず多宝塔中の大牟尼世尊分身の諸仏すりかたぎたる本尊なり、されば首題の五字は中央
にかかり・四天王は宝塔の四方に坐し・釈迦・多宝・本化の四菩薩肩を並べ普賢・文殊等・舍利弗・
目連等坐を屈し（中略）此等の仏菩薩・大聖等・総じて序品列坐の二界八番の雜衆等一人ももれず、此
の御本尊の中に住し給い妙法五字の光明にてらされて本有の尊形となる是を本尊とは申すなり。經に云
く『諸法実相』是なり、妙樂云く『実相は必ず諸法・諸法は必ず十如乃至十界は必ず身土』云云、又云
く『実相の深理本有の妙法蓮華經』等と云云、伝教大師云く『一念三千即自受用身・自受用身とは出尊
形の仏』文、此の故に未曾有の大曼荼羅とは名付け奉るなり」（御書一二四三）と仰せである。

第二に所踐の義、即ち本門の戒壇である。『輔正記』四にいわく「道は是れ智の所踐なるが故に」と。
信を以て慧に代うゆえに智はこれ信である。およそ戒壇とは信者の踐む所である。ゆえに所踐の義は即
ち本門の戒壇である。ゆえに「三大秘法抄」に「王臣一同に本門の三秘密の法を持ちて有徳王・覚徳比
丘の其の乃往を末法濁惡の未来に移さん時勅宣並に御教書を申し下して靈山浄土に似たらん最勝の地を
尋ねて戒壇を建立す可き者か時を待つ可きのみ事の戒法と申すは是なり、三国並に一閻浮提の人・懺悔

滅罪めつざいの戒法のみならず大梵天王・帝釈等も来下らいげして蹋給ふみうべき戒壇なり」(御書一〇二二頁)と仰せである。蹋ふみとは即ち踐ふみである。

第三に能通のうつうの義、即ち本門の題目である。法界次第中にいわく「道は能通を以つて義となす」と。本門の題目はおよそ二意を具している。一は信、二は行である。この二つが相扶たすけよく通じて寂光にいたる。ゆえに能通の義は本門の題目である。天台のいわゆる「智目行足、清涼池しょうりょうちに到る」は、これである。「当体義抄」に「日蓮が一門は正直に権教の邪法・邪師の邪義を捨てて正直に正法・正師の正義を信ずる故に当体蓮華を証得じようじやつこうして常寂光の当体の妙理を顕す事は本門寿量の教主の金言を信じて南無妙法蓮華經と唱うるが故なり」(御書五一八頁)との仰せが、即ち、この意である。行者はまさに知るべきである。信心があつても、唱題の行がなければ盲目あしなえではないが跛あしなえのようなものである。また唱題があつてももし信心がなければ、たとえば跛ではないが盲目のようなものである。もし信行がともに具足するならば、なお二つながら完全であるようなものである。『百論』の「盲跛もうはの譬え」を思い合わせよ。ゆえによく信心の目を開き唱題修行の足を運びなさい。もししからば、能く通じて寂光清涼池にいたることを確信すべきである。しかれば則ち能通・所踐・虚通の三義は即ち三箇の秘法であることは必然である。ゆえに「妙道」は文底深秘の大法である。「報恩抄」の「一ひとつには日本・乃至一閻浮提えんぶだい・一同に本門の教主釈尊を本尊とすべし(中略)二ふたつには本門の戒壇、三には日本・乃至漢土・月氏・一閻浮提に人ごととに有智無智をきらはず一同に他事をすてて南無妙法蓮華經と唱うべし(中略)日蓮が慈悲曠大じひこうだいならば

南無妙法蓮華經は万年の外・未来までもながるべし流布」（御書三二八ページ）との仰せを思い合わすべきである。（以上、文段集二三七ページ―二三九ページの趣意）

以上のように、「妙道」とは三大秘法のことであり、この天台大師の文は、末法に三大秘法が広宣流布すべきことを示したものであることを明らかに知るべきである。

末法の初め冥利無きにあらずみより

妙楽大師の『文句記』の文である。この文で「冥利」というのは下種益のことである。すなわち釈尊時代のように熟益じゆくやくや脱益だつちやくが顕れるのとは違うのである。「教行証御書」に「正像に益を得し人人は顕益なるべし在世結縁けちえんの熟せる故に、今末法には初めて下種す冥益なるべし（中略）妙楽の釈の如くんば、冥益なれば人は是を知らず見ざるなり」（御書一二七七ページ）と仰せのとおりである。また記の十に「或は冥、或は顕」とあることについて、『輔正記ふしやうき』には「或は冥とは、毀者きしやは但冥益ただを得るのみ。或は顕とは、信者は現に六根清淨を得る故なり」といつている。この文で毀者はただ下種益を得るゆえに冥益とるのである。すなわち「教行証御書」に「過去の威音王仏いおんのうぶつの像法に（中略）彼の二十四字を聞きし者は一人も無く亦不輕大士ふきやうだいしに値あつて益やくを得たり、是れ則ち前の聞法もんぽうを下種とせし故なり」（御書一二七六ページ）と仰せであるが、不輕菩薩は現に六根清淨を得るゆえに顕益とるのである。末法は順逆二縁ともに下種益である。ゆえに順逆ともに冥益である。不輕品の意は、能化のうけの不輕を名づけて信者となし、現

に六根清淨を得るゆえに、これを顛益というのである。（文段集二三九ページの趣意）

法華經の流布の時・二度あるべし等

法華經流布の時は釈尊在世と末法の二度であるとの仰せであるが、すでに天台大師、伝教大師の御時にも法華經が広宣流布したはずなのに、なにゆえ「二度」と仰せられたのか。これについて日寛上人は、像法時代は真実の法華經流布の時ではないと、次の五意を示されている。

一には、像法には、この經の利生りしやうがいまだ盛んでない。そのことを法華經の藥王品第二十三には「衆星の中に、月天子最も為れ第一なるが如く」（妙法蓮華經並開結六〇〇ページ）とあり、「藥王品得意抄」には「又月はよい宵よりも暁は光まさり・春夏よりも秋冬は光あり、法華經は正像二千年よりも末法には殊に利生りしやう有る可きなり（中略）此の經文に二千年の後南閻浮提に広宣流布すべしと・とかれて候は・第三の月の譬の意なり」（御書一五〇一ページ）と仰せである。ゆえに像法には、法華經の利生が盛んでないことを知るのである。

二には、像法には、まだ諸大乘經の利益があり、よって、ただ法華經のみが唯一無二の即身成仏の大法であるとの妙能が明らかでないゆえに。「顛仏未來記」にはそのことを「小乗經を以て之を勸かんうるに正法千年は教行証の三つ具つよさに之を備う像法千年には教行のみ有つて証無し末法には教のみ有つて行証無し等云云、法華經を以て之を探るに正法千年に三事を具するは在世に於て法華經に結縁けちえんする者か、其

の後正法に生れて小乗の教行を以て縁と為し小乗の証を得るなり、像法に於ては在世の結縁微薄の故に小乗に於て証すること無く此の人・権大乘を以て縁と為して十方の浄土に生ず、末法に於ては大小の益共に之無し、小乗には教のみ有つて行証無し大乘には教行のみ有つて冥顕の証之無し、其の上正像の時の所立の権小の二宗・漸漸・末法に入て執心しゅうしんいといよ 弥強盛にして小を以て大を打ち権を以て実を破り国土に大体謗法の者充滿するなり（中略）此の時に當つて（中略）本門の本尊・妙法蓮華經の五字を以て閻浮提に広宣流布せしめんか」（御書五〇六ページ）等と仰せである。

三には、像法には、正直の妙法を弘めざるゆえに。「立正観抄」に「天台大師は靈山の聴衆として如来出世の本懷を宣べたもうと雖も時至らざるが故に妙法の名字を替えて止観と号す迹化の衆なるが故に本化の付属を弘め給わず正直の妙法を止観と説きまぎらかす故に有のままの妙法ならざれば帶権の法に似たり（中略）本化弘通の所化の機は法華本門の直機なり」（御書五二九ページ）と仰せのとおりである。

四には、像法には、事行の三千を顕さざるゆえに。「観心本尊抄」には「像法の中末に観音・藥王・南岳・天台等と示現し出現して迹門を以て面と為し本門を以て裏と為して百界千如・一念三千其の義を尽せり、但理具を論じて事行の南無妙法蓮華經の五字並びに本門の本尊未だ広く之を行ぜず所詮四機有つて四時無き故なり」（御書二五三ページ）と仰せである。

五には、像法には、いまだ深秘の大法を弘めざるゆえに。「撰時抄」には「仏滅後に迦葉・阿難・馬鳴・竜樹・無著・天親・乃至天台・伝教のいまだ弘通しましませぬ最大の深密の正法經文の面に現前

なり、此の深法・今末法の始^{はじめ}五五百歳に一閻浮提^{えんぶだい}に広宣流布すべき」(御書二七二ページ)と仰せられている。
(以上、文段集二四〇ページ二四一ページの趣意)

正像二千年の大王よりも……癡人とはなるべし

位の高い人と低い人を相對して、法の高下^{こうげ}を決定される段である。すなわち「法妙なるが故に人貴し」(御書一五七八ページ)ということを明かされている。

正像二時の大王は、たとえ如説修行するとも、なお權迹^{ごんしやく}の行者であつて劣り、末法今時の民は如説修行すれば、すなわち本化の菩薩であつて遙^{はる}かに上位となる。あたかも正像の大王は猿のごとく、末法の民は帝釈^{たいしやく}のごとき相違となる。同じように、仏法を信じ修行しても、このような相違があるのは、時によつて弘通^{くわつう}される法が違ふからである。

次に「彼の天台の座主」の下は、たとえば天台の座主が末法にいらしても、爾前^{にぜん}、迹門^{しやくもん}、謗法^{ぼうぼう}の行人^{ぎようにん}であつて、一切世間の仏種^{ぶつしゆ}を断ずる罪人である。ゆえにかえつて卑賤^{ひせん}である。もし本門寿量の正法の行者は、まさしく「是の人仏道に於いて 決定して疑い有ること無けん」(妙法蓮華經並開結五八四ページ)の善人であつて、天台、真言の最極尊貴^{さいごくそんき}の智人、碩徳^{せきとく}より寿量品の最極下賤^{げせん}の愚人、白癡人^{びやくらいにん}のほうが尊い。ゆえに白癡人となるべしとの意である。(文段集二四二ページの趣意)

大御本尊を受持し、折伏に励む創価学会員は、いまは貧乏に悩み病氣に苦しむ身であっても、仏法のうえでは、このような地位を約束されているのである。世人はよく創価学会員に対して、貧乏人のくせにとか、病人のくせになどと批判する。しかし、学会員はいかに恵まれない環境にある人であっても、即身成仏するのである。地涌の菩薩として、世界人類の一切の苦悩を救うべき尊い使命をもって生まれてきているのである。

それでは、なぜ地涌の菩薩が、貧しい家や病氣をもって生まれてきたのであろうか。それは一には本人の宿業であり、悩みを乗り越えることによって其罪畢ございひつち已するためである。二には自ら清浄の業報を捨てて、願ってこの世へ折伏を行ずるために、そのような姿となって生まれてきたのである。折伏を行ずる人が、裕福で健康で、何一つ不自由のない人ばかりでは、折伏された人が、御本尊の功德を信じられないとの道理なのである。恩師戸田前会長は、つねに「われわれ学会人は、折伏を行ずるために、願って貧乏で、また病氣の身などに生まれてきたのだ。ゆえに折伏をやりきれば必ず絶対的幸福の境涯にもどる。自ら願ってそうしたのだから文句をいう必要はあるまい」といわれていた。

折伏を行ずるには、一般大衆と苦しみや悩みをともにしながら仏道修行に励んで、そのなかに大御本尊の功德を身をもって証明し、現実に見せていかなくは、人々は信用しない。ゆえに法華經法師品第十には「此の人は……願って此の間に生まれ広く妙法華經を演のべ分別ぶんべつするなり……是の人は、自ら清浄の業報ごうほうを捨てて、我が滅度の後に於いて、衆生を愍あわれむが故に、惡世に生まれて、広く此の經を演ぶるな

り」(妙法蓮華經並開結三八五ページ)と説かれている。

日蓮大聖人が、王侯や貴族に生まれることなく、貧窮下賤びんぐげせんの身で出世された理由は、一切衆生を救わんがためである。日寛上人は「寛記雑々」に「若し帝王將軍等の家に生れば、更に輕賤憎嫉きやうせんぞうしつ等有るべからず。若し爾しからば、結縁けちえんの便り少し、故に微家に託生し、応に謫戮たくりく(とがめ、はずかしめ)等を忍んで、全く経文の如く、身に当て之を行じ、普く毒鼓あまねどつくの縁を結ぶべし」(富要三卷二四〇ページ)と述べられている。

されば「善無畏三蔵抄」には「日蓮は安房の国・東条片海かたうみの石中いそなかの賤民が子なり威徳なく有徳のものにあらず」(御書八八三ページ)と、また「佐渡御勘氣抄」には「日蓮は日本国・東夷とうい・東条・安房の国・海辺せんだらの旃陀羅せんだらが子なり」(御書八九一ページ)とも仰せられている。そのうえで日蓮大聖人の御一生にわたる大難を思うならば、われわれにいま悩みがあるからといっても、それはじつに取るに足らない小難であり少悩である。必ず解決できるものと確信して、信心強盛に折伏に励むことが肝要であろう。

しかも再三にわたって述べてきたように、いま創価学会は世界広布、順縁広布という、かつてない新しい時代を迎えつつある。日蓮大聖人の御入滅後の時代において、中天の太陽のごとき時代が、いま到来したのである。じつにこのよき時代に生まれあわせた福運を身に感じて、黄金時代の最中に、戦い抜いていきたいものである。

第七章

正法の初めの五百年の弘教

問うて云く竜樹・天親等の論師の中に此の義ありや、答えて云く竜樹・天親等は内心には存ぜさせ給うといえども言には此の義を宣べ給はず、求めて云くいかなる故にか宣給ざるや、答えて云く多くの故あり一には彼の時には機なし・二には時なし・三には迹化なれば付嘱せられ給はず、求めて云く願くは此の事よくよくきかんとをもう、答えて云く夫仏の滅後二月十六日よりは正法の始なり迦葉尊者仏の付嘱をうけて二十年、次に阿難尊者二十年・次に商那和修二十年・次に優婆崛多二十年・次に提多迦二十年、已上一百年が間は但小乗經の法門をのみ弘通して諸大乘經は名字もなし何に況や法華經をひろむべしや、次には弥遮迦・仏陀難提・仏駄密多・脇比丘・富那奢等の四五人、前の五百余年が間は大乘經の法門少少・出来せしかども・とりたてて弘通し給はず、但小乗經を面としてやみぬ、已上大集經の先五百年解脱堅固の時なり、

通解 — 問うていわく、竜樹、天親等の論師の中に、この義があるかどうか。答えていわく、竜樹、天親等

は内心にはそのことを知っていたが、ことばにはこの義を宣べられていない。

求めていわく、いかなる理由によって宣べられなかったのか。答えていわく、多くの理由がある。竜樹、天親の時代には、一には機なく、二には時でなく、三には迹化の菩薩であるから、法華經本門の付嘱を受けていないからである。

求めていわく、願わくは、それらの事情をよくよく聞きたいと思う。答えていわく、仏の滅後二月十六日からは正法時代の初めである。まず迦葉尊者が仏の付嘱を受けて二十年の間、次に阿難尊者が二十年、次に商那和修が二十年、次に優婆崛多が二十年、次に提多迦が二十年、以上百年の間は但小乗経の法門のみを弘通して、諸大乘経はその名前すらなかった。まして実大乘経の法華経がひろめられるわけがなかった。

次に、弥遮迦、仏陀難提、仏駄密多、脇比丘、富那奢等の四、五人が、前の五百余年の間に大乘経の法門を少々あらわしたけれども、とり立てて弘通されることもなく、ただ小乗経を面として流布するにとどまった。以上の五百年は大集経の第一の五百歳・解脱堅固の時代である。

語 訳

竜樹^{りゅうじゆ} 生没年不明。竜樹菩薩のこと。梵名ナーガルジュナ (Nāgārjuna) といふ、竜猛、竜勝とも訳す。仏滅後

七百年ごろの南インドの大乘論師。付法蔵第十四祖（一説には第十三祖）。大乘思想の大成者で、大乘経の諸經典を注釈するなど多くの論書を著して、大乘思想の発展に貢献し、八宗（俱舎・成実・律・法相・三論・華嚴・真言・天台）の祖と称される。迦那提婆に法を付嘱して没したという。著書には『中観論』四卷、『十住毘婆沙論』十卷、『十二門論』一卷などがあり、また『大智度論』百卷も竜樹造と伝えられる。

天親^{てんしん} 生没年不明。四、五世紀頃のインドの学僧。梵名ではヴァスバンドウ (Vasubandhu) といふ、世親とも訳す。『大唐西域記』巻五等によると、北インド健駄羅国の出身。無著の弟。はじめ、阿踰闍国で説一切有部の小乗教を学び、『大毘婆沙論』を講説して『俱舎論』を著した。後、兄の無著に導かれて小乗教を捨て、大乘教を

学んだ。その時、小乗の教を説いてきた非を悔いて舌を切ろうとしたが、兄に舌をもって大乘を謗じたのであれば、以後、舌をもって大乘を讃して罪を償うようにと諭され、大乘の論をつくり大乘教を宣揚した。著書に『俱舍論』三十卷、『十地經論』十二卷、『法華論』二卷、『摂大乘論釈』十五卷、『仏性論』六卷など多数あり、千部の論師といわれる。

論師 論師とは梵名で阿毘曇師。初めに三蔵のうちの論蔵に通じている人をいったが、後に論議をよくする人、あるいは論を造って仏法を宣揚した人をいう。

迦葉尊者 釈尊の十大弟子の一人。迦葉は梵名マハーカーシャパ (Mahākāśyapa) の音写である摩訶迦葉の略。摩訶迦葉波などとも書き、大飲光と訳す。付法蔵の第一。王舎城のバラモンの出身で、釈尊の弟子となって八日目に悟りを得たという。衣食住等の欲に執著せず、峻厳な修行生活を送ったので、釈尊の声聞の弟子のなかでも頭陀第一と称される。釈尊滅後、王舎城外の畢鉢羅窟で第一回の仏典結集を主宰した。以後二十年間にわたって小乗教を弘通し、阿難に法を付嘱した後、鷄足山で没したとされる。法華經授記品第六で未来に光明如来になるとの記別を受けている。

阿難尊者 釈尊十大弟子の一人。梵名アーナンダ (Ananda) の音写。阿難陀とも書き、歡喜、慶喜、無染と漢訳する。釈尊の従弟で、提婆達多の弟とされる。釈尊に常随し、一切の説法を記憶して忘れなかったことから多聞第一といわれた。釈尊滅後、第一回仏典結集では誦出者として中心的な役割を果たした。摩訶迦葉から付嘱を受け、付法蔵の第二として小乗教を弘通した。法華經授学無学人記品第九で山海慧自在通王仏の記別を受けた。

商那和修 梵名シャーナヴァーサ、シャナカヴァーサ (Śaṇavāsa, Śaṇakavāsa) の音写。商那和衆、舎那婆修、奢羯迦、商諾迦縛娑とも書く。麻衣と訳す。付法蔵の第四祖（または三祖）。中インド王舎城の長者で、釈尊滅後、

阿難の弟子となり阿羅漢果を得、摩突羅、梵衍那、罽賓の地に遊行教化した。優婆崛多に法を付嘱した。

優婆崛多 梵名ウパグプタ (Upagupta) の音写。大護、近藏、近護と訳す。付法蔵の第五祖 (または第四祖)。紀元前三世紀頃の人。『付法蔵因縁伝』卷二等によるとインド摩突羅国の崛多長者の子。付法蔵第四祖の商那和修に師事した。摩突羅国優留曼荼羅山中で衆生を教化している崛多のもとへ、アショールカ大王が説法を聞きに行こうとした時、伝え聞いた崛多が一万八千の大衆を従えて華氏城に入り、大王のために説法し化導した。その際、大王は八万四千の塔を建立し供養したといわれる。衆生を教化することでは第一人者とされ、「無相好仏」とも呼ばれた。後に法を提多迦に付嘱した。

提多迦 梵名ディータカ (Dhīka) の音写。付法蔵の第六祖 (または第五祖)。提知迦、提地迦、地底迦などとも書く。梵行を修し、三明六通をそなえて阿羅漢果を得たのち、優婆崛多入滅に際し付嘱を受けている。その後もよく小乗教を弘め、法を弥遮迦に伝えた。

弥遮迦 付法蔵第七祖 (または第六祖)。中インドの僧。もとはバラモンの師で八千人の弟子をもっていたが、付法蔵第六祖提多迦の説法教化によって弟子とともに仏法に帰依した。多聞博識で弁舌にすぐれ、北インドに遊化して主に小乗教を弘通した。

仏陀難提 付法蔵の第八祖 (または第七祖)。仏陀難陀とも音写される。『仏祖統紀』卷五等によると北インドの迦摩羅国の僧。弥遮迦の教化によって出家し、たちまち声聞の四果 (須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果) を得たという。頭の頂に肉髻があつて弁舌に勝れていた。法を仏駄密多に付嘱した。

仏駄密多 梵名ブツダミトラ (Buddhamitra) の音写。仏陀密多とも書く。付法蔵第九祖 (または第八祖)。提伽国の僧。『仏祖統紀』卷五等によると付法蔵第八祖の仏陀難提に師事して法を受け、巧みな方便を駆使して衆生を

教化し、もろもろの外道を論破した。ある時、外道を信ずる国王を教化するために赤い旗を掲げて十二年間王城の前を往来し、ついに王の面前で法論する機会をえた。そして、一切の博学雄弁のバラモンと対論して論破し、ついに王の帰依を受けた。またある尼乾子（苦得外道の行者）が仏の悪口を言うのを聞き、必ず地獄に墮ちるとして破折し、この尼乾の徒五百人とともに仏法に帰依させ、その名声が広がったという。法を脇比丘に付嘱した。

脇比丘 きょうひく 二世紀初頭、中インドの説一切有部の僧。梵名パーシュバ（Pārśva）の漢訳名。勒比丘とも呼ぶ。付法蔵の第十祖（または第九祖）。カニシカ王の命によって四百九十九人の賢聖とともに、迦淫弥羅国かしゆみらにおいて第四回の仏典結集を行い、『阿毘達磨大毘婆娑論』を編纂した。

富那奢 ふなしや 梵名ブンニヤヤサス（Punayasas）の音写。付法蔵第十一祖（または第十祖）。『仏祖統紀』巻五などによると中インド摩訶陀国の華氏城の人。知識深邃で多聞博記であった。脇比丘に師事して付法され、巧みな方便で衆生を教化した。法を馬鳴に付嘱した。

講義

この章からは、広く三時の弘教の次第を明かされている。この章は、まず正法の初めの五百年について述べられている。初めに二つの問答があり、竜樹、天親等の論師の中にも、「此の義」があるかと問われている。「此の義」とは三大秘法が広宣流布するとの義である。三大秘法は正像二千年にはひろまらず、正像にひろまらないのは末法に流布するということを明かさんがためである。

答えの文には「**内鑑冷然**、**外適時宜**」の**所以**が明かされている。当抄には一、機なし、二、時なし、

三、付嘱なし、の三義を明かされているが、「当体義抄」(御書五一九頁)には一、時なし、二、付嘱なし、の二義を明かされ、「曾谷入道殿許御書」(御書一〇二八頁)には一、自身堪えざるがゆえ、二、所被しよひの機なし、三、付嘱なし、四、時なし、の四義が明かされている。

さて、当抄の三義を明らかにすれば次のようになる。

第一に、「彼の時には機なし」とは、彼の時は本未有善の機ではなかった。およそ文底深秘の大法は、本因下種ほんいんげしゆの正体である。ゆえに、その機を論ずれば、本未有善の衆生であつて謗法一闡提ほうほういつせんたいの輩やからである。しかるに正像二千年の間は、みな在世結縁けちえんの衆生であつて謗法一闡提の輩ではない。ゆえに小乗、權教等の經教を授けて成熟させ下種の要法を授けないのである。第二に「時なし」とは、白法隱没の時ではないのである。およそ文底深秘の大法は、一切の仏法が隱没した時に次いで広宣流布するのである。しかるに、正像二千年はまさしく大集經の前の四箇の五百歳であつて、第五の五百歳白法隱没の時ではない。どうして文底秘沈の大法を広宣流布することができようか。第三に、「迹化なれば付嘱せられ給はず」とは、迹化の菩薩に妙法五字の付嘱がなかったのは次のような理由による。一に迹化は釈尊の初發心しよほつしんの弟子にあらざるゆえに、二には迹化は本因の妙法所持の人にあらざるゆえに、三には迹化は功を積むこと浅きゆえに。

これに反して、本化の菩薩は一に機あり、二には時あり、三には付嘱を受けている。ゆえに三大秘法を末法に広宣流布するのである。正像に流布しなかったことを述べる元意は、末法に必ず流布すること

を明かさんがためであり、末法においても、世界広布、順縁広布を明かさんがためである。（以上、文段集二四四頁―二四五頁の趣意）

付嘱の三義

「迦葉尊者仏の付嘱をうけて二十年」とあるが、付嘱には弘宣付嘱、伝持付嘱、守護付嘱の三種類がある。第一の弘宣付嘱とは嘱累品ぞくるいにいわく「我無量百千万億阿僧祇劫あそうぎこうに於いて、是の得難えき阿耨多羅三藐三菩提みやくさんぼだいの法を修習せり。今以つて汝等に付嘱す。汝等当に受持読誦し、広く此の法を宣のべて、一切衆生をして、普あまねく聞知もんちすることを得せしむべし」（妙法蓮華經並開結五八五頁）と。迦葉、阿難等は、この弘宣付嘱を受けて諸国に仏法を弘宣したのである。

第二の伝持付嘱とは、涅槃經ねはんにいわく「我今所有の無上の正法、悉く以つて摩訶迦葉に付嘱す（中略）当に汝等の為に大依止だいえしと作なること猶如来の諸の衆生の依止処となるが如し」（大正十二卷三七七頁）と。すなわち仏の滅後、四依しえの賢聖けんせいが仏法を相伝、受持して、仏の在世と同じく衆生の依止となつたとをいう。

第三の守護付嘱とは、涅槃經にいわく「如来今、無上の正法を以つて、諸王・大臣・宰相・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷に付嘱す」（大正十二卷三八一頁）と。またいわく「内に智恵の弟子有つて甚深の義を解し、外に清淨しょうじょうの檀越だんつ有つて仏法久住す」と。すなわち在家の国王、大臣、民衆等が、ことごと

く守護付嘱を受けて仏法を守護することである。

さて迦葉尊者以下付法藏二十四人の付嘱は、第一の弘宣付嘱と第二の伝持付嘱である。大聖人の二箇相承も、また弘宣付嘱と伝持付嘱である。「日蓮一期弘法付嘱書」の「日蓮一期の弘法、白蓮阿闍梨日興に之を付嘱す、本門弘通の大導師たるべきなり」(御書一六〇〇ヅ)とは、第一の弘宣付嘱であり、「身延山付嘱書」の「身延山久遠寺の別当たるべきなり」(御書一六〇〇ヅ)とは、第二の伝持付嘱である。そして創価学会の活動は、学会が在家信徒の団体であるから、守護付嘱をうけた姿であることは当然であるが、さらに全世界に向かって大折伏をし、本尊流布に邁進まいしんしつつある姿は、また弘宣付嘱された姿ともいえるであろう。

守護付嘱と賢王

釈尊滅後のインドにおいては、仏教の興隆と仏典の結集が、多くの聖僧と強大な武力、権力を背景とした賢王の外護げどによってなされた。なかにもアショールカ王は深く仏教に帰依きえし、身をもって正法の流布に努めた。王は次第に領土を拡張し、ほとんど全インドを統一して仏教を弘宣したうえ、さらには南はセイロン(現スリランカ)より北は中央アジアにおよび、東はビルマ(現ミャンマー)、中国から、西はギリシャ、エジプトにまでおよぶ広大な地域に、百二十余人の長老を撰えらんで宣教したと伝えられる。これよりインドの仏教は世界的仏教となった。しかしアショールカ王の雄図ゆうとも、王の崩御ほうぎょとともに乱れ、四

方宣教の快挙も絶えて終わつたことは、まことに惜しむべきことである。

仏教は次いで中国へ渡り、日本へも伝えられたが、国王の一存によつて全国に正法が流布したこともあれば、徹底的な迫害、弾圧を加えられたこともあつた。賢王の代表的な例としては、天台大師時代の陳主ちんしゅがあり、伝教大師時代の桓武天皇かんむがある。迫害の例としては、北周の第三代武帝ぶていや唐の武帝等が挙げられる。

日蓮大聖人もまた公場対決を迫られ、国家権力者の前で法の正邪を決し、邪法を破つて正法を立て、もつて天下太平、国土安穩を實現しようとした。日興上人、日目上人等もまた、国主を諫め、立正安國の實現にあらゆる努力を傾注しつつ七百年を過ぎたが、ついに賢王は出現せず、広宣流布の實現を見ることはできなかつたのである。

「観心本尊抄」には「当まさに知るべし此の四菩薩折伏を現ずる時は賢王と成つて愚王を誠責かいしやくし」(御書二五四)と仰せられ、涅槃經ねはんには「正法を護持せん者は五戒を受けず威儀を修せず、応まさに刀劍・弓箭きゆうせん・鉞むさく槊しやくを持すべし」(大正十二卷三八三)と説かれている。化儀の折伏のためには、このような精神をもつて戦わなければならぬのである。

しかし第二次世界大戦に敗れた日本は、戦争を放棄した平和国家として、また全体主義、独裁主義を排除した民主国家として出発した。ゆえに武器を持つて戦うのではなく、主権者の一存や命令で宗教を左右することでもない。主権在民の今日では、民衆一人一人の意識を正しい宗教をもつて変革していく

ことこそ眞の民主主義社会を現出せしめる方途である。

ここに創価学会は、最も平和的かつ民主的な団体として、日本の国に眞の民主主義社会を建設するた
めに立ち上がったのである。つねに大衆の中にあつて、一対一で論議をかわし、一人一人を折伏し各家
庭が宗教革命をしつつ、今日まで発展をつづけてきた。広宣流布はあくまでも民衆の幸せのためであ
り、ひいては仏法守護のために他ならないのである。その武器は、言論であり、哲学であり、信心で
あつて、弓矢や暴力を必要としないのは当然である。

御本仏日蓮大聖人は、身に寸鉄もおびず、ただ言論をもつてあらゆる迫害、弾圧のなかで広宣流布を
進められた。われわれ末弟子たるものが、どうして、この順縁広布の時に安閑^{あんかん}としておられようか。ひ
たすらに、言論をもつて、哲学をもつて、信心をもつて、広布の大道を勇敢に前進してまいりたい。

第八章

正法の後の五百年の弘教

正法の後六百年・已後一千年が前・其の中間に馬鳴菩薩・毘羅尊者・竜樹菩薩・提婆菩薩・羅睺尊者・僧伽難提・僧伽耶奢・鳩摩羅駄・闍夜那・盤陀・摩奴羅・鶴勒夜那・師子等の十余人の人人始には外道の家に入り次には小乗經をきわめ後には諸大乘經をもて諸小乗經をさんざんに破し失ひ給いき此等の大士等は諸大乘經をもつて諸小乗經をば破せさせ給いしかども諸大乘經と法華經の勝劣をば分明にかかせ給はず、設い勝劣をすこしかかせ給いたるやうなれども本迹の十妙・二乗作仏・久遠実成・已今当の妙・百界千如・一念三千の肝要の法門は分明ならず、但或は指をもつて月をさすがごとくし或は文にあたりてひとはし計りかかせ給いて化導の始終・師弟の遠近・得道の有無はすべて一分もみへず、此等は正法の後の五百年・大集經の禪定堅固の時にあたれり、

通解

——正法の後の六百年以後一千年までの五百年間には、馬鳴菩薩、毘羅尊者、竜樹菩薩、提婆菩薩、羅睺尊者、僧伽難提、僧伽耶奢、鳩摩羅駄、闍夜那、盤陀、摩奴羅、鶴勒夜那、師子等の十余人の人々が、初めは外道を学び、次に小乗經を究めて、後には諸大乘經をもつて諸小乗經をさんざんに打ち破られた。しかし、これらの諸大菩薩たちは、大乘經で諸小乗經を破られたが、諸大乘經と法華經との勝劣は分明には書かれなかった。たとえ少しは權実の勝劣を書かれたようではあつても、法華經の肝要たる本迹の十妙、二乗作仏、久遠実成、已今当の妙、百界千如、一念三千等の法門は分明ではない。単にあるいは

語 訳

指をもつて月を指すように、あるいは文にあたつてその一端ばかりを書かれているのみで、化導けどうの始終しじゆう、師弟の遠近おんこん、得道の有無等については、すべて一分もない。これらは正法の後の五百年であり、大集經のぜんじようけん禪定堅固に当たる時代であつた。

馬鳴菩薩めみようぼさつ

二世紀ごろ、中インドに出現したといわれる大乘の論師。付法藏の第十二祖（第十一祖とする説もある）

アシュヴァゴーシャ（Asvaghosa）のこと。はじめ外道を信じて論を張り、負けたならば舌を切つて謝すと慢じていたが、富那奢（または脇比丘）に論破され仏教に帰伏した。後に大いに大乘を宣揚し、よく衆生を教化したという。著書に『仏所行讚』五卷、『憊稚梵讚』けんちぼんさん一卷などがあり、『大乘起信論』一卷なども馬鳴の作といわれている。

毘羅尊者びらそんじや

梵名カピマラ（Kapimala）の音写。迦毘摩羅かびまらともいう。二世紀ごろ、中インド摩訶陀国の華氏城の人。

付法藏の十三祖。初めは外道の師であつたが、馬鳴に論破され、三千人の弟子とともに仏法に帰依した。馬鳴の滅後、その付嘱を受けて正法流布に活躍し、南インドでは『無我論』一百偈をもつて外道を破したという。

提婆菩薩だいば

迦那提婆かなだいばともいう。三世紀ごろの南インドの仏法伝燈者で付法藏第十五祖。『提婆菩薩伝』によると、

バラモン出身で竜樹菩薩の弟子になった。昔、大自在天の請いによって一眼を供養したため片眼となったという。南インドで外道に帰依している王を破し、邪道の論師を多く破折したが、彼らの弟子の一人に恨まれて殺された。

羅睺尊者らごそんじや

梵名ラーフラバッドラ（Rahulabhadra）を音写して羅睺羅跋陀羅らごらばつだらと書く。また羅睺羅、羅睺羅多とも

いう。付法蔵第十六祖。インド迦毘羅衛國カピラエの人。生来、才智徳明であり、付法蔵第十五の提婆菩薩だいばに師事して諸法皆空の理を悟り、また多くの衆生、僧徒に大乘教を教えて化導したという。

僧伽難提そうぎやなんだい 梵名サンガナンディ(Sanghanandi)の音写。インド室羅筏國しらばつの僧。付法蔵第十七祖。僧迦難提、僧伽難提などとも書く。室羅筏國の宝莊嚴王ほうしやうこんのうの子。七歳で世間の楽しみを嫌って出家した。付法蔵第十六の羅睺尊者らくどから法の付嘱を受けて付法蔵の第十七祖となった。後に僧伽耶奢そうぎやしゃに付嘱した。

僧伽耶奢そうぎやしゃ 梵名サンガヤシャス(Sanghayasas)の音写。付法蔵第十八祖。僧伽耶奢とも書く。『仏祖歴代通載』卷四、『釈氏稽古略』卷一などには、付法蔵十八祖を伽耶舎多がやしやた(Gayasata)としており、同一人物と思われる。僧伽耶奢は摩提國の人。僧伽難提そうぎやなんだいから付嘱を受け、第十九祖の鳩摩羅駄くまらだに法を伝えた。

鳩摩羅駄くまらだ 梵名クマラーラブダ(Kumāralabdha)の音写。鳩摩羅多、拘摩羅羅多などとも書く。童受、童寿、豪童と訳す。三世紀末、北インド呬叉始羅國たんしやしらの人。付法蔵第十九祖。聡明で学道は人に勝れすぐ、多くの人々を教化し、全インドにその名声は高かった。法を闍夜那に付嘱した。

闍夜那じやな 梵名ジャヤナ(Jayana)の音写。闍夜多とも書く。付法蔵の第二十祖。北天竺の人。『付法蔵因縁伝』『仏祖統紀』には、仏滅後、法を鳩摩羅駄から相承され、後に盤陀ばんだに伝えたとある。

盤陀ばんだ 梵名ヴァスバンドウ(Vasubandhu)の音写。付法蔵第二十一祖。世親と訳されるが、『俱舍論』の著者である世親(天親)とは別人。インド羅閱國らくえつの人。婆修槃陀ばしゆばんだともいう。闍夜那じやなに師事し、仏法を深く理解して広く衆生を救った。

摩奴羅まぬら 付法蔵第二十二祖。インド那提國なだいの王子として生まれた。付法蔵第二十一の盤陀ばんだに師事して法を受け、三蔵の義に通達し、南インドを中心に諸宗を破折して広く大乘を弘通した。

鶴勒夜那かくろくやな 梵名ハクレーナヤシャ (Haklenayasa) の音写。鶴勒夜奢、鶴勒那とも書く。略して、鶴勒という。付

法蔵第二十三祖（または第二十二祖）。月氏国のバラモン出身。二十二歳で出家し、三十余歳で摩奴羅尊者まぬら（付法蔵第二十二）に会って法の付嘱を受ける。中インドで弘教に励み、やがて師子尊者に付法して死去したと伝えられる。

師子 六世紀頃の中インドの人で付法蔵第二十四祖の最後の伝燈者。『付法蔵因縁伝』巻六によると、罽賓国けいひんで大いに仏事をなしたが国王弥羅掘（檀弥羅）は邪見の心が盛んで敬信せず、仏教の塔寺を壊し、衆僧を殺害し最後に利剣で師子尊者の頸を切った。『景德伝燈録』巻二にもある。

勝劣をすこしかかせ 竜樹の『大智度論』や天親の『法華論』などの文をさすものと思われる。すなわち『大智度論』には「般若波羅蜜は秘密の法にあらず、しかして法華経等の諸経は阿羅漢じゆけつさの受決作仏ぶつを説く。大菩薩よく受持し用いば、たとえば大薬師のよく毒をもつて薬となすがごとし」などとある。

本迹の十妙 天台が『法華玄義』に説き明かしたものであり、法華経が他経に比して勝れていることを本迹各十妙をあげて説いたもの。十妙とは妙法蓮華経の妙の一字に十種の不可思議な義がそなわっていること。迹門十妙と本門十妙があり、合して本迹十妙、本迹二十妙ともいう。迹門十妙は、諸法実相・開三顯一の妙理について十重に開いて妙を論じたもので、境・智・行・位・三法・感応・神通・説法・眷属・利益の十妙、本門十妙は、迹門十妙を前提において、如来寿量品第十六の開迹顯本による久遠の妙義を十重に開いたもので、本因・本果・本国土・本感応・本神通・本説法・本眷属・本涅槃・本寿命・本利益の十妙がある。

已今当の妙 妙楽の『法華玄義釈籤』巻六の文。已（爾前経）今（無量義経）当（涅槃経）の三説に超過した妙法、すなわち法華経のこと。

百界千如・一念三千　十界に十界を具して百界、百界がまたおのおの十如を具するゆえに千如となる。すなわち、十如是により十界互具を説いたものを百界千如といい、これは有情界にかざられる。これに対し一念三千は、五陰世間、衆生世間、国土世間の三世間をあわせ説き、有情界にかざらず非情界にもわたる。ここに草木成仏の原理がある。

化導の始終　天台大師の三種の教相の第二。『法華玄義』卷一上にある。法華經化城喻品第七の因縁説に基づき、化導の始終を明かすか明かさないかによって法華と爾前の勝劣を決したものの。『法華玄義』には「教相を二と為す。一には根性の融不融の相、二には化導の始終不始終の相、三には師弟の遠近不遠近の相なり」（大正三十三卷六八三頁）とある。化城喻品では、三千塵点劫の大通智勝仏の第十六王子（釈尊の過去世の姿）によって化導された衆生が、退転して惡道を流転したが、今インドに釈尊とともに生まれ化導されて成仏することが明かされた。化導がいつ始まり、いつ終わるかが示されている。ゆえに四十余年の爾前權教に比して法華經が勝れるのである。

師弟の遠近　天台大師の三種の教相の第三。『法華玄義』卷一上にある。法華經如来寿量品第十六の説意をもとに

仏と弟子との久遠の本地の説・不説によって法華と爾前の勝劣を決したものの。『法華玄義』卷一上には「教相を三と為す。一には根性の融不融の相、二には化導の始終不始終の相、三には師弟の遠近不遠近の相なり」（大正三十三卷六八三頁）とある。爾前經では釈尊は久遠の因寿・仏寿を隠し、この世に生まれて三十歳の時、菩提樹下で成道したという始成正覺を説き、弟子も各地から集まった二乗などであつて、師弟ともにその本地が明かされていない。それに対して法華經如来寿量品では「我実に成仏してより已來、無量無辺百千万億那由他劫なり」（妙法蓮華經並開結四九六頁）と久遠の本地を開顯し、弟子との結縁も同品に「是れより來、我常に此の娑婆世界に在つて説法教化す」（妙法蓮華經並開結四九八頁）と久遠以来多くの衆生を教化してきたと説いた。ゆえに法華經に

説かれる師弟は久遠以来の親近の關係にあるから遠近であつて勝れ、諸經に説かれる師弟は不遠近だから劣るのである。

講義

この章には、大集經の第二の五百歳（年）、ぜんじようけんご禪定堅固の時代を明かされている。

この期間の諸論師は、内外相對、大小相對を立て、外道を破し小乘經を破して權大乘經を弘通している。權大乘經を弘通する時代に、權實相對や本迹相對を立てる必要もないし、かえつて不用の論議をすることは、仏法弘通の妨さまたげとなる。内外相對のキリスト教の信者を破折するのに、權實相對や本迹相對の必要はないし、また、權實相對の念仏の行者を破折するのに、本迹相對や種脱相對の説明をする必要はない。そのような無用の説明はかえつて折伏の妨げになることは、われわれのつねに體驗するところである。すなわち仏法においては、所對によつて説く法門は異なつてくるのである。

しかし、この時代の大菩薩たちは權大乘經を弘通しながらも、内心には法華經の実義たる一念三千をきちんと持っていた。すなわち「開目抄上」に「一念三千の法門はただ但法華經の本門・寿量品の文の底に拾しづめたり、竜樹・天親・知つてしかも・いまだ・ひろ出いいたさず但我が天台智者のみこれをい懷だけり」（御書一八九六）と、また「法華經の種に依つて天親菩薩は種子無上を立てたり天台の一念三千これなり」（御書二一五六）等と仰せられているとおりである。

始には外道の家に入り……

この文以下に内外、大小、權実、本迹の四種の相對が明かされている。すなわち「次には小乗經をきわめ」が内外相對、「後には諸大乘經をもて諸小乗經をさんざんに破し失ひ」が大小相對、「諸大乘經と法華經の勝劣」が權実相對であり、「設い勝劣」以下が本迹相對である。

すなわち「本迹の十妙」は一句で本迹を顯し、「二乗作仏」は迹門、「久遠実成」は本門で、二句で本迹を顯し、「已今当の妙」は一句で本迹を顯す。それを説明すると、通常は、法華經迹門法師品第十の「已^{すで}に説き、今説き、当^{まさ}に説かん。而^{しか}も其の中に於いて、此の法華經、最も為^これ難信難解なり」(妙法蓮華經並開結三九〇ページ)の文によつて、法華經を已今当・最為^{さう}難信難解とするが、本迹を相對する時は迹門が易^い信^{しん}易^い解^げ・本門が難信難解となる。「觀心本尊抄」に「迹門並びに前四味・無量義經・涅槃經等の三説^{ことごと}は悉く随他意の易信易解・本門は三説の外の難信難解・随^{ずい}自^じ意^いなり」(御書二四九ページ)と仰せられているのは、この意である。ゆえに「已今当の妙」の中に本迹の二義が明白である。次に「百界千如」は迹門、「一念三千」は本門を顯す。同じく「觀心本尊抄」(御書二四八ページ)の迹門孰益三段および本門脱益三段に、この意が分明である。またある時には「迹門の一念三千」というが、これは与えて論じているのであり、奪つていえば「百界千如」にすぎないことは明白である。(以上、文段集二四八ページより)

第九章

像法の初めの五百年の弘教

正法一千年の後は月氏に仏法充滿せしかども或は小をもて大を破し或は權經をもつて実經を隱没し仏法さまざまに乱れしかば得道の人やふやくすくなく仏法につけて惡道に墮る者かずをしらず、正法一千年の後・像法に入つて一十五年と申せしに仏法東に流れて漢土に入りなき、像法の前五百年の内・始の一百余年が間は漢土の道士と月氏の仏法と諍論していまだ事さだまらず設い定まりたりしかども仏法を信ずる人の心いまだふかからず、而るに仏法の中に大小・權実・顯密をわか分つなれば聖教一同ならざる故・疑をこりてかへりて外典とともなう者もありぬべし、これらのをそれあるかのゆへに摩騰・竺蘭は自は知つて而も大小を分けず權実をいはずしてやみぬ、其の後・魏・晋・齊・宋・梁の五代が間・仏法の内に大小・權実・顯密をあらそひし程にいづれこそ道理ともきこえずして上み一人より下も万民にいたるまで不審ふしんすくなからず南三・北七・と申して仏法十流にわかれぬ所謂南には三時・四時・五時・北には五時・半滿・四宗・五宗・六宗、二宗の大乗・一音等・各各義を立てへんしゆう刃執水火なり、しかれども大綱は一同なり所謂一代聖教の中には華嚴經第一・涅槃經第二・法華經第三なり法華經は阿含・般若・淨名・思益等の經經に對すれば眞実なり了義經・正見なりしかりといへども涅槃經に對すれば無常教・不了義經・邪見の經等云云、漢より四百余年の末へ五百年に入つて陳隋二代に智顗と申す小僧一人あり後には天台智者大師と号したてまつる、南北の邪義をやぶりて一代聖教の中には法華經第一・涅槃經第二・華嚴經第三なり等云

云、此れ像法の前・五百歳・大集經の読誦多聞堅固どくじゆたもんけんこの時にあひあたり、

通解

——正法時代一千年を過ぎた後は、インドに仏法が充満していたけれども、あるいは小乗をもって大乘を破り、あるいは権經をもって実經を隱没おんもつし、仏法がさまざまに乱れたので、得道とくだうする者は漸く少なくなり、仏法によって惡道に墮おちる者が数知れず多くなった。

正法一千年過ぎて、像法時代に入つて十五年に、仏法が東に流伝して中国へ渡つた。像法の前半五百年の内、初めの百年の間は、中国の道士とインドの仏法との論争が激しく、いずれが真実とも決定しかねており、たとえ仏法が真実なりと決定しても、これを信ずる人の心はいまだ深くなかつた。こういう状態であつたから、仏法の中に大乘・小乗、権經・実經、さらに顕教・密教の區別があるなどと立て分けたならば、同じ仏教の中に相違があるので疑いを起こしてかえつて外道につく者が出てくるだろう。このような恐れがあつたからであらう、摩騰またう、竺蘭じくらんは自分では知っていたけれども、大小とか権実の立て分けは何もいわないでいた。

その後、魏ぎ、晋しん、齊せい、宋そう、梁りやうの五代の間、仏法の中で大小、権実、顕密をたがいに争つたところ、いずれが正当だともわからないで、上一人より下万民にいたるまで仏法に対して不審が多くなった。この間に南三北七といつて仏法が十派に分裂していった。

すなわち南には三時、四時、五時が生まれ、北には五時、半満、四宗、五宗、六宗、二宗の大乘、一音等がそれぞれの義を立て、たがいに辺執へんしゆして、その主張も水火のごとく相容あいひれないものであつた。しかれ

語訳

ども、これら十派の主張する大綱たいこうは同じであつた。すなわち一代聖教の中には華嚴經第一、涅槃經第二、法華經第三であり、法華經は阿含あこんや般若はんにやや淨名じようみやうや思益しやく等の經々に相對すれば眞実であり、了義經であり、正見であるけれども、涅槃經に對すれば無常教むじようきやうであり、不了義經であり、邪見の經であるというものであつた。

漢の時代より、四百年の末から五百年に入つて、陳、隋の二代に智顗ちぎという小僧が一人出現し、後には天台智者大師と号したてまつた。この智者大師は、南北十派の邪義を破つて、一代聖教の中には法華經第一、涅槃經第二、華嚴經第三と決定した。これは像法の前半五百年間のことであり、大集經の誦誦多聞堅固もんけんこの時に當たる時代であつた。

月氏がつし 中国、日本等で用いられたインド、中央アジアの古称。月支とも書く。本来は紀元前三世紀の後半まで敦煌とんこう、祁連間きれんで活躍していた部族の名である。この月氏が、前二世紀の前半に匈奴きんぐどに追われ、中央アジアのアル・ダリア北岸に落ちのびた。後、紀元前後に西北インドに侵入、ガンダーラ地方を中心にして大月氏国を築いた。

とくに二世紀のカニシカ王以後、大乘仏教が盛んとなり、この地を経てインドの仏教が中国へ伝えられたことから、中国ではインド全体を月氏と呼んでいた。

像法に入つて一十五年 釈尊滅後一千十五年を経て、後漢の第二代明帝の永平十年（六七年）丁卯ひのとうの年に仏教が中

国へ渡った。（「開目抄下」御書二二六頁）

漢土の道士 道教を修めてその道に練達した修行者のこと。老子、莊子の虚無思想を中心として、中国でつねに仏教と対立抗争してきた一種の宗教の徒。

顕密 顕教と密教のこと。弘法が自宗の優位性を示すため『弁顕密二教論』等で立てた判教の一つ。すなわち応身の釈尊が衆生の機根に応じて顕わに説いた随他意の法門である四諦、十二因縁、六度万行の法門をさして顕教といい、真言三部経で法身の大日如来が自受法樂のため示した三密（身密、語密、意密）の法門を密教とし、顕教は密教に劣るとする。

摩騰・竺蘭 摩騰は摩騰迦ともいい迦葉摩騰のこと。梵名カーシヤ・パマータンガ（Kāśyapamātāṅga）の音写。中国・後漢代の仏教伝道者。中インドの人で、竺法蘭とともに中国に初めて仏教を伝えた。『高僧伝』巻一（大正五十卷三三三頁）等によると、よく大小乗の經典に通じていた。後漢の明帝の使者蔡愔の請いに応じて永平十年（六七年）中国に渡り、洛陽城外に建立された白馬寺で四十二章経を翻訳したという。

竺蘭は竺法蘭ともいい、後漢時代に迦葉摩騰とともに初めて中国に仏教を伝えた僧。『高僧伝』巻一（大正五十卷三三三頁）等によると、中インドの人で、経論数万章を誦することができたという。中国に来てすぐに言葉を覚え、白馬寺で十地断結経、仏本生経、法海蔵経、仏本行経、四十二章経を翻訳した。六十余歳で洛陽で寂した。

魏・晋・齊・宋・梁の五代 中国の三国時代（魏・晋）南北朝時代（齊・宋・梁）の国の名。後漢の献帝の建安十八年に曹操が魏王となつてから、梁の敬帝の太平二年に梁が滅亡するまでの約三百四十年間をいう。

後漢 西紀六七年

仏教が中国に渡る

五代				
魏	西紀二一三年	曹操が魏王となる		
晋	西紀二六五年	魏亡び晋の武帝が代わる		
宋	西紀四二〇年	晋亡び宋の武帝が代わる		
齊	西紀四七九年	宋亡び齊の高帝が代わる		
梁	西紀五〇二年	齊亡び梁の武帝が代わる		
陳	西紀五五七年	梁亡び陳の武帝が代わる		
隋	西紀五九四年	天台大師、『摩訶止観』を説く		

南三・北七 中国・南北朝時代に盛んに行われた仏教の教相判釈を立てた種々の学派のこと。揚子江南地（江南）の三師と北地（江北）の七師のこと。『法華玄義』卷十上によると南三とは①虎丘山の岌師②宗愛法師③定林寺の僧柔・慧次と道場寺の慧観。北七とは①地論師②菩提流支③光統（慧光）④某師、更には護身寺の自軌⑤某師、更には耆闍寺の安凛⑥北地禪師（二種大乘）⑦北地禪師（二音教）。そのうち南三はともに頓教、漸教、不定教の三種の教相を立て、華嚴経を頓教として最勝の経とした。北七は南三と同じく華嚴経第一として涅槃経第二、法華経第三と立てる。ただ各の分け方が違うだけである。

華嚴経 正しくは大方広仏華嚴経という。漢訳に三種ある。①六十華嚴（六十卷）。東晋代、仏駄跋陀羅の訳。旧訳華嚴経という。②八十華嚴（八十卷）。唐代の実叉難陀の訳。新訳華嚴経という。③四十華嚴（四十卷）。唐代の般若訳。これは華嚴経末の入法界品の別訳である。天台大師の五時教判によれば、釈尊が寂滅道場菩提樹下で正覺を成じた時、三七日（二十一日）間、別して利根の大菩薩のために説かれた教え。旧訳の内容は、盧遮那仏が利根の菩薩のために一切万有が互いに縁となり作用しあってあらわれ起こる法界無尽縁起、また方法は自己の一

心に由来するという唯心法界の理を説き、菩薩の修行段階である五十二位とその功德が示されている。

涅槃經 釈尊の入涅槃の様子とその時に説かれた教えを記した経。大・小乗の二經がある。大乘では、中国・北凉代の曇無讖どんむしん訳、大般涅槃經四十卷（北本）、それを修訂した中国・劉宋代りゆうそうの慧観えかん、慧嚴えげん、謝靈運しゃれいうん訳、大般涅槃經三十六卷（南本）等四種がある。小乗では、中国・東晋代の法顕ほつけん訳、大般涅槃經三卷等、五種がある。大乘の涅槃經にはおもに仏身の常住、涅槃の四徳である常楽我淨を説き、一切衆生悉有仏性を明かして、善根を断じた一闡提いつせんたいも成仏すると説かれている。また小乗の涅槃經には、釈尊の入涅槃から舍利しゃりの分配までの事跡が記されている。

阿含 阿含とは梵語のアーガマ（*āgama*）の音写で、教、伝、法帰等と訳す。伝承された教えの意。本来は、釈尊の言行、説法を伝え集成した経蔵全体を総称したが、大乘仏教が興ってからには小乗經典の意味に限って使われるようになった。北方系仏教では四阿含そういちあこんぎようといって、增一阿含經ちゆういちあこんぎよう、中阿含經ちゆうあこんぎよう、長阿含經じやうあこんぎよう、雜阿含經ぞうあこんぎようの四つに分類されている。長阿含經卷一に「如来の大智は……群生ぐんじやうを愍あわれむが故に、世に在りて成道す。四真諦ししんだいを以って、声聞の為に説く」（大正一卷一〇頁）とあるように、声聞を正意として説かれた経である。

般若 はんにかや 般若波羅蜜（仏の智慧によって悟りの境地に達すること）の深理を説いた經典の総称。漢訳には唐代の玄奘訳の「大般若經」六百卷から二百六十二字の「般若心經」まで多数ある。釈尊が方等部説法の後、十四年間（あるいは二十二年間、または三十年間）にわたって説いた経とされる。内容は、般若の理を説き、大小二乗の無差別を示している。

淨名 じやうみやう 維摩經ゆいまきやうのこと。梵本は失われ、『大乘集菩薩学論』の中に引用文として断片的に残っているだけである。漢訳は鳩摩羅什くまわじゆう訳、維摩詰所説經三卷など三種がある。維摩詰は毘舍離の富豪で、大乘仏教の奥義に通達してい

た在家の菩薩。内容は病床にあった維摩詰と、見舞いに訪問した文殊師利菩薩をはじめとする仏弟子達との問答形式で、教理が展開されている。大乘の不可思議の妙理によって小乗経を破し、灰身滅智の空寂涅槃に執著する二乗を弾呵し、大乘に包摂することを趣旨としている。

思益 しやく 思益梵天所問経の略称で鳩摩羅什訳。十八品から成る。思益梵天に対して菩薩行や四諦、如来の五力が説かれ、網名菩薩に対して凡夫と賢聖の行に差別がないことが明かされ、思益梵天、網名菩薩に授記がなされている。

了義経・正見 りようぎきよう しょうけん 了義経とは仏法の道理が直接、完全、顕了に説き尽くされた經典のこと。不了義経（方便の教え）に対する語。正見とは妄見、邪見を離れて、正しく真理を見究めること。

漢より四百余年の末へ五百年に入つて陳隋二代 天台大師が活躍した年代。仏法が中国に渡ったのが後漢の永平十年（六七年）であり、天台大師は梁の武帝の大同四年（五三八年）から陳の時代を経て隋の文帝の開皇十七年（五九七年）に滅しているので陳隋二代にわたって活躍したことになる。

智顗 ちぎ（五三八年―五九七年）。天台智者大師と号し、中国の天台宗の祖であり、理の一念三千を説いた像法時代の正師。前出、第六章の「天台」の項（二五三頁）参照。

講義

この章は、像法の初めの五百年の弘教を明かされている。この五百年間には、仏教がインドから中国へ渡り、多くの名僧が經典を求めて中国からインドへ旅行し、またインドから中国へ經典を持って渡つ

ては、盛んに翻訳をした。これはまた当時の国王の援護をえて、国家的な事業として行われたものが多い。

大小を分けず権実をいはずしてやみぬ

インドから中国へ仏教の渡った当時は、すでにインドでは小乗を破して大乘を立て、実経たる法華経を根本にした竜樹、天親等の弘教もあったが、新しく中国へ行ってひろめる場合は、大小、権実を分けなかった。摩騰^{またう}、竺蘭^{じくらん}は、みずからは知っていたが、いかなかったのである。次いで仏教は中国で栄えるようになり、隋、唐時代になると、日本から盛んに中国大陸へ留学生が渡っては、仏教を学び、日本へ招来してきた。

いまは創価学会の発展によって、学会員は世界各国と交流し、また世界各国のメンバーは日本へ行き、仏法の本流に触れることを、最高の希望とし目的として日夜励んでいる。じつに世界広布が眼前に実現されようとしている姿である。

さて海外へ行って弘法する場合には、いまは末法であるとはいえ、授受^{しやうじゆ}を前^{さき}として行ずることは、前章でも述べた。この章で、摩騰、竺蘭が大小・権実を知ってはいるが、いかなかったということもその参考になるであろう。後の章に出てくるが、日本へ仏教が渡った時にも同じようなことがあった。鑑真^{かんじん}は日本へ法華経を持ってはきたが、小乗の戒壇を建て小乗の授戒で一生を終わったようなことも、その

一例である。

南三・北七・と申して仏法十流にわかれぬ

中国において仏教が十派にも分裂したのは、教判の相違によるのである。釈尊一代仏教の説かれた順序や、内容別の分類をしてみると、そこにいろいろの異義が生じてくる。

南の三派はいずれも頓とん、漸ぜん、不定の三教を立てる。頓は華嚴、漸は四阿含から涅槃まで、不定は勝鬘まん、金光明等である。このうち漸の内容をさらに分類して三時教は有相うそう（阿含十二年）、無相むそう（十二年後法華まで）、常住教（涅槃）と立てる。四時教は、無相と常住教の間に法華を立てて同帰教とする。五時教は、無相教から淨名じようみよう、思益等を立てて抑揚教としている。

北の七派は、一に五時教とは、南の三時のほかに同帰教と人天教を立てる。二に半満二教とは、初しよ転法輪より十二年までを半字教、十二年以後の大乗を満字教とし、小乗、大乗を分別したものである。

三に四宗とは、因縁宗（毘曇）、仮名宗（成実）、誑相宗（大品等）、常宗（涅槃、華嚴等）である。四に五宗とは、四宗のほかに法界宗（華嚴經）を立てる。五に六宗とは、四宗のほかに真宗（法華經）、四宗（大集經）を立てる。六に二宗（種）の大乗とは、大乗を有相（大品、華嚴、瓔珞等）と、無相（楞伽、思益等）に分ける。七に一音教とは、但ただ一仏乘を立てる。

以上のような論争の後に出現した天台大師は、これらすべての教判は仏意に反すると破折し、正しく

五時八教を立てた。五時とは華嚴けごん、阿含あごん、方等ほうどう、般若はんにや、法華涅槃であり、八教とは化儀の四教たる頓、漸、秘密、不定と、化法の四教たる藏、通、別、円である。

第十章

像法の後の五百年の弘教

像法の後五百歳は唐の始・太宗皇帝の御宇に玄奘三蔵・月支に入つて十九年が間、百三十箇国の
寺塔を見聞して多くの論師に値いたてまつりて八万聖教・十二部經の淵底を習いきわめしに其の中
に二宗あり所謂法相宗・三論宗なり、此の二宗の中に法相大乘は遠くは弥勒・無著近くは戒賢論師
に伝えて漢土にかへりて太宗皇帝にさづけさせ給う、此の宗の心は仏教は機に随うべし一乗の機の
ためには三乘方便・一乗眞実なり所謂法華經等なり、三乗の機のためには三乘眞実・一乗方便・
所謂深密經・勝鬘經等此れなり、天台智者等は此の旨を弁えず等云云、而も太宗は賢王なり當時名
を一天にひびかすのみならず三皇にもこえ五帝にも勝れたるよし四海にひびき漢土を手くにぎるの
みならず高昌・高麗等の一千八百余国をなびかし内外を極めたる王ときこへし賢王の第一の御帰依
の僧なり、天台宗の学者の中にも頭をさしいだす人一人もなし、而れば法華經の実義すでに一国に
隠没しぬ、同じき太宗の太子高宗・高宗の繼母則天皇后の御宇に法蔵法師といふ者あり法相宗に天
台宗のをそわるところを見て前に天台の御時せめられし華嚴經を取出して一代の中には華嚴第
一・法華第二・涅槃第三と立てけり、太宗第四代・玄宗皇帝の御宇・開元四年・同八年に西天印度
より善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵・大日經・金剛頂經・蘇悉地經を持て渡り眞言宗を立つ、
此の宗の立義に云く教に二種あり一には釈迦の顕教・所謂華嚴・法華等、二には大日の密教・所謂
大日經等なり、法華經は顕教の第一なり此の經は大日の密教に対すれば極理は少し同じけれども事

相の印契と真言とはたえてみへず三密相応せざれば不了義經等云云、已上法相・華嚴・真言の三宗一同に天台法華宗をやぶれども天台大師程の智人・法華宗の中になかりけるかの間内内はゆはれなき由は存じけれども天台のごとく公場にして論ぜられざりければ上国王大臣・下一切の人民にいたるまで皆仏法に迷いて衆生の得道みなとどまりけり、此等は像法の後の五百年の前二百余年が内なり、

通解

——像法時代の後半の五百年は、中国では唐の初めであり、太宗皇帝の時であつた。このとき玄奘三蔵はインドへ入り、十九年のあいだ百三十カ国の寺塔を見聞して多くの論師に会い、八万聖教、十二部經の奥底を習いきわめたが、そのなかに二宗があつた。いわゆる法相宗と三論宗である。この二宗のなかで大乘法相宗というのは、遠くは弥勒菩薩の法を無著菩薩がひろめたといわれ、当時の戒賢論師まで伝えられていた。玄奘は戒賢論師からこの法相宗を習い伝えて中国へ帰り、太宗皇帝に授けたのである。

この宗の心は、仏教は衆生の機根に従うべきであるという。ゆえに一乗の機根の衆生には、三乗の教法は方便であつて、一乗の教法が真実である。これは法華經等である。これとは逆に三乗の機根の衆生のためには、三乗の教法が真実であり、一乗の教法は方便である。これは深密經、勝鬘經等である。そして天台智者大師はこの旨をわきまえていなかったと主張した。

しかも、太宗皇帝は賢王である。当時はその名を天下にひびかすのみならず、古代の伝説上の賢王である三皇五帝よりも勝れていると四海に鳴り響いていた。中国全土を平定したのみか、高昌、高麗等の一千

八百余国をなびかし、内外典を究めたといわれていた賢王であった。玄奘は実にこの賢王の第一の帰依を受けていたのである。ゆえに、天台宗の学者の中にも頭をさし出す人は一人もなく、法華經の実義は、すでに一国に隠没おんもつしてしまった。

同じく、この太宗の太子の高宗こうそうおよび高宗の継母たる則天皇后そくてんこうこうの時代に、法蔵法師という者があつた。法相宗に天台宗が襲われているのを見て、前に天台の時に破られた華嚴經をとり出し、一代教の中で華嚴第一、法華第二、涅槃第三と立てた。また太宗の第四代玄宗皇帝げんそうの御代、開元四年かいげん、同八年に、西のインドから善無畏三蔵ぜんむい、金剛智三蔵こんごうち、不空三蔵が、大日經、金剛頂經、蘇悉地經を持ってきて真言宗を立てた。この宗の立義によれば、教に二種類あつて一には釈尊の顕教けんきょうであり、いわゆる華嚴や法華である。二には大日如来の密教みつぎょうで、いわゆる大日經等である。法華經は顕教の中では第一であるが、大日の密教に對すれば、極理は少し同じであるけれども、事相の印契いんけいと真言とは法華經にまったくない。ゆえに法華は身・口・意の三密が相應そうおうしないから不了義經ふりようぎである。

以上のように、法相、華嚴、真言の三宗は、一同に天台法華宗を破ったけれども、天台大師ほどの智人が法華宗の中にはいなかったたので内々ではこれらの邪義はいわれのないものだを知っていたが、天台のようにならば論じなかつたので、上は国王大臣より下はいっさいの人民にいたるまで、みな仏法に迷ひ、衆生の得道は、みなとどまつてしまった。これらのことは、像法の後の五百年の初めの二百年ごろのことであつた。

太宗皇帝^{たいそう}（五九八年—六四九年）。中国・唐王朝の第二代皇帝。太宗のこと。姓名は李世民。高祖李淵の次子。すぐれた資質をもち、軍功をあげて人望を集めた。そのため兄弟にねたまれ身の危険を感じて兄弟を殺害し、父の讓位を受けて即位した。その治世は「貞観の治^{じやうかん}」と呼ばれ、空前の繁栄を現出した。

玄奘三蔵^{げんじやう}（六〇二年—六六四年）。中国・唐代の僧。中国法相宗の開祖。洛州緱氏^{ろうし}県に生まれる。姓は陳氏。俗名は禪^き。十三歳で出家。律部^{りつぶ}、成実^{じやうじつ}、俱舎論^{くしやろん}等を学び、後にインド各地を巡り、仏像、經典等を持ち帰る。その後、般若經六百卷をはじめ七十五部千三百三十五卷の經典を訳したといわれる。十七年にわたる旅行を綴った書が『大唐西域記』である。

月支に入つて十九年が間。日寛上人は「玄奘三蔵^{げんじやう}は貞観三年^{じやうかん}に発足^{はつそく}し、同七年に中印度に到り、同十九年の正月に帰着なり。故に十七年を経^ふるなり。故に開目抄上二十六に『十七年』というなり。故に今応^{まさ}に『十七年』に作るべし云云」（文段集二四九頁）と述べられている。

百三十箇国 『西域記』十二巻に出ている。各巻の記録をあわせると、百二十八力国となる。

八万聖教 釈尊の説いた一切の經教のこと。八万は八万四千の略で、實際の数ではなく、大数、多数の意。

十二部經 十二部、十二分經ともいう。一切經を叙述形式、内容から十二種類に分類したもの。①修多羅^{しゆたら}。スート

ラ (Sūtra) の音写。契經。經典の中で法義を説いた長行 (散文) ②祇夜^{ぎや}。ゲーヤ (Geyā) の音写。応頌^{おうじゆ}または

重頌^{じゆうじゆ}。修多羅に應じて重ねてその義を述べた頌③伽陀^{かだ}。ガーター (Gāthā) の音写。諷頌^{ふうじゆ}または孤起頌^{こきじゆ}。長行に

よらずに偈頌で説いたもの④尼陀那^{にだな}。ニダーナ (Nidāna) の音写。因縁。經中の説法教化の因縁を説いた部分

⑤伊帝目多伽。イティヴリッティカ (Itivṛitaka) の音写。本事または如是語。仏弟子の過去世の因縁を説いた経文⑥闍多伽。ジャータカ (Jātaka) の音写。本生。仏が昔、菩薩であった時の諸行や因縁を説いた経文⑦阿浮達磨。アドゥブタダルマ (Adbhuta-dharma) の音写。未曾有法。新訳では阿毘達磨という。仏の神通力を説いた経文⑧阿波陀那。アバダーナ (Avadāna) の音写。譬喩。譬喩を借りて説いたもの⑨優婆提舍。ウパデーシャ (Upadeśa) の音写。論議。修多羅の解説注解。法理を論議問答した経文⑩優陀那。ウダーナ (Udāna) の音写。自説または無問答説。衆の問を待たずに仏が自ら説いた経文⑪毘仏略。ヴァイプルヤ (Vaipulya) の音写。方広または方等。広大な理義を説いたもの⑫和伽羅。ヴァイヤーカラナ (Vyākaraṇa) の音写。授記。弟子に対して成仏の記別を授けること。

淵底 物事の奥深いところ。道理の深い奥底などをさす。法門の奥義をいう。

法相宗 解深密経、『瑜伽師地論』『成唯識論』などの六経十一論を所依とする宗派。中国・唐代に玄奘がインドから瑜伽唯識の学問を伝え、窺基(慈恩)によって大成された。日本には道昭が白雉四年(六五三年)に入唐し、本宗を玄奘から学び、帰朝して元興寺で弘通した。教義は、五位百法を立てて一切諸法の性相を分別して体系化し、一切法は衆生の心中の根本識である阿頼耶識に含蔵する種子から転変したものであるという唯心論を説く。また釈尊一代の教説を有・空・中道の三時教に立て分け、法相宗を第三中道教であるとした。更に五性各別を説き、三乘真実・一乘方便の説を立てている。法相宗の日本伝来については四伝ある。道昭を初伝とし、智通、智達等が斉明天皇四年(六五八年)に入唐して玄奘から学んで伝えたのを第二伝、智鳳、智鸞、智雄等が大宝三年(七〇三年)に入唐し、智周に学んで伝えたのを第三伝、玄昉が入唐し天平七年(七三五年)に帰国して興福寺に住して弘めたのを第四伝としている。

三論宗 竜樹りゅうじゆの『中論』『十二門論』と提婆だいば菩薩の『百論』の三つの論を所依とする宗派。中国十三宗の一つ。日

本八宗、南都六宗の一つ。鳩摩羅什くまらじゆが三論を漢訳して以来、羅什の弟子達に受け継がれ、隋代に嘉祥寺かじやうじの吉蔵きちざうによつて大成された。日本には推古天皇三十三年（六二五年）一月一日、吉蔵の弟子の高麗僧、惠灌によつて伝えられたのを初伝とする。奈良時代には南都六宗の一派として興隆したが、以後、次第に衰え、聖宝が東大寺に東南院流を起こして命脈を保つたが、他は法相宗に吸収された。

無著 むじやく 生没年不明。梵名でアサンガ (Asaṅga) とし、無障礙むじやうげとも訳す。四世紀ごろ、北インド健駄羅国けんだらのバラモンバラモンの家に生まれた。最初は化地部けじの僧として出家したが、空の教えに興味をもち、更に弥勒に大乘の空觀を教えられてから、大乘に帰して大乘の諸教義を研究し、瑜伽ゆが、唯識ゆいしきの教えを弘めた。小乗の論師であつた弟の世親（天親）を教化して大乘に帰依させたことは有名である。著書に『攝大乘論』三卷、『金剛般若論』二卷、『顯揚聖教論』二十卷、『順中論』二卷などがある。

戒賢論師 七世紀中頃のインドの瑜伽行派ゆがぎやうの学僧。梵名はシラバードラ (Śīlabhadra) とし、音写して尸羅跋陀羅しらばつだらという。東インド三摩呬吒国さんまたんたの王族の出身。摩訶陀国まかだの那爛陀寺院ならんたで護法ごほうに師事し、有相唯識論を学び、學問に優すぐれ、名声が高かつた。『大唐西域記』卷八によると、玄奘げんじやうがインドを訪れた時、那爛陀寺の院長をしていたという。玄奘は戒賢論師から有相唯識論を学び、中国に帰つて法相宗を開いた。

三乘方便・一乘真實 さんじやうほうべん いちじやうしんじつ 三乗の教法は方便説であり、一仏乗の教法が真實義であること。『法華義疏』卷五に説かれている。おもに天台宗、華嚴宗で法相宗の三乘真實・一乘方便の説を破したもの。三乘（声聞・緣覺・菩薩）に対して各別に悟りの道を説いた解深密經等の三乗教は仏の方便説であり、一仏乗、即ち一切衆生皆成仏道を説いた法華經等の一乗教が仏の真實義であることをいう。

三乘眞実・一乘方便　三乗の教法が眞実であり、一仏乗の教法は方便であるとする法相宗の教義。三乗（声聞・縁覺・菩薩）に対して各別に悟りの道を説いた解深密經等の三乗教は、法華經等の一乗教よりも勝れているとする説。これは解深密經等によって立てられた五性各別（衆生が本来そなえている性質に五種あるとして成仏、不成仏を定めたもの）の教義に基づく。三乗教は、阿羅漢果、辟支仏果、仏果をそれぞれ開くべき種子をもった定性声聞、定性縁覺、定性菩薩を確実に果に至らしめるので眞実であるとし、それに対して、一乗教は、果の定まらない不定性の者を励まして大乘に入らせる方便にすぎないとする。

深密經　解深密經のこと。五卷。漢訳には唐代の玄奘訳解深密經と北魏代の菩提流支訳深密解脫經、その他二種の抄訳がある。他受用身の盧舎那仏が十八圓満の華藏世界において、弥勒、文殊等の菩薩を対象として説法したもので、内容は、己心の外にあると思われる諸現象は、ただ阿頼耶識によって、認識の対象に似たすがたが心に映じ出されたものにすぎないという唯識の義、および諸法の如実の性相を明かし、実践修行の方法、行位、証果、化他の力用を説いている。法相宗の依經である。

勝鬘經　一卷。中国・劉宋代の求那跋陀羅訳。勝鬘師子吼一乘大方便方廣經の略称。舍衛国の波斯匿王の女勝鬘夫人が仏の威神力を受けて説いたとされる。小乗を破って一乗眞実、如来藏法身の義を明かしている。維摩經とともに在家仏教の經典として重視されている。

三皇　中国上古の伝説上の帝王。理想的帝王とされるが、三皇は天地人の三才から導かれたとも考えられる。具体的に誰をさすかは異説が多いが、①天皇・地皇・泰皇（史記・秦始皇本紀）または天皇・地皇・人皇（河図）とする説②伏羲（庖羲）・神農・燧人（それぞれ漁獵・農耕・火食の發明者）（尚書大伝）または燧人の代わりに祝融（火をつかさどる神官）（白虎通）または女媧（蛇身人首の女神）（春秋運斗樞）をあげる説③伏羲・神農・黃帝（尚書・孔安國序）

をあげる説、などがある。これらは人類の文明の起源を説いた伝説を擬人化したものと考えられる。

五帝 中国上古の伝説上の帝王、理想的帝王とされる。五帝は五行から導かれたとも考えられる。五帝については

①太皞（伏羲）・炎帝（神農）・黄帝・少皞・顓頊（礼記・月令）②黄帝・顓頊・帝嚳・唐尧・虞舜（史記・五帝本紀）などの説がある。これらは中国民族の国家起源の王を説いたものと考えられている。

高昌 中国の東トルキスタン（新疆ウイグル自治区）のトゥルファン盆地に五―七世紀に栄えたオアシス国家およびその都城の名。古くから中央アジア有数の交通の要地で、中国諸王朝の西方進出のため大きな意味を持っていた。紀元前一世紀、前漢が匈奴を退け、高昌壁（現在のカラ・ホージョ遺跡）を築いてから漢人が定住するようになった。北涼の沮渠氏が北魏に滅ぼされ、この地に亡命して四五〇年に高昌王国を立てた。その後、閼氏、張氏、馬氏、麴氏が王位を継承し、六四〇年、唐に滅ぼされた。支配者は漢人であったが、国民はイラン系が多く、風俗もイラン的であった。この地からは仏教寺院の発掘にともない、仏書、仏像、注釈書が多数発見されており、西域諸国中最も仏教が盛んであった。

高麗 古代、朝鮮半島にあった国。日本では高句麗（一六六八年）をさす。

高宗（六二八年―六八三年）。中国・唐代第三代皇帝。在位は貞観二十三年（六四九年）―弘道元年（六八三年）。太宗の第九子。姓名は李治。伯父の長孫無忌に擁立されて皇太子となり、太宗の死後即位。治世の初期は平和であったが、武氏（則天武后）を皇后に迎えてからは武氏の専横に圧せられ、最後は実権を武氏に奪われて失意のうちに没した。

則天皇后（六二三年―七〇五年）。則天武后のこと。中国・唐王朝第二代皇帝太宗の才人（歌舞をもって宮仕えした女官）として後宮に入ったが、太宗死後、尼となった。第三代皇帝高宗に召されて再び後宮に入り、策略を弄して

皇后となった。高宗没後、中宗^{ちゆうそう}が第四代皇帝となったが、これを廃して睿宗^{えいそう}を立て、天授元年（六九〇年）武后自ら帝位について国号を周と改めた。

法蔵法師（六四三年―七二二年）。中国・唐代の華嚴宗第三祖。華嚴教学の大成者。姓は康氏。字は賢首。西域康居の人。賢首大師、国一法師、康蔵大師、華嚴和尚等と呼ばれる。在俗のまま、十七歳の時に太白山に入って経論を学び、後に洛陽雲華寺の智儼^{ちげん}に師事して華嚴の教理に通達した。咸亨元年（六七〇年）勅命によって出家、太原寺に住んだ。証聖元年（六九五年）実叉難陀^{じつしやなんだ}が華嚴経八十巻を翻訳するのを助けて華嚴教学を講説し、長安、洛陽等に華嚴寺を建立、華嚴宗を流布して大薦福寺で没した。

玄宗皇帝^{げんそう}（六八五年―七六二年）。中国・唐朝第六代皇帝。在位は先天元年（七二二年）から天宝十五年（七五六年）。第五代睿宗皇帝の第三子。姓名は李隆基^{りりゆうき}。諡^{おくりな}が玄宗皇帝。第四代中宗の皇后である韋后^{いこう}の禍を平定し、睿宗を立て、自らは皇太子となった。即位後は宋璟^{そうけい}、姚崇^{ようそう}を用いて善政をしき、「開元の治」と呼ばれる安定した世を現出させた。しかし、晩年は楊貴妃^{ようきひ}を寵愛^{ちゆうあい}し、政治を怠り、奸臣を用いたために政情が混乱し、ついには安史の乱^{ぼつぽつ}の勃発を招いた。その後は讓位した肅宗^{しゆくそう}との関係も思わしくなく、不遇のうちに世を去った。開元四年（七一六年）善無畏三蔵が来唐して以来、真言宗に帰依したといわれる。

善無畏三蔵^{ぜんむゐ}（六三七年―七三五年）。中国・唐代の真言密教の僧。『宋高僧伝』によれば、インド烏荼国の王子として生まれ、十三歳で王位についたが兄の妬み^{ねた}をかい、位を讓つて出家した。摩訶陀国^{なろんだ}の那爛陀寺で、達摩掬多^{だつまきくた}に従い密教を学ぶ。開元四年（七一六年）中国に渡り、玄宗皇帝^{げんそう}に国師として迎えられた。大日経七巻、蘇婆呼童子經三巻^{そほこどうじきやう}、蘇悉地羯羅經三巻^{そしつじか}などを翻訳し、また『大日経疏』二十巻を編纂、中国に初めて密教を伝えた。とくに大日経疏に天台大師の一念三千の法門を盗み入れ理同事勝の義を立てている。なお烏荼国は烏仗那国

の訛なまりとされる。

金剛智三蔵 こんどうち（六七一年―七四二年）。中国・唐代の真言密教の僧。中インドの王族（一説に南インドのバラモン）に生まれ、十歳の時、那爛陀寺ならんだじで出家。寂靜智に師事し、二十歳で具足戒を受ける。三十一歳から七年間、竜智りゅうちのもとで金剛頂經など真言の諸經論を修學した。開元八年（七二〇年）唐の洛陽らくように入り、玄宗皇帝に迎えられ慈恩寺に住し、その後、長安の薦福寺せんぷくじに移った。金剛頂瑜伽中略こんどうちようゆがちゆうりやくしゆつねんじゆきよう出念誦經四卷など多くの密教の諸經論を訳出。弟子に一行、不空などがある。

不空三蔵 ふくく（七〇五年―七七四年）。中国・唐代の真言密教の僧。不空金剛のこと。北インドの生まれで幼少のところ中国に渡り、十五歳の時、金剛智に従って出家した。後にスリランカに行き、天宝五年（七四六年）唐に帰る。玄宗皇帝の帰依を受け、淨影寺、開元寺、大興寺等に住して密教を弘めた。金剛頂經三卷、一字頂輪王經五卷など百十部百四十三卷の經を訳し、羅什らじしゆ、玄奘げんじよう、真諦しんだいとともに中国の四大翻訳家の一人に数えられている。

大日經 だいびるしやな 大毘盧遮那成仏神變加持經の略。中国・唐代の善無畏三蔵訳。七卷。一切智を体得して仏果を成就するための菩薩心、大悲、種々の行法などが説かれ、胎藏界曼荼羅たいざうかいまんだらが示されている。金剛頂經、蘇悉地經と合わせて大日の三部經、また三部秘經といわれ、真言宗の依經となっている。

金剛頂經 詳しくは、金剛頂一切如來真実攝大乘現証大教王經こんどうちよういっさいにょらいしんじつしやうだいじんしやうだいぎやうおうちやうという。三卷。唐の不空訳。真言三部經の一つ。密教の根本聖典。金剛界曼荼羅とその供養法等を説く。

蘇悉地經 そしつじか 蘇悉地羯羅經の略称。三卷。唐の善無畏訳。真言三部經の一つ。持誦、灌頂などが明かされ、妙果成就の法が説かれている。

密教 弘法の『弁顯密二教論』卷上に「他受用応化身の隨機の説、これを顯と謂い、自受用法性仏の内証智の境を

説きたまう、これを秘と名づく」(大正七十七卷三七五頁)とあり、応身の釈迦仏が説いた法門を顕教というのに対応して、真言三部経で法身仏である大日如来が自受法樂のために示した三密(身密・語密・意密)の法門は表面からは知り難い秘密の教えであるから密教であるとする。

事相 じそう 真言密教では威儀、作法等の実際の修法を事相といい、これに対して教義面の解釈を教相という。

印契 仏の悟りや誓願などを外形として標示すること。またその標示をいう。「いんかい」「いんけい」「いんげい」とも読み、印相、密印とも単に印ともいう。契はちぎり、約束の意で、印を結ぶ相に偽りのないことを示す。密教では三密のうちの身密として重視する。仏の悟りや徳をあらわすために指先でつくる特別な形、あるいはそれらを表示する刀剣などの器具をさす。

真言 しんごん 真言密教という絶対真実のことば。仏の悟りや誓願を示す。密教における三密のうちの語密。漢訳では呪、神呪、密呪、密語という。また陀羅尼だらにともいい、用語はサンスクリットまたは俗語で、内容は本尊の梵号や種子を示す一字のものや教理を説いたものや、字義不詳の句を連ねたものなど種々である。日本では翻訳せずに原語を音写して用い、その解し難いことから秘密と称す。

三密相応 さんみつそうおう 衆生と仏の三密が相和あい合すること。三密加持かじともいう。三密は身密、語密(口密ともいう)、意密の三つで、これに仏の三密と衆生の三密とがある。相応は相合し応ずること。すなわち三密相応とは真言密教で説く成仏の方式で、手に印を結び(身密)口に真言を唱え(語密)意に本尊を念ずる(意密)ことによって、衆生の三密と仏の三密が相応融和して一体となり、即身成仏できると説くもの。

像法の後の五百年は多造塔寺堅固の時代である。中国では唐の太宗皇帝の時代に玄奘が法相宗をひろめ、次の高宗と則天皇后の時代に法蔵が華嚴宗をひろめ、玄宗皇帝の時代には善無畏等がインドからきて真言宗をひろめ、いずれも法華經の真義を批判し邪義を弘通したので、仏教で得道する者は一人もなくなつた。五時八教を立て、法華最第一と立てた天台の正義も、たちまちにして、これらの邪義に押し流されてしまったことは、まことに惜しむべきことである。

其の中に二宗あり所謂法相宗・三論宗なり等

インドの大乗教に二つの系統がある。

一には、仏滅後七百年ごろに出た竜樹が大乗空宗をひろめ、中観宗として南方に唱導し、これが中国に伝わって三論宗となつた。竜樹が空觀を説いた代表的なものが『中論』四卷、『十二門論』一卷等であり、竜樹のこの教学を迦那提婆が継承し、その代表的著述として『百論』二卷がある。

二には、仏滅後九百年ごろに出た無著、世親の兄弟が大乗有宗としての瑜伽宗を北インドに唱導した。これが中国へ伝来して法相宗となつた。無著の代表的著書には『攝大乘論』三卷、『瑜伽師地論』百卷等がある。日蓮大聖人は「聖密房御書」に「法相宗は唯心有境・大乗宗・無量の宗ありとも所詮は唯心有境とだにいはば但一宗なり・三論宗は唯心無境・無量の宗ありとも所詮・唯心無境ならば但一宗

なり」(御書八九九^{ページ})と仰せである。

本抄の後の文に、奈良七大寺の大徳が伝教大師に出した^{きふくじよう}帰伏状を載せられているが、その中に「三論法相久年の^{あらそ}諍い^{かんえん}渙焉として氷の如く^と釈け……」(御書二七二^{ページ})と仰せである。すなわちインドにおける大乘空宗としての三論宗と、大乘有宗としての法相宗との長い争いは、日本にまできて、伝教大師によつて、ようやく解決されたわけである。そのことから、仏教は釈尊の^{ほんがい}本懐たる法華經によらなければならぬことがわかるであらう。

第十一章

日本に六宗の伝来

像法に入つて四百余年と申しけるに百済国くだらより一切経並びに教主釈尊の木像・僧尼等そうに・日本国にわたる、漢土の梁りやうの末・陳ちんの始にあひあたる、日本には神武天王よりは第三十代・欽明天王きんめいの御宇なり、欽明の御子みこ・用明の太子に上宮王子じやうぐう・仏法を弘通し給うのみならず並びに法華経・浄名経・勝鬘経しょうまんを鎮護国家の法と定めさせ給いぬ、其の後・人王第三十七代に孝徳天王の御宇に三論宗・成実宗を觀勒僧正かんろく・百済国よりわたす、同御代に道昭法師・漢土より法相宗・俱舎宗をわたす、人王第四十四代・元正天王の御宇に天竺てんじくより大日経をわたして有りしかども而も弘通せずして漢土へかへる此の僧をば善無畏三蔵という、人王第四十五代に聖武天皇の御宇に審祥大徳・新羅国より華嚴宗をわたして良弁僧正・聖武天王にさづけたてまつりて東大寺の大仏を立てさせ給えり同御代に大唐の鑒真和尚がんじん・天台宗と律宗をわたす、其の中に律宗をば弘通し小乗の戒場を東大寺に建立こんりゆうせしかども法華宗の事をば名字をも申し出させ給はずして入滅し了んぬ、

通解

——像法に入つて四百余年過ぎたころ、百済国くだらから一切経および教主釈尊もくぞうの木像、僧尼等そうにが日本へ渡つてきた。中国では梁りやうの末で陳の初めであつた。日本では神武天皇じんむから第三十代の欽明天皇きんめいの御代みよであつた。欽明の御子みこの用明天皇ようめいの太子に上宮王子じやうぐう（聖徳太子）があつて、大いに仏法を弘通されたうゑに、法華経・浄名経・勝鬘経を鎮護国家の法と定められた。

語 訳

その後、第三十七代孝徳天皇こうとくの御代に、三論宗さんろんしゅうと成実宗じやうじつを觀勒僧正くわんろくしやうじが百済国から渡した。また同時代に道昭法師どうしやうが中国から法相宗ほつそうと俱舎宗くしゃを渡した。

そして第四十四代元正天皇げんしやうの御代には、インドから大日経だいにちきやうを持ってきたが、弘通しないで中国へ帰った僧があつた。それは善無畏三蔵ぜんむゐさんざうであつた。

第四十五代聖武天皇の御代に、審祥大徳しんじやうだいとくは新羅国しんらから華嚴宗くわえんしゅうを渡して良弁僧正らうべんしやうじ、聖武天皇に授けて、東大寺の大仏を建立した。また同時代に唐から鑒真和尚かんじんわうが天台宗と律宗を渡したが、律宗のみを弘通し、小乗の戒壇を東大寺に建立したけれども、法華經のことは、名前すら出されないで入滅してしまった。

百済国くだら 古代、朝鮮半島の南西部にあつた王国。正しくは「ひやくさい」というが、日本では「くだら」と呼びな

らわされている。三国志東夷伝にある馬韓五十四国中の伯济国がその前身である。史料に初めて登場するのは三四五年、近肖古王即位前年からで、以後、勢力を拡大して高句麗・新羅しんらと朝鮮半島を三分した。古くから中国文化の影響を受けて仏教が栄えた。日本との交流も深く、大陸文化の日本への伝来に大きな役割を果たした。六六〇年、義慈王の時代、唐と新羅の連合軍の攻撃を受けて滅亡した。

第三十代・欽明天王（一五七一年）。『扶桑略記』では第三十代とされているが、第二十九代との説もある（在位五三九年―五七一年）。また即位年次には異説がある。名は天国排開広庭天皇あめくにわしはるきひろにわのみこと（『日本書紀』）、天国押波流岐広庭命あめくにわしはるきひろにわのみこと

（『古事記』）という。欽明天皇は諡号しごう。父は継体天皇、母は手白香皇后たしろかのきさきでその第四皇子。『日本書紀』卷十九等によると、大伴金村おほとものかなむら、物部尾輿もののべのおこしを大連おおむらじ、蘇我稻目そがのいなめを大臣おおみとして、磯城嶋しきしまに都を置いた。在位十三年の十月十三日、

百済の聖明王から金銅の釈迦仏、幡蓋^{ばんがい}、経論等を献上してきた。天皇は仏教を尊崇すべきか否かを群臣に問うたところ、蘇我稻目は崇仏、物部尾輿^{なかとみのかまこ}、中臣鎌子は排仏を主張した。この時、天皇は蘇我稻目の願いを入れて礼拝させた。後に国中に疫病が流行したので、物部尾輿と中臣鎌子は排仏を奏し、天皇は仏像を難波の堀江に捨てさせ、寺を焼いたと記されている。在位は三十二年に及んだ。

上宮王子 ^{じやうぐうおうじ}（五七四年―六二二年）。聖徳太子のこと。飛鳥時代の政治、宗教、思想家。第三十一代用明天皇の第二皇子。名は厩戸^{うまやどの}豊聡耳皇子と呼ばれた。『日本書紀』卷二十二等によると推古天皇の摂政として活躍し、冠位十二階、十七条憲法などを制定。また小野妹子を遣^{つか}わして隋との国交を開始し、大陸文化の摂取に努めるなど多くの業績を残した。崇仏派の蘇我氏と力を合わせて排仏派の物部守屋と戦って守屋を殺害し、三経義疏を著し、法隆寺、四天王寺を建立するなど仏法興隆に尽くした。また、仏法を精神を政治に反映して善政をしき、民衆の尊崇を受けた。

成実宗 ^{じやうじつ} 『成実論』を所依とする宗。教義は自我も法も空であるとの人法二空を説き、この空観に基づいて修行の段階を二十七（二十七賢聖）に分別し煩惱から脱することを教えている。訶梨跋摩^{かりはつま}を祖とする。小乗教中では最も進んだ教義とされる。姚秦弘始十四年（四二二年）、鳩摩羅什^{くまらじしゅう}によって『成実論』が漢訳されると、僧叡、僧導等の羅什門下によって盛んに研究され講じられた。しかし、天台大師や吉蔵に破折されてから衰退した。『三国仏法伝通縁起』巻中に「成実宗は三論宗と同時に伝来す。是の故に、後代に成実宗を以って三論宗に附す」とあるように、日本には三論宗とともに伝来した。南都六宗の一。

観勒僧正 ^{かんろく} 生没年不明。大和時代、百済^{くだら}の僧。推古天皇十年（六〇二年）に来朝し元興寺に居し三論宗、成実宗^{じやうじつ}を伝えた。また暦数、天文、地理、方術^{ほうじゆつ}の書を伝え、大陸文化の導入に貢献した。同三十二年（六二四年）、日本最

初の僧綱として僧正に任命された。

道昭法師（六二九年―七〇〇年）。日本法相宗の開祖。姓は船連氏。河内（大阪府）の人。出家して元興寺に入った。

白雉四年（六五三年）遣唐使に従って入唐し、玄奘に師事した。在唐八年の後、帰国して元興寺に禅院を建立。

以後十数年の間諸国を巡遊し、文武天皇二年（六九八年）に大僧都となった。

俱舍宗 世親の『俱舍論』を所依とする宗派。毘曇宗、薩婆多宗、論宗ともいう。教義は我空・法有を説き、一切

諸法を五位七十五法（色法―十一、心法―一、心所法―四十六、不相応法―十四、無為法―三）に分類して、その本性を追究し、四諦の理を観じて阿羅漢果を得ることを目的とする。インドでは安慧、徳慧、世友らが『俱舍論』の注釈書を著したところは宗派として存在しなかったが、中国において、陳の天嘉四年（五六三年）、真諦が『俱舍論』を著してから俱舍宗と呼ばれるようになった。日本には齊明天皇四年（六五八年）、智通、智達等が入唐して『俱舍論』等を伝え、興福寺等で盛んに修学された。俱舍宗は南都六宗の一つに入るが、諸宗の間で兼学されたもので、一定の相承系譜はない。

元正天王（六八〇年―七四八年）。第四十四代天皇（在位七一五年―七二四年）。名は氷高。草壁皇子の第一王女。母は

元明天皇。

聖武天皇（七〇一年―七五六年）。第四十五代天皇（在位七二四年―七四九年）。諱は首。四十二代文武天皇の第一子。

母は藤原不比等の娘宮子。皇后は不比等の娘安宿媛（光明皇后）。長屋王の変など政権争いが続き、皇后の兄弟が権力を握るようになったが、疫病のために相次いで死去。世情不安の中で、鎮護国家、攘災招福のため深く仏教に帰依し、全国に国分寺・国分尼寺を、また総国分寺として奈良に東大寺を建立した。そして東大寺に金銅の盧舎那仏（いわゆる大仏）を造立。自ら三宝の奴と称した。讓位後は鑑真について出家し、沙弥勝満と号した。仏

教興隆に尽力し、天平文化を現出したが、財政的には窮乏した。

審祥大徳（？―七四二年）。奈良時代、日本華嚴宗の祖。新羅国しんらこくの人。唐の法蔵について華嚴を学び日本に來航して大安寺に住した。東大寺良弁ろうべんの請によって金鐘道場（いまの東大寺法華堂）で六十華嚴經を講じた。聖武天皇の外護を受け、華嚴宗を弘め、良弁など多くの弟子を得た。

良弁僧正（六八九年―七七三年）。「ろうべん」「りょうべん」とも読む。奈良時代の華嚴宗第二祖。東大寺開山。朗弁とも書かれ、金驚菩薩、金鐘行者ともいう。相模または近江の人とも、百済系帰化人の子孫ともいわれる。赤子の時、驚にさらわれて春日神社の前に連れてこられたのを、義淵に救われてその保護を受けたという。義淵について法相の義を学び、金鐘寺に住んだ。天平十二年（七四〇年）に新羅の学僧審祥しんじょうを招いて金鐘寺で華嚴經講を開き華嚴宗弘通、盧舎那仏（大仏）造像の機縁をつくった。また同十五年（七四三年）に金光明最勝王經講、同十八年（七四六年）には法華会を開いて仏教の宣揚をはかり、聖武天皇の外護を受けた。東大寺の創建に際しては非常に尽力し、天平勝宝四年（七五二年）に初代の別当に任じられている。次いで僧正に進み八十四歳で没した。

東大寺の大仏 第四十五代聖武天皇の天平十五年（七四三年）に、天皇は華嚴宗の開講にちなんで、金銅こんどうの盧舎那ろしゃな仏を鑄造ちゆうそうすることを発願した。しばしば改鑄かいちゆうをしたが完成せず、同十九年（七四七年）から八回の改鑄によって第四十六代孝謙天皇の天平勝宝元年（七四九年）に完成。同四年（七五二年）に孝謙天皇、聖武上皇のもと開眼供養が行われ、金銅造り五丈三尺五寸（十六・二メートル）の坐像ざざうが成ったのである。

鑒真和尚かんじん（六八八年―七六三年）。中国・唐代の律僧。日本律宗の開祖。揚州江陽県の人。十四歳で大雲寺の智満に従って出家。洛陽、長安で天台、律を学んだ。帰郷後、大明寺に住し江淮こうわいの代主と仰がれた。天宝元年（七四二

年)に大明寺で開講中、日本僧の栄叡ようえい、普照ふしょうの請いをうけ、国禁を犯して渡日を図ったが、五度とも失敗した。

その間、マラリアにかかり両眼を失明したが、天平勝宝五年(七五三年)ついに来日。翌年入京、東大寺大仏殿前に戒壇を築き、聖武天皇以下諸僧に授戒。同年五月に律宗を立て、同八年(七五六年)五月に大僧都に、八月に大僧正に任ぜられ、天平宝字二年(七五八年)に大和上の号を授けられた。天平宝字三年(七五九年)に唐招提寺とうしょうだいじを建立。一切経を校正し、戒律三大部を印刷したといわれる。

律宗 戒律を修行する宗派で南都六宗の一つ。中国では代表的なものに唐代初期の道宣どうせんが開いた南山宗がある。日本では南山宗を学んだ鑑真が来日し、東大寺に戒壇院を設け、唐招提寺を開いてから律宗が成立した。

小乗の戒壇 小乗の戒壇と同じ意。戒壇とは、一般に仏道修行者の身口意三業をととのえるための戒法を授ける道場である。戒とは防非止惡ぼうひしあくの義で定慧じようえと並んで三学と称せられる。戒定慧三学は仏法において必須ひつすの要法である。しかし、小乗、権大乘、法華迹門、法華本門、文底独一本門と、それぞれ定慧が異なるように、戒法も戒壇の様相も相違がある。戒壇の発祥はつしょうはインドの祇園精舎ぎおんしやうじやである。インドにおいては、これにつづいて多くの戒壇が建立されたが、いずれも小乗戒壇であつた。一般に、小乗教は戒を重んじて定慧の比重が軽く、したがって、受戒者も授戒者も、資格をきびしく問われた。中国においては、後漢末、西紀六七年に仏教が渡来し、戒壇が初めて建立されたのは西紀四三四年、劉宋文帝元嘉十一年、求那跋摩ぐなばつまによる南林寺の戒壇とされる。日本においては西紀七五三年、鑑真が中国より伝え、まず奈良の東大寺、つづいて東国は下野しもつけの薬師寺、西国は筑紫つくしの觀世音寺かんぜおんにそれぞれ小乗戒壇が建立された。それらは小乗三戒壇と称された。

本章は、欽明天皇きんめいてんの時代に、日本の国に初めて仏教が伝来し、次いで奈良の六宗（法相、三論、俱舎、成実、律、華嚴）の伝来した経過が述べられている。

仏教と日本の国

日本の国は大乗仏教に縁が深く、とくに古くから法華経が広く流布されて、末法の御本仏日蓮大聖人が三大秘法を御建立になる先序となった。「御義口伝上」には「殊には此の八歳の竜女の成仏は帝王ていおう持経じきようの先祖たり、人王の始は神武天皇なり神武天皇は地神五代の第五の鵜萱葺不合尊うがふきあへずのみことの御子なり此の葺不合尊は豊玉姫とよたまひめの子なり此の豊玉姫は沙竭羅竜王しゃかくらりゆうおうの女むすめなり八歳の竜女の姉なり、然る間先祖法華経の行者なり甚深甚深」（御書七四六頁）と仰せであり、じつに不思議な因縁である。

また弥勒菩薩みろくの『瑜伽論ゆが』には「東方に小国有り、其の中に唯大乘ただの種姓しゆしやうのみ有り」とあり、肇公じやうこうの翻經ほんぎやうの記には「大師須梨耶蘇摩左すりやそまの手に法華経を持し右の手に鳩摩羅什くまらじの頂うなじを摩なで授与して云く、仏日西に入いって遺耀將いようまさに東に及ばんとす此の經典東北に縁有り汝慎つしんで伝弘せよ」とあり、遵式じゆんしきも「始西より伝う猶月の生ずるが如し、今復東より返る猶日の昇るが如し」といい、伝教大師も「地を尋ねれば唐の東・羯かつの西」と述べている。

これらは、いずれも日本の国をさして、大乘有縁とし、あるいは法華經の流布すべき国と定められていたのである。

わが国に仏教が公式に伝来したのは、『日本書紀』によれば欽明天皇十三年（五五二年）で、百濟の聖明王が仏像、經卷等を獻じてきたのが最初とされている。なぜこれを公式伝来というかといえば、すでに朝鮮半島とわが国とは古来から往来が盛んであったので、それ以前にも民間人が仏像を持ってきたり、經卷の一部を持ってきたり、ましてや一部の教えが日本に伝えられたことは当然に想像できる。一例として継体天皇十六年（五三二年）に、南梁の司馬達等が日本へ来て、大和坂田ヶ原へ草堂をかまえ、仏像を安置して礼拝していたという言い伝えもある。

なお日本への仏教伝来については種々の説があり、最近では欽明天皇の御世戊午の年（五三八年）説が有力である。これは奈良時代に作られた『上宮聖徳法王帝説』、その他の資料によるものである。さて百濟からもたらされた仏教を、信ずるか信じないかで、日本国内は二派に分かれて争いが生じた。蘇我稲目は礼拝を主張、物部尾輿、中臣鎌子はこれに反対した。数十年にわたる争いの結果、崇仏派が勝ち、廃仏派は敗れ去った。とくに推古天皇の太子厩戸皇子（聖徳太子）は、憲法十七条を制定して、よく国を治めるとともに、厚く仏法を敬い、勝鬘經、法華經、維摩經の義疏を製し、またこれらの經典を講じて鎮護国家、文化の向上に努めた。

そのほか仏教伝来の経過は本文に示されたとおりであるが、聖徳太子も法華經を講じたが、諸經を破

折するといふようなことはなかったし、鑑真も律宗と天台宗を持ってきたながら、天台宗をひろめないで、小乗の授戒で一生を終わっている。これも時のしからしむるところであらう。

小乗の戒場を東大寺に建立等

その小乗の戒場には三重の壇があつて、その第三重には多宝の塔があり、その中に釈迦・多宝の像が安置されているという。もしそうであるなら、東大寺の戒壇は大乗の戒壇ではないかとの疑問がおきる。

これに対し日寛上人は、幾多の事例を挙げて、小乗の戒壇なりと破折されている。一に伝教大師は『けんかい顕戒論』に、さんしや三車、じよふん除糞といつて、東大寺の戒壇を小乗の戒壇として破している。三車とは牛、鹿、羊の三車で、しやうもん声聞、えんがく縁覚、ぼさつ菩薩の三乗をあらわし、除糞は家業につく前に、糞はらいとして雇われたことをいい、いずれも小乗を示す言葉である。そのほか、慈覚も、智証も、三井寺の明尊めいそんも法然の伝記等によつても、すべて小乗の戒であることが明らかであるとされている。(文段集二五一頁―二五二頁)

第十二章 天台宗の弘通

其後・人王第五十代・像法八百年に相当つて桓武天王かんむの御宇に最澄さいちようと申す小僧出来しめつたいせり後には伝教大師と号したてまつる、始には三論・法相ほつそう・華嚴けごん・俱舎くしゃ・成実じようじつ・律の六宗並びに禪宗等を行表僧正等に習学せさせ給いし程に我と立て給える国昌寺・後には比叡山と号す、此こにして六宗の本經・本論と宗宗の人師の釈とを引き合せて御らむありしかば彼の宗宗の人師の釈・所依の經論に相違せる事多き上僻見びやつけん多多にして信受せん人皆惡道に墮おちぬべしとかんがへさせ給う其の上法華經の実義は宗宗の人人・我も得たり我も得たりと自讃じさんありしかども其の義なし、此れを申すならば喧嘩けんか出来すべしも黙だして申さずば仏誓ぶつせいにそむきなんとをもひわづらはせ給いしかども終に仏いましめの誠ををそれて桓武皇帝かんむに奏し給いしかば帝・此の事ををどろかせ給いて六宗の碩学せきがくに召し合させ給う、彼の学者等・始めは慢幢まんどう・山のごとし惡心・毒蛇のやうなりしかども終に王みまえの前にしてせめをとされて六宗・七寺・一同に御弟子みでしとなりぬ、例せば漢土の南北の諸師・陳殿ちんでんにして天台大師にせめおとされて御弟子となりしがごとし、此れはこれ円定・円慧げんか計りなり其の上天台大師のいまだせめ給はざりし小乗の別受戒をせめをとし六宗の八大德に梵網經ぼんもうの大乗別受戒をさづけ給うのみならず法華經の円頓えんどんの別受戒を叡山に建立せしかば延曆えんりやく円頓の別受戒は日本第一たるのみならず仏の滅後一千八百余年が間身毒戸けんどくし那一閻浮提えんぶだいにいまだなかりし靈山りようぜんの大戒日本国に始まる、されば伝教大師は其の功を論ずれば竜樹天親にもこえ天台・妙樂にも勝れてをはします聖人なり、されば日本国の当世の東

寺・園城・七大寺・諸国の八宗・浄土・禅宗・律宗等の諸僧等誰人か伝教大師の円戒をそむくべき、かの漢土九国の諸僧等は円定・円慧は天台の弟子ににたれども円頓一同の戒場は漢土になければ戒にをいては弟子とならぬ者もありけん、この日本国は伝教大師の御弟子にあらざる者は外道なり悪人なり、而れども漢土日本の天台宗と真言の勝劣は大師心中には存知せさせ給いけれども六宗と天台宗とのごとく公場にして勝負なかりけるゆへにや、伝教大師已後には東寺・七寺・園城の諸寺日本一州一同に真言宗は天台宗に勝れたりと上一人より下万人にいたるまでをぼしめしをもえり、しかれば天台法華宗は伝教大師の御時計りにぞありける此の伝教の御時は像法の末大集経の多造塔寺堅固の時なり、いまだ於我法中おがほうちゆう・闘諍言訟とうじやうごんしやう・白法隱没びやくほういんもつの時にはあたらず。

通解

——その後、人王第五十代、像法に入つて八百年のころ桓武天皇かんむの御代みよに最澄さいちやうという小僧が出現した。後に伝教大師と号された。

最澄は、初めは三論、法相、華嚴、俱舍くしゃ、成実、律の六宗および禅宗等を、行表僧正ぎやうひやうそうじやうに学んでいたが、後に自分で建てられた国昌寺こくしやうじ（後に比叡山と号す）に住して、六宗の本経、本論とそれぞれの宗派の人の師の解釈とを引きあわせて研究した結果、かの六宗の人師の解釈はその宗派の拠り所よとしている経文や本論に相違していることが多い上、自分勝手の誤った見解が多く、こんな邪義を信じている人はみな悪道に墮ちると考えられた。その上にまた法華経の実義については各宗の人々は我も得たり我も得たりと自讃し

ているけれども、法華の実義などは全くない。これを最澄が事実のままにいいだすならば、宗教界が大喧嘩げんかになってしまふだろう。また黙って誤りを見過かしていれば、仏との誓いに反することになる、と思わずらわれたが、ついに仏の誠いましめを恐れて桓武天皇かんむにこのことを奏上した。天皇は驚かれ、さっそく奈良六宗の大学者と最澄とを召し合わせ討論せしめた。六宗の学者たちは初めは自分を慢ずるはたほこが山のように高く、悪心が毒蛇どくじやのようだったが、ついに天皇の前で最澄からせめおとされ、六宗七寺が、一同に最澄の弟子となった。

ちやうど、中国の南三北七といわれた十宗の諸師が、陳ちんの王宮で天台大師にせめおとされ、天台の弟子となったのと同じようなものである。しかし天台は、円定えんじやう・円慧えんねばかりをひろめたのであったが、最澄は天台がまだ打ち破られなかった小乗の別受戒べつじゆかいをせめおとし、六宗の八大徳に梵網經ぼんもうの大乗別受戒をさずけたのみではなく、法華經の円頓えんどんの別受戒を比叡山に建立した。ゆえに比叡山延暦寺えんりやくりじの円頓の別受戒は日本第一であるのみか、釈尊滅後一千八百余年の間、インドにも中国にも、一閻浮提えんぶだいに、いまだどこにもなかった靈山りやうぜんの大戒が、日本国にはじめられたのである。されば伝教大師の功績を論ずるならば、竜樹りゆうじゆ、天親てんにも越え、中国の天台、妙楽にもすぐれている聖人である。ゆえに日本国当世の東寺とうじ、園城寺おんじやう、七大寺はもとより、諸国の八宗、浄土、禅宗、律宗等の諸僧等は、だれも伝教大師の円戒に背くことはできないのである。中国では九国の諸僧等が、円定と円慧だけはそなえて天台の弟子に似ているが、円頓の戒壇が中国にはなかったので、戒においては天台の弟子でないものもあつたであらう。しかしこの日本国では伝教大師の御弟子とならない僧は、外道であり、悪人である。

しかしながら、中国と日本の天台宗と真言宗の勝劣については、伝教大師はもとより心の中では御存知

語訳

であったが、奈良六宗と天台宗のごとく公場において勝負をつけなかったためか、伝教大師以後には東寺、七寺、園城の諸寺をはじめ、日本一州一同に真言宗は天台宗よりすぐれていると上一人より下万民にいたるまで思うようになってしまった。ゆえに天台法華宗は伝教大師の御時ばかりであった。この伝教の御時は像法のみであり、大集経の予言では多造塔寺堅固の時であり、いまだ「わが法の中において鬭諍言訟して白法隠没せん」の時代ではなかった。

桓武天王（七三七年—八〇六年）。光仁天皇の第一皇子として誕生。第五十代天皇に即位して、蝦夷の平定、兵制改

革、平安遷都など数々の業績を残し、律令政治中興の英主といわれる。蝦夷平定については、坂上田村麿を征夷大將軍として拔擢し、東北開発の実を挙げた。また、政治の墮落の根源は、乱れきった諸宗の僧が政治に介入していることにありと看破し、都を平安京に遷したことも、機運の清新化をもたらした。しかし、桓武天皇の最も大きい業績は、伝教大師最澄と南都（奈良）六宗との間で公場対決させ、仏法の正邪を明らかにし、正法たる法華経を興隆せしめたことである。

禅宗 菩提達磨所伝の禅定観法によって悟りに至ろうとする宗派。達磨宗、仏心宗ともいう。仏法の真髓は教理の追究ではなく、坐禅入定の修行によって自ら体得するものであるとして、教外別伝・不立文字・直指人心・見性成仏という教義を立てている。日本では、孝徳天皇の白雉四年（六五三年）元興寺の道昭が入唐し、慧満について学び、帰朝後、元興寺の東南隅に禅院を建てたのを初伝とし、鎌倉時代に栄西が臨済宗を、道元が曹洞宗を伝え、江戸時代には明僧隠元が黄檗宗を開いた。なお、大聖人御在世当時は、臨済禅の流れで楊岐宗大慧派の大

慧宗果しゆこうから印可いんかされた看話禪かんわぜんが盛んだったようである。

行表僧正ぎやうへいそうじょう（七三二年—七九七年）。奈良時代末期、奈良大安寺の学僧。大和葛上郡くずがみの人。天平十三年（七四一年）大安寺の道璿どうえんについて得度する。後に近江国滋賀の崇福寺の寺主となり、更に近江の国師に任ぜられた。宝龜九年（七七八年）に伝教大師の授戒の師となった。

国昌寺 平安時代、近江国（滋賀県）にあった寺。伝教が出家、得度した近江国分寺のこと。または伝教が比叡山に建てた草庵で、延暦寺の前身である比叡山寺をさすともいわれる。

慢幢・山のごとし 慢幢まんどうとは、慢心の高いことを、幢はたけが高くそびえているのにたとえたものだが、いま、さらに山にたとえたのである。「開目抄上」にいわく「我慢の幢・高きこと非想天ひそうてんにもすぎ」（御書一八七頁）と。

六宗・七寺 六宗は華嚴、三論、法相、俱舍、成実、律。七寺は大安、元興、東大、西大、薬師、法隆、興福の各寺。

円定・円慧 戒定慧かいじゆえの三学は蔵・通・別・円の四教にそれぞれある。定とは静慮の義で、心の散乱を静めて悟りの境地を得ること。慧とは明らかな智慧の義で、煩惱ぼんのうや惑障わくしょうを断破だんぱして真理の本性を証得することをいう。法華經の定・慧を爾前經と區別して円定・円慧という。末法の三学は三大秘法である。「御義口伝下」に「第廿五建立御本尊等の事 御義口伝に云く此の本尊の依文えもんとは如来秘密神通じんづうしりき之力の文なり、戒定慧の三学は寿量品の事の三大秘法是れなり」（御書七六〇頁）と仰せられている。

小乗の別受戒 種々の小乗戒を一つ一つ各別に受戒し、次第にすべての戒を受けていくこと。別受は通受（総受）に対する語で、『善見律毘婆沙』卷十六に説かれている。これに対し通受はすべての戒を一時に受けることをいう。

六宗の八大徳 奈良六宗の道証、修円、勤操、正能、延秀、広円などの八人のこと。

梵網經の大乗別受戒 梵網經は梵網經盧舎那仏説菩薩心地戒品第十の略。菩薩戒經ともいわれる。もと華嚴經と同部で、すべてを翻訳すると百二十卷六十一品となるが、鳩摩羅什が長安で同經中の菩薩心地戒品第十のみを訳出した。上下二卷からなる大乘律の經典で、衆生の戒は仏性の自覺によって形成されるとしている。十重禁戒・四十八輕戒を挙げている。「大乘別受戒」は、伝教大師が比叡山に建立した法華經迹門の円頓戒壇で受ける別受戒をいう。一般の大乘戒が三聚淨戒を通じて受ける通受戒なのに対して、別に梵網經の十重禁戒・四十八輕戒を受けることを別受戒という。

法華經の円頓の別受戒 円頓とは、円は円満、頓は頓極ということ。天台宗の円頓戒をさす。円頓は本来天台の法門全体をさした語。小乗の戒、大乘の戒、法華の戒等については、「十法界明因果抄」(御書四三五頁)等に詳しくある。

身毒 インドのこと。梵語でシンドウ (Sindhu) とし、申毒、信度、身度、新陶などとも音写する。梵名シンドウはインダス河の称。身毒は身毒とも読む。

尸那 シナすなわち中国のこと。

靈山の大戒 法華經の大乗戒のこと。靈山は靈鷲山のこと。法華經説法の会座をいう。

日本国に始まる 日寛上人は「天台大師既に陳の少主及び隋の煬帝の為に正しく菩薩戒を授く。豈震旦国に始まるに非ずや。答う、彼はこれ国主一人なり。況や円頓一同の戒場に非ざるが故なり」(文段集二五五頁)と述べられている。真の大乘の戒は、まさにわが日本国から始まったのであることを明かされている。

漢土九国 古代中国では全土が九力国に分かれていたがこれを総称したもの。伝説上の帝王堯および夏の時代に

は、冀^き、衰^{こん}、青、徐、揚、荊、豫、梁、雍に分かれていたと伝えられ、殷、周時代にはこれに若干の異同があるとされている。

講義

仏教が日本に弘通された経過を述べられるなかで、この章では奈良六宗が日本に渡来した後に、伝教大師が出現し、円頓の戒壇を比叡山^{ひえいざん}に建立した経過や意義を述べられている。

小乗の別受戒、大乘の別受戒

小乗の別受戒とは、小乗律部^{りつぶ}に明かす二百五十戒等、具足戒^{ぐそく}の一つ一つを別々に受けることをいう。もとは南都六宗の戒であったが、伝教大師が法華経迹門円頓^{しやくもんえんどん}の別受戒の方式を比叡山に建立して以来、やがて形骸化^{けいがいか}した受戒の方式である。大乘の別受戒とは、小乗の別受戒、大乘の通受戒に対する語である。比叡山の円頓の戒壇で受けるもので、別して法華経、梵網経^{ぼんもう}の戒を受ける。なお別受戒に対し、通受戒があるが、これは一般的に大乘戒の代表的なものとされ、大乘・小乗双方に通ずる面をもつ。たとえば三聚淨戒^{さんじゅじやうかい}がそれである。摄律儀戒^{しやうりつぎ}、摄善法戒^{しやうぜんぽう}、摄衆生戒^{しやうじゆじやう}の三種が説かれるが、摄律儀戒では仏の定めた戒律の一切を守って悪を防ぐ意があり、五戒、二百五十戒、五百戒等の小乗の戒はみなここに含まれる。ゆえに三聚淨戒は小乗の戒の意にも通じ、かつ併合するところから通受戒と称するのである。

鑑真和尚が日本にきて東大寺に建てた戒壇は小乗の戒であり、三師七証びやくしこんま白四羯磨びやくしこんまの作法という。三師とは戒和尚、教授師、羯磨師をいい、七証とは儀式が正しく行われたことを証明する七人の僧をいう。白四羯磨とは授戒をする時に、その旨の表白文を一度読むこと（白）と羯磨の表白文を三度読むことで、一白三羯磨または略して白四羯磨という。

中国の天台大師は、南三北七を破折して仏教界を統一したとはいえ、戒壇建立を実現しなかったで、法華經を学び、一念三千の觀を行じて、円定・円慧の修行はするが、戒だけは小乗の戒を用い、小乗の戒を受けたりしてしたのである。日本においても同様のことが行われていた。すなわち「聖密房御書」には「宗を申すは戒・定・慧の三学を備へたる物なり、其の中に定・慧はさてをきぬ、戒をもて大・小の傍示ばうじをうちわかつものなり、東寺の真言・法相・三論・華嚴等は戒壇なきゆへに東大寺に入りて小乗律宗の驢乳・臭糞しゆうふんの戒を持つ、戒を用つて論ぜば此等の宗は小乗の宗なるべし」（御書八九九ページ）と仰せである。

そこで伝教大師は、円定・円慧をひろめる上においては、戒においても必ず円戒を建てなければならぬないということを主張した。すなわち、定慧が菩薩でありながら戒は声聞のままであるというのはおかしい、と述べている。そして三聚淨戒の第一の摂律儀戒を、小乗声聞の戒ではなく、正には法華により傍には梵網の十重四十八輕戒（御書の本文に「六宗の八大徳に梵網經の大乗別受戒をさづけ給う」（御書二六四ページ）とある）とした。すなわち伝教大師の三聚淨戒は、第一は菩薩の行儀を正しくする戒（摂律儀戒）、

第二は菩薩の自行（摂善法戒）、第三は菩薩の化他（摂衆生戒）とし、三つともに菩薩の大乗戒となったのである。

東大寺の戒壇は、三重の壇の上に釈迦・多宝の二仏、四周には四天王となっており、比叡山の戒壇は、壇上に釈迦がいて、その脇士が文殊・弥勒の二菩薩となっている。

これについて伝教大師は、『学生式』に「普賢經に依りて三師証等を請す、釈迦牟尼仏を請して菩薩戒の和上と為す、文殊師利菩薩を請して菩薩戒の羯磨阿闍梨と為す、弥勒菩薩を請して菩薩戒の教授阿闍梨と為す、十方一切の諸仏を請して菩薩戒の証師と為す、十方一切の諸菩薩を請して同学等侶と為す、現前の一りの伝戒の師を請し以て現前の師と為す」（『伝教大師全集』卷一、一八頁）と述べている。

普賢經とは、法華經の結經で觀普賢菩薩行法經という。これには「爾の時に行者若し菩薩戒を具足せんと欲せば（中略）釈迦牟尼仏正遍知世尊、我が和上と為りたまえ。文殊師利具大悲者、願わくは智慧を以て我に清淨の諸の菩薩の法を授けたまえ。弥勒菩薩勝大慈日、我を憐愍するが故に亦我が菩薩の法を受くることを聴したもうべし。十方の諸仏、現じて我が証と為りたまえ。諸大菩薩各其の名を称えて、是の勝大士、衆生を覆護し我等を助護したまえ」（妙法蓮華經並開結七一四頁）等と説かれている。

大小権実の戒の功德の相違

同じく戒といっても、大小権実によって、次のような違いがある。まず大小の違いは「十法界明因果

抄」に「問うて云く二乗所持の不殺生戒ふせつしようかいと菩薩所持の不殺生戒と差別如何、答えて云く所持の戒の名は同じと雖いまだも持する様並に心念永く異なるなり、故に戒の功德も亦浅深せんじんあり、問うて云く異なる様如何、答えて云く二乗の不殺生戒は永く六道に還らんと思わす故に化導けどうの心無し亦仏菩薩と成らんと思わす但灰身滅智けしんめつちの思を成すなり、譬えば木を焼き灰と為しての後に一塵じんも無きが如し故に此の戒をば瓦器がきに譬う破れて後用うることに無きが故なり、菩薩は爾しからず饒益有情戒にようやくうじようかいを發して此の戒を持するが故に機を見て五逆十惡を造り同く犯せども此の戒は破れず還つて弥弥戒いよいよ體を全くす」(御書四三四頁)と仰せられてゐる。

次に權實の戒については同抄に更に「梵網經等ぼんもうきようの權大乘の戒と法華經の戒とに多くの差別有り、一には彼の戒は二乗七逆の者を許さず二には戒の功德に仏果を具せず三には彼は歷劫修行りやくこうしゆぎようの戒なり是くの如き等の多くの失有り、法華經に於ては二乗七逆の者を許す上・博地はくじの凡夫・一生の中に仏位に入り妙覺に至つて因果の功德を具するなり」(御書四三七頁)と仰せである。

末法には法華本門の戒

法華經においては、傳教大師の比叡山の戒は、迹門の理戒であつて、末法には無益であるのみか、かえつて有害である。末法において日蓮大聖人が建立される戒は、法華本門の大戒であつて、受持即持戒とも、金剛宝器戒こんどうほうきかいともいわれる。次に、末法の戒および戒壇に関して若干の御抄を拝読してみよう。

「観心本尊抄」にいわく「釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り与え給う」（御書二四六ページ）と。

「教行証御書」にいわく「此の法華經の本門の肝心・妙法蓮華經は三世の諸仏の万行万善の功徳を集めて五字と為せり、此の五字の内に豈万戒の功徳を納めざらんや、但し此の具足の妙戒は一度持つて後・行者破らんとすれど破れず是を金剛宝器戒とや申しけんなんと立つ可し、三世の諸仏は此の戒を持つて法身・報身・応身など何れも無始無終の仏に成らせ給ふ」（御書二二八二ページ）と。

「三大秘法抄」にいわく「戒壇とは王法仏法に冥じ仏法王法に合して王臣一同に本門の三秘密の法を持ちて有徳王・覺徳比丘の其の乃往を末法濁惡の未来に移さん時勅宣並に御教書を申し下して靈山淨土に似たらん最勝の地を尋ねて戒壇を建立す可き者か時を待つ可きのみ事の戒法と申すは是なり」（御書一〇二二ページ）と。

そして「日蓮一期弘法付嘱書」（御書一六〇〇ページ）には「日蓮一期の弘法、白蓮阿闍梨日興に之を付嘱す、本門弘通の大導師たるべきなり、国主此の法を立てらるれば富士山に本門寺の戒壇を建立せらるべきなり、時を待つべきのみ、事の戒法と云うは是なり、就中我が門弟等此の状を守るべきなり。

弘安五年壬午九月 日

日 蓮 在御判

血脈の次第 日蓮日興

と仰せである。

このように、日蓮大聖人は、日興上人に対して戒壇建立を御遺命されているにもかかわらず、大聖人の滅後、六老僧の間において、すでに意見が二つに分かれ諍論じやうろんの生じたのに対し、日興上人は、「五人所破抄」で、次のように破折されている。

「五人所破抄」にいわく「五人の立義既に二途に分れ戒門に於て持破じはを論ず云云。日興が云く、夫れ波羅提木叉はらだいぼくしやの用否ゆうひ・行住四威儀の所作・平嶮へいけんの時機に随い持破ぼんしやうに凡聖ぼんしやう有り、爾前迹門の尸羅しらを論ずれば一向に制禁す可し、法華本門の大戒に於ては何ぞ又依用せざらんや。但ただし本門の戒躰・委細の経釈・面を以て決す可し」(御書一六一五頁)と。

すなわち、末法におけるわれわれの戒は、「大学三郎殿御書」に「設たとい世間の諸戒之を破る者なりとも堅く大小・権実等の経を弁えば世間の破戒は仏法の持戒なり」(御書二二〇五頁)と仰せのごとく、大御本尊建立の後にあつては、堅く御本尊を受持して邪宗邪義を破折するのが第一の持戒であり、世間の戒、釈迦仏法の戒等は、まったく無用であるのみか、かえつて害毒となるのである。

第十三章

妙法流布の必然を明かす

今末法に入つて二百余歳・大集經の於我法中・鬭諍言訟・白法隱没の時にあたれり仏語まことな
らば定んで一閻浮提に鬭諍起るべき時節なり、伝え聞く漢土は三百六十箇国・二百六十余州はすで
に蒙古国に打ちやぶられぬ華洛すでにやぶられて徽宗・欽宗の両帝・北蕃にいけどりにせられて
韃靼にして終にかくれさせ給いぬ、徽宗の孫高宗皇帝は長安をせめをとされて田舎の臨安行在府に
落ちさせ給いて今に数年が間京を見ず、高麗六百余国も新羅百濟等の諸国等も皆大蒙古国の皇帝に
せめられぬ、今の日本国の嵯岐・対馬並びに九国のごとし鬭諍堅固の仏語地に墮ちず、あたかもこ
れ大海のしをの時をたがへざるがごとし、是をもつて案ずるに大集經の白法隱没の時に次いで法華
經の大白法の日本国並びに一閻浮提に広宣流布せん事も疑うべからざるか、彼の大集經は仏説の中
の權大乘ぞかし、生死をはなるる道には法華經の結縁なき者のためには未顕眞実なれども六道・四
生・三世の事を記し給いけるは寸分もたがはざりけるにや、何に況や法華經は釈尊・要當説眞実と
なのらせ給い多宝仏は眞実なりと御判をそへ十方の諸仏は広長舌を梵天につけて誠諦と指し示し、
釈尊は重ねて無虚妄の舌を色究竟に付けさせ給いて後五百歳に一切の仏法の滅せん時上行菩薩に妙
法蓮華經の五字をもたしめて謗法一闡提の白癩病の輩の良薬とせんと梵帝・日月・四天・竜神等に
仰せつけられし金言虚妄なるべしや、大地は反覆すとも高山は頽落すとも春の後に夏は来らずとも
日は東へかへるとも月は地に落つるとも此の事は一定なるべし、

——今は末法に入つて二百余年になる。大集經に予言されている「わが法の中において鬭諍言訟してとうじやうごんしやう白法びやくほう隱没いんもくせん」の時に当たっている。そして仏の予言が眞実であるならば、間違いなく世界中に鬭諍が起るべき時節である。伝え聞くところによれば、中国の三百六十力国、二百六十余州はすでに蒙古の軍勢に打ち破られたという。また都はすでに破られて徽宗きそう、欽宗きんそうの二人の帝は北方の金の軍勢にいけどりにされて韃靼だたんで亡くなられた。また徽宗の孫高宗皇帝は都の長安をせめおとされて田舎の臨安行在府へ逃げて、今に数年の間都をみる事ができないでいる。また高麗こま六百余国も新羅しんらや百濟くだけの朝鮮半島の諸国もみな大蒙古国の皇帝に攻められた。今の日本の老岐いぎ、対馬つしまや九州のようなものである。鬭諍とうじやう堅固と予言されている仏語は、地に落ちることなく、あたかも大海の潮が、時を違えることなく満ち干ひするようなものである。

このようなことから考えてみれば、大集經の白法隱没の時に次いで、法華經の大白法が、日本の国をはじめ全世界に広宣流布することも疑いのないことであろう。かの大集經は、仏説の中では権大乘の經である。生死を離れ成仏する道でもないし、法華經の結縁がない者には未顕眞実の經ではあるけれども六道や四生や三世の事を記し給うている点は、寸分の違いもない。まして法華經は釈尊が「要かならず当に眞実を説くべし」と宣言され、多宝仏も「法華經はみなこれ眞実なり」と証明し、十方の諸仏は広長舌を梵天にまでつけて説法の眞実なることを証明している。その上に釈尊は無虚妄こもうの舌を色究竟天しきくきやうてんにまでつけられて、後の五百歳に一切の仏法が滅してしまふ時、上行菩薩に妙法蓮華經の五字を持たしめて、謗法一闡提ほうぼうせんたいの白癩病びやくらいびやうの輩の良薬にしようと、梵天ぼんてん、帝釈たいしやく・日天、月天、四天、竜神等に仰せつけられた金言が、虚妄

となるはずがあろうか。大地が反覆^{はんぷく}しても、高山がくずれ落ちても、春の後に夏がこなくとも、日が東にかえっても、月が地に落ちてても、このことは間違いのないことである。

漢土は三百六十箇国・二百六十余州はすでに蒙古国に打ちやぶられぬ 「撰時抄」を御著述の建治元年（一二七五

年）は、文永十一年（一二七四年）の第一回蒙古襲来の翌年にあたる。三百六十箇国・二百六十余州は、唐時代における中国の国数と州数である。蒙古国とは元と号する前の名前である。

華落 都のこと。中国の周、後漢の時代に、洛陽に都を置いたところから、帝都を華洛と称するようになった。北宋時代の都は開封。

徽宗・欽宗 徽宗（一一〇八年—一一三五年）は中国・北宋の第八代皇帝。名は趙佶^{ちようきつ}。父は第六代皇帝の神宗^{しんそう}。元符

三年（一一〇〇年）帝位についたが、政治に関心が薄く、文化面での才能を発揮した。とくに書道では瘦金体^{そうきんたい}と呼ばれる書体を確立し、絵画では院体画^{いんたいが}といわれる文人画に才を示し、従来の黄氏体^{わうしだい}に代わる画法をひらいた。

後年、女真族の建てた金国と結び、遼^{りよう}を攻めて北京とその付近六州の割譲を受けたが、金国と紛争を起し、攻撃を受けて捕虜になり黒竜江省五国城で没。また、自ら教主道君皇帝と名のり、道教を保護し、仏法僧・尼に

還俗^{げんぞく}を命じ、ただ一人それに反対した法道に対し、顔にかなやきをあて、江南に流したといわれる。日蓮大聖人は本抄のあとの御文で、それが原因で「半年が内に^{夷人}ゑびすの手にかかり給いき」（御書二六五頁）と仰せである。

欽宗（一一〇〇年—一一六一年）は中国・北宋代の第九代皇帝。徽宗の子。宣和七年（一二二五年）金国との和議が破れ、金軍の攻撃の始まる直前に即位した。しかし、金軍に捕らえられ、三十年間流人生活を送って没した。

北蕃^{ほくばん} 北狄^{てき}ともいう。北方の蕃族のこと。中国人が北方に住む異民族をさしてこう呼んだ。ここでは蒙古族の金という。

韃靼^{だたん} タタール (Tatar) のこと。八世紀から十三世紀初期にかけて蒙古に住んでいた蒙古系民族の一部族の名。

後に蒙古帝国、または元朝の子孫の名前として用いられることもあった。

高宗皇帝 中国・南宋の初代皇帝 (在位は一二二七年—一二六二年)。徽宗^{きそう}の第九子。徽宗および欽宗^{きんそう}が金の軍勢に捕らえられたために即位した。臨安を首都と定め、金と和議を結び、南宋の基礎を築いた。のちに元によって滅ぼされた。なお、皇位の順として徽宗の孫にあたるため「徽宗の孫」と仰せられたと思われる。

臨安行在府^{りんあんざいふ} 中国・南宋の国都。臨安府ともいう。浙江省杭州^{せつこう こうしゅう}の地。行在府は仮の都のこと。靖康二年^{せいこう} (一二二七年) に北宋の国都開封^{かいほう}が金軍の攻撃を受けて陥落し、徽宗^{きそう}、欽宗^{きんそう}が捕らえられたため、欽宗の弟高宗が江南の臨安で即位し、仮の都を定めた。しかし華北の地は奪回できなかった。

高麗^{こま} 六百余国も新羅百濟等の諸国等も 朝鮮半島の三韓分立当時、高麗^{こま}は六百六十余国、新羅^{しらぎ}は五百六十余国、百濟は四百六十余国といわれていた。

大蒙古国の皇帝 蒙古帝国第五代フビライのこと。蒙古国第三代のテムジン (一二六二年—一二三七年) は南宋の高宗紹興二十五年に生まれ、二十八歳でジンギスカンと称し、その後、全蒙古を統一し、さらに中国の北部、西部、南ロシア、中央アジアなどを征し、ヨーロッパにも遠征した。これが太祖である。第五代フビライは全中国を統一し、一二六〇年 (文応元年) 即位して世祖と号した。一二七一年 (文永八年) にはじめて国号を元となえた。元の領土は、中国を中心に内外蒙古、チベット、中央アジア、東南アジア、ヨーロッパにまでおよび空前の大国家であった。わが国には文永五年、建治元年、弘安二年の三度、使いを派し、文永、弘安の二回にわたって

来寇した。世祖いらい十一世九十八年、順帝のとき（一二三六八年）滅びた。

今の日本国の^い嵯^き岐・^{つしま}対馬並びに九国のごとし 蒙古は文永十一年十月、日本をおそい、嵯岐は守護代平景隆、対馬は守護代宗助^{そうのすけ}国はじめほとんど全滅し、九州も大きな被害をうけた。

権大乘 釈尊一代の仏教を大別して小乗教と大乘教とに分け、更に、大乘教を二つに分けたときの一つである権大乘教のこと。実大乘に対する語。権とは「かり」の意であり、方便である。すなわち、仏の真実の教えである実大乘教に衆生を誘引するため、方便として仮に説かれた大乘教のこと。慧遠の『大乘義章』巻九の「大に二あり、一には実大、二には権大なり」（大正四十四巻六四八頁）等の文に由来する。天台大師の教判によると、華嚴、方等、般若時に説かれた大乘の諸経をさす。

六道・四生 六道は地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天、四生は卵生・湿生・胎生・化生をいう。卵生は鳥のように卵から生まれ、湿生は虫のように湿気から生まれ、胎生は人間のように母胎から生まれるもの、化生とは諸天、地獄、中有のように他に託するところがなく、過去からの自らの力によって忽然と生まれるものとされている。六道に出生する時に四種の出生の仕方があること。

要当説真実 法華経方便品第二の文。「世尊は法久しくして後 要^{かなら}ず^{まさ}当に真実を説きたもうべし」（妙法蓮華経並開結一五八頁）と。

多宝仏 多宝如来のこと。東方宝浄世界の仏。いずこであつても、もし法華経を説くことがあれば、それが真実であることを証明するために、宝塔に乗って出現するという。法華経見宝塔品第十一では、涌出した宝塔の中から釈尊の説く法華経が真実であることを証明した。「爾^その時に宝塔の中より、大音声を出して歎^{たん}じて言^{のたま}わく……釈迦牟尼世尊、所説の如きは、皆是れ真実なり」（妙法蓮華経並開結四〇〇頁）とある。また宝塔の中に釈尊と並坐

して虚空会の儀式の中心となった。

広長舌^{こうちようぜつ}

広長舌相のこと。仏の舌が柔軟で薄く、加えて額にとどくほど長く広いこと。『大智度論』巻四に説かれ

ている仏の三十二相の一つ。大舌相ともいう。転じて説法そのものをさす場合もある。中阿含經卷四十一には、
仏の舌はその面を遍^{あまね}覆^{おほ}うとあるところから覆面舌相ともいう。古代からインドでは言葉の眞実を証明するのに
舌を出す風習があり、舌が長ければ長いほど、その言説が眞実であることの確かな証明とされ、またバラモンの
間では舌が広く長い者には虚妄がないとされた。ゆえに広長舌相は不妄語をあらわす。

色究竟^{しきくきよう}

阿迦尼咤天^{あかにたてん}、有頂天^{うちようてん}ともいう。色界十八天の一つ。色界四禪天の頂上にあり、色界天の最頂にあることか

ら色究竟という。欲界を離れて静慮^{じようりよ}を修行し、煩惱におかされることのない淨妙の色質のみが存在する所であ
り、四禪定^{しぜんじよう}の最高である第四禪を修した者の住处となる。また第四禪の九天の中、無煩天^{むぼん}、無熱天^{むねつ}、善見天^{ぜんけん}、
善現天^{ぜんげん}と共に五淨居天^{ごじようごてん}と称し、声聞乘四果の一つである不還果^{ふげんか}（阿那含果^{あなごんか}）の聖者の居所とされている。色究竟
天を超えると意識のみが存在する無色界に入る。

後五百歳に一切の仏法の滅せん時……日寛上人は、この文について「この文に三意あり。所謂、一には白法隱没

の時来るが故に。二には本化なれば付嘱せられ給うが故に。三には本未有善の機あるが故に云云」（文段集二五六
頁）と述べられている。大聖人の大白法の弘通される時は従来のすべての教法の力が失われる時であり、その弘
通の使命を付嘱された人こそ本化地涌の菩薩であり、弘通される衆生の機根は謗法一闡提、白癩の病の衆生なの
である。

上行菩薩 法華經從地涌出品第十五で、大地から涌出した地涌の菩薩の上首。釈尊は法華經如来寿量品第十六の説

法の後に、法華經如来神力品第二十一で滅後末法のため、上行菩薩に法華經を別付嘱した。上行菩薩の本地は久

遠元初の自受用報身如来である。

ほうぼういつせんだい
謗法一闡提

謗法とは誹謗正法の略。正しく仏法を理解せず、正法を謗そしつて信受しないこと。また、正法を憎み、人に誤った法を説いて正法を捨てさせることも謗法となる。謗法が無間地獄に墮ちる業因であることが法華経譬喻品第三に説かれている。一闡提とは梵語イツチャンテイカ (icchantika) の音写。一闡底迦とも書き、断善根、信不具足と訳す。正法を信ずる心がなく成仏の機縁をもたない衆生のこと。

講義

本章以後は、末法の初めを明かす段であり、初めに本章では、仏の予言が虚妄こもうでないことを示して、必ず妙法蓮華経が末法に広宣流布することを述べられている。

いちえんがだい とうじょう 一閻浮提に鬭諍起るべき時節なり

当時は世界中が大戦乱の中にあつた。

日本では、承久じようきゆうの乱らんにより三上皇が島流しにされ、天皇が廃せられた翌年に、日蓮大聖人は御誕生になつている。その後も国内には内紛や謀反むほんが相ついで起きており、外国では蒙古の勃興ぼつこうにより各国が征服されて、次第に日本にもその危機が迫りつつあつた。中国大陆の情勢は、本文にも仰せのとおり、蒙古の大軍が、漢土三百六十方国、二百六十余州を打ち破り、弘安二年には南宋が滅亡した。西は中央ア

ジアからヨーロッパまで、東は朝鮮半島まで、ことごとく蒙古に破られて、島国の日本だけが残されていたのである。西洋では東ローマ帝国が一時占領されてラテン帝国となった時代であり、日蓮大聖人の御誕生は、第四次十字軍の十九年後に当たるが、第五次、第六次、第七次と、次々に十字軍が派遣されて、激烈な宗教戦争が戦われていたのである。

しかし、この時には結果的に幕府は衰亡したが、国は滅亡しなかったのである。すなわち一閻浮提に闘争がおこったが、逆縁の広宣流布のみで順縁広布にはいたらなかったことは前述のとおりである。

法華經の結縁なき者のためには

大集經は権大乘經であつて成仏得道はできない教えであるが、六道、四生や三世のことを説いている点は眞実であるとの御文意である。法華經の結縁なき者のためには未顕眞実と仰せられているから、「法華經の結縁のある者には眞実の教えなのか」との疑問がおきる。これは正像と末法の相違であつて、正像二千年には法華經に結縁のある衆生が生まれてきているので、権教を縁とし法華の下種を熟する事ができたが、いま末法に入つては結縁のない衆生ばかりであるから、権教ではいくら修行しても熟し脱することができない。寿量品文底秘沈の下種仏法でなければならぬ所以である。

「顕謗法抄」には「或人云く無量義經の四十余年未顕眞実の文はあえて四十余年の一切の経經・並に文文・句句を皆未顕眞実と説き給にはあらず、但四十余年の経經に処処に決定性の二乗を永不成仏と

嫌きらはせ給い……答えて云く此の料簡りようけんは東土とくいちの得一とくいちが料簡に似たり」(御書四四九頁)と仰せである。この御文は、文々句々がみな未顕真実ではないという得一の説を破されているのである。得一は文々句々ことごとく未顕真実であるということになれば、今の「撰時抄」の文に反するではないか、というのである。

これに対し、日寛上人は、得一は爾前にぜん経に成仏往生のあることを主張するが、爾前に成仏はないから、文々句々ことごとく未顕真実となる、とお答えである(文段集二五六頁)。しかし成仏以外のことからその限りではないので、爾前も真実であるという本抄の御文と一致するのである。

後五百歳に一切の仏法の滅せん時等

日寛上人はこの文に三意を挙げて、文底下種仏法の広宣流布を断言されている(文段集二五六頁)。第一に、一切の仏法が隠没おんもつしてしまいうえに、第二に、地涌の菩薩が後五百歳広宣流布の付嘱を受けているがゆえに、第三には、謗法ほうほう一闡提いつせんたいの本未有善の衆生なるがゆえに、釈尊の説いた熟脱の仏法ではなくて、本門寿量品文底秘沈の下種仏法が広宣流布するとの御意である。大地がひっくりかえろうと、高山がくずれ落ちようと、春の後に夏がこなくても、太陽が西から東へ回ろうと、月が地に落ちようと、「此の事は一定なるべし」との日蓮大聖人の御確信を、よくよく肝きもに銘すべきである。

そもそも日蓮大聖人の御予言は、第一に釈尊の経文に依られている。第二に、あくまでも民衆救済の

大慈悲を根幹にしておられる。第三に、仏法を根源にした社会観、世界観からの御予言である。ゆえにわれわれ末弟に対する偉大なる御遺命と拝すべきである。本抄に「外典に曰く未萌^{みぼう}をしるを聖人という内典に云く三世を知るを聖人という余に二度の^{高名}かうみようあり」(御書二八七ページ)と仰せられ、さらに「佐渡御書」には「現世に云^いをく言^{こと}の違^{たが}はざらんをもて後生の疑をなすべからず」(御書九五七ページ)と御教示である。われわれは、御本仏の教えを虚妄^{こもう}にすることなく、絶対の確信をもって、御遺命を達成しなければならぬ。

「後五百歳に一切の仏法の滅せん時」と仰せのように、釈迦仏法はすべて滅してしまふのである。それにもかかわらず、念仏、真言、禪などという邪宗が、さも仏教であるかのような顔をして、いまだに存在しているということは、釈尊の真意に反することはなほだしいということを知らなくてはならない。それは最早形のみで、そこには人々を幸せに導く功力は微塵^{みじん}もないのである。

第十四章

能弘の師徳を顕す

此の事一定ならば鬪諍堅固の時・日本国の王臣と並びに万民等が仏の御使として南無妙法蓮華經を流布せんとするを或は罵詈めりし或は惡口ちようちやくし或は流罪けんぞくし或は打擲ちようちやくし弟子眷屬等を種種の難にあわする人人いかでか安穩あんのんにては候べき、これをば愚癡ぐちの者は咒詛じゆそすともひぬべし、法華經をひろむる者は日本国の一切衆生の父母なり章安大師云く「彼が為に惡を除くは即ち是れ彼が親なり」等云云、されば日蓮は当帝の父母・念仏者・禅衆・真言師等が師範しはんなり又主君なり、而るを上一人より下万民にいたるまであだ怨をなすをば日月いかでか彼等が頂を照し給うべき地神いかでか彼等の足を戴いたき給うべき、提婆達多だいばだつたは仏を打ちたてまつりしかば大地揺動ようどうして火炎いでにき、檀弥羅王だんみらは師子尊ししそんじや者の頸くびを切りしかば右の手刀とともに落ちぬ、徽宗皇帝きそうは法道が面かおに火印かおかなやきをやきて江南こうなんにながせしかば半年が内にゑびすの手にかかり給いき、蒙古のせめも又かくのごとくなるべし、設い五天の兵つわものをあつめて鉄圀山てつせんを城とせりともかなふべからず必ず日本国の一切衆生・兵難に値うべし、されば日蓮が法華經の行者にてあるなきかはこれにても見るべし、教主釈尊記して云く末代惡世に法華經を弘通するものを惡口罵詈めり等せん人は我を一劫が間あだせん者の罪にも百千万億倍すぎたるべしと・とかせ給へり、而るを今の日本国の国主・万民等・雅意わがにまかせて父母・宿世すくせの敵かたきよりもいたく憎くみ謀反むほん・殺害の者よりも・つよくせめぬるは現身にも大地われて入り天雷も身をさ裂れかざるは不審なり、日蓮が法華經の行者にてあらざるか・もししからばををきになげかし、今生に

は万人にせめられて片時もやすからず後生には惡道に墮ん事あさましとも申すばかりなし、又日蓮法華經の行者ならずばいかなる者の一乗の持者にてはあるべきぞ、法然が法華經をなげすてよ善導が千中無一・道綽どうしゃくが未有一人得者と申すが法華經の行者にて候か、又弘法大師の云く法華經を行ずるは戲論けろんなりとかかれたるが法華經の行者なるべきか、經文には能持のうじ是經能說ぜきようのうせつしきよう此經しきようなんどこそとかれて候へよくとくと申すはいかなるぞと申すに於諸經中最在其上と申して大日經・華嚴經・涅槃經・般若經等に法華經はすぐれて候なりと申す者をこそ經文には法華經の行者とはとかれて候へ、もし經文のごとくならば日本国に仏法渡わたて七百余年、傳教大師と日蓮とが外は一人も法華經の行者はなきぞかし、いかにいかにとをもうところに頭破ずはさ作七分・口則閉塞くそくへいそくのなかりけるは道理にて候いけるなり、此等は浅き罰ばちなり但一人二人等のことなり、日蓮は閻浮えんぶ第一の法華經の行者なり此れをそしり此れをあだむ人を結構けつこうせん人は閻浮えんぶ第一の大難にあうべし、これは日本国をふり振ゆるがす正嘉しょうかの大地震一天を罰する文永の大彗星等なり、此等をみよ仏滅後の後仏法を行ずる者にあだ怨をなすといへども今のごとくの大難は一度もなきなり、南無妙法蓮華經と一切衆生にすすめたる人一人もなし、此の徳はたれか一天に眼を合せ四海に肩をならぶべきや。

通解

——このことが決定的であるならば、鬭諍堅固の時に日本国の王臣ならびに万民等が、仏の御使いとして南無妙法蓮華經を流布しようとする人を、あるいはのしつたり、あるいは惡口をいったり、あるいは

流罪にし、あるいは杖で打ち、その弟子や眷属等を種々の難にあわせている人々が、どうして安穩でいられようか。こういうとおろかな人間は呪のろっていると思うであろう。

法華經をひろめる者は、日本国の一切衆生の父母である。章安大師は「相手のために悪を除いてあげることは相手の人にとっては親である」といつている。されば、日蓮は日本の皇帝の父母であり、念仏者、禅衆、真言師等の師範しはんであり、また主君である。

しかるに、上一人より下万民にいたるまで、日蓮をあだむのだから、日天月天はどうして彼等の頂を照らしていられようか。地神はどうして彼らの足をいただいておられようか。提婆達多だいばだつたは仏を打ちたたてまいったので、大地が揺れ動き火炎が現じた。檀弥羅王だんみらは、師子尊者の頸を切ったので、右の手が刀とともに落ちたという。徽宗皇帝きそうは、法道三蔵の顔にかなやきをおして江南に流したので、半年内に蕃族にとらえられてしまった。蒙古が来襲するの、これと同じである。たとえ五天竺の兵を集め、鉄圀山てつぐせんを城として防いでも、防げるものではない。かならず日本国の一切衆生は兵難にあうであろう。

されば、日蓮が法華經の行者であるかないかは、この現証によって知るべきである。教主釈尊は「末代悪世に、法華經をひろめる者の悪口をいったり、馬鹿にしたりする者は、仏を一劫の間怨あだした罪よりも百千万億倍も過ぎる罪をうけるであろう」と予言されている。しかるに、今の日本国の国主や万民は我見のままに父母の敵や宿世からの敵よりも強く日蓮をにくみ、謀反人むはんや人を殺害した者よりも強く日蓮を責めているのに現身にも大地が割れて地獄へおちもせず、天雷に身を引き裂かれもしないのは不審である。それでは日蓮が法華經の行者ではないのであろうか。もしそうであるとすれば、おおいに嘆かわしいことである。この世では万人に責められて片時の安らぎもなく、後生には悪道に墮ちるのならば、実にあさまし

い限りである。また日蓮が法華經の行者でないとするならば、だれが一仏乗の持者なのか。

法然は「法華經をなげすてよ」といい、善導は「千中無一」といい、道綽は「未有一人得者」といっているが、こういう者たちが、法華經の行者なのか。また弘法大師は「法華經を行ずるのは戯れたわむの論だ」と説いているが、こんなのが法華經の行者なのか。經文には「能くこの經を持つ」「能くこの經を説く」などと説かれている。この「能く説く」というのは、どんなことかといえば、「諸經の中において、この法華經はもつともその上にある」といって、大日經や華嚴經や涅槃經や般若經等より法華經が勝れているという者をこそ、經文には「法華經の行者なり」と説かれているのである。もし經文のとおりなら、日本の国に仏法が渡って七百余年になるが、伝教大師と日蓮以外の者は一人も法華經の行者ではないのである。そこでいろいろと考えるのに、「頭が七分に破れる」「口が閉塞へいそくする」という現証がないのはまた道理なのである。これらは浅い罰であって、また一人か二人だけがうけることである。日蓮は世界第一の法華經の行者である。この日蓮を謗そしったり怨あだんだりする者の味方になるような者は、世界第一の大難にあらうであらう。その現証が日本国を振りゆるがす正嘉しょうかの大地震や一天を罰する文永ぶんえいの大彗星すいせいとなって現れたのである。これらを見よ、釈尊が入滅してから今日まで、仏法を行ずる者に怨をなしたけれどもこのような大難は一度もなかった。南無妙法蓮華經と一切衆生に勧めた人も一人もなかった。その徳は、だれが一天に眼を合わせ、四海に肩をならべる者がいるだろうか。

語訳

しょうあん
章安大師

(五六一年―六三三年)。中国の隋末・唐初の人。姓は呉氏。諱いみなは灌頂かんじょう。浙江省台州府臨海県に生まれる。

二十五歳で天台大師の弟子となり、十三年間教えを受け、天台教觀の奥義を究めた。師の所説を百余卷に編纂して後世に伝えた。天台三大部の『法華玄義』『法華文句』『摩訶止観』なども章安大師の筆記である。天台大師の没後多くの書を著し、三論宗の吉蔵は、章安大師の義記によって帰伏したという。主な著書に『涅槃玄義』二卷、『涅槃經疏』二十卷などがある。

章安大師云く「彼が為に……」章安大師の『涅槃經疏』第八の文。

檀弥羅王は師子尊者の頸を切りしかば 檀弥羅王は梵名ミヒラクラ (Mihira-kula) の音訳。弥羅掘などともいう。北インド罽賓国の王。師子尊者は六世紀ごろの中インドの人で、付法蔵の最後の伝燈者。『付法蔵因縁伝』巻六によると、檀弥羅王は邪見が盛んで敬信の念がなく、国中の寺塔を破壊し、衆僧を殺害した。そして利剣をもって師子尊者を殺害し、付法をここに断絶させた。『景德伝燈録』巻二によると、王が師子尊者を切ったとき、王の右臂もまた地に落ち、七日にして死んだという。

五天 インドの古称。上古においてインドは、東天竺・西天竺・南天竺・北天竺・中天竺の五つにわけられていた。これを五天竺、五印度と呼んだ。

鉄圀山 一小世界を囲む鉄山のこと。須弥山を中心とする九山八海の一番外側にある鉄山のこと。鉄輪圀山ともいう。また三千大千世界を囲む鉄山をさすこともあり、この時は前者を小鉄圀山、後者を大鉄圀山という。

教主釈尊記して云く末代惡世に 法華經法師品第十に「若し惡人有って、不善の心を以って、一劫の中に於いて、現に仏の前に於いて常に仏を毀罵せん、其の罪尚輕し。若し一人の惡言を以って、在家出家の、法華經を誦誦する者を毀訾せん、其の罪甚だ重し」(妙法蓮華經並開結三八六頁)とある。

雅意 我意、我見のこと。

弘法大師（七七四年―八三五年）。平安時代初期の日本真言宗の開祖。諱は空海。弘法大師は諡号。姓は佐伯、幼

名は真魚。讃岐国（香川県）多度郡の生まれ。十五歳の時、奈良で阿刀大足に論語、孝経、史伝等を学び、十八

歳で京都で大学に入り、尚書、左氏春秋等を修めた。桓武天皇の治世、延暦十二年（七九三年）勤操の下で得度。

延暦二十三年（八〇四年）留学生として入唐し、不空の弟子である青竜寺の慧果に胎藏界・金剛界大曼荼羅法の

付法を受け、遍照金剛の号を受けた。帰朝後、弘仁七年（八一六年）高野山に金剛峰寺を創建し、密教の流布に

努めた。著書には『三教指帰』三卷、『弁頭密二教論』二卷、『十住心論』十卷、『秘藏宝鑰』三卷等がある。

戲論『大日経疏』に「世の戲人の散乱の心をもつて……ゆえに戲論と名づくなるなり」などとある。弘法が真言

第一、華嚴第二、法華第三の邪義を立て、法華を第三の戲論と悪口した。

能持是経能説此経 能持是経とは、法華経分別功德品第十七に「能く是の経を持ち」（妙法蓮華経並開結五二五）

「能く是の経を持たん者は」（妙法蓮華経並開結五二八）等とあり、如来神力品第二十一には「能く是の経を持た

んを以つての故に」（妙法蓮華経並開結五八二）、「能く是の経を持たん者は」（妙法蓮華経並開結五八四）等とあ

る。また能説此経とは見宝塔品第十一に「能く此の経を説かん」（妙法蓮華経並開結四一六）等とある。

於諸経中最在其上 法華経安樂行品第十四の文で「此の法華経は、諸仏如来の秘密の蔵なり。諸経の中に於いて、

最も其の上に在り」（妙法蓮華経並開結四六五）とある。また藥王品第二十三にも「此の法華経も亦復是の如し。

諸経の中に於いて、最も為れ其の上なり」（妙法蓮華経並開結六〇〇）等とある。

頭破作七分・口則閉塞 法華経陀羅尼品第二十六に「説法者を悩乱せば 頭破れて七分に作ること 阿梨樹の枝の

如くならん」（妙法蓮華経並開結六四五）と、また安樂行品第十四には、「若し人惡み罵らば 口則ち閉塞せん」（妙法蓮華経並開結四六九）とあるのをさす。

結構せん 結党營構の意味で、すなわち仲間として援助すること。

正嘉の大地震 正嘉元年八月二十三日戌亥いぬいの刻、すなわち午後九時ごろ鎌倉地方を襲った大地震のこと。

文永の大彗星 文永元年七月五日の大彗星。

講義

前章で必ず広宣布すべきことを明かされて、本章では、法華經の行者日蓮大聖人を誹謗ひぼうする者が、大罰を受けることによって、日蓮大聖人の御徳がいかに崇高であるかを明かされている。謗法の罰としては法華經に「頭が七つに破れる」とか、「口が則ち閉塞へいそくする」と説かれているけれども、それは一人、二人の浅い罰であって、日蓮大聖人をあだむ罪は世界第一の大罪であり、いまだかつて世界中になかった大罰をうける。この大罰の現証によって、大聖人の御徳の偉大さを知らしめようとされているのである。

仏の御使として南無妙法蓮華經を流布等

南無妙法蓮華經をひろめる人は仏の御使いなりというのは、外用げゆうせんごん浅近の辺であり、「日蓮は当帝の父母・念佛者・禅衆・真言師等が師範なり又主君なり」とは内証ないしょうじんび深秘の辺であって、すなわち日蓮大聖人が末法の主師親三徳具備の御本仏なりとの趣旨しゆしである。

このように、日蓮大聖人が仏の御使いとか、上行菩薩の再誕とか仰せられていても、その御内証は主師親三徳具備の末法の御本仏であることは明白な事実である。日蓮大聖人御自身が、このようにはつきりと断言されているにもかかわらず、日蓮宗と称する邪宗の徒は、一向にこの御文を読むことができないで、日蓮大菩薩などと呼んで平然としているのは、まことにあわれむべき存在であり、師敵対謗法してきたいぼうほうの限りである。

「開目抄下」には「日蓮は日本国の諸人主師親にしうし父母なり」（御書二三七ページ）と仰せられ、さらには「佐渡御書」には「日蓮は此関東の御一門の棟梁なり・日月なり・亀鏡なり・眼目なり・日蓮捨て去る時・七難必ず起るべし」（御書九五七ページ）と仰せられ、さらに「報恩抄」には「日蓮が慈悲曠大こうだいならば南無妙法蓮華経は万年の外・未来までもながるべし、日本国の一切衆生の盲目をひらける功德あり、無間地獄の道をふさぎぬ」（御書三二九ページ）と御教示されている。この御文で慈悲曠大は親の徳、一切衆生の盲目をひらくは師の徳、無間地獄の道をふさぐは主の徳である。すなわち主師親三徳の御宣言なのである。

なお「御義口伝下」の「末法の仏とは凡夫なり凡夫僧なり、法とは題目なり僧とは我等行者なり、仏とも云われ又凡夫僧とも云わるるなり」（御書七六六ページ）との仰せや、「諸法実相抄」の「されば釈迦・多宝の二仏と云うも用の仏ゆうなり、妙法蓮華経こそ本仏にては御座候おわしへ、経に云く『如来秘密神通之力にょらいひみつじんづうしりき』是なり、如来秘密は体の三身にして本仏なり、神通之力は用の三身にして迹仏ぞかし、凡夫は体の三身

にして本仏ぞかし、仏は用の三身にして迹仏なり」(御書二三五八頁)との仰せ等もあわせて深く拝すべきである。

蒙古のせめ……兵難に値うべし

正法の行者を迫害し邪法邪師を重んずるならば、その国が滅びるとは、「立正安国論」の予言であり、七百年後の今日、事実となって現れた。江戸時代の日寛上人の時代(享保十一年、一七二六年滅)には、いまだ亡国の現象はなかったが、日寛上人はこの御文を次のように釈されている。

問う、太平記によると、日本は元軍を破って勝っているではないか。国が滅ぶという日蓮大聖人の予言は的中しなかったのではないか。答う、この文には多くの意味があるけれども、しばらく二意を示そう。第一に、これは大悲忠諫ちゆうかんの辞である。たとえば父が子供の過ちを責める時には、改めないと必ず身を滅ぼし家を滅ぼすであろうというが、その意は身を全うし家を全うさせんがために、親心からいうのである。大聖人もまた謗法の過とがを挙げて蒙古のせめ逃のがれがたとしと仰せられるが、その意は、国を安んじ身を安んぜしめるための大悲の心からである。

次に人力の分齊に約す。ただ人力によるだけならば実に退治しがたいのである。故にまた太平記によると、大元の軍を打ち破ったことは、わが国の武勇によるのではなくて、大小の神祇が冥助みようじよした神力によつて勝利をえたのだという。もしそうなら諸天善神がこの国を捨て去ったという所論と違うではない

か。答う、神天上とは謗者ほうしやに約するのであって、信者に約すならば、信者の頂には神がいるのである。たとえば濁水には月の影は映らないが清水にはすなわち映るのと同じである。わが国の神が冥助した理由にまた二意がある。一には鎌倉幕府が改悔かいげしたことによる。大聖人を佐渡へ流し奉ったが、ついに赦免しやめんして大聖人の御弘通を妨害ぼうがいしなくなった。二には日蓮大聖人が国を護られたことによる。すなわち、「種種御振舞御書」に「かかる日蓮を用いぬるともあしくうやまはば国亡ぶべし、何に況いかんや数百人ににくませ二度まで流しぬ、此の国の亡びん事疑いなるべけれども且しばらく禁をなして国をたすけ給へと日蓮がひかうればこそ今までは安穩あんゐんにありつれども・はう法に過ぐれば罰あたりぬるなり」(御書九一九ページ)と仰せのとおりである。(文段集二五八ページ―二五九ページの趣意)

こうして、日蓮大聖人の御在世中は、亡国の悲運からまぬかれたが、七百年後において「はう法に過ぐれば罰あたりぬるなり」の御予言が的中して、第二次世界大戦において敗戦亡国となってしまったのである。

なお、これは一国についての賞罰の原理であるが、このことは、個人についても、一家についても、一会社についても同じことがいえるのである。たとえば、妻が信仰していて、夫が反対しているような場合、夫が謗法を犯せば、その家庭にはそれなりの罰の現証が顕れる。しかし一方では、妻や子供が熱心に信仰してさえいれば、失業して路頭に迷うとか、主人が倒れるということではなく、やはり熱心にやっていたらいるほど守られるのである。むしろ妻の信心が純真であり熱心であれば、夫に少しの欠点

があつても、その家庭は不思議によく守られ、繁栄していく例はよくあることである。

教主釈尊記して云く末代惡世に等

法華經法師品第十に「藥王、若し惡人有つて、不善の心を以つて、一劫の中に於いて、現に仏の前に於いて常に仏を毀謗せん、其の罪尚輕し。若し人一の惡言を以つて、在家出家の、法華經を讀誦する者を毀訾せん、其の罪甚だ重し」(妙法蓮華經並開結三八六ページ)とあるのをさす。

すなわち創価学会員のごとく大御本尊を信じ折伏行に励む者を迫害し惡口をいえば、たった一言の惡口であつても、仏を一劫の間そしる罪より、はなはだ重いといふのである。信じて持つところの大御本尊が尊貴のゆえに、その人も貴く、したがって謗する者はこのような重罪となり、現罰をうけるのである。まことに恐るべく、慎むべきことである。

法華經普賢品第二十八にいわく「若し復是の經典を受持せん者を見て、其の過惡を出さん。若しは實にもあれ、若しは不實にもあれ、此の人は現世に白癩の病を得ん。若し之を輕笑すること有ん者は、當に世世に、牙齒疎欠、醜唇平鼻、手脚繚戾し、眼目角眵に、身体臭穢にして、惡瘡膿血、水腹短氣、諸の惡重病あるべし」(妙法蓮華經並開結六七一ページ)と。このように、大御本尊を受持する者の過惡を出すならば、もしそれが事實であつても、また事實でなくても、このような大罰を受ける。また輕笑することによつても、このような罰を受け、長く不幸のどん底に沈むことになってしまうのである。

いかにかにとをもうところに頭破作七分・口則閉塞のなかりけるは

法華經の行者を誹謗してもなにゆえ現罰がないのかという疑問を提起されているのである。日寛上人の仰せには「謗者がもし一人や二人なら頭破作七分や口則閉塞もあるだろう。しかるに、今は上一人より下万民にいたるまで、日本国じゅう、みな謗者である。たとえば、頭髮が全て白髪となれば抜き捨てがたくなるようなものであるから、『頭破作七分・口則閉塞のなかりけるは道理にて候いけるなり』と仰せられているのである。しかるに日蓮大聖人は閻浮第一の法華經の行者なるゆえに、これを怨む人々は、閻浮第一の大罰をこうむるのである。いわゆる正嘉の大地震や文永の大彗星がそれである。これはすなわち謗者の罰が大きいのによせて、能弘の師徳の大なることをあらわされているのである」(要旨、

第十五章

総じて問答料簡す

疑つて云くたと設たい正法の時は仏の在世に對すれば根機劣れつなりとも像末ぞうまつに對すれば最上の上機なり、いかでか正法の始に法華經をば用いざるべき随つて馬鳴・竜樹・提婆・無著等も正法一千年の内にこそ出現せさせ給へ、天親菩薩は千部の論師・法華論を造りて諸經の中第一の義を存す真諦三藏しんたいさんざうの相伝に云く月支がつしに法華經を弘通せる家・五十余家・天親は其の一也と已上正法なり、像法に入つては天台大師・像法の半なかばに漢土に出現して玄と文と止との三十卷を造りて法華經の淵底えんていを極めたり、像法の末に伝教大師・日本に出現して天台大師の円慧・円定の二法を我が朝に弘通せしむるのみならず円頓えんどんの大戒場を叡山に建立して日本一州皆同じく円戒の地になして上一人より下万民まで延曆寺えんりやくじを師範しはんと仰あおがせ給う豈あに像法の時法華經の広宣流布にあらずや、答えて云く如来の教法は必ず機に随うという事は世間の学者の存知なり、しかれども仏教はしからず上根上智の人のために必ず大法を説くならば初成道の時なんぞ法華經をとき給はざる正法の先五百年さきに大乘經を弘通すべし、有縁うえんの人に大法を説かせ給うならば淨飯大王・摩耶夫人まやふじんに觀仏三昧經・摩耶經まやきやうをとくべからず、無縁むえんの惡人謗法あくにんぼうぼうの者に秘法をあたえず与ば覺德比丘かくとくびくは無量の破戒の者に涅槃經をさづくべからず、不輕菩薩は誹謗ひぼうの四衆に向つていかに法華經をば弘通せさせ給ひしぞ、されば機に随つて法を説くと申すは大なる僻見びやくけんなり。

——疑っていわく、正法時代というのは、仏の在世に比べたら、衆生の根機が劣つているとしても、像法、末法の衆生に比べたら最上の上機である。どうして、正法時代の初めに法華經を用いなかったといえるのか。したがって、馬鳴、竜樹、提婆、無著等も、正法一千年の間にこそ出現されたのである。天親菩薩は千部の論師といわれ、しかも『法華論』を造って、法華經は諸經の中に第一であると立てた。また真諦三蔵の相伝によれば「インドで法華經を弘通したのは五十余家もあり、天親はその一つである」といつているが、これは正法時代のことである。像法に入つては、天台大師が、像法中ごろに中国に出現して、『玄義』『文句』『止観』の三十巻を造って、法華經の法門の奥底をきわめた。像法の末には、伝教大師が日本に出現して、天台大師の円慧・円定の二法を、わが国に弘通せしめたのみか、円頓の大戒場を比叡山に建立して、日本全国をみな同じく円戒の地となし、上一人の天皇から下万民にいたるまで、延暦寺を師範とおおぐようになった。これは、像法時代に法華經が広宣流布したことになるのではないのか。

答えていわく、如来の教法は、かならず衆生の機根にしたがって説かれるということとは、世間の学者の通常の考えである。しかし仏教はそうではない。機根の高い智慧のある人のために、かならず大法を説くというならば、釈尊が初めて成道した時に、どうして法華經を説かれなかったのか。また正法時代の前半の五百年には、大乘經をひろめるべきである。また仏に縁がある者に大法を説くというなら、浄飯王や摩耶夫人のために観仏三昧經や摩耶經等を説くべきではない。また仏に縁のない悪人謗法の者には秘法を与えないというのなら、覺徳比丘は無量の破戒の者に涅槃經を授けるわけがない。不輕菩薩は誹謗する四衆に向かつて、どうして法華經を弘通されたのか。ゆえに機根にしたがって法を説くというのは、大きな誤りである。

無著^{むじやく} インドの法相宗の祖。前出、第十章の語訳（二〇五頁）参照。

千部の論師 千部の論をつくって、仏の教義を解釈し弘めた人のこと。普通は竜樹^{りゆうじゆ}と天親^{てんじん}をさす。『百論序疏』によれば「天親は本小乗^{もとしょうじやう}を学び、五百部の小乗の論を造り……（後に兄の無著によって大乘に入り）大乘五百部の論を造る。時に人呼んで千部の論主となす」（大正四十二卷二三四頁）とある。

法華論 ①二卷。天親^{てんじん}釈。中国・北魏代の菩提流支^{ぼだいりうし}、曇林^{どんりん}等共訳。正しくは妙法蓮華經憂波提舍^{うぱだいしや}といい、妙法蓮華經論、法華經論ともいう。妙法蓮華經を略解釈したもの。最初に十四句偈を記し、次に序品を釈して七種の功徳成就を明かし、方便品は如来が説法した因果の相について述べ、譬喩品以下は七喩、三平等、十無上をもって釈している②一卷。天親^{てんじん}釈。中国・北魏代の勒那摩提^{ろくなまたい}、僧朗^{そうろう}共訳。妙法蓮華經論憂波提舍^{うぱだいしや}の異称。①の別訳である。

真諦三蔵^{しんたいさんざう}の相伝 真諦三蔵（四九九年—五六九年）は、中国・南北朝時代、摂論宗の祖。西インド優禪尼国^{うぜんにこく}の人で波羅末陀^{はらまだた}、または拘羅那他^{くろなた}という。真諦はその中国名。南北朝の梁・陳代に活躍した訳経僧で、訳経三蔵とも呼ばれる。梁の武帝から厚遇され、北齊や東魏にも歴遊して仏法興隆に尽くした。翻訳した経論には『摂大乘論』三卷、金光明經、『仏性論』など多数ある。「真諦三蔵の相伝」とは、唐の慧詳^{えしやう}訳という『法華伝記』に「真諦三蔵いわく、西方の相伝に法華の大教を説き五天竺^{てんてん}に流演^{りゅうえん}し、優婆提舍^{うぱだいしや}を造りその文義を釈する五十余家。仏涅槃の後五百年の終わり、竜樹菩薩『法華論』を造り、六百年の初め堅意菩薩^{けんいぼさつ}『釈論』を造る。ならびにいまだこの土に來らず旨^{しき}帰^{はか}を測らず、五百年中北天竺、丈夫国国師大婆羅門^{きやうろうしか}橋戸迦^{きやうと}の子、婆藪槃豆^{ばすばんず}此^こに天親と云う。亦『法

華論』を製し、六十四節の法門をもつて、その大義を釈す」とある。

玄と文と止との三十卷 『法華玄義』『法華文句』『摩訶止観』のおの十卷で三十卷。天台の三大部といわれている。

淵底 淵とは水が静かに深く湛えているありさまで、その底を淵底という。すなわち法門の道理が深遠であることをたとえている。天台は『法華文句』に「法性の淵底、玄宗の極地」（大正三十四卷二五頁）と述べている。

浄飯大王・摩耶夫人 釈尊の父と生母。浄飯大王は中インド迦毘羅衛国の王で、釈尊の父。白浄ともいう。浄飯王は釈尊の出家に反対するが、それを阻止することができず、釈尊が迦毘羅衛城へ帰還した折り、釈尊の化導によつて帰仏した。観仏三昧経は、釈尊が尼拘楼陀林において、父の浄飯王等のために観仏三昧に住して解脱を得ることを説いている。観仏三昧経は東晋の時代（三一七年―四二〇年）に仏陀跋陀羅によつて訳された。摩耶夫人は浄飯王の妃で、釈尊の母と伝えられる。他に異説が多くある。仏本行集経によると、摩耶は迦毘羅衛国の付近にあった天臂城の城主善覚王の第一女で、釈尊を産むが、生後七日にして世を去り、摩訶波闍波提が釈尊を養育したという。釈尊は母の恩を報ずるため、忉利天（三十三天）に登つて摩耶夫人のために摩耶経を説いたとされる。

覺徳比丘 涅槃経卷三に説かれている過去世の正法護持の比丘。過去拘尸那城に歓喜増益如来が出現し、その滅後、あと四十年で正法が滅しようとした末世に、覺徳は九部の經典を頒宣広説し、諸の比丘に対して「奴婢・牛羊・非法の物を畜養することを得ざれ」（大正十二卷三八三頁）と制した。この言葉を聞いて、多くの比丘は惡心を生じ、刀杖を執持して覺徳を殺害しようとした。この時、国王の有徳王が破戒の惡比丘と戦い、覺徳は守られたが、有徳王は死んだ。

不輕菩薩 法華經常不輕菩薩品第二十に説かれている常不輕菩薩のこと。威音王仏の滅後の像法時代に出現し、増上慢の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の四衆から惡口罵詈、杖木瓦石の迫害を受けながらも、すべての人に仏性が具わっているとして常に「我深く汝等を敬う。敢えて輕慢せず。所以は何ん。汝等皆菩薩の道を行じて、当に作仏することを得べし」（妙法蓮華經並開結五六七）と唱え、一切衆生を禮拜した。あらゆる人を常に輕んじなかつたので、常不輕と呼ばれた。釈尊の過去の姿の一つとされる。一方、不輕を輕賤、迫害した者は、その罪によつて千劫の間、阿鼻地獄に墮ちて大苦惱を受けた後、ふたたび不輕の教化にあつて仏道に住することができたという。

講義

この章からは大段の第二、料簡りようけんの段であり、本抄の終わりまでに十二の問答がある。初めから十一問答までは、正像について料簡し、第十二問答は末法についての料簡である。

十一問答のうち初めの一問答は總であり、後の十問答は別である。本章はすなわち初めの一問答で、總である。ゆえに、この章では、次のように、四つの難を挙げて設問されている。

第一に機に約して難じ、第二に馬鳴めみよう、竜樹等りゆうじゆに約して難じ、第三に天台に約して難じ、第四に伝教に約して難じられている。

そして、この章では機に対する難だけを会あして、後の三難は、次章以下に別して料簡されているので

ある。

像末に対すれば最上の上機なり等

正法時代は、像末に対すれば最上の上機であるから、正法の初めに法華經がひろめられるはずではないか。ましてや、像法には、天台も伝教も法華經を広宣流布しているではないか。どうして法華經の流布が末法に限るといふのかとの質問である。

撰時抄の初めに、すでに仏教は機によらず、ただ時によることを明かされているのに、なぜまた、このような疑問を設けるかとの問いに対し、日寛上人は「本抄の初めには、在世に約してその相を明かしたゆえに、今は滅後に約してこれを疑うのである」と仰せである（文段集二六〇頁）。そしてその結論は、如来の教法は必ず機に従うというのが世間の学者の主張であるが、仏教はそうではない。機に従って法を説くというのは、大なる僻見びやつけんであるとされて、釈尊の事実の説法の姿を例として挙げられているのである。

第十六章

竜樹・天親の弘通

問うて云く竜樹・世親等は法華經の実義をば宣べ給わずや、答えて云く宣べ給はず、問うて云く何なる教をか宣べ給いし、答えて云く華嚴・方等・般若・大日經等の權大乘・顯密の諸經をのべさせ給いて法華經の法門をば宣べさせ給はず、問うて云く何をもつてこれをしるや答えて云く竜樹菩薩の所造の論三十万偈・而れども尽して漢土・日本にわたらざれば其の心しりがたしといえども漢土にわたれる十住毘婆娑論・中論・大論等をもつて天竺の論をも比知して此れを知るなり。

疑つて云く天竺に残る論の中にわたれる論よりも勝れたる論やあるらん、答えて云く竜樹菩薩の事は私に申すべからず仏記し給う我が滅後に竜樹菩薩と申す人・南天竺に出ずべし彼の人の所詮は中論という論に有るべしと仏記し給う、随つて竜樹菩薩の流・天竺に七十家あり七十人ともに大論師なり、彼の七十家の人人は皆中論を本とす中論四卷・二十七品の肝心は因縁所生法の四句の偈なり、此の四句の偈は華嚴・般若等の四教・三諦の法門なりいまだ法華開会の三諦をば宣べ給はず。

疑つて云く汝がごとくに料簡せる人ありや、答えて云く天台云く「中論を以て相比すること莫れ」又云く「天親竜樹内鑒冷然にして外は時の宜きに適う」等云云、妙樂云く「破会を論ぜば未だ法華に若かざる故に」云云、從義の云く「竜樹天親未だ天台に若かず」云云、問うて云く唐の末に不空三蔵一卷の論をわたす其の名を菩提心論となづく竜猛菩薩の造なり云云、弘法大師云く「此の論は竜猛千部の中の第一肝心の論」と云云、答えて云く此の論一部七丁あり竜猛の言ならぬ事処

処に多し故に目錄にも或は竜猛或は不空と両方にいまだ事定まらず、其の上・此の論文は一代を括
れる論にもあらず荒量なる事此れ多し、先ず唯真言法中の肝心の文あやまりなり其の故は文証現証
ある法華經の即身成仏をばなきになして文証も現証もあとかたもなき真言經に即身成仏を立て候又
唯ゆいという唯ただの一字は第一のあやまりなり、事の体を見るに不空三藏の私につくりて候を時の人に
重をもくせせんがために事を竜猛によせたるか其の上不空三藏は誤る事かずをほし所謂法華經の觀
智の儀軌に寿量品を阿弥陀仏とかける眼の前の大僻見・陀羅尼品を神力品の次にをける属累品を経
末まうに下くだせる此等はいうかひなし、さるかともれば天台の大乗戒を盗んで代宗皇帝に宣旨を申し五台
山の五寺に立てたり、而も又真言の教相には天台宗をすべしといえりかたがた誑惑の事どもなり、
他人の訳ならば用ゆる事もありなん此の人の訳せる經論は信ぜられず、総じて月支より漢土に經論
をわたす人・旧訳・新訳に一百八十六人なり羅什三藏一人を除いてはいづれの人人も悞らざるはな
し、其の中に不空三藏は殊に誤多き上誑惑の心顯なり、疑つて云く何をもつて知るぞや羅什三藏よ
り外の人人はあやまりなりとは汝が禪宗・念仏・真言等の七宗を破るのみならず漢土・日本にわた
る一切の訳者を用いざるかいかん、答えて云く此の事は余が第一の秘事なり委細には向つて問うべ
し、但しすこし申すべし羅什三藏の云く我漢土の一切經を見るに皆梵語のごとくならずいかでか此
の事を顯すべき、但し一の大願あり身を不淨になして妻を帶すべし舌計り清淨になして仏法に妄語
せじ我死なば必やくべし焼かん時舌焼けるならば我が經をすてよと常に高座にしてとかせ給しな

り、上^{かみ}一人より下^{しも}万民にいたるまで願じて云く願くは羅什三蔵より後に死せんと、終^{つい}に死し給う後焼きたてまつりしかば不浄の身は皆灰となりぬ御舌計り火中に青蓮華^{しょうろう}生^{おひ}て其の上にあり五色の光明を放ちて夜は昼のごとく昼は日輪の御光^みをうばい給いき、さてこそ一切の訳人の経経は軽くなりて羅什三蔵^{らじゆう}の訳し給える経経・殊に法華経は漢土にやすやすとひろまり給いしか。

疑つて云く羅什^{らじゆう}已前はしかるべし已後の善無畏・不空等は如何、答えて云く已後なりとも訳者の舌の焼けるをば悞^{あやまり}ありけりとしるべしされば日本国に法相宗^{ほっそう}のはやりたりしを伝教大師責めさせ給いしには羅什三蔵は舌焼けず玄奘^{げんじよう}・慈恩^{じおん}は舌焼けぬとせめさせ給いしかば桓武天王^{かんむ}は道理とをぼして天台法華宗へはうつらせ給いしなり、涅槃^{ねはん}経の第三・第九等をみまいらすれば我が仏法は月支^{がつし}より他国へわたらん時、多くの謬誤^{あやまりしゆつたい}出来して衆生の得道^{とくどう}うすかるべしととかれて候、されば妙楽大師は「並びに進退は人に在^あり何ぞ聖旨^{かかわ}に関らん」とこそあそばされて候へ、今の人人いかに経のままに後世をねがうともあやまれる経経のままにねがはば得道もあるべからず、しかればとて仏の御とがにはあらじと^書かかれて候、仏教を習ふ法には大小・権実・顕密はさてをくこれこそ第一の大事にては候らめ。

通解

——問うていわく、竜樹、世親等は法華経の実義を述べられなかったのか。

答えていわく、述べられていない。

問うていわく、それではどんな教えを述べられたのか。

答えていわく、華嚴、方等、般若、大日經等の權大乘や顯・密の諸經を述べられて法華經の法門は述べられていない。

問うていわく、何をもってそれを知ることができるのか。

答えていわく、竜樹菩薩が造った論は三十万偈に及ぶという。しかし、それが全部は中国、日本に渡ってきていないから、竜樹の心を知ることとはできないが、中国に渡った『十住毘婆娑論』『中論』『大論』等をもって、インドに残されているであろうところの論の内容も推しはかることができるのである。

疑っていわく、インドに残っている論の中に、中国へ渡った論よりも勝れている論があるのではないだろうか。

答えていわく、竜樹菩薩のことは私が勝手な意見を述べる必要はない。釈尊が予言されているには「わが滅後に竜樹菩薩という人が南インドに出るであろう。この人の究極の法門は中論という論にある」と記されている。したがって竜樹菩薩を祖師とする流派がインドに七十家あり、七十人とも大論師であるが、彼の七十家の人々はみな『中論』を本としている。『中論』四卷二十七品の肝心は「因縁所生法」の四句の偈である。この四句の偈は華嚴、般若等の四教、三諦の法門であり、いまだ法華に開会された空假中三諦の法門は述べていないのである。

疑っていわく、汝のように考えていた人があるか。

答えていわく、天台は「中論などとは比較にならない」といい、また「天親、竜樹は法華の実義を内心では知っていたが、口に出してはいわないうで、外面は時の宜しきになつていた」といつている。また妙

樂は「權教を破り實教に會入^{えにゆう}することを論ずるならば、法華經には及ばない」といい、從義は「竜樹、天親は、いまだ天台には及ばない」等といっている。

問うていわく、唐の末に不空三藏が『菩提心論』という一卷の書をインドから渡してきて、これは竜猛の造ったものだといった。それをうけて弘法大師は「この論は竜猛が造った千部の論の中で第一の肝心の論だ」といっているがどうか。

答えていわく、この論は一部七丁あつて、竜猛のことばでないような内容が処々に多い。ゆえに目錄にもあるいは竜猛といい、あるいは不空といつて、いまだ決定されていない。そのうえ、この論は釈尊一代を総括した論でもなく、大雑把^{おおざっぱ}な見解が多い。まず肝心の文といわれている「唯真言法^{ただ}の中においてのみ」といっているのが誤りである。そのゆえは、文証も現証も明らかな法華經の即身成仏を無視して、文証も現証もあとかたもない真言の經に即身成仏を立てているからである。また「唯真言法の中」という「唯」の字が第一の誤りである。こうしたことから見ると、不空三藏が自分勝手につくった『菩提心論』を時の人に重要なものと見せかけるため竜猛の造ったものだといったのであろう。そのうえ不空三藏には誤りが数多い。いわゆる法華經の『觀智の儀軌^{ぎぎ}』に寿量品の仏を阿弥陀だと書いているのは目の前の大僻見^{びやくけん}であり、それから陀羅尼^{だらに}品を神力品の次においたり、屬累品^{ぞくるい}を經の末においたりするような誤りは話にならない。そうかと思えば天台の大乗戒を盗んで唐の代宗皇帝に宣旨^{せんじ}を申し下して五台山の五寺に立てている。しかも真言宗の教相判釈には天台宗の教判を用いるべしといっている。とにかくあれこれと世間を誑惑^{おうわく}することばかりである。他の人の訳した經なら用いることもあろうけれど、この人の訳した經論は信じられない。総じてインドから中国に經論を渡して訳した人は、旧訳と新訳で百八十六人いるが、羅什

三蔵一人を除いては、いずれの人々も誤らないものはない。その中でも不空三蔵は、ことに誤りが多いうえに、偽り惑わそうとする心が顕著である。

疑っていわく、羅什三蔵より外の人々が誤りだというのは、何をもって知ることができるのか。汝は禪宗、念仏、真言等の七宗を破るのみならず、中国、日本に渡るいっさいの訳者を用いないというのか。

答えていわく、このことは余の第一の秘事である。委細には面と向かつて問うがよい。ただし、今すこし述べよう。羅什三蔵は「自分が中国の一切経を見るのに、みな原本の梵語の経の通りではない。どのようにして、このことをはつきりさせようか。そこで一つの大願がある。自分の身は妻を帯して不浄だが、舌ばかりは仏法に妄語はしないので清浄である。自分が死んだら、必ず身を焼きなさい。その時に舌が焼けるならば、自分の訳した経を捨てなさい」と、常に高座で説法されていた。これを聞いて、上一人より下万民にいたるまで願うていうには「願わくは羅什三蔵より後に死にたいものだ」といつていた。ついに羅什の死なれた時、いわれた通り焼き奉ったが、不浄の身はみな焼けて灰となってしまうたが、御舌ばかりは火の中に青蓮華を生じて、その上にあった。五色の光明を放って夜は昼のごとく輝き、昼は太陽の光を奪うほどであった。このようなことがあったればこそ、ほかの人々の訳したいっさいの経々は軽くなり、羅什三蔵の訳された経々、ことに法華経が、やすやすと中国にひろまったのである。

疑っていわく、羅什以前は、そうかもしれないが、羅什以後の善無畏、不空等はどうかのか。

答えていわく、羅什以後だからといっても、訳した人の舌が焼けるのを見て、誤りがあると知らなければならぬ。されば日本に法相宗が流行していたころ、伝教大師はこれを「羅什三蔵は舌が焼けなかったのに、玄奘や慈恩は舌が焼けてしまったではないか」と責められたので、桓武天皇は伝教大師のいうのが

道理だとおぼしめし、天台法華宗へ移られたのである。涅槃經の第三、第九等を見れば、釈尊の仏法はインドから他国へ渡る時に、多くの誤謬あやまりが発生して衆生の得道も薄くなるであろうと説かれている。されば妙樂大師は「取捨は、人師のいかんによるのであり、仏の御意には関係がない」といわれているのである。今の世の人々がいかに經のままに後世を願うとも、過誤あやまりのある經文を信じて、願ったところで、得道ができるわけがない。得道ができないからといって、それは仏の過失となるのではないと書かれているのである。仏教を習うには、大小、権実、顕密等の立てわけはさておいて、このことが第一の大事ではないか。

三十万偈 竜樹菩薩の著作物の偈の総数。『竜樹菩薩伝』には、優婆提舍うぱだいしや十万偈、莊嚴仏道論しょうどんぶつどう五千偈、大悲方便論五千偈、無畏論十万偈をつくったとある。これで二十一万偈であるが、大数に約して三十万偈という。

十住毘婆娑論じゅうしゅうびばしや 前出、第四章の語訳（二二五頁）参照。

中論 四卷。りゅうじゆ竜樹述、しやうもく青目釈。ようしん姚秦（後秦）の鳩摩羅什くまらじしやう訳。『中觀論』ちゆうかんろん『正觀論』しやうかんろんともいう。三論の一つ。根本中頌と呼ばれる竜樹の偈頌げじゆと、青目の注釈とからなる。大乘教の理論的基礎となり、後の大乘思想に大きな影響を与えた。インドではこの書を依処として中觀派が起り、中国では『百論』『十二門論』と共に三論宗の依処となつた。

大論 『大智度論』の略称。百卷。竜樹造と伝えられる。ようしん姚秦の鳩摩羅什くまらじしやう訳。『摩訶般若波羅蜜經まかはんにやほらみつぎやうしやくろん』ともいう。内容は摩訶般若波羅蜜經（大品般若經）を注釈したもので、序品を第一卷から第三十四卷で釈し、以後一品につ

き一卷ないし三巻ずつに釈している。大品般若經の注釈にとどまらず、法華經などの諸大乘教の思想を取り入れて般若空觀を解釈し、大乘の菩薩思想や六波羅蜜などの実践法を解明しており、単に般若思想のみならず仏教思想全体を知るための重要な文献であるとともに、後の一切の大乘思想の母体となった。

仏記し給う 摩耶經に「一の比丘あり名を竜樹と言ふ。善く法要を説いて邪見の幢を滅し、正法の炬を然やさん」(大正十二卷一〇二三頁)とある。また大乘入楞伽經には「善逝涅槃の後、未來世に當にわが法を持つ者あるべし。南天竺國中に大名徳の比丘あらん。厥の号を竜樹と為づく。能く有無の宗を破し、世間の中にわが無上大乗の法を顯わして、初歡喜地を得、安樂國に往生す乃至諸縁和合のゆえに、このゆえに有法と説く。もし和合を離るれば、不生にして亦不滅なり。而してもしもろの縁起の法は、一異にして不可得なり」(大正十六卷六二七頁)とある。

七十家 天台大師の『摩訶止観』に「天竺の注論凡そ七十家あり」(大正四十六卷一頁)とある。

因縁所生法の四句の偈 『中論』四諦品には「衆の因縁生の法、我即ち是れ無なりと説く。亦た是れ仮名と為す、亦た是れ中道の義なり」(大正三十卷三三頁)とある。ここではこの『中論』の文を天台が『摩訶止観』卷一上で「因縁より生ずる所の法は、我即ち是れ空なりと説く。亦是れ仮名となす、亦是れ中道の義なり」(大正四十六卷一頁)と改めたものをさす。ここにおいて、

「因縁より生ずる所の法は」……藏教

「我即ち是れ空なりと説く」……通教(空諦を説く)

「亦是れ仮名となす」……別教(仮諦を説く)

「亦是れ中道の義なり」……円教(中諦を説く)

となる故に、大聖人はこれを「四教・三諦の法門なり」とされているのである。しかし、これは三諦が各別に説かれていたので、きやくりやく隔歴の三諦であり、法華経で説かれる円融相即の三諦ではないので「法華開会の三諦をば宣べ給はず」とされているのである。

華嚴・般若等の四教・三諦たいの法門なり 諦とは眞実、明らか、つまびらかの意で眞理のこと。その眞理に三つの側面があるゆえに三諦という。三諦は空諦、仮諦、中諦で、仮諦とは、一切の諸法はかりに因縁によって和合したものととして、これを仮とする。すなわち仮和合けわごうのことである。空諦とは、凡夫はこの仮和合の諸法を実有なものと考えるが、じつは仮和合なので空という。この空でありながら仮和合であるところを、中というのである。

『中論』の四句の偈は華嚴、般若等で説かれているきやくりやく隔歴の三諦であり、円融の三諦ではないということである。

法華開会ほつけかいえの三諦 法華経において円融相即して説かれた三諦のこと。円融の三諦と同じ。三諦のとらえ方に二種があり、法華経以前の爾前権教においては、各々が個々の独立した眞理として考える隔歴の三諦を説く。法華経において孤立性を廃し互いに一諦のうちに三諦を備え、各々が即空、即仮、即中であると立てるのが円融の三諦である。

料簡りようけん 了簡、了見とも書く。料度簡括かんしやくのこと。思いをめぐらし考えること。思案すること。

天台云く「中論を以て相比すること莫なれ」 天台大師の『法華玄義』卷三下の文であり、法華経の深広なる義は、『中論』などとは比較にならない、あらゆる教義を破し会するのであるとの意。すなわち「此かくの如く破会深広なり、中論を以て相比する莫なれ」（大正三十三卷七二三頁）と。

又云く「天親竜樹……」 天台大師の『摩訶止観』第五の文。（大正四十六卷五五頁）

内鑒冷然 内心の悟りは鏡のように冷ややかに澄んでいて絶対平等の境地に止住するが、外面には時になつた相

対差別の法を説くこと。『摩訶止観』卷五上の文。同止観には、一念三千の法門を明かした後に、古の竜樹、天親（世親）の両師は内心では法華經が一念三千の哲理を説き、諸經中最第一であることを知っていたが、外に向けては説かず、その時代の民衆の機根にあった権大乘教を弘通したとある。両師が法華經に説かれる一念三千の哲理を覚知していたことは次の文からも推察される。竜樹の『大智度論』卷百釈囑累品に「般若經で説く般若波羅蜜は秘密（最極）の法ではなく、二乗作仏を説く法華經が最勝の經である」（趣意）とある。また天親の『法華論』卷下には「仏は但だ一仏乗の教え（法華經）をもつて教化する。前に種々の方便（仮の教えである方便權教）を説いたのも悉く法華經を説こうとするためである」（趣意）とある。

妙樂云く「破会を論ぜば……」妙樂大師の『法華玄義釈籤』卷七の文。天台大師の『法華玄義』卷三にある「此の如く破会深広なり、中論を以て相比する莫れ、之を熟思すべし」（大正三十三卷七一三頁）とある「破会深広なり」の文意を、妙樂大師が釈した文で「もし破会を論ぜば、いまだ法華に若かず。故に權実本迹偏を遣り近を廃す。久遠の聖旨此に於て始めて存せり」（大正三十三卷八六八頁）とある。破会は破と会の併称。破は邪惡を破ること。会は正善に会入（種々の相違を同一のものに会入させる）させること。爾前、迹門の經教を破して法華本門に会入せしめること。

從義の云く「竜樹……」從義の三大部補註の文。從義法師は中国の唐の末に出た天台宗の学僧。

菩提心論 詳しくは『金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論』と称し、また別名を『瑜伽総持釈門説菩提心觀修行義』ともいう。古来から竜樹菩薩作、不空三蔵訳として伝えられ、また真言宗では所依の論としているが、日蓮大聖人は竜樹の作ではなく、不空自身の作であろうと諸御書で指摘されている。

竜猛菩薩 竜樹菩薩のこと。

弘法大師云く「此の論は……」弘法の『弁顯密二教論』上の終わりの文。

此の論一部七丁あり……「此の論」とは『菩提心論』のこと。以下大聖人が『菩提心論』が偽作であることを種々明かされていくのである。日寛上人は、『菩提心論』は竜樹の作ではない。諫迷論七、中正論十七等。今、大聖人の御文の意を示すと即ち五意がある。一には竜樹の言ではないことが多いゆえに。二には目録にも竜樹が不空かが一定していないゆえに。三には一代を括る通論ではないゆえに。四には荒量のことが多いゆえに。五には他の誑惑おうわくに例して今の誑惑を知るがゆえである。まず『此の論』の下にはいいかげんなことが多いことをあげられて別して謬あやまりをあげて偽作であることをあらわされているのである。そして『其の上不空三藏は』以下は、余の誑惑を知ることによってこのことの例とされているのである。誑惑とは、不空が私に作ったものを竜樹が著したとすることである」(要旨、文段集二六一頁)と述べられている。

目録 一切經の目録のことである。円照の『貞元じょうげん祿』第十五の「総集群經錄」には、竜猛と不空の両名をあげている。

唯真言法中 『菩提心論』の「唯真言法の中のみ即身成仏するがゆえに、このゆえに三摩地を説く、諸教の中においてか闕いて言わず」の文をさす。

文証現証ある法華經の即身成仏 法華經の即身成仏の文証、現証は、数多く説かれている。その一、二をあげれば、文証としては方便品の「開示悟入」(妙法蓮華經並開結一六七頁)、現証としては、提婆品の竜女成仏(妙法蓮華經並開結四三三頁)などがある。

唯の一字 『菩提心論』にある「唯真言法の中のみ即身成仏す」の文にある「唯」の一字のこと。

觀智かんちの儀軌ぎぎ 一卷。中国真言宗の不空の訳。『法華儀軌』ともいう。法華經見宝塔品第十一に説かれる釈迦・多宝

の二仏並座びようざの説を中心として、文殊、葉王、弥勒、普賢などの諸菩薩を配した曼荼羅が説かれている。そしてこの中で不空は寿量品の釈尊を阿弥陀仏とする大変な誤りを犯しているのである。日寛上人は「観智儀軌十一に云く『如来寿量品を誦し、如来の靈鷲山りようじゆせんに処して常に妙法を説くを信じ、次に当まさに即ち無量寿命決定如来の真言を誦すべし』略抄文。具つぎに諸抄の如し。本これ不空三蔵、理趣の釈の中に釈迦如来を以て或は観自在菩薩と為し、或は無量寿仏と為す。故に知んぬ、観智の儀軌の無量決定如来もまた寿量品の釈迦如来を以て阿弥陀仏と為すことを」(文段集二六一頁)と仰せである。

陀羅尼品だらにを神力品の次にをける 同じく不空が『観智の儀軌』に、法華經の諸品の次第をのべて、陀羅尼品を神力品の次にしたり、属累品を最後にもつていくなどの誤りをおかしているのである。

天台の大乗戒を盗んで 『宋僧伝』によると、不空は代宗の帰依をうけ、大曆三年、興善寺で天台の大乗戒をぬすんで、代宗に灌頂したという。

五台山の五寺 中国の山西省にある山で、清涼山と呼ばれていた。不空三蔵はここに華嚴寺、大曆法華寺、清涼寺、金閣寺、玉花寺の五寺を建てた。

旧訳・新訳くやく しんやく 唐朝の玄奘以前に訳されたものを旧訳といい、意識をもとにしている。旧訳の代表的な訳者は羅什である。玄奘以後に訳されたものを新訳といい、直訳に重点をおいている。新訳の代表的な訳者は玄奘である。

羅什三蔵らしゆくさんぞう (三四四年―四一九年)。中国姚秦ようしん(後秦)代の訳経僧。生没年については三五〇年―四〇九年とする説もある。鳩摩羅耆婆くまらぎば、鳩摩羅什婆くまらじゆばとも書き、羅什三蔵と呼ばれる。童寿と訳す。父はインドの一国の宰相鳩摩羅炎くまらえん、母は龜茲国王きうじくわうの妹耆婆ぎば。七歳の時、母と共に出家し、諸国を遊歴して仏法を学び、国に帰って大乘仏教を弘めた。龜茲を攻略した中国の前秦王符堅ぜんしんふけんに迎えられて中国へ行く途中、前秦が滅亡したため、前秦の將軍呂光父

子の保護を受けて涼州に留^{とど}まった。その後、後秦王姚興に迎えられて弘始三年（四〇一年）長安に入り、その保護の下に国師の待遇を得て、多くの訳経に従事した。その訳経数は出三蔵記集によると三十五部二百九十四卷（開元釈教録によると七十四部三百八十四卷）にのぼり、代表的なものに、妙法蓮華經八卷、大品般若經二十七卷、『中論』四卷、『百論』二卷、『十二門論』一卷などがある。その訳文は、内容の秀抜さと文体の簡潔さによって、後世まで重用された。羅什は死に際して、その経の正しさを証明するため、我が身を焼いて舌が焼けたら、我が経を捨てよと遺言し、その予言通り舌だけは焼けなかったと伝えられる。「諫曉八幡抄」には「月氏より漢土に経を渡せる訳人は一百八十七人なり其の中に羅什三蔵一人を除きて前後の一百八十六人は純乳に水を加へ薬に毒を入たる人人なり」（御書五七七六）とも仰せである。

伝教大師責めさせ給いしには 伝教大師が『法華秀句』で羅什の現証を通して、法相宗を破折したこと。すなわち、『法華秀句』には「法華を訳するの三蔵は舌を焼かざるの驗^{しるし}あり。釈論を糅^{じゅう}するの賛師は、いまだその靈驗を聞かず」（『伝教大師全集』卷三、二四五六）とある。賛師とは中国の法相宗の開祖慈恩をさす。

慈恩（六三二年―六八二年）。中国・唐代の法相宗の事実上の開祖。窺基^{きくき}のこと。姓は尉遲^{うぢ}。慈恩寺に住んだので慈恩大師といわれ、大乘基とも呼ばれる。玄奘^{げんじやう}の弟子となり訳経に従事した。『成唯識論』を訳出し、また『瑜伽論^{うがろん}』を学んだ。著書には『法華經玄贊』十卷、『大乘法苑義林章』七卷など多数あり、百本の疏主、百本の論師と称される。

涅槃經の第三・第九等 涅槃經は四十卷から成る。第三卷長壽品第四に「群賊が醍醐を盗んで置く所に窮^{きゆう}し、またその鑽^{さん}揺^{よう}に困しているうちに、諸賊がこれに水を加えたため、乳・酪^{らく}・醍醐^{だいご}の一切を失った」（趣意、大正十二卷六二一―六二二）とある。また第九卷菩薩品第十六には「われ涅槃の後、正法いまだ滅せざる八十年に、もろもろの

悪比丘あくびくあつてこの経しやうりやくを抄掠し、分かつて多分となして正法の色香美味を滅す」(趣意、大正十二卷六六三頁)とある。

妙楽大師は「並びに……」妙楽大師の『法華文句記』のことば。「但恐ただらくは訳者の曲会私情どくえなり……並びに進退は人に在り何ぞ聖旨しかむに関らん」(大正三十四卷三四一頁)の文によって、訳者の誤りを批判したのである。

講義

この章では、竜樹、天親等が法華の実義を述べていないことを明かされている。正像に述べていないのは、末法に必ず流布することを明かさんがためである。

彼の人かれのひとの所詮は中論という論

インドの大乗教は竜樹、提婆の唱導した大乘空宗と、無著、世親の兄弟が唱導した大乘有宗とに分けられる。

竜樹は仏滅後七百年ごろに出て、大品般若を釈した『大智度論』百卷、八不中道の般若思想を展開した『中論』四卷、観因縁門等の十二門を以て空義に入ると説く『十二門論』一卷等がその代表的著述である。『中論』は空観の真意を明かしたものとされ、大乘教の理論的基礎を築き、以後の大乗思想に大きな影響を与えた。この大乘空宗はインドでは中観宗といい中国へ伝わって三論宗と呼ばれた。竜樹の

弟子としては迦^{かな}那提婆がおり、中観宗、大乘空宗を唱導した。『百論』二巻が、その代表的著述である。これに対し、無著、世親は、仏滅後九百年のころ出て、大乘有宗としての瑜^ゆ伽^が宗を北インドにひろめた。無著には『摂^{しやう}大乘論』三巻、『瑜^ゆ伽^が師地論』百巻等があり、世親は大乘五百・小乗五百の合わせて千部の論師といわれた。これが中国へ渡って法相宗となった。

仏教をこのように分類してみれば、一に小乗教、二に大乘の唯心有境（大乘空宗）と唯心無境（大乘有宗）、三に法華經ということにもなる。

「聖密房御書」にはそのことを「仏御存知の御意は但法華經一宗なるべし小乗には二宗・十八宗・二十宗候へども但所詮の理は無常の一理なり、法相宗は唯^{ゆい}心^{しん}有^う境^{きやう}・大乘宗・無量の宗ありとも所詮は唯心有境とだにいはば但一宗なり・三論宗は唯心無境・無量の宗ありとも所詮・唯心無境ならば但一宗なり、此れは大乘の空^{くう}有^{ゆう}の一分か、華嚴宗・真言宗あがらば但中^{ちゆう}・くだらば大乘の空有なるべし」（御書八九九^じ）と仰せである。

空観については、さまざまな説があり、爾前経にも処々にこれが説かれている。まず小乗の空観は色^{しき}を細かく分析してみる空なので析^{しやつく}空^{くう}観^{かん}といい、大乘の空観は存在そのものに空をみるので体空観といい、これは天台大師の論である。次に衆生の身は五蘊^{ごおん}仮^け和^わ合^{ごう}の体であって、実の我というものはないので人空であり、そして存在するものはすべて因縁によって生じたものであるから法空というとの人空・法空の立て分けもある。これは中観派の説である。

また空・仮・中の三觀についても、別教の次第の三觀と、円教の円融えんゆうの三觀等がある。次第の三觀とは、仮より空に入るのが空觀、空より仮に入るのが仮觀、そして以上の空仮二觀を修するのを中觀という。円融の三觀とは法華經に明かすところの空仮中の三觀であつて、一諦即三諦、三諦即一諦であつて、しかも、それが一心に具している（一心三觀）と説いている。

不空三蔵一卷の論をわたす其の名を菩提心論となづく

次に弘法が『菩提心論』を竜樹の著述だといったのを破されている。『菩提心論』は、本文に仰せのように、不空が中国へ持ってきたのであるが、これは竜樹の著述ではなく、不空が勝手に偽作したものであり、とんでもない代物なのである。そして次に大聖人が羅什わじゆうさんぞう三蔵以外の訳は用いられない理由を明かされている。

「諫曉八幡抄」にも「然るに月氏より漢土に經を渡せる訳人やくにんは一百八十七人なり其の中に羅什三蔵一人を除きて前後の一百八十六人は純乳に水を加へ薬に毒を入たる人人なり、此の理を弁わきまへざる一切の法師末学等設い一切經を讀誦し十二分經を胸に浮べたる様なりとも生死を離る事かたし又現在に一分のしるしある様なりとも天地の知る程の祈とは成る可からず魔王・魔民等・守護を加えて法に験しるしの有様なりとも終には其の身も檀那も安穩あんゐんなる可からず譬ば旧医の薬に毒を雜まじへて・さしをけるを旧医の弟子等・或は盗み取り或は自然に取りて人の病を治せんが如しいかでか安穩なるべき」（御書五七七頁）等と仰せ

られている。

このように羅什の訳した經典はじつに空前絶後の名訳であるが、それでは羅什以外の訳は全然使わな
いかというと、そうではない。現に日蓮大聖人の御抄にも他の人が訳した經を使われているし、法華經
の開經たる無量義經は曇摩伽陀耶舎どんまかたやしゃが訳したものを使われている。ゆえに他人の訳でも誤謬ごびゅうがあれば捨
て、真正ならば用いる。とくに本文では不空三蔵は数多くの誤りを犯しているから、とても用いられな
い趣旨を述べられている。

総じて、真言宗の開祖たちは、中国の善無畏、金剛智、不空等にしても日本の弘法、慈覚等にして
も、このようなごまかしが多い。不空が雨乞いをして、雨が降り出したのはよいが、暴風雨となってや
まないの、「結句は使をつけて追うてこそ風も・やみてありしか」(御書三二六頁)と「報恩抄」に仰せ
られているのも、その一例である。

羅什三蔵は舌焼けず

仏法は現証をもって第一とすることは、「三三蔵祈雨事」の「日蓮仏法をこころみるに道理と証文と
にはすぎず、又道理証文よりも現証にはすぎず」(御書一四六八頁)との仰せや、「顕立正意抄」の「設
い日蓮富楼那ふるなの弁を得て目連の通を現ずとも勘かんうる所当らずんば誰か之を信ぜん」(御書五三七頁)との
仰せに明らかであるが、そのほかにも、日蓮大聖人は、王法は賞罰を本としているが、仏法は勝負を先

とする旨や、雨乞いのような今生の祈りがかなわないうなら、大事の中の大事たる後生の成仏がかなうわけがないとか、大聖人に三度の高名があられたことなどを、諸御抄に示されている。

このように、現証および予言の的中ということは、すべての宗教において重要な問題である。仏法においては、釈尊が、近くは三カ月後の涅槃^{ねはん}を予言して的中したこと、遠くは法華經の中に予言した「後五百歳。広宣流布」が達成されようとしていることなどがある。その仏法の中においても、末法の御本仏日蓮大聖人の御予言の的中および現証の確實さが、格段にすぐれていることはいうまでもない。「聖人知三世事」に「聖人と申すは委細^{ゐさい}に三世を知るを聖人と云う」（御書九七四頁）と仰せのとおりである。ゆえに、仏教典を漢訳する際の、正誤の争いにしても「羅什三蔵は舌焼けず」という決定的事実の現証がある以上は、どうすることもできないのである。参考までに、いまここに、第二十六世日寛上人の伝記の中から、これに関連した予言を引いてみよう。

『日寛上人伝』にいわく「享保十一年二月、上人は寺檀の請に応じて一世のなごりとして観心本尊抄を講じられた。講義の終わる日に上人は、たわむれのように『羅什三蔵は舌の焼けないという現証があった。ゆえに人々はこれを信じたのである。日寛がいま、富楼那の弁を得て目連の通を現ずとも、いふ所が当たらなければ信ずるに足らないであろう。予はかねてからそばを好む。正に臨終^{りんじゆう}の期^でに及びて、そばを食べ一声大いに笑って題目を唱えて死ぬであろう。もしそのとおりになったら、わが説法の一文一句においても疑いを持ってはならない』といわれた。

同年夏のころから次第に身体が衰弱しはじめられたが、上人は薬を一切飲まれないで、『色香美味の大良薬を服しているから心配はない』と仰せられていた。そうして、あるだけのお金は遺言して将来の使途を定め、すべての品物は遺品分けをなされ、御遷化の二日前には駕籠に乗られて、本堂をはじめ山内をことごとく暇乞いに回られた。

八月十八日の夜には大御本尊を床の上に掛け奉り『今夜死ぬからあわてるな。息が絶えてから諸方へ通知せよ。一兩人のほかはそばにいてはならない』と仰せられ、最後の一偈と歌一首をお作りになり、侍者に命じて、そばを作らせた。日寛上人はそばを七箸食べ、にっこりと笑われて『ああ、面白や寂光の都は……』と。そして、うがいをされ、大御本尊に向かい一心にお題目を唱えつつ、眠るがごとく安祥として円寂あそばされた。享保十一年八月十九日朝、辰の上刻であつた」（富要五卷三五六頁、趣意）さて、このような現証のなかでも「舌焼けず」とか「おそばを食べて」等は個人的な姿である。それに対して創価学会の出現とその活動という大きな運動としての現証についてみると、日蓮大聖人の御予言を実践したものは、わが創価学会のほかにも、いずこにあるであろうか。じつに「顕仏未来記」の「月は西より出でて東を照し日は東より出でて西を照す仏法も又以て是くの如し正像には西より東に向い末法には東より西に往く」（御書五〇八頁）との御確信、また「報恩抄」の「日本・乃至漢土・月氏・一閻浮提に人ごとく有智無智をきらず一同に他事をすてて南無妙法蓮華經と唱うべし」（御書三二八頁）との御予言どおりの姿である。

第十七章

天台大師の弘通

疑つて云く正法一千年の論師の内心には法華經の実義の顯密の諸經に超過してあるよしは・しろしめしながら外には宣説せずして但權大乘計りを宣べさせ給うことは・しかるべしとはをばへねども其の義はすこしきこえ候いぬ、像法一千年の半に天台智者大師・出現して題目の妙法蓮華經の五字を玄義十卷一千枚にかきつくし、文句十卷には始め如是我聞より終り作礼而去にいたるまで一字一句に因縁・約教・本迹・觀心の四の釈をならべて又一千枚に尽し給う已上玄義・文句の二十卷に一切經の心を江河として法華經を大海にたとえ十方界の仏法の露一滴も漏さず妙法蓮華經の大海に入れさせ給いぬ、其の上天竺の大論の諸義・一点ももらさず漢土・南北の十師の義破すべきをば・これをはし取るべきをば此れを用う、其の上・止觀十卷を注して一代の觀門を一念にすべ十界の依正を三千につづめたり、此の書の文体は遠くは月支・一千年の間の論師にも超え近くは尸那五百年の人師の釈にも勝れたり、故に三論宗の吉藏大師・南北一百余人の先達と長者らをすすめて天台大師の講經を聞けと勸むる状に云く「千年の興復今日に在り乃至南岳の叡聖天台の明哲昔は三業住持し今は二尊に紹係す豈止甘呂を震旦に灑ぐのみならん亦当に法鼓を天竺に震うべし、生知の妙悟魏晉以来典籍風謡実に関連無し乃至禅衆一百余の僧と共に智者大師を奉請す」等云云、修南山の道宣律師天台大師を讚歎して云く「法華を照了すること高輝の幽谷に臨むが若く摩訶衍を説くこと長風の太虚に遊ぶに似たり假令文字の師千羣万衆ありて彼の妙弁を数め尋ぬとも能く窮む

る者無し、乃至義月を指すに同じ乃至宗一極に帰す」云云、華嚴宗の法蔵大師天台を讃して云く「思禪師智者等の如き神異に感通して迹登位に参わる靈山の聴法憶い今に在り」等云云、真言宗の不空三蔵・含光法師等・師弟共に真言宗をすてて天台大師に帰伏する物語に云く高僧伝に云く「不空三蔵と親たり天竺に遊びたるに彼に僧有り問うて曰く大唐に天台の迹教有り最も邪正を簡び偏円を曉むるに堪えたり能く之を訳して將に此土に至らしむ可きや」等云云、此の物語は含光が妙樂大師にかたり給しなり、妙樂大師此の物語を聞いて云く「豈中国に法を失いて之を四維に求むるに非ずや而も此方識ること有る者少し魯人の如きのみ」等云云、身毒国の中に天台三十巻のごとくなる大論あるならば南天の僧いかでか漢土の天台の釈をねがうべき、これあに像法の中に法華經の実義顕れて南閻浮提に広宣流布するにあらずや、答えて云く正法一千年・像法の前四百年・已上仏滅後・一千四百余年にいまだ論師の弘通し給はざる一代超過の円定・円慧を漢土に弘通し給うのみならず其の声月氏までもきこえぬ、法華經の広宣流布にはにたれどもいまだ円頓の戒壇を立てられず小乗の威儀をもつて円の慧定に切りつけるはすこし便なきにいたり、例せば日輪の蝕するがごとし月輪のかけたるに似たり、何にいわうや天台大師の御時は大集經の誦誦多聞堅固の時にあひあていまだ広宣流布の時にあらず。

ていることを知っていたが、外に向かつて宣説することなく、ただ権大乘ばかりをひろめていたということとは、どうもそうとは思えないけれども、その義は少しばかりわかつてきた。像法一千年の半ばごろには、天台智者大師が出現して、法華經の題目の妙法蓮華經の五字を、『玄義』十卷一千枚に書きつくし、『文句』十卷には經の初めの「是の如きを我聞きき」から、經の終わり「礼を作して去りにき」にいたるまで、一字一句に因縁、約教、本迹、觀心の四つの釈をならべてまた一千枚に書きつくされた。以上の『玄義』『文句』の二十卷には一切經の心を江河にたとえ、法華經を大海にたとえて、十方界の佛法の露を一一滴ももらさず、妙法蓮華經の大海に入れて解釈をなさった。その上にインドの大論師の諸義まで一点ももらさず、中国の南北の十師の義も破すべきをば破し、取るべきをば用いられている。その上に『摩訶止觀』十卷を述べて釈尊一代の觀門を一念に統括し、十界の依報、正報を三千に収めつくされた。この書は遠くはインドの一千年の論師に超過し、近くは中国五百年の人の師の釈よりも勝れている。

ゆえに三論宗の吉蔵大師は南北十派の一百余人の先達や長者らに、天台の經を講ずるのを聞けと勧める状に次のようにいつている。「千年の間に聖人が一人出で五百年の間に賢人が一人出るといふのは、実に今日のことをいつたのである。南岳大師の叡聖、天台大師の明哲の二人は、昔は身・口・意三業に法華經を受持し、今は南岳、天台の二尊と紹繼して中国に出現している。ただ単に甘露の法雨を中国にそそぐのみではなく、またまさに法鼓をインドまでひびかせている。生まれながらにして佛法の深妙の理を悟り、魏、晋の時代からこのかた經典の講説の妙なること実に比類すべき者がない。よって禪僧の百余人とともに天台智者大師の許に参つて講説を請い奉る」と。

また修南山の道宣律師は天台大師を讃歎していわく「法華經のすべての義理に通達しつくしているさま

は、正午の太陽が深い谷の底までも照らしつくすがごとく、大乘の極理を自在に説くさまは、大風が大空に遊ぶのと似ている。たとえ文字の師が千万人あつて天台の妙弁をあつめ討究しても、よくその至極を究むることはできないであろう。その所詮しよせんの妙義は、月をさすがごとく明らかに、能詮のうせんの言葉は、妙法蓮華の一極に帰している」と。

さらに華嚴宗の法蔵大師は天台を讃歎する際には「慧思禪師（南岳大師）や智者大師のごときは、自分の心が自然に真理に感通して、その位は初住の菩薩の行動であり、靈鷲山りやうじゆせんで聞いた説法の思いが今にある」と。

また真言宗の不空三蔵や含光法師等が、師弟ともに真言宗を捨てて、天台大師に帰伏する物語を、『高僧伝』では、次のように伝えている。「不空三蔵とともにインドの地で遊学中、一人の僧がいて質問するには、中国には天台の教があつて最も邪正を簡えらび偏あやまちを脱あきらめるのに傑出しているという。よくこれを訳してインドにも伝えるべきではないか」と。この物語は含光が妙楽大師に語ったものである。妙楽大師は、この物語を聞いて「仏教の中心地たるインドでは正法がすでに無く、これを四方に求めている。しかもわが国では天台の教観が優すぐれていることを知っているものが少ない。ちょうど、自分の国の孔子の偉大さを知らなかった魯国の人のようなものである」といつている。インドの中に天台の『玄義』『文句』『止観』三十巻のような大論があるならば、インドの僧がどうして中国の天台の釈を乞い願うことがあろうか。このことは、像法に法華經の実義が顕れて、南閼なんがく浮提ふだいに広宣流布した証拠ではないのか。

答えていわく、天台大師は正法一千年、像法の前四百年、以上仏滅後千四百年の間いまだ論師のひろめたことのない一代超過の円定・円慧を中国に弘通されただけでなく、その名声はインドまで伝わった。そ

れは法華經の広宣流布には似ているけれども、いまだ法華円頓の戒壇を建てられてはいない。そして小乗の威儀（戒）をもつて、円の法華の定慧に切り付けるといふのは、少したよりないことである。たとえば、太陽が蝕し月がかけているようなものである。まして天台大師の時は、大集經の読誦多聞堅固の時であり、いまだ広宣流布の時代には当たっていないのである。

題目の妙法蓮華經の五字を玄義十卷一千枚にかきつくし「玄義十卷」は『法華玄義』十卷のことで、法華經の題号である妙法蓮華經の深い義を明かした書。『法華文句』と共に天台教學の教相を示している。妙法蓮華經の題号は一經の全意を顯すということから五重玄（名・体・宗・用・教）を用いて題号の意義を明らかにし、法華經の内容を総括的に示している。内容は一千枚に及ぶ紙数に述べてあるとのこと。

文句十卷『法華文句』は、法華經の初め、序品の「如是我聞（是の如くを我聞きき）」から最後の普賢品の「作礼而去（礼を作して去りにき）」までの一字一句を、因縁、約教、本迹、觀心の四釈を通して、くわしく十卷にわたって解釈している。

如是我聞より終り作礼而去 法華經の序品第一の初めに如是我聞（是の如くを我聞きき）とあり、また普賢菩薩勸發品第二十八の終わりに作礼而去（礼を作して去りにき）とある。すなわち法華經二十八品の始終、全卷をさす。

因縁・約教・本迹・觀心 『法華文句』の四種の釈で、因縁釈、約教釈、本迹釈、觀心釈である。因縁釈とは四悉檀（世界悉檀、為人悉檀、対治悉檀、第一義悉檀）をもつて釈し、約教釈は藏、通、別、円の四教と五時で釈し、本迹釈は仏の本地と垂迹から釈し、觀心釈は觀心をもつて実践的に釈する。

天竺の大論の諸義 インドの諸大論師が講じた多くの大論の諸義。

止観十巻 天台大師の『摩訶止観』十巻は、法華経をもとにしてつくられた観念観法の実践修行を説き、一心三観、一念三千の法門が十巻に記されている。

一代の観門 釈尊一代五十年における修行法である。観法を門として道にはいり仏道を証得するので観法を観門という。

此の書の文体 日寛上人は「通じて三大部を指して『此の書』というなり。これ吾が祖、三大部を歎ずるの文なり。その証拠に三論宗・律宗・華嚴宗・真言及び梵僧の懇望を引くなり」（文段集二六七頁）と述べられている。

吉蔵大師（五四九年―六三三年）。中国・隋から唐代の人で三論宗再興の祖。祖父または父が安息人（胡族）であつたことから胡吉蔵と呼ばれ、嘉祥寺に住したので嘉祥大師とも称された。姓は安氏。金陵（南京）の生まれで幼時父に伴われて真諦に会つて吉蔵と命名された。十二歳で法朗に師事し三論を学ぶ。その後、嘉祥寺に住して三論宗を立て般若最第一の義を立てた。著書に『三論玄義』一巻、『中観論疏』十巻、『大乘玄論』五巻、『法華玄論』十巻、『法華遊意』一巻など数多くある。

勸むる状に云く「千年の……」 天台大師の弟子、章安大師が集めた『国清百録』のなかに出ている。開皇十七年八月二十日の吉蔵の状である。

千年の興五百の実 聖人は千年にひとり出、賢人は五百年にひとり出ることをいう。日寛上人はこの御文について概略次のように述べられている。一には、五百年に一人聖人が出る説は『孟子』十四に「堯・舜由り湯（夏）の桀王を討つた」に至るまで五百有余歳」と。また趙氏いわく「五百歳にして聖人出ずるは天道の常」とある。しかるにまた遅速があつて、正しく五百年にならないゆえに有余というのである。二には、千年に聖人出て、五百年

に賢人が出る説は、王子年が『拾遺記』に記しているのには「丹丘は千年に一度焼け黄河は千年に一度清む。みな至聖の君が出る大瑞としている」と。『晋書』の註には「千年に一度、聖人が出ずるのを見、五百年に一賢を見る」と。孔子は、まさに釈尊滅後三百九十九年、周の靈王二十一年十一月四日、魯国に生まれ、周の敬王四十四年四月八日、七十三歳でなくなった。これ釈尊滅後四百七十二年にあたるゆえに、大数は五百年である。清浄法行經にいわく「光浄菩薩、彼に仲尼と称す」と。天台大師は孔子滅後一千十五年の、梁の武帝の大同四年の誕生である。隋の開皇十七年入滅、春秋六十歳である。伝教大師は天台滅後一百六十九年に生まれ、御年五十六歳で弘仁十三年入滅である。日蓮大聖人は伝教滅後四百一年に御誕生であり、それは天台滅後五百七十年に当たる。もし伝教、天台に望めば、ともに五百年前後である。ゆえに大数は、五百年に聖人の出る説も論拠があるというべきである。(文段集二六八頁)

南岳の叡聖 なんがく えいしやう 叡聖とは叡智のすぐれた聖人という意。南岳大師(五一五年—五七七年)のこと。中国・南北朝時代の僧。天台大師の師。字は慧思。姓は李。河南に生まれる。十五歳で出家し、法華經を学んだ。二十歳の時に妙勝定經を読んで感じ、修禪に努め、後に法華三昧を得たという。三十四歳の時、対論した僧に毒を盛られて死に瀕したが、命はとりとめた。その後、多くの禪師を訪ねたり、刺史に法を説いたりしたが、その間にも悪論師によつて毒を盛られた。四十一歳の時に光州の大蘇山に入り、ここで立誓願文の著作や般若經、法華經の書写を行い、また集まりきたった智顗(天台大師)等の弟子の育成にあたつた。陳の光大二年(五六八年)戦乱を避けて南岳に移り、ここに晩年を過ごして大建九年(五七七年)に没した。

天台の明哲 めいてつ 明哲とは賢明なる哲人という意。天台大師を讃めたことば。

三業住持 さんごうじゆうち 身口意の三業にわたつて法華經を受持すること。

二尊に紹係す^{しやうけい} いま中国においては、南岳大師、天台大師と二尊に紹継されているということ。

甘露^{かんろ} 仏の説法を、甘露の法雨にたとえた。

震旦^{しんたん} 中国の歴史的呼称。梵名チーナスターナ (Cina-sthāna) の音写。真丹、真旦とも書く。中国人の住んでい

る地域との意。チーナ (Cina) とは秦^{しん}の音写。スターナ (sthāna) とは地域、場所の意。古代インド人が秦 (中国) をさした呼称。おもに仏典の中に用いられた。

法鼓^{ほつこ} 仏の説法が、よく鼓^{つづみ}の音が遠く清らかにひびくのにたとえた。

生知の妙悟^{みょうご} 生まれながらにして悟り知っていること。

典籍風謡^{てんせきふうよう} 經典の講説。風謡とは諷謡のこと、おしえうたう。すなわち弁論のこと。

禅衆一百余 百余人の禅僧衆。

修南山の道宣律師^{どうせんりつし} 修南山は中国の陝西省^{せんせいしやうせいあん}西安市 (長安) の南方にある山で、終南山とも南山とも^{なんざん}地肺山とも呼

ぶ。昔から多くの僧が寺を構えた。道宣律師は中国・隋唐代の南山律宗の祖 (五九六年―六六七年)。南山律師、

南山大師ともいう。『仏祖統紀』巻二十九には、南山律学の第九祖とある。姓は錢氏。十六歳 (または十七歳) の

時に出家。隋・大業年中に智首律師について律を学び、禪定を修した。後に、修南山に入り、行事抄^{ぎょうじしやう}を作し四分

律宗を立てる。貞觀十九年 (六四五年) から弘福寺で玄奘の翻訳を助けた。著書に『刪定僧戒本』『刪定比丘尼

戒本』『注僧戒本』『注羯磨經』『行事抄』『尼戒本』『法華義苑』三十卷、『続高僧伝』『広弘明集』『三宝感通

記』『大唐内典録』などがある。死後、懿宗^{いそう}から澄照律師の号を贈られた。

天台大師を讃歎して云く「法華……」道宣が章安大師の『天台智者大師別伝』の文意によって『内典録』に天台

大師の著述を出して賛嘆したこと。

高輝^{こうき} 正午の太陽。

摩訶衍^{まかえん} 梵語マハーヤーナ (mahāyāna) の音写の摩訶衍那の略。大乘と訳す。利他の実践を説き、自他共に仏となることを目的とする教法のこと。『大智度論』巻百に「三蔵は是れ声聞の法、摩訶衍は是れ大乘の法なり」とある。ここでは法華経をいう。

長風の太虚^{たいこ} 長風は勢いのよい風、太虚は大空のこと。

月を指すに同じ 月をさすように、その説く義がはつきりしている。

一極^{ごく}に帰す あらゆる法門が法華の一極に帰入している。

法蔵大師 (六四三年—七二二年)。華嚴宗の第三祖。華嚴教学の大成者といわれる。賢首大師^{げんじゅ}とも康蔵大師ともいう。在俗のまま十七歳で太白山に入り、経論を学び、後に洛陽雲華寺の智儼に師事して華嚴の教理に通達した。咸亨元年(六七〇年)勅命によって出家、太原寺に住んだ。証聖元年(六九五年)実叉難陀が華嚴経八十巻を翻訳するのを助けて五教十宗の教判を立てた。

天台を讃して云く「思禅師智者……」『華嚴五教章』第一の文。

思禅師智者 思禅師は慧思すなわち南岳大師。智者は天台大師。

神異^{じんい}に感通して 神異は不思議な力のこと。みずから心が真理に通達すること。

迹登位^{しやくとうい}に参^{まじ}わる 登位とは中道実相を一分でも実証する位の意。別教の初地、円教の初住に当たる。この位に登って初めて真に聖人といわれる。南岳、天台の行迹^{ぎょうせき}が初住已上の聖人にも等しいほどであるとの意で、南岳、天台を讃歎した語。

靈山の聴法^{ちやうほう} インドの靈鷲山^{りやうじゆせん}で聞いた法華経の説法。章安大師の『天台智者大師別伝』には天台が光州の大蘇山に

南岳をたずねたときに「昔日靈山に同じく法華を聴き、宿縁の追うところ今また来たる」（大正五十卷一九一頁）といわれたとある。

含光法師 がんこう 唐の大興善寺の僧。不空の弟子で、真言宗をひろめた。

高僧伝 十四卷。中国・南北朝梁代の慧皎えこうの撰。『梁高僧伝』ともいう。中国に仏教が伝来した後漢の明帝永平十年（六七年）から、梁の天監十八年（五一九年）に至る四百五十二年間の高僧の事跡を集録したもの。本伝二百五十七人、傍出付見二百余人の伝記がある。全体を徳業によって訳経、義解ぎげ、神異しんい、習禪しゅうぜん、明律みょうりつ、亡身、誦經じゆきやう、興福、経師、唱導の十科に分け、最後に撰者の自序と総目録などを付している。高僧伝として初めて整備されたもので後世の僧伝の範となった。『唐高僧伝』（続高僧伝）『宋高僧伝』『大明高僧伝』と共に、四朝高僧伝と称される。

天台の迹教 天台大師を中心として、弟子門下のすべての教説をいう。

中国 この場合は仏教の中心地たるインドをさす。

四維に求むる 西北、西南、東北、東南の四隅をいう。すなわち、四方八方より仏法を求めるという意味である。

魯人 魯国の人が孔子の偉大さを知らなかったところから、中国で天台大師の偉大さを知らない人にたとえた。

円定・円慧 前出、第十二章の語訳（二二八頁）参照。

講義

前章までに、正法時代の竜樹、天親等が法華の実義を述べなかったことを明かされたが、本章では天

台に約して像法時代にも法華の実義が弘通されなかったことを明かされている。

玄文止観の概要

天台の『玄義』『文句』『止観』三大部の概要を、日寛上人の「撰時抄愚記」から摘記しよう。

玄義十卷

およそ玄義十卷では、この妙法の五字を釈している。それを名体宗用教の五重玄に約している。ここに広略がある。第一卷は仏意の略釈で標章・引証・生起・開合・料簡・観心・会異の七番に約し、共に名体宗用教の五重玄を解している。第二卷よりは機情広釈である。その中で第二卷より第八卷の半ばにいたるまでは名玄義を釈し、第八卷の半ばより第九卷の始めにいたるまでは体玄義を釈し、第九卷の中部に宗玄義を釈し、第九卷の終わりに用玄義を釈している。そして第十卷は教玄義を釈している。これを五重の各説と名づける。

第二卷より第八卷の半ばにいたるまで名玄義を釈する中で、第二卷の始めはまず通教を判じ、次に妙法の前後を定め、次に心・仏・衆生の三法に約して法の一文字を釈している。次に妙の一文字を釈する中でまず待絶の二妙を明かし、次に十妙に約してこれを釈する中で第二卷より第六卷の終わりにいたるまでは迹門の十妙を明かしている。

迹門の十妙とは境妙・智妙・行妙・位妙・三法妙・感応妙・神通妙・說法妙・眷屬妙・利益妙である。第一の境妙にはしばらく六種の境妙がある。いわゆる十如境・因縁境・四諦境・二諦境・三諦境・一諦境等である。その中において、第二卷には十如・因縁の二境を明かし、第三卷の始めより半ばにいたるまでは四諦・二諦・三諦・一諦等を明かしている。第三卷の半ばより卷をおわるまでは第二の智妙を明かし、第四卷の初めより半ばにいたるまでは第三の行妙を明かし、第四卷の半ばより第五卷の半ばにいたるまでは第四の位妙を明かし、第五卷の末に第五の三法妙を明かし、第六卷には感応等の五妙を明かしている。此の十妙の一々に正釈・判麁・開麁・觀心の四重の釈がある。

第七卷にいたってまず六重の本迹を明かしている。事理・理教・教行・体用・実權・已今である。前の五重は所詮の法であり、第六の已今は能詮の教である。已迹とは初め華嚴より終わり安樂行品にいたるまでを名づけて已迹とする。今本とは涌出已後の十四品である。

次に正しく本門の十妙を明かしている。本因・本果・本国土・本感応・本神通・本說法・本眷屬・本利益・本壽命・本涅槃である。この十妙の一々にそれぞれ三義をもって迹を払っている。次に麁妙・權実の二科を立て事に約して判開し、また一々に理に約して融通している。そして第七卷の終わりに蓮華の二字を釈し、第八卷の初めに經の一字を釈している。

その後、妙樂大師は釈籤十一卷を造って玄義を更に釈しているのである。

文句十卷

文句十卷においては二十八品を釈している。第一巻においてはまず一經三段・二經六段の分文を明かし、正しく一經三段をもつて總分となし、二經六段をもつて所含として迹本二門の文々句々を釈している。次に総じて因縁・約教・本迹・觀心の四釈の主旨を示そう。

次に正しく經文を釈すと第一巻より第三巻の半ばにいたるまでは序の一品を釈している。第三巻の半ばより第四巻の終わりにいたるまでは方便品を釈している。その中でまず題号を釈するのに、法用・能通・秘妙の三種の方便を明かし、次に、一切皆權・一切皆實・一切亦權亦實・一切非權非實の四句の權實を明かしている。そしてその第三の亦權亦實の句について、さらに十双の權實を開している。いわゆる事理・理教・教行・縛脱・因果・体用・漸頓・開合・通別・悉檀である。この十双を釈するのに、八番の解釈がある。いわく列名生起・解釈・引証・結權實・分別・照諦・約諸經・約本迹である。所詮は三種の中の秘妙方便の四句の中では亦權の一半であり、十双中の意は即實の權・即ち今の方便品の題号である。次に文に入つて釈する中で第三巻は略開三頭一の文を釈し、第四巻は広開三頭一の文を釈している。その中においてまず十門の料簡を明かしている。十門の料簡とは一には有通・有別、二には有聲聞・無聲聞、三には惑有厚薄、四には転根・不転根、五には有悟・不悟、六には領解・無領解、七には得記・不得記、八には悟有淺深、九には益有權實、十には待時・不待時である。次にこの巻が終わ

るまで正しく広開三顯一の文を釈している。

第五卷は譬喩品、第六卷は信解品、第七卷には菓草喩品・授記品・化城喩品・五百品・（人記品）の五品を釈している。第八卷には法師・宝塔・提婆・勸持・安樂の五品を釈している。そして第九卷には涌出・寿量・分別の三品を釈し、第十卷には隨喜已下の十一品を釈している。この品々の、一々の章々、段々の一字一句にみな因縁等の四釈を用いている。縦い文は略すといえどもその義は宛然として
いる。

因縁とは四悉檀しつだんであり、約教とは四教・五時であり、本迹とは迹門の中には体用本迹を借り、本門の中には即ち久近本迹である。そして觀心とはただこれ託事・附法の二觀であり、いまだ約行の觀は宣べ
ていない。

その後、妙樂大師は疏記十七卷を述べて本疏ほんしよの闕略けつりやくを補い、文句の義意を釈している。

止觀十卷

止觀には十大章ある。一には大意・二には釈名・三には体相・四には摂法・五には偏円・六には方便・七には正觀・八には果報・九には起教・十には旨歸しきである。第一・第二の兩卷はまず大意を釈し、第三卷には釈名・体相・摂法・偏円の四章を釈し、第四卷には方便の一章を釈し、第五卷より第十卷の終わりにいたるまでは正觀を明かし、後の三 chapters は略してこれを宣のべていない。第一の大意はまた五科

に分けてこれを五略と名づける。一に発大心・二に修大行・三に感大果・四に列大綱・五に帰大処である。そして第一巻には発大心を明かしている。

第二巻の初めより五十三葉にいたるまでは修大行を明かしている。すなわち常行常座、半行半座、非行非座の四種三昧である。第三巻は前に述べた通りである。

第四巻には方便の章を釈しているが、これに二十五法がある。いわゆる五縁・五欲・五蓋・五事・五法である。巻の初めには具五縁を釈している。五縁とは持戒清淨・衣食具足・閑居靜処・息諸縁務・得善知識である。次に四十八葉からは呵五欲を釈している。五欲とは色・声・香・味・触である。五十三葉からは棄五蓋を釈している。五蓋とは貪欲・瞋恚・睡眠・掉悔・狐疑である。六十八葉からは調五事を釈している。いわく調食・調眠・調身・調息・調心である。そして七十三葉からは行五法を釈している。五法とは樂欲・專念・精進・巧慧・一心である。

第五巻より第十巻にいたるまでは正觀を釈しているが、つづきに十境を明かしている。十境とは一に陰入・二に煩惱・三に病患・四に業相・五に魔事・六に禪定・七に諸見・八に上慢・九に二乘・十に菩薩である。その中で第五巻より第七巻にいたるまでは陰入境を明かしている。まず第五巻の初めに陰入境を明かし、この下に簡境用觀して但心法を取って所觀の境とする。これを心法觀体と名づける。ここに能造近要等の異義がある。

この下に広く十乗を明かしている。十乗とは一には觀不思議境・二には起慈悲心・三には巧安止觀・

四には破法遍・五には識通塞・六には修道品・七には対治助開・八には知次位・九には能安忍・十には無法愛である。そして十境の一々に十乗を具すことを知るべきである。

第五巻の二十二葉からは観不思議境を明かしている。そしてこの下に初めて一念三千を明かしているのである。まず略して十界および五陰世間・衆生世間・国土世間を釈し、次に広く十如是を釈して正しく名目を出し、「此の三千、一念の心に在り」等といっているのである。すなわちこれこそが止観一部の肝心であり、三大部の眼目であり、一代諸経の骨髓なのである。ここにおいて理修化他の三境については諸師の異義が蘭菊である。また如意珠・三毒・惑心眠夢の三喻をもって上来の意を顕している。

次に第五巻の四十二葉からは起慈悲心を明かし、四十五葉からは巧安止観を明かしている。そして六十二葉から第六巻の終わりにいたるまでは破法遍を明かしている。第七巻の初めには識通塞を明かし、十葉からは、修道品を明かし、三十葉からは対治助開を明かし、六十八葉からは知次位を明かし、七十葉からは能安忍を明かし、八十一葉からは無法愛を明かしている。

第八巻には煩惱境・病患境・業相境・魔事境を明かし、第九巻には禅境を明かし、第十巻には見境を明かして後の三境については略してこれを宣べていない。そのことについて止観第一巻の初めに「纔かに見境に至って法輪の転ずるを停め、後の分宣べず」と触れている。

その後、妙楽大師は弘決二十二巻を造って止観の文を消釈している。

問うていうには、止観は天台の己心の所行の法門を説くために述べたものか、それとも法華の意に

よつてこれを註しるさんがためなのか。答う、止観の一部は法華の意によるものである。弘五に「法華の經旨を攢あつめて不思議の十乗・十境を成ず」とあり、また止観大意には「円頓止観は全く法華に依る。円頓止観は即ち法華三昧の異名なるのみ」とあり、自余の諸文は枚挙に遑いとまがないほどである。

問う、迹門の意によるのか、本門の意によるのか。答う、恵・檀の異義がある。恵心流では専ら弘五上の「本迹二門」「求悟此之十法」等の文を引いて止観は本迹二門に亘わたるといい、檀那流では盛んに弘三上の「今約法華迹理」等の文を引いて止観は迹門に限るといつている。わが祖師の深義は立正観抄送状に「若し与えて之を論ぜば止観は法華迹門の分齊ぶんさいに似たり、(中略)若し奪つて之を論ぜば爾前権大乘・即別教の分齊なり」(御書五三四六)と仰せである。この中の奪つての辺は、しばらく当世天台宗の止観は法華に勝るといふ僻見を破すためである。ゆえに実義ではない。もし異義を論ずれば迹門の意となる。ゆえに「檀那流の義尤も吉なり」と仰せられているのである。また十章抄には「前六重は修多羅しゆたらに依ると申して大意より方便までの六重は先四巻に限る、これは妙解迹門しやくもんの心をのべたり、今妙解に依つて以て正行を立つと申すは第七の正観・十境・十乗の觀法本門の心なり、一念三千此れよりはじまる」(御書一二七四六)と仰せである。安心録にはこの両文を会して「附文・元意」といつているが、この義は理を尽くしていない。日寛上人の正意は迹門は理で本門は事である。また迹門は但ただ百界千如を明かしていまだ国土世間を明かしていない。本門はすなわち一念三千を明かしている。しかるに止観の意は正しく理の一念三千を明かしている。三千を明かすといえども、但これ理具である。ゆえに迹門の意

というのである。理具であつても、やはり三千である。ゆえに本門の意というのである。両判があつても、但これ面裏の違目であり、相違しているのではない。観心本尊抄に「南岳・天台等と示現し出現して迹門を以て面と為し本門を以て裏と為して百界千如・一念三千其の義を尽せり、但理具たたりぐを論じて事行の南無妙法蓮華經の五字並びに本門の本尊未だ広く之を行ぜず」(御書二五三頁)等と仰せのとおりである。(以上、三大部の大旨については文段集二六三頁―二六七頁の趣意)

天台大師に帰伏等

天台大師の法華經の解釈は最高の權威があり、釈迦仏法の範圍における法華經は、天台大師において事きわまるのである。ゆえに「開目抄上」で「日蓮が法華經の智解は天台・伝教には千万が一分も及ぶ事なけれども……」(御書二〇二頁)と仰せのごとく、日蓮大聖人も、天台の立場を最大限に尊重されているのである。

さて、このような天台大師の權威の前には、本抄に仰せのように、三論宗の吉蔵大師も、修南山の道宣どうせん律師も、華嚴宗の法蔵大師も、真言宗の不空三蔵もみな、天台に帰伏している。最後に挙げられている不空は、インドから中国へ渡り、ふたたびインドへ旅行した時に、インドの老僧が天台大師をほめたたえ、天台の教えをインドへ持ってきてくれといわれたという。わずか数百年前には竜樹、天親等の大論師が出て、大乘仏教が隆盛をきわめたのに、中国に天台大師の出現するところには、すでにインドに

おいて仏法の真髓は失われてしまっていた。と同時に、また不空が内心では天台に帰伏していたからこそ、このような物語が伝えられたのである。

「開目抄下」（御書二一六頁）には、天台に帰伏した模様が次のように述べられている。すなわち、善無畏、不空等は胎藏界の大日経と、金剛界の金剛頂経を左右の臣下のごとくおいて、法華経をその中央に大王のごとくおいたという。三論の嘉祥は、天台に帰伏して七年つかえ、廃講散衆して身を肉橋とした。法相の慈恩は、玄賛の第四に故亦こやくりようぞん両存等と自宗を不定にした。自分の宗が不定になったのは、心が天台に帰伏したからである。華嚴の澄観は、法華を方便と書いたが、また「彼の宗之を以て実と為す此の宗の立義・理通ぜざること無し」等と書いているのは、法華経第一を認めたからであろう、等々と。

しかし、いくら天台大師に権威があっても、天台みずから「後の五百歳遠く妙道に沾うるわん」といつて、末法を恋い慕っている。そして日蓮大聖人は「彼の天台の座主ざすよりも南無妙法蓮華経と唱うるわいにん頼人とはなるべし」（御書二六〇頁）と仰せられているのである。したがって、われわれこそ、真に最高の福運をもって生まれてきたのである。

第十八章

伝教大師の弘通

問うて云く伝教大師は日本国の士なり桓武の御宇に出世して欽明より二百余年が間の邪義をなんじやぶり天台大師の円慧・円定をせんじ給うのみならず、鑑真和尚の弘通せし日本小乗の三処の戒壇をなんじやぶり叡山に円頓の大乗別受戒を建立せり、此の大事は仏滅後一千八百年が間の身毒・尸那・扶桑乃至一閻浮提第一の奇事なり、内証は竜樹・天台等には或は劣るにもや或は同じくもやあるらん、仏法の人をすべて一法となせる事は竜樹・天親にもこえ南岳・天台にもすぐれて見えさせ給うなり、総じては如来御入滅の後一千八百年が間此の二人こそ法華經の行者にてはをすれ、故に秀句に云く「經に云く若し須弥を接つて他方無數の仏土に擲げ置かんも亦未だこれ難しとせず乃至若し仏の滅度惡世の中に於て能く此の經を説かん是則ちこれ難し云云、此經を釈して云く浅は易く深は難しとは釈迦の所判なり浅を去て深に就くは丈夫の心なり天台大師は釈迦に信順し法華宗を助けて震旦に敷揚し叡山の一家は天台に相承し法華宗を助けて日本に弘通す」云云、釈の心は賢劫第九の滅・人寿百歳の時より如来・在世五十年・滅後一千八百余年が中間に高さ十六万八千由旬・六百六十二万里の金山を有人五尺の小身の手をもつて方一寸・二寸等の瓦礫をにぎりて一丁二丁までなぐるがごとく雀鳥のとぶよりもはやく鉄圀山の外へなぐる者はあるとも法華經を仏のとかせ給いしやうに説かん人は末法にはまれなるべし、天台大師・伝教大師こそ仏説に相似してとかせ給いたる人にてをはずれとなり、天竺の論師はいまだ法華經へゆきつき給はず漢土の天台已前

の人師は或はすぎ或はたらず、慈恩・法蔵・善無畏等は東を西といふ天を地と申せる人人なり、此等は伝教大師の自讃にはあらず、去る延暦二十一年正月十九日高雄山に桓武皇帝行幸なりて六宗・七大寺の碩徳たる善議・勝猷・奉基・寵忍・賢玉・安福・勤操・修円・慈誥・玄耀・歳光・道証・光証・観敏等の十有余人、最澄法師と召し合せられて宗論ありしに或は一言に舌を巻いて二言三言に及ばず皆一同に頭をかたぶけ手をあざう、三論の一蔵・三時・三転法輪・法相の三時・五性・華嚴宗の四教・五教・根本枝末・六相・十玄・皆大綱をやぶらる、例せば大屋の棟梁のをれたるがごとし十大徳の慢幢も倒れにき、爾の時天子大に驚かせ給いて同二十九日に弘世・国道の両吏を勅使として重ねて七寺・六宗に仰せ下れしかば各各帰伏の状を載せて云く「竊に天台の玄疏を見れば総じて釈迦一代の教を括つて悉く其の趣を顕すに通ぜざる所無く独り諸宗に逾え殊に一道を示す其の中の所説甚深の妙理なり七箇の大寺六宗の学生昔より未だ聞かざる所曾て未だ見ざる所なり三論法相久年の諍い渙焉として氷の如く釈け照然として既に明かに猶雲霧を披いて三光を見るがごとし聖徳の弘化より以降今に二百余年の間講ずる所の経論其の数多く彼此理を争えども其の疑未だ解けず、而るに此の最妙の円宗未だ闡揚せず蓋し以て此の間の羣生未だ円味に応わざるか、伏して惟れば聖朝久しく如来の付を受け深く純円の機を結び一妙の義理始めて乃ち興顕し六宗の学者初めて至極を悟る此の界の含靈今より後悉く妙円の船に載り早く彼岸に済る事を得ると謂いつべし、乃至善議等牽れて休運に逢い乃ち奇詞を閲す深期に非ざるよりは何ぞ聖世に託せんや」等云云、彼

の漢土の嘉祥等^{かじよう}は百余人をあつめて天台大師を聖人と定めたり、今日本の七寺・二百余人は伝教大師を聖人とがうしたてまつる、仏の滅後二千余年に及んで両国に聖人二人・出現せり其の上天台大師の末弘^{みぐ}の円頓^{えんどん}大戒^{えいぎん}を叡山^{えいざん}に建立し給う此れ豈像法^{あにぞうぼう}の末に法華經広宣流布するにあらずや、答えて云く迦葉^{かしよう}阿難等の弘通せざる大法を馬鳴^{めみよう}・竜樹^{りゆうじゆ}・提婆^{だいば}・天親等の弘通せる事前^{さき}の難に踴れたり、又竜樹・天親等の流布し残し給える大法天台大師の弘通し給う事又難にあらはれぬ、又天台智者大師の弘通し給はざる円頓の大戒を伝教大師の建立せさせ給う事又踴然^{けんねん}なり、但し詮^{ただ}と不審^{しん}なる事は仏は説き尽し給えども仏滅後に迦葉^{かしよう}・阿難^{あなん}・馬鳴^{めみよう}・竜樹^{りゆうじゆ}・無著^{むじやく}・天親^{てんしん}・乃至天台・伝教のいまだ弘通しましませぬ最大の深密^{じんみつ}の正法經文の面に現前^{げんぜん}なり、此の深法・今末法の始五五百歳に一閻浮提に広宣流布すべきやの事不審^{ふしん}極^{きわ}り無きなり。

通解

——問うていうのには、伝教大師は日本国の人である。桓武天皇^{かんむ}の時代に出現して、欽明天皇^{きんめい}の時代から二百余年のあいだの邪義を難じ破り、天台大師の円慧・円定を撰んで立てられたうえに、鑑真和尚^{かんじんわじよう}が日本に弘通した三力所の小乗戒壇を難じ破り、比叡山^{えんどん}に円頓^{えんどん}の大乗別受戒^{べつじゆかい}の戒壇を建立した。この大事は、釈尊滅後一千八百年のあいだ、インド、中国、日本はもとより、世界第一の慶事であつた。伝教大師の内証は、竜樹や天台等にくらべて、あるいは劣っているか、あるいは同じであろう。しかし、その時代の仏法者をことごとく法華經に統一したということは、竜樹菩薩や天親菩薩も超え、南岳大師^{なんがく}や天台大師より

も、すぐれているようにみえる。

総じては釈迦如来御入滅の後、一千八百年のあいだに、天台大師と伝教大師の二人こそ、法華經の行者にておわすのである。ゆえに『法華秀句』に「法華經には、もし須弥山しゆみのような大山を接とつて他方無數の仏土に投げおくことは、いまだ難むずかしいことではない。しかし仏の滅度の後の惡世によくこの經を説くことは、困難なことであるとある。この經を釈して、浅きは易く深きは難しとは釈迦の所判しよはんであり、浅きを去つて深きに就つくは丈夫じやうぶの心である。天台大師は釈迦に信順し法華宗を助けて中国にひろめ、比叡山ひゑの家は天台に相承そうじやうし法華宗を助けて日本に弘通くつうするのである」とある。

この文の意は、賢劫けんごうの第九番目の滅の人寿百歳の時より、釈迦仏の在世五十年と釈尊滅後一千八百余年の中間に、高さ十六万八千由旬ゆじゆん、六百六十二万里の金山を、五尺の小身の人が一寸角、二寸角ほどの瓦礫かわらこいしを握にぎつて一丁ちやう、二丁までも投げるように、雀の飛ぶよりも早くその大きな金山を鉄圀山てつがんの外へ投げるものはいても、法華經を仏が説かれたように説く人は、末法には稀まれである。その中であつて天台大師と伝教大師だけが、仏説そつじに相似そうじした説き方をされたということである。

インドの論師たちは、いまだ法華經には行きつかかなかつた。中国の天台大師出現以前の人は、あるいは過ぎ、あるいは足らず、慈恩じおん、法蔵ほうぞう、善無畏ぜんむゐ等は、東を西といい、天を地というような人々であつた。これらは伝教大師の自讃じさんではない。さる延暦二十一年正月十九日に高雄山たかおに桓武天皇かんむが行幸なされ、六宗、七大寺の高僧、博学者と仰がれていた善議ぜんぎ、勝猷しょうゆう、奉基ほうき、寵忍ちやうにん、賢玉けんぎよく、安福、勤操ごんそう、修円、慈誥じこう、玄耀げんよう、歳光さいこう、道証どうしやう、光証かんびん、觀敏等の十余人が、最澄法師と召し合わせられて宗論をしたが、あるいは一言で舌を卷いて二言三言におよばず、みな一同に頭をかたむけ腕を組んでしまった。三論宗で立てる二蔵・三時・

三転法輪、法相宗の三時・五性、華嚴宗の四教・五教・根本枝末・六相・十玄等々、みなその大綱を破られてしまった。たとえば、大きな家の棟梁が折れくずれるように、十大徳の高慢の幢がたおれたのである。

その時に、桓武天皇は大いに驚かれて、同月の二十九日に和氣弘世と大伴国道の二人を勅使として、重ねて七寺、六宗におおせくだされたので、おのおのは、次のような帰伏の状をたてまつった。「ひそかに天台大師の『玄義』『文句』『止観』等をみれば、総じて釈尊一代の教を括って、ことごとく釈尊出世の本懷を顕して通ぜざるところはなく、天台宗のみが諸宗派に超越して殊に一仏乗を示している。その中の所説は甚深の妙理であり、われわれ七大寺、六宗の学僧は昔よりいまだかつて聞いたことも見たこともないものである。三論宗と法相宗が長年にわたって争ってきた法門の違いも、たちまちに氷のごとく釈け、照然として明らかになり、雲や霧が開けて、三光を見るように明らかになった。聖徳太子が仏法を弘通されてからこのかた、いまに二百余年のあいだ、講ずるところの経論はその数が多く、あれとこれが理を争っていたが、その疑いはいまだに解けていなかった。しかるに、最妙の円宗は、いまだ世間に弘められていなかった。この間の衆生はいまだ円味を味わう資格がなかったのであるか。伏して考えてみるのに、日本の天皇は遠く如来の付嘱を受けて深く純円の機を結び、一乗妙法の義理を初めて興顕して、六宗の学者はいま初めて仏法の至極を悟ることができた。この世の衆生は、いまより後は、ことごとく妙円の船に乗り、早く成仏得道の彼岸に渡ることができるのである。〔中略〕善義等は宿縁に引かれて良縁に逢うことができ、いまだかつて聞いたことのない奥義を拝見することができた。深い宿縁でなければ、どうしてこのような聖代に生まれあうことができようか」と。

彼の中国の嘉祥等^{かじよう}は、百余人を集めて天台大師を聖人と定めている。いま日本の七大寺の二百余人は、伝教大師を聖人と号したてまつっている。仏の滅後二千余年におよんで、両国に、聖人が二人出現したのである。そのうゑ、天台大師のいまだ弘めなかつた法華^{えんどん}円頓の大戒を、比叡山^{ひえいざん}に建立されたのだから、像法の末^{まつ}に法華経が広宣流布されたのではないのか。

答えていわく、迦葉^{かしよう}、阿難^{あなん}等の弘通^{くづつう}しなかつた大法を馬鳴^{めみよう}、竜樹^{りゆうじゆ}、提婆^{だいば}、天親^{てんじん}等が弘通したということ、前の問答ではつきりした。また竜樹、天親等の流布し残した大法を、天台大師が弘められたことは、また前の問答ではつきりした。また天台智者大師の弘通されなかつた円頓の大戒を、伝教大師が建立されたことも、はつきりしている。ただし、ここでもっとも不審^{ふしん}に思うことは、釈尊は一切経を説きつくされたが、仏の滅後において迦葉、阿難、馬鳴、竜樹、無著^{むじやく}、天親^{てんじん}乃至天台、伝教のいまだ弘通されていない最大の深密^{じんみつ}の正法が、経文の面^{おもて}に現前と説かれている。この最大深密の正法が、いま末法の初めの五五百歳に世界に広宣流布すべきか否^{いな}かの問題が、もっとも不審^{ふしん}きわまりないところである。

日本小乗の三処の戒壇 奈良時代、中国から渡来した律僧鑑真^{かんじん}の建てた三力所の戒壇のこと。奈良の東大寺、下野^{しもつけ}の薬師寺^{やくしじ}、筑紫^{つくし}の観世音寺^{かんぜおんじ}の小乗の三戒壇をいう。

扶桑^{ふそう} 日本の別名。扶桑とは樹の名で、古来、中国では東海の日の出る海の方に小さな島があり、その島に葉が桐に似て、初めてできる実は筍^{たけのこ}に似ている樹を多く産すると伝えられ、その国を扶桑国といったことから、中国から東方の日本を扶桑国と呼んだ。

仏法の人をすべて一法となせる事 日寛上人は「円頓の戒壇を叡山に建立して、日本一州を一同に円戒の地と成したまうが故なり」(文段集二六九頁)と述べられている。つまり伝教は比叡山に戒壇を建立し、仏法の根本を明確にしたのである。このことは従来の邪義を打ち破ると共にわが国の仏教界を法華經の一法で統一したことを示す快挙であったことを大聖人は賞讃されているのである。

此の二人 像法時代に述門の法華經を広宣流布した、天台と伝教をさす。

秀句 三卷。伝教大師最澄の著述。天台法華宗が唯識、三論、華嚴、真言などの諸宗よりも優れていることを、法華十勝をあげて説示している。法相宗の徳一が五性各別・三乘真実の義を立てたのに対して、一切衆生皆成仏道・三乘方便の義を説いて徳一の義を破すなど、法華經が真実究極の法であり、法華宗は釈迦所立の宗であることを述べている。

須弥 古代インドの世界観で世界の中心にあるとされた山。梵名スメール(Sumeru)の音写で、妙高、安明などと訳す。古代インドの世界観によると、この世界の下には三輪(風輪・水輪・金輪)があり、その最上層の金輪の上に九つの山と八つの海があつて、この九山八海からなる世界を一小世界としている。須弥山は九山の一つで、一小世界の中心であり、高さは水底から十六万八千由旬といわれる。須弥山の周囲を七つの香海と金山とが交互に取り巻き、その外側に鹹水(塩水)の海がある。この鹹海の中に閻浮提などの四大洲が浮かんでいるとする。

能く此の經を説かん是則ちこれ難し 妙法蓮華經見宝塔品第十一の文(妙法蓮華經並開結四一六頁)。日寛上人は「秀句下二十二にこの文を正釈して云く『能く此の經を説くとは即ち妙法蓮華經なり』已上。感涙堪えずして頌し云く『一たび此の文を仰いで涙千行、暮天の雲尽きて内鑒明らけし。准知す、部内此經の句、多くは是れ秘沈文底の名』と」(文段集二六九頁)と述べられている。

浅を去て深に就くは丈夫の心なり 日寛上人は「秀句に云く『六難は是れ則ち法華經を指す。九易は則ち是れ余の經典を指す』云云。余の經典を去つて法華經に就くが故に『浅を去つて深に就く』というなり。当に知るべし、

『丈夫』は即ち釈迦の異称なり。これ十号の一名なり」(文段集二六九)と。

賢劫 現在の一大劫のこと。三劫(過去世・現在世・未来世)の一つ。善劫ともいう。千仏など多くの賢聖が出現して衆生を救うゆえにこのように称する。

由旬 梵語で由旬、由延、踰繕那、踰闍那とも音写し、和、和合、応、限量、一程、駅等と訳す。インドの里程の単位。当時の帝王一日の行軍里程をさす。一由旬は四俱盧舍、または八俱盧舍といわれ、一般には中国の四十里にあたるという。他に十六里、十七里(仏教)、三十里、三十二里(世俗)などの異説がある。

東を西といふ 慈恩は一乘方便・三乘真実といい、法蔵は華嚴第一・法華第二といい、善無畏は顕劣密勝の邪義をとなえたことをいう。

高雄山 京都市右京区の高雄町にある山。高さは四二八メートル。この山の背に真言宗神護寺がある。この寺では延暦二十一年(八〇二年)、勅使の和氣弘世臨席のもと伝教が七大寺の高僧達と法論を行い、これを打ち破っている。その後この寺院は弘法の収めるところとなり、真言密教の道場となった。

善議 (七二九年―八二二年)。平安初期の三論宗の僧。姓は慧賀、河内(大阪府)の人。幼少の頃から大安寺道慈について三論を学び、後に入唐した。帰朝後は、大安寺に住み、空宗(三論)を説いた。弟子に安澄、勤操がいる。

勝猷 生没年不明。平安初期の南都七大寺の十大徳といわれた高僧の一人。

奉基 生没年不明。平安初期の法相宗の僧。「ぶき」とも読む。平安初期の南都七大寺の十大徳といわれた高僧の一人。法相宗の奈良元興寺の僧。

寵忍^{ちようにん} 生没年不明。南都六宗の僧の一人。

賢玉^{けんぎよく} 生没年不明。平安初期の法相宗の奈良元興寺の僧。

安福^{あんぷく} 生没年不明。南都六宗の僧の一人。

勤操^{こんそう} (七五八年―八二七年)。平安初期の南都七大寺の高僧の一人。三論宗の僧。姓は秦氏^{はた}、大和石淵寺^{いわぶちでら}の開基で、

石淵僧正ともいう。大和高市郡^{たけち} (奈良県) に生まれる。十二歳で大安寺の僧信礼に師事し、十六歳の時、高野山

に登る。後に東大寺の善議^{ぜんぎ}に三論『中觀論』『十二門論』『百論』を学んだ。後に僧都^{そうず}となって東大寺と西大寺を

管領し石淵寺を開いた。天長三年(八二六年)に大僧都となり、死後勅をえて僧正となった。

修円^{しゆえん} (七七一年―八三五年)。平安初期の法相宗の僧。大和の人。興福寺に住み、当時第一の学僧として有名であつ

た。伝教が唐から帰国後、伝法灌頂を受けた。弘仁九年(八一八年)に伝教の大乗戒壇建立の請願に対して、同十年(八一九年)護命らと共にそれに反対する上奏を行った。義真の没後、延暦寺総事になろうとしたが衆徒に反対されて室生山に移り没した。弟子には伝教と「三一論争」を行った徳一などがいる。著書に『因明要記抄』

二巻などがある。

慈誥^{じこう}・玄耀^{げんよう}・歳光^{さいこう} いずれも平安時代初期の南都七大寺の高僧の一人。生没年不明。

道証^{どうしやう} (七五六年―八一六年)。平安初期の法相宗の僧。姓は百濟氏。阿波(徳島県)に生まれ、幼少の頃から奈良に

入り、法相を学んだ。弘仁二年に太宰府の講師に補せられ、観世音寺に住んだ。

光証^{こうしやう} 生没年不明。南都七大寺の十徳といわれた高僧の一人。

観敏^{かんびん} 生没年不明。平安初期、奈良大安寺の僧。

手をあざう^又 腕を組んで降伏するさま。

三論の二藏・三時・三轉法輪　三論宗で立てている教義。釈尊の一代聖教を声聞藏と菩薩藏の二藏に分け、一に心境俱有（小乘經）、二に境空心有（法相大乘經）、三に心境俱空（無相大乘經）の三時を立てている。また三轉法輪とは一に根本法輪、二に枝末法輪、三に摂末歸本法輪であり、これらは共に般若經を第一とする教判である。大聖人はこれら三論宗の法門については「三論宗の如きは二藏を立つる時・菩薩藏に於て華嚴法華等を収め般若經に同ずと雖も新古の大般若經を開き見るに全く大般若を以て法華涅槃に同ずるの文無し華嚴は頓教・法華は漸教等とは人師の意樂にして仏説に非ざるなり」（『守護國家論』御書四四六）と破折されている。

法相の三時・五性　三時とは法相宗が釈尊の一代聖教を年次に従つて三時期（初時教・第二時空教・第三時中道教）に分類したもの。初時教とは法のみ有であると説くもので阿含經等がそれに相当する。第二時空教とは一切諸法みな空であると説く。般若經等がこれにあたる。第三時中道教とは非有非空を明かすもので華嚴經、法華經、解深密經等がこれにあたる。五性とは、衆生が本来備えている五種の機類のことで、決して変えることのできないものであるとして五性各別の説を立てている。一に定性声聞、二に定性緣覺、三に定性菩薩、四に三乘不定性、五に無性である。

華嚴宗の四教・五教　釈尊の一代聖教をその内容によつて四種または五種に分類し、華嚴經を最高の教えとした華嚴宗の教判。四教は法藏の弟子の慧苑の説。大聖人は「華嚴經は（中略）法華涅槃の如く一代聖教を集めて方便と為すの文無し、四乗を説くと雖も其の中の仏乘に於て十界互具・久遠実成を説かず」（『守護國家論』御書四三六）と破折されている。

根本枝末　三論宗の吉藏が著した『法華遊意』で説かれる三轉法輪の中の根本法輪と枝末法輪のこと。華嚴宗でも用いる。

六相 六相とは総相、別相、同相、異相、成相、壞相。十玄と共に華嚴宗で立てる法界觀に関する法門。諸法を差別と平等の両面から述べたもので、一切の法は皆六相を具足し、凡夫にはこの六相が別々に見えるが、聖人の眼には互いに円融して相即無礙となつてゐることをいう。『十地經論』卷一、『華嚴五教章』卷四などにある。

十玄 微妙な十種類の縁起のこと。諸事象が相互に密接に関連する相を十種の方角から説明したもの。華嚴宗の教判。華嚴一乘十玄門、一乘十玄門ともいう。華嚴宗の第二祖智儼が法華一乘法門で創唱したものを古十玄、更に第三祖法蔵が智儼の配列した順序、名目を多少変更して『華嚴經探玄記』卷一に述べたものを新十玄という。古十玄では①同時具足相応門②因陀羅網境界門③秘密隱顯俱成門④微細相容安立門⑤十世隔法異成門⑥諸蔵純雜具德門⑦一多相容不同門⑧諸法相即自在門⑨唯心廻轉善成門⑩託事顯法生解門となつてゐる。新十玄では順序、法門名に多少の違いがある。

弘世・国道 ひろよ くにみち ともに伝教大師に帰依した檀越でよく大師を外護した。弘世は和氣弘世で、平安時代初期の貴族。広世とも書く。和氣清麻呂の長子。典葉頭、後に大学別当に任じられた。延暦二十一年（八〇二年）に勅を得て弟の真綱と共に南都六宗の碩徳十四人を高雄寺に集め、伝教を講師として法華会を開いた。生没年不明。国道は大伴国道（七六八年―八二八年）のことで、延暦四年（七八五年）、父親の継人が要人暗殺事件に連座して佐渡へ流罪された時に共に佐渡に渡つた。しかし、恩赦で京に帰り、文才を認められて参議に列し、右大弁を兼任した。

天台の玄疏 玄は『法華玄義』、疏は『法華文句』のこと。

渙焉 かんえん 氷などがとけるさまをいいあらわしたことば。

三光 太陽、月、星。

聖徳の弘化 聖徳太子が仏教をもつて化導したことをさす。

聖朝久しく如来の付を受け　ここで聖朝とは桓武天皇の代をさしている。しかしこのようにいうのも伝教が法華經迹門を興顯したからに他ならない。故に桓武天皇を賛嘆しているといえども、その意は伝教に対してのものというべきであらう。

純円の機　純円の教えによって悟る機根のこと。純円は純粹な円教の意で法華經のこと。

一妙の義理　一乗妙法の法門。

此の界の含靈　がんにょうこの世の衆生。

講義

第十五章から問答料簡りようけんが始まり、第十六章は竜樹、天親、第十七章は天台、そして本章は伝教に約して像法みづ未弘を明かされている。像法未弘を明かすのは、末法流布を明かさんがためであることは、前に述べたとおりである。

延暦二十一年正月十九日えんりやく たかおさん高雄山に……

過去の歴史においては、仏教をひろめるためには国主諫暁かんぎょうが大事であつた。いままで述べてきた仏教史のうえからみても、賢王の外護をえて仏教が興隆した時には、国家、民族も繁栄し、悪王、愚王に遭あつて仏教が弾圧され迫害された時には、国家も民衆も不幸になり、滅亡への道をたどってきた。ゆえ

に国主もまた、正しい仏法を立てて、国を安んずる道を考えなければならなかったのである。

延暦二十一年（八〇二年）正月十九日に、桓武天皇は高雄山寺たかおさんじにおいて、六宗の学者と伝教大師を討

論させ、その結果、六宗の学者はみな伝教大師に破折されて、帰伏の状をたてまつった。さらに伝教大

師は比叡山ひえいざんに迹門しやくもんの戒壇を建て、日本の仏教を法華經に統一して、数百年にわたる平和と繁栄の基礎を

築いたことは、本文に示されたとおりである。しかし、この公場対決の時は、伝教大師は三十六歳の壮

年であつたが、これより弘仁十三年（八三二年）、五十六歳で入滅するまでの伝教大師の後半生は迹門戒

壇建立の戦いであり、戒壇建立が聴許ちやうきよになつたのは、伝教大師が入滅して七日目のことであつた。

それにつけてもここで深く思うことは、日蓮大聖人の御遺命である本門戒壇建立についてである。全世界の民衆の真の幸福はどこにあるのか。地球民族の平和と繁栄はどこにあるのか。世界人類の永遠の平和への道はどこにあるのか。これらについて、正しい道を求め、正しい教えを求めて、時を創り時を待ち、よくよく研究していかなければならないのである。

三論法相久年の諍い等

インドの大乗仏教は、竜樹りゆうじゆ、提婆系だいばの大乗空宗としての中観宗と、無著むじやく、世親系せしんの大乗有宗としての瑜伽宗ゆががあつた。中観宗は中国に渡つて三論宗と呼ばれ、吉蔵法師きちざうが大成した。吉蔵法師は竜樹を祖とする中国三論宗の開祖と仰がれているが、後にはまったく天台大師に帰伏している。しかし、この宗は

日本にも渡って盛んに空^{くう}か有^うかで法相宗^{ほつそう}と争っていた。瑜伽宗は唐代に玄奘^{げんじょう}がインドへ旅行して戒賢^{かいけん}論師から習い伝え、中国へ渡って法相宗と呼ばれた。日本へは道慈^{どうじ}、道昭^{どうしょう}等が伝えている。

こうしてインド、中国、日本の三国にわたって長年の争いとなっていた両宗も、伝教大師が法華経第一と立てたことによって一切の論争が氷解^{ひようかい}したのである。

法相宗については、「開目抄上」(御書一九八^{ページ})に詳しい。すなわち仏滅後九百年ごろに無著菩薩が出て法相宗(瑜伽宗)をひろめた。彼の弟子には世親^{せしん}、護法、難陀^{なんだ}、戒賢という大論師がいた。戒日大王はこれに深く帰依し、全インドがこれにしたがっていた。中国から玄奘三蔵がインドへ渡ってこの法相宗を習い伝えて太宗皇帝に授けた。賢王たる太宗は深くこれに帰依した。そして玄奘は神昉^{しんぼう}・嘉尚^{かしよう}・普光^{ふこう}・窺基^{きき}を弟子として大慈恩寺を建て全国にひろめた。日本には孝徳天皇の時代に、道慈、道昭が習い渡して、これこそ三国第一の宗であると、山階寺^{やましな}であがめた。

しかし日蓮大聖人は同じく「開目抄上」で「華嚴宗と真言宗は法相・三論にはにるべくもなき超過の宗なり」(御書一九九^{ページ})と、法相、三論を破すとともに、さらに華嚴宗、真言宗が天台の一念三千を盗み取ったことを明かされている。さらに「観心本尊抄」では「爾前迹門^{にぜんしやくもん}の円教尚仏因に非ず何^{いか}に況や大日経等の諸小乗経をや何に況や華嚴・真言等の七宗等の論師・人師の宗をや、与えて之を論ずれば前三教を出でず奪つて之を云えば蔵通に同ず」(御書二四九^{ページ})と破折されている。

このように釈尊一代の仏教の論争は、日蓮大聖人の御出現によって、さらにその浅深勝劣は明確に決

定づけられたのである。

但し詮ただと不審せんなる事は等の文

「答えて云く迦葉阿難等の……」この答えは二段に分かれる。初めの一段は結前の文であり、迦葉以後天台までの諸師が円頓の大戒を弘通しなかったことを結論され、「但し詮ただと不審……」からは生後の文であり、あらためて釈尊滅後の正法流布の有無を述べられるのである。そして、その答えの意は天台、伝教ははまだ文底秘沈もんでいひちんの「最大深密の正法」をひろめていないので、広宣流布ではないということである。

經文の面おもてに現前あらわなり等

「最大深密の正法」とは文底秘沈の三大秘法である。文底秘沈の大法であるにもかかわらず、なにゆえ「經文の面に現前なり」と仰せられるのか。それは法華經の謂いわれを知って依義判文するから現前なのである。

日寛上人はそれを「依義判文抄」において次のように示されている。「撰時抄上に曰いく『仏の滅後、迦葉・阿難・馬鳴・竜樹・天台・伝教の未だ弘通せざる最大深秘の大法經文の面おもてに顕然けんねんなり。此の深法、今末法の始め後五百歳に一閻浮提えんぶだいに広宣流布』等云云。

問う、夫れ正像未弘の大法、末法流布の正体、本門の三大秘法とは、一代諸經の中には但法華經、法華經の中には但本門壽量品、壽量品の中には但文底秘沈の大法なり。宗祖何ぞ最大深秘の大法經文の面に顕然なりと言うや。

答う、一代聖經は浅きより深きに至り、次第に之を判ずれば実に所問の如し。若し此の經の謂れを知つて、立ち還つて之を見る則是、爾前の諸經すら尚本地の本法を詮せざる莫し、何に況んや今經の迹本二門をや。天台大師、玄文の第九に云く『皆本地の実因果果、種々の本法を用いて諸の衆生の為に而も仏事を作す』とは是れなり。故に知りぬ、文底の義に依つて今經の文を判ずれば、三大秘法宛も日月の如し。故に經文の面に顕然なりと云うなり。

問う、此の經の謂れを知るとは、其の謂れ如何。

答う、宗祖云く『此の經は相伝に非ざれば知り難し』等云々。三重秘伝云云。

問う、若し爾らば、其の顕然の文、如何。

答う、此に開山上人の口決あり。今略して之を引き、以て綱要を示さん云云。三大秘法口決に云く

『一には本門壽量の大戒、虚空不動戒を無作の円戒と名づけ、本門壽量の大戒壇と名づく。二には本門壽量の本尊、虚空不動定、本門無作の大定を本門無作事の一念三千と名づく。三には本門壽量の妙法蓮華經、虚空不動慧を自受用本分の無作の円慧と名づく云云。口決に云く、三大秘法の依文は神力品なり。疏に云く、於諸法之義の四偈は甚深の事を頌す云云。能持是經とは三大秘法の中の本門の妙法蓮華

經なり。乃至畢竟住一乘とは三大秘法の中の本門壽量の本尊なり。一切衆生の生死の愛河を荷負する船筏、煩惱の嶮路を運載する車乘なり。乃至応受持斯經とは三大秘法の中の本門の戒壇なり。裏書に云く、受持即持戒なり。持戒清潔、作法受得の義なり』等云云略抄。秘すべし秘すべし、仰いで之を信ずべし云云」(六卷抄一一六頁)

さらに「依義判文抄」では、法師品の「在々処々」の文等、壽量品の「是好良藥」等の文、壽量品の「一心欲見仏」等の文等、数多くの例文を挙げて三大秘法の依文とされている。

此の經の謂れを知る

前述の「依義判文抄」に「此の經の謂れを知る」とあるが、その「謂れを知る」についての日寛上人の教えの要は次のとおりである。

もし文底のいわれを知れば、すなわち三箇の秘法は經文に顯然なのである。その文底のいわれを知ると知らないとは、天地雲泥、万里の差がでてくるのである。

もし、仏法のいわれを知らないならば、仏法も、なお世法である。名利を求める僧などが、仏法をもつて渡世の橋としてゐるようなのが、これである。もし、仏法のいわれを知るならば、世法は、すなわち仏法である。天台大師が「深く世法を識れば即ち是れ仏法なり」と述べ、法華經法師功德品第十九に「治世語言。資生業等。皆順正法」(妙法蓮華經並開結五六一頁)とあるのがこれである。

もし、法華經のいわれを知らないならば、法華も、なお爾前にぜんの經である。權經の人が法華經を讀誦どくじゆするごときが、これである。これはあたかも、香木である栴檀せんたんを焼いて炭にしてしまふようなものである。もし法華經のいわれを知るなら、爾前經は、すなわち法華經である。日蓮大聖人が「此の覺きより起りて後は行者・阿含・小乘經を讀むとも即ち一切の大乗經を讀誦し法華經を讀む人なり」（「十法界明因果抄」御書四三七頁）と仰せられているのがこれである。瓦礫がりがくを變じて金となすようなものである。

もし本門のいわれを知らないならば、本門もなお迹門である。本迹一致の類たぐいのごときは、これである。もし本門のいわれを知るならば、迹門はすなわち本門である。わが祖日蓮大聖人が方便品を讀誦されたごときがこれである。

もし文底のいわれを知らないならば、文底もなお熟脱じゆくだつである。諸門徒が、三大秘法を談ずるがごときが、これである。もし文底のいわれを知るならば、熟脱はすなわち文底の秘法である。すなわち当文（最大の深密の正法經文の面に現前なり）のごときがこれである。

たとえば和氏かしの璞あらたまのようなものである、すなわち、知らなければ玉を石としてしまい、これを知ればすなわち石を玉となすのである。このように、知ると知らないとは、天地雲泥、万里の差があるのである。（以上、文段集二七〇頁～二七一頁）

第十九章

末法について料簡す

問ういかなる秘法ぞ先ず名をきき次に義をきかんとをもう此の事もし実事ならば釈尊の二度・世に出現し給うか上行菩薩じようぎようぼさつの重ねて涌出ゆじゆつせるかいそぎいそぎ慈悲をたれられよ、彼の玄奘三蔵げんじようは六生を経て月氏に入りて十九年・法華一乗は方便教・小乗阿含經あこんは眞実教、不空三蔵は身毒けんどくに返りて寿量品を阿弥陀仏とかかれたり、此等は東を西という日を月とあやまてり身を苦くるしめてなにかせん心に染そめてようなし、幸い我等末法に生れて一步をあゆまずして三祇ぎをこゑ頭を虎にかわずして無見頂相むけんちようそうをゑん、答えて云く此の法門を申さん事は經文に候へばやすかるべし但ただし此の法門には先ず三の大事あり大海は広けれども死骸がいをとどめず大地は厚けれども不孝の者をば載のせず、仏法には五逆をたすけ不孝をばすくう但ただし誹謗ひぼう一闡提せんたいの者持戒にして第一なるをばゆる容されず、此の三のわざはひとは所謂いわゆる念仏宗と禪宗と眞言宗となり、一には念仏宗は日本国に充滿して四衆の口あそびとす、二に禪宗は三衣一鉢の大慢の比丘びくの四海に充滿して一天の明導みようどうとをもへり、三に眞言宗は又彼等の二宗にはにるべくもなし叡山・東寺・七寺・園城おんじよう或は官主かんしゆ或は御室おむろ或は長吏ちやうり或は檢校けんぎやうなりかの内侍所ないしどころの神鏡みかがみじんかい燼灰じんかいとなりしかども大日如来の宝印ほういんを仏鏡ぶつぎやうとたのみ宝劍さい西海に入りしかども五大尊をもつて国敵を切らんと思へり、此等の堅固の信心は設い劫石はひすらぐとも・かたぶくべしとはみへず大地は反覆はんぷくすとも疑心をこりがたし、彼の天台大師の南北をせめ給いし時も此の宗はいまだわたらず此の伝教大師の六宗をしゑたげ給いし時も洩もれぬ、かたがたの強敵をまぬがれてかへつて大法をかす

め失う、其の上传教大師の御弟子・慈覚大師・此の宗をとりたてて叡山の天台宗をかすめをととして一向真言宗になししかば此の人には誰の人か敵をなすべき、かかる僻見のたよりをえて弘法大師の邪義をもとがむる人もなし、安然和尚すこし弘法を難ぜんとせしかども只華嚴宗のところ計りとがむるににてかへて法華経をば大日経に対して沈めはてぬ、ただ世間のたて入の者のごとし。

通解

——問う、それはいかなる秘法か。まずその名を聞き、次にその義を聞きたいと思う。このことがもし事実であるならば、釈尊が二度、この世に出現されたのか、上行菩薩がふたたび涌出されたのか、いそぎいそぎ慈悲を垂れて教えていただきたい。

彼の中国の玄奘三蔵は、經典を求めてインドへ入るのに、六度も大難にあつて死に、七度めに生まれてようやくインドへ渡つて、十九年の大旅行のすえ、尋ねあてた結論が、法華一乗は方便教であり、小乗の阿含経が真実の教であるということであつた。また不空三蔵は中国からインドへ帰つた結果、寿量品の仏は阿弥陀仏であるなどということを書いている。

これらは東を西といい、太陽を見て月だと誤っているようなものである。これでは、身を苦しめても、心をこめてもなんにもならない。幸いわれらは、末法に生まれて、一步も歩まずして、三阿僧祇百大劫の修行をしたことになるし、身を虎に与えなくとも、無見頂相という仏の位を得るであらう。

答えていわく、この深秘の法門を教えてあげることがは経文に明らかに説かれているから容易である。ただしこの法門には、まず三つの大事がある。大海は広いけれども、死骸はとどめない。大地は厚いけれど

も、不孝の者はのせない。仏法では五逆の罪を犯した者でも、不孝の者でも救うことができる。ただし正法を誹謗する一闡提の者と、表面だけ持戒第一のような姿をした徒は許さないのである。

この三つの災いとは、いわゆる念仏宗と禅宗と真言宗である。一に念仏宗は、日本の国に充滿して、四衆の口あそびになっている。二に禅宗は、三衣一鉢の姿をした大慢の僧侶が四海に充滿して、天下の指導者だと思っている。三に真言宗は、彼の念仏や禅の二宗には似るべくもない悪宗である。比叡山、東寺、七大寺、園城寺の座主や、あるいは御室や、あるいは長吏とか、あるいは検校などが、（一人残らず真言にかぶれてしまった）のである。

かの宮中内侍所（賢所）の神鏡は、熾灰となってしまったのを、大日如來の宝印を仏鏡とたのんで、まづついているという。また宝剣は、西海へ沈んでしまったので、真言宗の五大尊をまつつて国敵を切るといつている。このような、真言に対する堅固な信心は、たとえ劫石を天衣ですりへらしても、ぐらつくとは思えない。また大地が反覆しても疑いの心はおきないであろう。

彼の天台大師が、南三北七の十派をせめ落とされた時にも、真言宗はまだ中国へ渡っていなかった。また、この伝教大師が六宗を破折された時にも、真言は破折からもれていた。たびたびの強折からまぬかれていたので、かえって法華經の大法をかすめ失おうとしている。その上、伝教大師の御弟子の慈覚大師は、この真言の邪宗をとり立てて比叡山の天台宗をかすめ落とし、一向に真言宗としてしまったので、この人に対し誰が敵対できようか。このような僻見が盛んになって、弘法の邪義をとがめる人もなくなつた。安然和尚はすこし弘法を非難しようとしたが、ただ華嚴宗だけをとがめて、かえって法華經を大日經よりも劣るとしてしまった。それは、世間の仲人のようなものであった。

六生を経て月氏に入りて十九年 玄奘^{げんじょう}三蔵はインドに行く途中、六度も難にあつて死に、七生目に玄奘と生まれ、ようやくインドに入ることができたといわれる。インドに行くことの容易ではないことを六生の生死にたとえたのである。十九年は十七年の誤りであることは、前に述べたとおりである。第十章の語訳「月支に入つて十九年が間」の項（二〇三頁）参照。

三祇^{さんぎ} 三祇とは、三阿僧祇劫^{さんあそうぎこう}のこと。菩薩が修行して成仏するまでの劫数をいう。阿僧祇とは梵語アサンキヤ（asankya）の音写で無数、無尽数と訳す。インドにおける大数の名目で極大で数えることのできない数をいう。菩薩の修行の階位を五十に分けたときに、十信・十住・十行・十回向の四十位までを第一阿僧祇劫、十地のうち初地から七地までを第二阿僧祇劫、八地から十地までを第三阿僧祇劫とする。『大毘婆沙論』によると、藏教の菩薩は初阿僧祇に七万五千の仏を供養し、第二阿僧祇に七万六千の仏を供養し、第三阿僧祇に七万七千の仏を供養し、この間は六波羅蜜を行じて、化他を専ら^{もっぱ}にするという。

頭を虎にかわずして無見頂相^{むけんちやうそう}をえん 頭を虎にかうとは、金光明経に、釈尊が薩埵王子^{さつた}として修行していたとき、身を虎にあたえ六度の修行をまっとうして、いまの釈尊と生まれることができたと言っている。無見頂相とは仏の八十種好^{しゆじやう}のひとつで、仏果をあらわす。

三の大事 念仏宗と禅宗と真言宗の三つの謗法^{ぼうぼう}を、強盛に折伏することを三の大事というのである。

大海は広けれども死骸^{がい}をとどめず 涅槃經^{ねはん}第三十獅子吼菩薩品に大海の八つの不思議が説かれているが、第七の不思議として「死屍^{しし}を宿せず」といい、さらに「死屍^{しし}とは一闍提^{いつせんたい}（不信の者）や正法誹謗^{ひぼう}の者をいう」（趣意、大正十二

卷八〇五」とある。すなわち正法誹謗の者や不信の者は救われないことをたとえているのである。

大地は厚けれども不孝の者をば載せず 四十華嚴經第十二卷の普賢行願品に地神の語として「われ大地一切の所有および須弥山を負うとも、もって重しとせず、また厭う心なし、三種の人において、われ恒に厭倦して勝持することを欲せず」（大正十卷七一五）とあり、三種の人とは、一には謀反心をいだく者、二には恩親をすてることを願い父母に孝行しない者、三には因果を撥無する者とある。不孝とは、仏法上の不孝すなわち誹謗一闡提の者を意味する。

五逆 理に逆らうことがはなはだしい五種類の重罪。無間地獄の苦果を感じる悪業のゆえに無間業ともいう。五逆罪には、三乗通相の五逆（五逆の本罪）、大乘別途の五逆、同類の五逆（相似の五逆）、提婆の五逆などがある。代表的なものは『俱舍論』卷十七に説かれる三乗通相の五逆で、一に父を殺し、二に母を殺し、三に阿羅漢を殺し、四に仏身より血を出し、五に和合僧を破る、をいう。

三衣一鉢 僧が身につける三衣と、物を乞う時に用いる鉄鉢一個のこと。僧のあるべき姿、行儀をいう。僧の生活が質素であるべきことを表示しており、僧の所有すべき限度をさす。日蓮大聖人はここでお示しのように鎌倉時代の慢心の強い禅宗の僧を「三衣一鉢の大慢の比丘」、また権力と結託して民衆をあざむく律宗の僧などを「三衣一鉢の獵師」として非難されている。

一天の明導 天下の指導者。

官主 比叡山の座主のこと。

御室 京都市右京区にある仁和寺の別称。古義真言宗の大本山。第五十九代宇多天皇が光孝天皇の遺志を継いで仁和四年（八八八年）に建立。御室の名は、宇多天皇が入道後、仁和寺に居を構えたので御室御所と呼ばれたこと

による。いわゆる門跡の始まりとされる。

長吏 ちやうり 寺院の首長となる僧侶のこと。園城寺、勧修寺などに設けられた職名。

検校 けんぎやう 僧侶の役職。寺社にあって一山の僧尼を監督する職。

内侍所の神鏡燼灰 ないしどころ みかがみじんかい 内侍所とは賢所ともいい、三種の神器の一つ、八咫鏡を奉安する宮殿のこと。村上天皇の天徳

四年（九六〇年）に内裏が炎上して、内侍所も焼けた。

大日如來の宝印 だいにくわいのほういん 真言密教の本尊、両部の曼荼羅において、金剛界では大日如來が智拳印を結び、胎藏界では

法界定印を結んでいる。

五大尊 五大明王のこと。真言密教明王部の五尊。金剛界五部の教主である五仏（大日如來、阿閼如來、宝生如來、阿

弥陀如來、不空成就如來）の教令を受けて、内外の魔障を降伏するために忿怒形を現じた身のこと。不動明王、

降三世明王、軍荼利明王、大威徳明王、金剛夜叉明王をいう。

劫石 劫の長さを決める基準となる石。天人が百年に一度天衣をもって擦り減らす大石のこと。『大智度論』に説

かれ、石が天衣によって摩滅し尽くしたときを一劫といい、無限の時間をあらわしている。これを抔石劫とい

う。

ひすらぐ み 磨かれて、だんだん薄くなること。

慈覚大師 （七九四年―八六四年）。比叡山延暦寺第三代座主。台密三派の一つである慈覚派の祖。諱は円仁。慈覚大

師は諡号。下野国（栃木県）都賀郡に生まれる。俗姓は壬生氏。十五歳で比叡山に登り、伝教大師の弟子となつ

た。勅を奉じて、仁明天皇の治世の承和五年（八三八年）入唐して梵書や天台、真言、禅等を修学し、同十四年

（八四七年）に帰国。仁寿四年（八五四年）、円澄の跡をうけ延暦寺第三代の座主となった。天台宗に真言密教を取

り入れ、真言宗の依経である大日経、金剛頂経、蘇悉地経そしつじきようは法華経に対し所詮の理は同じであるが、事相の印と真言とにおいて勝れているとした。没年については貞観八年（八六六年）ともいわれる。著書には『金剛頂経疏』七卷、『蘇悉地経略疏』七卷、『即身成仏義私記』一卷等がある。

あんねんわじよう安然和尚（八四一年―）。天台宗の僧。伝教大師の俗縁といわれる。幼少から比叡山に登り、はじめ慈覚の弟子となり、顕密二教を学び、後に元慶院の遍照について胎藏界の法を受けた。元慶元年（八七七年）唐に渡ろうとしたが果たせなかった。元慶八年（八八四年）には元慶院の座主となり、更に伝法院阿闍梨に任じられた。晩年は、比叡山に五大院を建て著述に専念した。著書に『教時問答』四卷、『教時諍論』一卷、『悉曇藏』八卷など多数ある。

たていりたて入の者「たて入の者」とは仲人なこうどのこと。すなわち安然が、弘法を批判しても、ただ華嚴と法華をいれかえたのみで、あいかわらず真言第一を許した辺をいう。

講義

これより第十二番の問答となり、正しく末法について料簡りようけんするのである。

いかなる秘法ぞ先ず名をきき等聞

さきに「最大の深密の正法経文の面おもてに現前げんぜん」とあるが、その末法流布の深密の正法とは、一切諸経の中には但ただ法華経、法華経の中には但本門寿量品、本門寿量品の中には但文底秘沈の大法である。ゆえに

深秘の中の最深秘、大法の中の最大法である。また五百塵点劫は本果ほんがの所証しよしようであり、「復倍上数ふばいじやうしゆ」は本因の初住である。またその「復倍上数」の当初そのかみは本因ほんいん所証の妙法である。ゆえに深秘の中の最深密、大法の中の最大法なのである。

また日寛上人は「先ず名をきき聞」について、末法流布の秘法は、ただ本門寿量品の文底に秘沈された、深秘のなかの最深秘の秘法、大法のなかの最大法であるから、すぐにその義を聞くことができるはずがない。ゆえに「先ず名をきき聞次に義をきかんとをもう」といつているのである。そしてその名および義は、この「撰時抄」のなかにはあらわされていない。しかしながら、あらあら後の「報恩抄」「観心本尊抄」「法華取要抄しゆよう」「本尊問答抄」等の意をとって、略して一意を示せば、秘法の「名」とは、本門の本尊と本門の戒壇と本門の題目の五字であり、秘法の「義」とは、熟脱の本尊ではなく下種の本尊であり、熟脱の戒壇ではなく下種の戒壇であり、熟脱の題目ではなく下種の題目であると示されている。(以上、文段集二七二ページの趣意)

幸い我等末法に生れて一步をあゆまずして等

末法は即身成仏の三大秘法が流布される時であるから、われわれは末法に生まれてこれ以上の幸いはないといえる。「一步をあゆまず」とは、速疾そくしつに仏果を成ずる義である。

釈尊の因位については「観心本尊抄」に「迹門しやくもん爾前にげんの意を以て之を論ずれば……過去の因行を尋ね求

れば或は能施太子或は儒童菩薩或は尸毘王或は薩埵王子或は三祇・百劫或は動喻塵劫或は無量阿僧祇劫或は初發心時或は三千塵点等の間七万・五千・六千・七千等の仏を供養し劫を積み行満じて今の教主釈尊と成り給う……本門を以て……教主釈尊は五百塵点已前の仏なり因位も又是くの如し」(御書二四二ページ)等と仰せられている。

いま末法においては、あるいは三祇の間、七万・五千・六千・七千等の仏を供養したり、あるいは薩埵王子と生まれて飢えた虎に身をあたえなくても、三大秘法を受持して速疾に仏果にいたることができ。これはすなわち文底下種の大御本尊の力用によるがゆえである。

「三祇をこゑ」とは、すでに速疾に成道するゆえ、三祇に超過するとの意である。「無見頂相をゑん」とは、八十種好の第一の無見頂相を挙げて、通じて仏果を顕されている。無量義經には「未だ六波羅蜜を修行することを得ずと雖も、六波羅蜜自然に在前し」(妙法蓮華經並開結一〇八ページ)とあるが、布施行とか持戒の行とかいう六波羅蜜の修行を、長い年月かさねなくても、われわれはただ妙法五字の大御本尊を受持し奉ることによって、それらの六波羅蜜修行の功德をことごとく具足することができるのである。否、六波羅蜜の修行で得る功德などは問題にならないほどの大功德を得るのである。(文段集二七四

ページ二七五ページの趣意)

真言宗は又彼等の二宗にはにるべくもなし

日蓮大聖人の御一代において、「立正安国論」にはもっぱら念仏を破され、権実相對が表になっているが、「撰時抄」(建治元年)、「報恩抄」(建治二年)では、念仏と禪を破折はしやくされたるうえで、もっぱら真言の邪義を強折ごうしやくされている。この点については、すでに序講じょこうで論じたとおりである。

本文にも示されているように、当時は、伝教大師によつて法華經で統一された比叡山に、真言を混入して全宗教界に真言の害毒を流入するとともに、宮中から万民にいたるまで、真言の邪法を崇重するようになっていた。以下本抄の各章にわたつて、これらの邪義を破折され国家滅亡の現証じようきゆうを承久の乱によつて御教示になる等、順次論じられていくのである。

第二十章

浄土宗を破す

問うて云く此の三宗の謬誤如何答えて云く浄土宗は齊の世に曇鸞法師と申す者あり本は三論宗の人竜樹菩薩の十住毘婆娑論を見て難行道易行道を立てたり、道綽禪師という者あり唐の世の者本は涅槃經をかうじけるが曇鸞法師が浄土にうつる筆を見て涅槃經をすてて浄土にうつて聖道・浄土二門を立てたり、又道綽が弟子に善導という者あり難行正行を立つ、日本国に末法に入つて二百余年・後鳥羽院の御宇に法然というものあり一切の道俗をすすめて云く仏法は時機を本とす法華經大日經天台真言等の八宗九宗一代の大小・顕密・權実等の諸宗等は上根上智の正像二千年の機のためなり、末法に入りてはいかに功をなして行ずるとも其の益あるべからず、其の上・弥陀念仏にまじへて行ずるならば念仏も往生すべからず此れわたくしに申すにはあらず竜樹菩薩・曇鸞法師は難行道となづけ、道綽は未有一人得者ときらひ善導は千中無一とさだめたり、此等是他宗なれば御不審もあるべし、慧心先徳にすぎさせ給へる天台真言の智者は末代にをはすべきか彼の往生要集には顕密の教法は予が死生をはなるべき法にはあらず、又三論の永観が十因等をみよされば法華真言等をすてて一向に念仏せば十即十生・百即百生とすすめければ、叡山・東寺・園城・七寺等始めは諍論するやうなれども、往生要集の序の詞道理かとみへければ顕真座主落ちさせ給いて法然が弟子となる、其の上設い法然が弟子とならぬ人々も弥陀念仏は他仏ににるべくもなく口ずさみとし心よせにをもひければ日本国皆一同に法然房の弟子と見へけり、此の五十年が間・一天四海・一人もなく法

然が弟子となる法然が弟子となりぬれば日本国一人もなく謗法の者となりぬ、譬へば千人の子が一同に一人の親を殺害せば千人共に五逆の者なり一人阿鼻あびに墮ちなば余人墮ちざるべしや、結句けつこは法然・流罪をあだみて惡靈となつて我並びに弟子等をとがせし国主・山寺の僧等が身に入つて或は謀反むはんををこし或は惡事をなして皆関東にほろぼされぬ、わづかにのこれる叡山・東寺等の諸僧は俗男俗女にあなづらること猿猴えんこうの人にわらはれ俘囚えぞが童子に蔑如べつじよせらるるがごとし、

通解

——問うていわく、この三宗はどこが誤っているのか。答えていわく、まず浄土宗は中国の齊せいの世に曇鸞どんらん法師という者がいた。もとは三論宗の人であつたが、竜樹菩薩りゅうじゆの『十住毘婆娑論びばしや』を見て難行道、易行道を立てた。次に道綽どうしやく禪師という者がいた。唐の時代の人で、もとは涅槃ねはん經を講じていたが、曇鸞法師が浄土へ移る書を見て、涅槃經を捨てて浄土へ移つて、聖道、浄土の二門を立てた。また道綽の弟子に善導ぜんどうという者がいて、難行と正行を立てた。

次に日本では末法に入つて二百余年の、後鳥羽院の時代に法然ほうねんという者がいた。一切の道俗にすすめていふには、「仏法は時機を本とするのである。法華經、大日經、天台、真言等の八宗、九宗や釈尊一代の大小、顯密けんみつ、權実こんじつ等の諸宗等は、上根上智の正像二千年の機のための教えである。末法に入つては、いかに熱心に修行を積んでも、利益はないのである。そのうえ、これらの諸經、諸行を弥陀念仏にまじえて行じたならば、念仏の功德も消えて往生おうじやうができなくなる。これは自分が勝手にいつているのではなくて、竜樹菩薩、曇鸞法師は念仏以外を難行道と名づけ、道綽は未有一人得者と嫌い、善導は千中無一と定めてい

る。これらは、念仏という他宗派の開祖たちの言であるから、それだけなら疑問もおきるであらう。ところで、慧心えしん先徳せんとくを超える天台、真言の智者はこの末法の時代にいるだろうか。その慧心の『往生要集』には『顕密の教法は、予が死生を離れるべき教法ではない』といっている。また三論宗の永観ようかんの『往生十因』を見てみなさい。されば法華、真言等を捨てて、一向に念仏を唱えるならば、十即十生・百即百生の功德がある」とすすめたので、比叡山ひえい、東寺とうじ、園城寺おんじょうじ、奈良の七寺等では、はじめは争い論じ合っていたが、結局は、『往生要集』の序のことばが道理のように思えて、顕真座主けんしんざすが念仏の邪義に降伏して法然ほうねんの弟子となつてしまった。

そのうえ、たとえ法然の弟子とならない人々も、弥陀念仏みだを他仏には比べようもないほど口ずさみ、心をよせたので、日本国はみな一同に法然房の弟子となつたようにみえた。この五十年のあいだ、一天四海、一人もなく法然の弟子となつたのである。法然の弟子となつたということは、日本国は一人も残らず謗法の者となつたのである。たとえば、千人の子が一緒に一人の親を殺害すれば千人ともに五逆の者である。そのうちの一人が阿鼻地獄あびへおちれば、ほかの人たちはおちなくてもよいというわけがあらうか。

結局は、法然は流罪るざいされたことを怨んで、悪霊あくりようとなつて、法然ならびに法然の弟子を罰した国主や、比叡山や、三井寺の僧等の身に入つて、あるいは謀反むはんをおこしたり、あるいは悪事をなさしめたので朝廷や比叡や三井は、鎌倉幕府軍に攻め滅ぼされてしまった。わずかに残つた比叡山や東寺の僧たちが俗男俗女からあなどられたり笑ひものにされるさまは、猿が人に笑われ、俘囚めしうどが子供からさげすまれたり、ばかにされたりするようなものであった。

本は三論宗の人 曇鸞^{どんらん}は初め三論を学び、後に菩提留支^{ぼだいりうし}より観無量寿經を授けられて、浄土門に入つたのである。涅槃經をかうじけるが 道綽^{どうしゃく}について、『続高僧傳』第二十に「大涅槃部は偏^{ひとえ}に弘伝する所にして、講ずること二十四遍」とある。日蓮大聖人は「立正安国論」に「涅槃の広業^{こうぎょう}を闇^おきて偏^{ひとえ}に西方の行を弘め」（御書二四六）と道綽を責められている。

往生要集 三卷。恵心僧都源信著。永観三年（九八五年）の作。後の念仏宗の基礎となつた。極楽往生に関する經論を集めたもの。まず厭離^{おんり}すべき六道のありさまを述べ（厭離穢土^{えど}）、次に求めるべき浄土の様子を説き（欣求^{こんぐ}浄土）、最後に極楽往生するために念仏を称^{とな}えることを勧めている（称名念仏）。

永観（一〇三三年—一一二一年）。平安時代末期の三論宗の僧。浄土教の先驅者と称される。源国經の子。京都に生まれ、十一歳の時、禅林寺の深観について出家。東大寺で具足戒を受け、三論、法相、華嚴の教義を学んだ。その後、十年間にわたって山城国の光明山で念仏の行を修した。維摩会の講師、権律師、東大寺の別当などを経て、禅林寺に帰住した。著書には『往生拾因』『往生講式』等がある。

十因 一卷。永観撰。『往生拾因』という。称名念仏の書で、一心に称念に励めば成仏の十因を修行したことになる、極楽往生できるとしている。十因とは、一に広大善根^{こうだいぜんこん}、二に衆罪消滅^{しゆざいしょうめつ}、三に宿縁深厚^{しゆくえんじんこう}、四に光明摄取^{こうみょうせつしゆ}、五に聖衆護持^{しょうしゆごぢ}、六に極樂化生^{ごくらくけしやう}、七に三業相応^{さんごうそうおう}、八に三昧発得^{さんまいはつとく}、九に法身自体^{ほつしんどうたい}、十に随順本願^{ずいじゆんほんがん}をいう。

顕真座主^{けんしんざす}（一二三〇年—一二九二年）。比叡山延暦寺第六十一代座主。美作守藤原顕能の子。比叡山に登つて顕教を座主の明雲に学び、密灌（密教の秘密灌頂という儀式）を法印相実^{ほういんそうじつ}から受ける。後に法然の専修念仏の義を信じ、余行を捨てて専ら念仏三昧^{もつぱ}にふける。文治六年（一一九〇年）三月に天台座主となり、建久元年（一二九〇年）五

月、権僧正となったが、同三年（一一九二年）十一月没す。

一天四海 全世界のこと。古代インドの世界観では世界の中央に須弥山があり、これを輪状に八つの山、八つの海が囲んでいる。そのいちばん外側の海に四洲があり、東方を弗婆提ぼつぱだい、南方を閼浮提えんぶだい、西方を瞿耶尼くやに、北方を鬱单越うつたんのつと称した。この四洲を四天下または一天といい、東西南北の四方の大鹹海かんかいを四海という。一天四海で世界全体を表す。

法然・流罪 建永二年（一二〇七年）二月、一門の僧が官女を出家させた一件があり、これが後鳥羽上皇の怒りを買い、法然は土佐に流された。さらに法然死後十五年、嘉祿三年（一二三七年）に、勅命により墓をあばかれ、骨は大神人つるめによって鴨川に流された。また『選択集せんちやくしゅう』の版木は叡山えいざんの大講堂で焼かれ、門人の隆寛りゅうかんや幸西こうさいなども流罪にされた。このようにして、法然の専修念仏は停止させられたのである。

国主・山寺の僧等 国主とは後鳥羽院、山は比叡山ひえいざん、寺は三井寺みいでらのことをいう。

或は謀反むほんををこし 承久じようきゆうの乱のこと。

関東 鎌倉の北条執権しつけんをいう。

講義

これより通じて、念仏、禅、真言を破されるが、この章は念仏の破折である。念仏の破折にあたっては初めに中国の三師を破し、次に日本の法然ほうねんを破されている。

齊せいの世に曇鸞どんらんぼつし法師

曇鸞は中国における念仏の開祖である。曇鸞はその著往生論おうじようろんの注ちゆうに「謹つつしんで竜樹菩薩りゆうじゆぼさつの十住毘婆沙じゆびばしゃを案ずるに云く、菩薩、阿毘跋致あびばつちを求むるに二種の道有り。一には難行道なんぎようどう、二には易行道いぎようどうなり」(大正四十卷八二六頁)といっているが、日寛上人は、曇鸞に二失ありとされている。一には本論違背いはいの失とが、二には執權謗実しゅうくんぼうじつの失である。まず第一の本論違背の失とは、竜樹の『十住毘婆沙論』の主張と、曇鸞の主張とは違っている。すなわち『毘婆沙論』の巻第五易行品にいわく「仏法に無量の門有り。世間の道に難有り、易有るが如し。陸道の歩行は則ち苦しく、水道の乗船は則ち樂し。菩薩道も亦是またかくの如し。或は勤行精進こんぎようしやうじんする有り、或は信の方便を以て易行して、疾とく阿惟越致あゐいおつちに至る者有り」(大正二十六卷四一頁)と、またいわく「菩薩、此の身に阿惟越致地に至ることを得んと阿耨多羅三藐三菩提を成就すること欲せば応まさ当に是の十方の諸仏を念じて其の名号を称となうべし」(大正二十六卷四一頁)と。

この文を曇鸞は、自己流に解釈して、「難行道とは五濁無仏の時に於て阿毘跋致あびばつちを求むるを難しと為す。譬えば陸地の歩行は則ち苦しきが如し。易行道とは但信仏の因縁を以て淨土に生ぜんと願ひ、仏の願力に乗じて、便すなわち彼の清淨の土に往生することを得。譬えば水路の乗船は則ち樂しきが如し」といっているのである。

その違いは、第一に竜樹の本論は、通じて仏道に難なんもあれば易いもあるといっているのに、彼は別して

無仏五濁の時に約している。二には、本論の意は、歴劫長遠りやつこうじやうおんの教を難行道とし、勤行精進等ごんぎやうしやうじんといつて
いるが、彼は無仏五濁の時にこの土に入ることを難行としている。三には、本論では、この土において
不退に入れば易行であることを明かしているのに、彼は往生淨土おうじやうじやうどを易行としている。このように本論に
違背いはいしている。

次に第二の執權謗実しゅうごんぼうじつの失とは、爾前にぜん四十余年の權教しゅうじやくに執著して、実教たる法華經ひふぽうを誹謗ひぼうしている失で
ある。

道綽どうしやくの誤り

次に道綽のいう聖道、淨土の二門は、曇鸞のいう難行、易行と同じである。ゆえにその誤りも同じに
なるが、日寛上人は別して二失ありとされ、一には所立不成しよりゆうふじようの失、二には執權謗実の失とされている。
第一の所立不成の失とは、道綽の『安樂集』にいわく「一には謂いく聖道、二には謂いく往生淨土なり。其
の聖道の一種は今時証し難し。一には大聖を去ること遙遠やうおんなるに由より、二には理深解微りじんげみなるに由る。是
の故に大集月藏經に云く、我が末法時中、億々の衆生行を起し、道を修するに未だ一人の得者有らず
と。当に今末法は是れ五濁惡世にして、唯淨土の一門のみ有って通入すべき道たるべし」と。

道綽のいう聖道門とは、曇鸞のいう難行道である。難行道は、歴劫長遠の權大乘の修行であつて、た
とえ如来の在世であつても、これは難行である。それを何で仏が滅して遙かに遠いなどというのが、こ

れ一。二には、高山の頂の水ほど深谷まで下る力がある。最高の教えほど下根の機まで救う力がある。たとえば輕病には凡藥、重病には仙藥のごとし。ゆえに理深ならば、解微ということはありえない。また解微のような教えなら理深ということはできない。それをなぜ理深解微などということをするのか。三には、白法びやくほうおんもつ隱没とは、淺理の教えが隱没し、深理の大白法が広宣流布するということである。ところが彼が引用している經の意は深理隱没という義であり、そのような義は大集經にないし、大体この文そのものが大集經に存在しないのである。以上のように、これはとんでもない妄説もうせつなのである。このように、彼のいう論議は成り立たないから、所立不成という。また權教の淨土の一門に執しゅうし「未有一人得者」といつて法華經を謗ぼうずるから、執權謗実の失というのである。

善導ぜんどうの誤り

善導もまた、曇鸞、道綽と同じ誤りを犯している。善導は正行と雜行ぞうぎょうを立てる。正行には五種あり、読誦、觀察、礼拝、称名、讚歎であるとしてこの五種を正助に分け、称名の一行を正行となし、読誦等の四を助行としている。そして、この阿弥陀の三部經の正行以外は、すべて雜行であるとしている。そして、雜行は、千中無一であるといい、正行の功德は、十即十生であるという。結論として彼は、法華經を雜行と誹謗ひぼうしており入阿鼻地獄にゅうあびじごくの罪を犯しているのである。(以上、曇鸞、道綽、善導の破折については、文段集二七七頁―二七九頁)

善導は、浄土の法門を演説すること、じつに三十年にわたったという。その揚げ句ついに気が狂って、寺前の楊柳の木で自殺を図り、極楽往生を図ったがはたさず、十四日間、脊椎せきついを打った傷によって苦しみぬいて死んだという。これは確かな当時の中国の記録に残っている事実である。念仏は権教であり、夕陽のごとき、はかない教えである。ゆえに生命力を弱め、不幸で消極的な人間をつくる。善導の現証がなによりも、これを物語っているといえよう。

慧心院源信の謗法

慧心は、中古天台の本覚法門を立てた慧心流の祖である。御書では、慧心に対して、与よ、奪だつの二面から述べられている。すなわち「守護国家論」では「源信僧都……多くの書を造れることは皆法華を弘めんが為なり……当に知るべし往生要集の意は爾前にぜん最上の念仏を以て法華最下の功德に対して人をして法華經に入らしめんが為に造る所の書なり、故に往生要集の後に一乗要決ようけつを造つて自身の内証ないしやうを述ぶる時・法華經を以て本意と為すなり」(御書四九ページ)と、与えて論じられ、次に奪つての立場では、本抄に「慈覺・安然・慧心等は法華經・伝教大師の師子の身の中の三虫なり」(御書二八六ページ)と仰せである。

慧心は、このように、身は天台宗の権少僧都ごんしょうそうずにありながら、四十三歳で『往生要集』三巻を作り、念仏に身を売った。『往生要集』とは、極楽往生に関する経論の要文を集めたものである。しかし、六十歳の時、弥陀念仏を悔い改め『枕艸子』まくらのそうしを著あして法華經読誦、天台の一心三觀の功德を挙げ、さらに六

十一歳の時、法華經に復歸して『一乗要決』三卷を著し、五乗方便・一乗眞実の義を詳論しょうろんして法華經最勝を述べた。その後は、法華經を中心に、弟子の指導と著述につとめ、天台慧心流の祖となったのであるが、念仏をすすめる『往生要集』が、念仏無間の道へ僧侶や民衆を追いやった罪は大きく、日蓮大聖人は慧心を「師子の身の中の三虫」の一人として破折されているのである。

第二十一章

禪宗を破す

禪宗は又此の便を得て持齋等となつて人の眼を迷かしたつとげなる気色なればいかにひが
法門 ほうもんをいゝくる狂 へども失ともをばへず、禪宗と申す宗は教外別伝きようげべつでんと申して釈尊の一切経の外に
迦葉尊者かしようにひそかにささやかせ給へり、されば禪宗をしらずして一切経を習うものは、犬の雷をか
むがごとし、猿さるの月の影をとるにたり云云、此の故に日本国の中に不孝にして父母にすてられ無
礼なる故に、主君にかんどうせられあるいは若じやくなる法師等の学文がくもんにも懶のうき遊女ぶつのものぐるわしき
本性かなえに叶かな邪法なるゆへに皆一同に持齋じさいになりて国の百姓をくらう蝗虫いなむしとなれり、しかれば天は天
眼をいからかし地神は身をふるう、

通解

——禪宗はこのような仏教界の混乱や衰微すいびに乗じて「持齋じさい」の姿をして、人の眼を迷わし、貴たつとげな様子
であるから、いかに誤あやまつた法門を言い狂つても、人々はそれが誤りだと気がつかないでいる。彼らは「禪
宗と申す宗は、教外別伝きようげべつでんといつて、釈尊は一切経の外に迦葉尊者かしようにひそかにその悟りをささやかれたので
ある。されば、禪宗を知らないで一切経を習う者は、犬が雷にかみつこうとしているようなものであり、
猿が月の影を取ろうとしているのに似ている」といつている。

このゆえに、禪宗というのは、日本国の中で親不孝のために父母に捨てられたような、また無礼のため
主君かんどうに勘当されたような、あるいは若い僧が学問がくもんを嫌きらっているような、遊女がもの狂わしいような本性に

かなった邪法なのである。だから日本國中、みな一同に持齋となつて、国の百姓を食いつくすイナゴになつてしまつた。だから、天は天眼を怒らし、地神は身を振るうのである。

語 訳

持齋^{じさい} 齋戒^{さいがい}を持つこと、またその人。齋は心の不浄を清めること、戒は身の過ちを戒めること。普通は律宗をさすが、齋戒を重んずる禅宗の僧をさすこともある。

教外別伝 仏の悟りは、文字や言語であらわされた經典や教理によらず、ただ心をもつて伝えられたとする禅宗の教義。大梵天王問仏決疑經の「文字を立てず教外に別伝し……摩訶迦葉に付属す」（正統一卷四四二）を根拠としている。

迦葉尊者にひそかにささやかせ給へり^密 大梵天王問仏決疑經には、ただ迦葉のみが破顔微笑した（正統一巻四四二）とある。つまり釈尊が華をひねって大衆に示したとき、その意味をよく知って破顔微笑したのは迦葉のみであつたとするところから、「ひそかにささやかせ」と仰せられた。

犬の雷をかむがごとし 天台大師の『摩訶止観』第五卷上に、眞実の妙法を聞けないで小乗、權教に執著するものをたとえて「渴鹿の炎を逐い、狂狗の雷を齧むがごとく、何ぞ利を得ることあらん」（大正四十六卷五二）とある。ここでは、禅宗が、『摩訶止観』の文を盗用して、他宗を批判しているさまをいったもの。

猿の月の影をとるにいたり 『碧巖録』には「向上一路千聖伝へず、学者形を勞すること猿の影を捉る如し」（大正四十八卷一五二）とある。これは、もののはかないことをいうのであり、ここでは、禅宗が他宗を批判しているさまをいったものである。

国の百姓をくらう蝗虫いぬむしとなれり 稻を食う害虫の蝗いなごが、人々に大きな損害をあたえるように、邪宗なる禅宗が、あわれな人々をだまし、とりいつて、不幸にするというたとえ。

講義

念仏につづき、次に禅宗を破されている。

禅宗と申す宗は教外別伝と申して等

禅宗でいうところの教外別伝の根拠は、大梵天王問仏決疑經だいぼんてんのうもんぶつけつぎきように「摩訶迦葉、仏の拈華ねんげし衆に示す仏事を見、即ち今廓然として破顔微笑す。仏即ち告げて言く、我に正法眼蔵・涅槃の妙心・実相無相・微妙の法門有り。不立文字・教外別伝（中略）今まさに摩訶迦葉に付属す」（正統一卷四四二頁）とあることによっている。「文字を立てず、教外に伝う」といいながら、こんな經文を論拠にすること自体が、すでに自語相違じごそういである。

しかも問仏決疑經は、「蓮盛抄」に「此の文は上古の録に載せず中頃より之を載す」（御書一五〇頁）と仰せのとおり、開元、貞元の二録には、この經は出ていない。明らかに偽經と思われる。唐の末に慧炬えこが『宝林伝』を著して、初めてこの文を引いている。

鎌倉時代の武士は、よく禅宗を信じていたようであるが、「弥源太入道殿御消息」には「本権教もとごんより

起りて候しを・今は教外別伝と申して物にくるひて我と外道の法と云うか」（御書一二二九頁）と指摘されている。すなわち經典で拠りどころを挙げてみても、それは法華經に対すれば權教であるし、しかも「教外別伝」などといって、みずから仏教典を離れているから、外道というほかないのである。

釈尊は「願つて心の師とはなるとも心を師とせざれ」と説き、また「仏の所説に順したがわざる者あらば、まさに知るべし、これ魔の眷属けんぞくなり」と説いている。いかに、わが身に仏性ありとしても、いまだ理即、名字即の仏であるからこそ、仏道修行が必要なのである。仏教の何たるかも知らず、正法をも信ぜず、「われ悟れり」というような禅宗は、釈尊の指摘どおり、まさしく天魔以外の何物でもない。

国の百姓をくらう蝗虫いなむし

蝗虫とは、「いなご」のことである。この虫は秋になると稻を食い荒らす。日蓮大聖人は邪宗のことをこの「いなご」に譬たとえられ、「呵責謗法滅罪抄」には「国の大蝗虫たる諸僧等・近臣等が日蓮を讒訴ざんそする弥いよよ盛さかならば大難ますます倍来るべし」（御書一一三〇頁）と、また「報恩抄」には「あら不思議や法師ににたる大蝗虫・国に出現せり仏教の苗一時に・うせなん失」（御書二二八頁）と仰せられている。

第二十二章

真言の善無畏を破す

真言宗と申すは上の二のわざはひにはにるべくもなき大僻見なりあら此れを申すべし、所謂いわゆる

大唐の玄宗皇帝げんそうの御宇ぎように善無畏三蔵ぜんむい・金剛智三蔵こんごうち・不空三蔵ふくう、大日經・金剛頂經・蘇悉地經がっしを月支

よりわたす、此の三經の説相分明ふんみようなり其の極理ごくりを尋ねれば会二破二えはの一乗・其の相を論ずれば印と

真言と計りなり、尚華嚴般若けごんはんにかの三一相對の一乗にも及ばず天台宗の爾前の別四程もなし但藏通二教

を面おもてとするを善無畏三蔵ぜんむいさんそうをもはく此の經文をあらわに現い出す程ならば華嚴法相けごんほつそうにもをこつかれ天

台宗にもわらはれなん大事として月支よりは持ち来りぬさてもだせば本意にあらずとやをもひけ笑

ん、天台宗の中に一行禪師びやくにんという僻人一人ありこれをかたらひて漢土の法門をかたらせけり、一行

阿闍梨あじやりうちぬかれて三論・法相・華嚴等をあらあら・かたるのみならず天台宗の立てられけるやう欺

を申しければ善無畏ぜんむいをもはく天台宗は天竺てんじくにして聞きしにも・なをうちすぐれてかさむべきやうも勝

なかりければ善無畏ぜんむい・一行いちぎようをうちぬひて云く和僧わそうは漢土には・こごかしき者にてありけり、天台宗

は神妙の宗なり今真言宗の天台宗にかさむところは印と真言と計りなりといふければ一行さもやと重崇

をもひければ善無畏三蔵一行にかたて云く、天台大師の法華經に疏をつくらせ給へるごとく大日經語

の疏を造りて真言を弘通せんとをもう汝かきなんやといふければ一行が云くやすう候、但しいかや

うにかき候べきぞ天台宗はにくき宗悪なり諸宗は我も我もとあらそい争をなせども一切に叶わざる事一

あり、所謂法華經の序分に無量義經と申す經をもつて前四十余年の經經をば其の門を打ちふさぎ候塞

いぬ、法華經の法師品・神力品をもつて後の經經をば又ふせがせぬ肩をならぶ經經をば今説の文をもつてせめ候大日經をば三説の中にはいづくにかをき候べきと問ひければ爾その時に善無畏三藏大に巧たくらんで云く大日經に住心品じゆうしんという品あり無量義經の四十余年の經經を打ち掃はらうがごとし、大日經の入漫陀羅にゆうまんだら已下の諸品は漢土にては法華經・大日經とて二本なれども天竺にては一經のごとし、釈迦しやくは舍利弗・弥勒みろくに向つて大日經を法華經となづけて印いんと真言とをすてて但理計ただりをとけるを羅什らじゆう三藏此れをわたす天台大師此れをみる、大日如来は法華經を大日經となづけて金剛薩埵こんどうさつたに向つてとかせ給う此れを大日經となづく我まのあたり天竺てんじくにしてこれを見る、されば汝がかくべきやうは大日經と法華經とをば水と乳とのやうに一味となすべし、もししからば大日經は已今当の三説をば皆法華經のごとくうちを下とすべし、さて印と真言とは心法の一念三千に莊嚴するならば三密相応さんみつそうおうの秘法なるべし、三密相応さんみつそうおうする程ならば天台宗は意密いみつなり真言は甲なる將軍の甲鎧たいを帶たして弓箭ゆみやを横たたへ太刀たちを腰こしにはけるがごとし、天台宗は意密計りなれば甲なる將軍の赤裸あかはだかなるがごとくならんといふければ、一行阿闍梨あじやりは此のやうにかきけり、漢土三百六十箇国には此の事を知る人なかりけるかのあひだ始めには勝劣を諍論しけれども善無畏ぜんむい等は人品がらは重おもし天台宗の人人は輕かりけり、又天台大師ほどの智ある者もなかりければ但日日に真言宗になりてさてやみにけり、年ひさしくなればいよいよ真言おうわくの誑惑おうわくの根ふかくかくれて候いけり、日本国の伝教大師・漢土にわたりて天台宗をわたし給う次序ついでに真言宗をならべわたす、天台宗を日本の皇帝にさづけ真言宗を六宗の大徳に

ならはせ給う、但し六宗と天台宗の勝劣は入唐已前に定めさせ給う、入唐已後には円頓えんどんの戒場を立
てう立てじの論の計りなかりけるかのあひだ敵多くしては戒場の一事成りがたしとやをぼしめしけ
ん、又末法にせめさせんとやをぼしけん皇帝の御前にしても論ぜさせ給はず弟子等にもはかばかし
くかたらせ給はず、但し依憑集と申す一卷の秘書あり七宗の人人の天台に落ちたるやうをかかれて
候文ふみなり、かの文の序に真言宗の誑惑おうわく一筆みへて候

通解

——真言宗というのは、上の念仏、禪の災いとは比較にならないほどの大邪見の宗派である。その大体
のことを述べよう。

大唐の玄宗皇帝げんそうの時代に、善無畏三蔵ぜんむい、金剛智三蔵こんどうち、不空三蔵ふくうの三人が、大日經こんどうちよう、金剛頂經こんどうぎやう、蘇悉地經そしつじ
をインドから中国へ渡した。この三經の説くところは明らかである。その極理ごくりは會二破二えにはの一乗であり、
その事相じそうを論ずれば、印いんと真言しんごんばかりである。華嚴けえんや般若はんにやで説く三一相對の一乗にもおよばず、天台宗で
説く爾前にぜんの円教や別教ほどの深い法門もない。ただ、藏通の二教を表に説かれているだけである。

そこで善無畏三蔵が思うには、この三經をそのまま説き始めたならば、華嚴宗や法相宗ほつそうからもバカにさ
れ、天台宗からも笑われるであろう。インドから大事に持ってきた經典である。黙っていては不本意であ
る、と思ったのであろうか。天台宗の中に一行禪師いちぎやうぜんじというひねくれ者が一人いた。そこでこの人物をかた
らって中国の仏教界の法門を語らせた。一行阿闍梨あじかりは、すっかり善無畏にだまされて、三論、法相、華嚴
等の大体の教えを述べたばかりでなく、天台宗で立てられた教義についても説明した。善無畏は、天台宗

はインドで聞いていた以上に勝れていて、その上へ出られそうもないと思い、そこで善無畏は一行をだましていうには、「貴僧は中国には珍しい賢僧である。天台宗は神妙の宗ではあるが、いま真言宗が天台宗より勝れているところは、印と真言である」といいよった。

一行はそれもそうかと思つたやうなので、善無畏はさらに「天台大師が法華經の疏を作つたやうに、大日經の疏を作つて真言をひろめようと思うが、汝が書いてくれないか」というと、一行は「それは、やさしいことだ」といった。そして「ただし、どのように書いたらいいのか。天台宗は悪い宗派であり、諸宗が我も我もと争つてみるが、とてもかなわないことが一つある。いわゆる法華經の序分の無量義經という經をもつて法華經以前の四十余年の一切の經を、權教なり方便なりとしてその門を封じてしまつてゐる。さらに法華經法師品や神力品をもつて、法華經以後の經々を防いでしまつてゐる。また法華經と同時に説かれた經典は、法師品の今説の中に入れられて、責められてしまふ。そこでいつたい大日經は已今當の三説のうちのどこへおいたらよいものだろうか」と問うた。

ここにおいて善無畏は、大いにたくらんでいうには、「大日經に住心品という品がある。ちやうど無量義經に四十余年未顕真実とあつて、他の一切の經を打ち払つてしまふやうな品である。また大日經の第二入漫陀羅品以下の諸品は、中国では法華經と大日經の二本に分かれてゐるが、インドでは一つの經である。釈迦仏は舍利弗や弥勒に向かつては大日經を法華經と名づけて印と真言を捨てて但理ばかりを説いた。それを羅什三蔵が中国へ渡し、天台大師はそれを見たのである。しかしまた、大日如来は法華經を大日經と名づけて金剛薩埵に向かつて説いた。これを大日經と名づけ、自分は近しくインドでそれを見てゐる。されば汝は、大日經と法華經とを、水と乳とのように一味とすればよい。そうすれば、大日經は、

已今当の三説を皆法華經のように打ち払ってしまふことができるのである。そのうえ印と真言で心法の一
念三千を莊嚴するならば、それこそ三密が相応する秘法となる。三密が相応すれば、天台宗は単なる意密
だけなので劣ることになる。真言はたとえば剛勇なる將軍が甲鎧を帶し、弓箭を横たえ、太刀を腰にはい
たようなものである。それに対し天台宗は剛勇なる將軍が赤裸になつてゐるようなものである」といつた
ので、一行阿闍梨はそのとおりに書いたのである。

中国の三百六十カ国の中で、このことを知る者は一人もなかったもので、初めは、大日と法華の勝劣につ
いて論争したが、善無畏らは、高貴の出身であるのに対し、天台宗の人々は、身分も軽く、また天台大師
ほどの智慧ある者もいなかったもので、ただ日々に真言宗になりおわつてしまつたのであつた。そして年久
しくなるにしたがつて、いよいよ真言の誑惑の根が深く隠れていつたのである。

日本国の伝教大師は中国へ渡つて天台宗を日本へ渡したついでに、真言宗をも持つてきた。そして天台
宗を日本の天皇に授け、真言宗を奈良六宗の高僧たちに習学させた。ただし、六宗と天台宗との勝劣は、
唐へ渡る前に決定されていた。唐から帰つてからは、比叡山に迹門の円頓戒壇を建てるか、建てないかの
議論に対する裁定がおりず、そこで敵が多くては戒壇建立が成就しがたいと思われたのであらう、あるいは
真言の破折は末法にゆずられたのであらうか、天皇の前でも真言については論ぜず、弟子等にも、はっ
きりしたことをいわれなかった。ただし、伝教大師に『依憑集』という一卷の秘書がある。七宗の人々が
天台に帰伏したことを書いた書物である。この書の序に、真言宗の誑惑を破したところが一力所ある。

会二破二の一乗 二乗を会し、または破して一乗に帰着させること。三論宗や法相宗などで法華經を解釈して立てる教義。会二とは、二乗（声聞、緣覺）を会して一乗となし、破二とは、二乗を破して一乗をあらわすこと。この場合の一乗とは菩薩乗で、一仏乗ではない。三論、法相では、三乗のみを立てて仏乗を立てない。大日經等も、權教であるその教説の所詮は会二破二にすぎない。

其の相を論ずれば印と真言と計りなり その事相を論ずると、真言宗では印と真言だけである。印とは、印契、契印ともいう。指先である形を作り、諸仏、菩薩の悟りをあらわしたものを手印と称する。こうした印相は、各宗派によって異なるが、それぞれ依拠する教義や法理を表現したものである。また真言とは密教という絶対真実の言葉で漢訳では呪、密呪、密語等とする。つまり一種の呪文である。

三三相對 三乗と一仏乗を比較相對して一仏乗が勝ること。三は三乗（声聞・緣覺・菩薩）、一は一乗（二仏乗）のこと。法藏の『華嚴五教章』卷一等では華嚴經を別教一乗と立て、同經のみが諸經を超えた一乗教であるとしている。天台の意によれば華嚴には相待妙の一分はあるが絶待妙は説かれず、絶待妙に立つて開三顯一の哲理を説く法華經には劣る。

天台宗の爾前の別円程もなし但蔵通二教を面とする 真言は、天台宗でいう爾前の別円、すなわち華嚴經や般若經よりも低く、ただ小乗經や低い權經をおもてに立てているにすぎない。

をこつかれ 嘲笑されること。あざわらわれ、輕蔑されるという意。

一行禪師（六八三年―七二七年）。中国・唐代の真言宗の僧。一行阿闍梨、大慧禪師ともいう。姓は張氏、名は遂。嵩山の普寂について禪を学び、更に諸方で律藏ならびに諸經論を研鑽し、また天台の教義を学び、その教義にも

通じていたといわれる。善無畏^{ぜんむい}および金剛智に従って真言の教えを受け、両三蔵の翻訳を助け、善無畏の大日經の講説を筆記して『大日經疏』二十卷を著し、このなかに一念三千の法門を取り入れている。

僻人^{へくじん} 変わりもの、ひねくれもの、悪人の意。

うちぬかれ^欺 出しぬかれ、だまされること。

こざかしき者 小利口げなもの。

神妙 殊勝なこと。不思議なこと。

大日經の疏^{しよ} 二十卷。中国・唐代の善無畏^{ぜんむい}述、一行^{いっぢやう}記。『大毘盧遮那成仏經疏』のこと。大日經疏ともいう。善無

畏が大日經の翻訳後に、一行に対して同經を講義した内容を筆記したもので、大日經七卷三十六品の中、前の六卷三十一品について注釈している。単なる注釈書にとどまらず、大日經を中国仏教の立場から解釈し、密教思想を組織だてている。一行の没後、智儼、溫古が修正を加え、『大日經義釈』十四巻をつくった。日本の東密では弘法の伝えた大日經疏を用い、台密では慈覚、智証の伝えた大日經義釈を用いている。

法華經の序分に無量義經 經文を判釈するために内容によって文段を分けることを科文といい、一般には序分（一經の序論）、正宗分（一經の本論）、流通分（一經の利益をあげて、その正説の流通を勧める部分）に三分される。「法華經の序分に無量義經」とは法華經一經の序分は、無量義經であるということ。

肩をならぶ經經 法華經と同時に説いた無量義經等の經文。

三説 法華經法師品第十に説かれた已説^い、今説^{こん}、当説^{とう}のことをさす。

住心品 大日經卷一入真言門住心品第一のこと。

舍利弗^{しゃりほつ}・弥勒^{みろく}に向つて 舍利弗は法華經迹門^{しやくもん}の対告衆、弥勒は法華經本門の対告衆である。

金剛薩埵こんどうさつた

密教を相承した八人の祖師のうちの第三祖。金剛手とも秘密主ともいう。大日經の対告衆で、大日經を結集して竜樹に伝えたとされる。金剛界曼荼羅では三十七尊の一つで、胎藏界曼荼羅では金剛手院の主尊となっている。

三密相応みつそうおう

衆生と仏の三密が相和あい合すること。三密加持かじともいう。三密は身密、語密（口密ともいう）、意密の三つで、これに仏の三密と衆生の三密がある。相応は相合し応ずること。即ち三密相応とは密教で説く成仏の方式で、手に印を結び（身密）、口に真言を唱え（語密）、意に本尊を念ずる（意密）ことによって、衆生の三密と仏の三密が相応融和して一体となり、即身成仏できると説くもの。

甲なる將軍の甲鎧よろいを帯して 甲は乙に対してすぐれたことを意味する。すなわち智勇すぐれた將軍が、りっぱな鎧よろいをきていること。ここで「甲なる將軍」とは、法華經の理と大日經が同じくすぐれていることをあらわし、「甲鎧」とは大日經の事相をあらわし、法華經には事相がなく赤裸であるとさげすんでいる。これに対して日寛上人は、「宗祖破して云く（中略）『裸形の猛者もさの進んで大陣を破ると甲冑を帯せる猛者の退いて一陣をも破らざる』等云云」（文段集二八二頁）と大聖人のおことばで真言宗側の言い分を破折されている。

天台宗を日本の皇帝にさづけ 伝教大師が帰朝した延暦えんりやく二十四年八月、ただちに桓武天皇に天台等の經疏などをたてまつったこと。

真言宗を六宗の大徳にならはせ

延暦えんりやく

二十四年九月一日、高雄寺で六宗の大徳に真言の義を授けたことをいう。

六宗と天台宗の勝劣は入唐已前に定め 伝教大師は入唐以前の延暦えんりやく二十一年一月十九日に、高雄寺において、六宗の人師をすべて打ち破ったこと。

計りなかりけるかのあひだ どちらになるかの裁定がまだなかったから。

末法にせめさせん 真言宗を破折することを末法にゆずり、伝教大師はあまり強くせめなかつたこと。

依憑集 一卷。伝教大師が弘仁四年（八一三年）に著した書。詳しくは、『大唐新羅諸宗義匠依憑天台義集』とい
い、『依憑天台集』ともいう。本文は十二章から成る。内容は天台の義を規範とし、依憑（よりどころ）としなが
ら、真言、華嚴、三論、法相宗などが仏法の正義からはずれていることを破している。

七宗の人人の天台に落ちたる 伝教大師の『依憑集』には、七宗の人々すなわち、一に律宗の道宣、二に三論の
嘉祥、四に法相の智周、良寛、五に華嚴の法蔵、恵苑、居士通玄、澄観、新羅の元曉、六に真言の一行、七に禪
宗の惟懿などが、天台に帰伏し、天台を讃嘆し、天台義を用いたことをあげて、天台に帰伏したことを述べてい
る。

真言宗の誑惑一筆みへて候 伝教大師の『依憑集』の序に、真言宗の邪説を破折したものが、少し載っているこ
と。すなわち「新来の真言家は則ち筆授の相承を泯し」（『伝教大師全集』巻三、三四四頁）云々とあること。

講義

念仏と禪に引きつづき、この章では真言宗を破されている。この章ではまず善無畏を破され、次章以
降に弘法、覚鑊等を破されるのである。

善無畏の墮地獄

善無畏三蔵は、烏仗奈国の大王、仏種王の太子である。十三歳にして位を捨てて出家し、インドの七

十力国、九万里を歩き回って、諸経、諸論、諸宗を学び、北インドの金粟王こんそくの下で祈請をこらしている時に、虚空の中に大日如来を中央とした胎藏界たいざうかいの曼荼羅まんだらが顕れたという。そこでこの正法をひろめようと決めて中国へ渡り、唐の玄宗皇帝に重く用いられて、真言の密教を授けた。その中国へ渡って真言をひろめる時、一行という天台宗の僧をかたらって、数々の謀略をたくらみ、理同事勝りどうじしょうという謗法ほうぼうの根源をつくったことは、本文に詳しく述べられているとおりである。

さて善無畏は、一時、頓死とんしした。数多くの獄卒ごくそつがきて、鉄繩てつじょうを七筋かけ、閻魔王宮えんまおうぐうへ連れていった。王位を捨てて仏道に入り、遠く中国まで弘教して、皇帝からも厚く信用されたような三蔵が、どうして閻魔の責めを受けなければならなかったのか。日蓮大聖人は二つの失とがありとされて、「善無畏三蔵抄」に「一つには大日経は法華経に劣るのみに非ず涅槃経・華嚴経・般若経等にも及ばざる経にて候を法華経に勝れたりとする謗法ほうぼうの失とがなり、二つには大日如来は釈尊の分身ふんじんなり而るを大日如来は教主釈尊に勝れたりと思ひし僻見びやくけんなり」（御書八八七ページ）と仰せである。

また「下山御消息」には「善無畏三蔵は閻魔王えんまのせめにあづかるのみならず又無間地獄に堕ちぬ、汝等此の事疑あらば眼前に閻魔堂えんまどうの画を見よ」（御書三六一ページ）と仰せであり、当時、鎌倉の閻魔堂には、善無畏が獄卒に呵責かしやくされ、「今此三界こんしさんがい」等の法華経の偈げを唱えて、ようやく鉄繩が切れた図がかかげられていたものと思われる。また、大日経の疏しよには、善無畏みずからが墮地獄だじごくのありさまを書いているのである。

第二十三章

真言の弘法を破す

弘法大師は同じき延暦年中に御入唐・青竜寺の慧果に値い給いて真言宗をならはせ給へり、御帰朝の後・一代の勝劣を判じ給いけるに第一真言・第二華嚴・第三法華とかかれて候、此の大師は世間の人人もつてのほかに重ずる人なり、但し仏法の事は申すにをそれあれども・もつてのほかに荒量あらき事どもはんべり、此の事をあらあら・かんがへたるに漢土にわたらせ給いては但真言の事相の印真言計り習いつたえて其の義理をばくはしくもさはぐらせ給はざりけるほどに日本にわたりて後大に世間を見れば天台宗もつてのほかに・かさみたりければ、我が重ずる真言宗ひろめがたかりけるかのゆへに本日本国にして習いたりし華嚴宗をとりいだして法華經にまされるよしを申しけり、それも常の華嚴宗に申すやうに申すならば人信ずまじとやをぼしめしけん・すこしいろをかえて此れは大日經・竜猛菩薩の菩提心論・善無畏等の実義なりと大妄語をひきそへたりけれども天台宗の人人いたうとがめ申す事なし。

問うて云く弘法大師の十住心論・秘藏宝鑰二教論に云く「此くの如き乗乗自乗に名を得れども後に望めば戲論と作す」又云く「無明の辺域にして明の分位に非ず」又云く「第四熟蘇味なり」又云く「震旦の人師等諍つて醍醐を盗んで各自宗に名く」等云云、此等の釈の心如何、答えて云く予此の釈にをどろいて一切經並びに大日の三部經等をひらきみるに華嚴經と大日經とに対すれば法華經・六波羅蜜經に対すれば盜人・守護經に対すれば無明の辺域と申す經文は一字一句も候はず此

の事はいとはかなき事なれども此の三四百余年に日本国のそこばくの智者どもの用いさせ給へば定めてゆへあるかともひぬべし、しばらくいとやすきひが事をあげて余事のはかなき事をしらすべし、法華經を醍醐味と称することは陳隋の代なり六波羅蜜經は唐の半に般若三藏・此れをわたす、六波羅蜜經の醍醐は陳隋の世にはわたりてあらばこそ天台大師は眞言の醍醐をば盜ませ給はめ、傍例あり日本の得一が云く天台大師は深密經の三時教をやぶる三寸の舌をもつて五尺の身をたつべしとのしりしを伝教大師此れをただして云く深密經は唐の始玄奘これらをわたす天台は陳隋の人・智者御入滅の後・数箇年あつて深密經わたれり、死して已後にわたれる經をばいかでか破り給うべきとせめさせ給いて候いしかば得一はつまるのみならず舌八にさけて死し候いぬ、これは彼にはにべくもなき悪口なり、華嚴の法藏・三論の嘉祥・法相の玄奘・天台等・乃至南北の諸師・後漢より已下の三藏人師を皆をさえて盜人とかかれて候なり、其の上・又法華經を醍醐と称することは天台等の私の言にはあらず、仏・涅槃經に法華經を醍醐ととかせ給い天親菩薩は法華經・涅槃經を醍醐とかかれて候、竜樹菩薩は法華經を妙藥となづけさせ給う、されば法華經等を醍醐と申す人・盜人ならば釈迦・多宝・十方の諸仏・竜樹・天親等は盜人にてをはすべきか、弘法の門人等・乃至日本東寺の眞言師・如何に自眼の黒白はつたなくして弁へずとも他の鏡をもつて自禍をしれ、此の外法華經を戲論の法とかかるること大日經・金剛頂經等にたしかなる經文をいだされよ、設い彼彼の經經に法華經を戲論ととかれたりとも訳者の悞る事もあるぞかしよくよく思慮のあるべかりける

か、孔子は九思一言・周公旦は沐には三にぎり食には三はかれけり外書のはかなき世間の浅き事を習う人すら智人はかう候ぞかし、いかにかかるあさましき事はありけるやらん、

通解

——弘法大師は、伝教大師と同じく延暦年中に唐へ入り、青竜寺の慧果に会って真言宗を習学した。日本へ帰って後に、釈尊一代仏教の勝劣を判じて、第一真言、第二華嚴、第三法華と書いた。この弘法大師は、世間の人々がもつてのほかに重んじて尊敬している人である。しかし、仏法のことについては批判するのは憚りがあるが、もつてのほかに見当はずれや誤りが多いのである。

これらの事情を、あらあら考えてみると、中国へ渡ってもただ真言の事相の印と真言だけを習い伝えて、その義理は詳しく思索したり学んだりしないうちに日本へ帰ったあと、よくよく世間を見れば、天台宗が予想外に尊重されていた。これでは自分が重んずる真言宗はひろまりそうもないと思い、その昔日本で習ったことのある華嚴宗を取り出して、華嚴経は法華経に勝るといい出した。それも、つねの華嚴宗がいうようにいえば、人々が信じないと思ったのであろうか、少し色を変えて「これは大日経にも、竜猛菩薩の『菩提心論』にもあり、善無畏もいつているところの実義である」と大妄語をつけ加えたけれども、天台宗の人々は、強くこれをとがめなかった。

問うていわく、弘法大師の『十住心論』『秘蔵宝鑰』『二教論』には「各宗とも自宗に仏乗を名のっているが、後の教えに望めば、戯論にすぎない」とあり、また「釈尊は無明の辺域であって、明の分位ではない」とあり、また「法華は第四の熟蘇味の位である」といい、また「中国の人師たちは、争って醍醐味を

盗み取って、おのおのの自宗に添加てんかしている」等といっているが、これらの釈はどうか。

答えていわく、自分もこの釈に驚いて一切経ならびに大日の三部経等を開いてみたが、華嚴経と大日経に対すると法華経は戲論けろんであるとか、天台宗は六波羅蜜経から醍醐を盗んだ法盗人であるとか、守護経に對すれば法華経は無明の辺域であるという経文は一字一句もないのである。このことは、大變に幼稚ようちな邪義であるが、この三、四百年のあいだ、日本国では多くの智者どもが用いてきたので、定めて理由のあることだと思ふであろう。そこで、大變にわかりきったごまかしを少々あげて、そのほかのことも信ずるに足らないことであることを明らかにしよう。

天台大師が法華経を醍醐味であるといったのは、陳ちん、隋ずいの時代である。ところが六波羅蜜経はその後の唐の半ばごろ般若三藏はんにかさんぞうがこれを中国へ持ってきたのである。六波羅蜜経の醍醐が、陳、隋の代に渡ってきたならば、天台大師は六波羅蜜経の醍醐を盗まれることができたかもしれない。

ここに同じような例がある。日本の得一とくいちは「天台大師は深密経じんみつぎょうの三時教を破折しているが、これは三寸の舌で五尺の身を断つものである」といって天台大師を非難したが、伝教大師はこれに對して「深密経は唐の初めに玄奘三藏げんじようが持ってきた經典である。ところが天台大師は、陳、隋の人であり、智者が入滅されて数年経って深密経が伝えられた。その死後に伝えられた経を、どうして生前に破折することができようか」と責められたので、得一は返答につまったのみか、舌が八つに裂けて死んでしまったのである。

弘法が天台大師のことを盗人だといっているのは、得一よりも、さらにひどい悪口である。華嚴の法藏、三論の嘉祥かじよう、法相の玄奘、天台大師のみでなく南北の諸師、さらに後漢以降の三藏や人師を、みな、ひとからげにして盗人と書いているのである。そのうえ、また、法華経を醍醐であると定めたのは、天台

大師の私の言ではない。仏が涅槃經に法華經を醍醐だいごであると説かれ、天親菩薩は法華經と涅槃經を醍醐であると書かれている。また竜樹菩薩は法華經を妙藥であると名づけられた。

されば法華經等を醍醐であるという人が盗人ならば、釈迦、多宝、十方の諸仏、竜樹りゅうじゆ、天親等は盗人であられるのか。弘法の弟子たちや日本の東寺の真言師たちは、いくら自分の眼の黒白は拙つたなくして見分けがつかなくとも、他の鏡に引き合わせて自らの過ちを知りなさい。それに、法華經を戲論けろんの法と書かれているといふが、大日經、金剛頂經等から確かな經文を出しなさい。たとえ、それらの經々に法華經を戲論と書いてあつても、訳者の誤りということもある。よくよく考えてから、いかなければならないのである。孔子は九たび思つて一言出し、周公旦は沐浴するのに、三度も髪を握り、食べる時には三度吐はいて、つねに注意を怠おこたらなかつたという。外道のはかない世間の浅いことを習う人ですら、智人はこのようにしていたのである。そうしていれば、このような浅はかなことはあるはずがないのである。

語 訳

慧果けいか（七四六年—八〇五年）。中国・唐代の真言僧。真言宗東寺派では七祖とする。陝西省臨潼縣せんせいりんどうに生まれる。俗姓は馬氏。不空の弟子。内道場の護持僧となり、長安の青竜寺東塔院に住した。永貞元年（八〇五年）弘法に密教を伝えた。著書に『十八契印』じゅうはちけいいん、『阿闍梨大曼荼羅灌頂儀軌』あじやりだいまだらかんじようぎ等がある。

思 索
さはぐらせしさく 思索すること。

すこしいろをかえて色 真言の弘法は、どうしても法華經を非難したいところから、華嚴宗が五教十宗を立て法華經より華嚴經が高いといっているのを利用し、少し形を変えて十住心判じゅうしんを立て、また法華第八、華嚴第九、真言第

十という邪義を立てて、法華經をおとし入れたのである。

十住心論

『秘密漫荼羅十住心論』の略。

弘法大師空海の著。

淳和天皇

が諸宗に対し、それぞれの宗要を奏進さ

せた時提出したもので、真言宗の教判である十住心（異生羗羊住心・愚童持斎住心・婴童持斎住心・唯蘊無我住心・拔業因種住心・他縁大乘住心・覺心不生住心・一道無為住心・極無自性住心・秘密莊嚴住心）を、大日經十住品や『菩提心論』を依処として説き、それによって顕密二教、世間出世の浅深を説き明かし、真言宗の立教開宗の趣旨を明らかにしている。また十住心とは、華嚴の十宗をまねて作ったものとされている。

秘蔵宝鑰

三卷。弘法大師空海の撰。

『秘密漫荼羅十住心論』十卷の要点をまとめて三卷にしたもの。

二教論

二卷。弘法大師空海の著。

『弁顕密二教論』のこと。

法相、三論、華嚴、天台の諸宗を顕教として挙げ、

密教である大日經と比較対照して、その浅深・勝劣を判じ、真言密教が最勝であるとしている。『十住心論』をたて堅の判教として、顕密二教を比較対照している二教論を横の判教とする。

「此くの如き乗乗……」

『秘蔵宝鑰』下の文である。すなわち「出世心中唯蘊ゆいおん、拔業は是れ小乗教にして、他縁以

後は大乘心なり。大乘の前の二は菩薩乗、後の二は仏乗なり。かくのごとき乗乗自乗には仏名を得れども後に望むれば戲論と作す」（大正七十七卷三七四頁）と。ゆえに、この『秘蔵宝鑰』のいうところは、第十の真言宗、第九の華嚴宗に望めば、第八の天台法華宗は戲論の法であるということ。

六波羅蜜經 十卷。中国・唐代の般若はんにや訳。大乘理趣六波羅蜜多經りしゆくはらみつたの略称。涅槃に至るために、菩薩が修すべき六種の行（六波羅蜜）を説いている。衆生を発心させ修行させる法と、不退転心を説き、更に菩薩の修行の要としての六波羅蜜それぞれについて詳説している。

守護經

中国・唐代の般若と牟尼室利むにしりの共訳。正しくは、守護国界主陀羅尼經という。密教部の經とされる。国主

を守護することが人民を守護することになるとの理を明かし、正法守護の功德が説かれている。

般若三蔵 生没年不明。八、九世紀頃、北インド迦畢試国の訳経僧。姓は喬答摩^{きやうとうま}。幼い頃に出家し、インド諸国を巡って大小乗を学んだ。建中二年（七八一年）、中国に渡り、長安の西明寺で六波羅蜜経などを漢訳した。その後、心地観経などを訳した。

得一^{とくいち} 生没年不明。平安初期の法相宗の学僧。徳一、徳溢とも書く。伝教大師と三一権実論争をした。藤原仲麻呂の子といわれ、出家して興福寺の修田から法相を学んだ。常陸国筑波山に中禅寺を建て、後、奥州の恵日寺に移って没した。弘仁八年（八一七年）頃、伝教大師と著書を通して法華経の権実に関する論争をした。その間に『仏性抄』『中辺義鏡』三卷、『慧日羽足』^{えにちうそく}三卷などを著した。

伝教大師此れをただして云く 伝教大師の書『守護章』上の文。

舌八にさけて 『百因縁集』^{ひゃくいんしゆ}の七卷にいわく「得一大師という人、彼の宗論の為に奥州より登り叡山に上り見て、伝教をいつて小僧彼処にありといいたりける時、舌口中に裂けると爾^{しか}いう」と。また山寺住僧の真賢法橋の『破邪弁正記』には「東国の徳溢止観宗を破して舌口中に爛^たれたり」とある。

天親菩薩は法華経・涅槃経を醍醐とかかれ 天親菩薩は、『法華論』に、方便品の種種譬喩^{ひゆ}を釈する下にいわく「譬喩^{ひゆ}というは牛によるがごとし、乳、酪、生蘇、熟蘇および醍醐有り。醍醐を第一となす。小乗は乳のごとく大乘は醍醐のごとし」（大正二十六卷一六頁）と。

竜樹菩薩^{りゆうじゆ}は法華経を妙薬となづけ 竜樹菩薩の『大智度論』第百卷にいわく「般若波羅蜜^{はんにかはらみつ}は秘密の法にあらず、しかるに法華等の諸経は阿羅漢の受決作仏^{じゆけつさぶつ}を説く、大菩薩能く受持用うることを、譬えば大薬師能く毒をもって薬と為すがごとし」（大正二十五卷七五四頁）と。妙薬とはすなわち醍醐であることを知るべきである。

弘法の門人等「門人」とは別して東寺や高野山をさす。また「日本の東寺の真言師」とは、総じて日本国中の真言師をさす。これは比叡山ひえいざんの天台真言とわけられているのである。

自眼の黑白はつた拙なくして「自らの眼力は弱くてもものの黑白の判断がつかずとも、他の認識の基準に依って自らの誤りを知るべきである」との意。

孔子（前五五一年―前四七九年）。中国・春秋時代の思想家。孔丘こうきゅうともいう。儒教の祖。名は丘、字は仲尼ちゆうに。生まれは魯国ろこくの昌平郷陬邑しやうへいきやうさうゆい（山東省曲阜付近）。貧しいなかで育ったが、礼を学び學問に熱心であった。魯に仕え、理想政治の実現をめざして政治改革を行ったが失脚して、衛、陳等を遍歴。前四八四年、魯国に帰り著述に励み、顔回、子路、子貢、子游など多くの弟子の育成に努めた。

九思一言 物事の是非、善惡を十分に考察した上で言葉を出すこと。孔子の『論語』（八季氏編）にある。

周公旦しゅうこうたん 生没年不明。周代の政治家。姓は姬氏。文王（西伯）の子。兄の武王を助けて殷の紂王を滅ぼした。武王の死後は、武王の子、成王が幼かったために代わって政治をとり、また殷の殘党が東方で反乱を起こした時には自ら遠征軍の指揮をとった。周公の政治は社会の道德を慣習化した「礼」を基礎にしたことが特色とされ、後世、孔子などの儒者から深く尊敬された。

沐には三にぎり食には三は吐かれけり 『史記』には、周公旦がその子の伯禽をいまして「われは文王の子、武王の弟、成王の叔父なり。われ天下において、また賤しからず。しかも、われ一たび沐うときに三たび髪を捉え、一たび飯するときに三たび哺を吐く、起きてもって士を待つ、なお天下の賢人を失わんことを恐る。子魯に之て慎んで国をもつて人に驕ることなかれと云々」といったとある。思慮深く人に接することの大切さを示したもの。

通じて真言を破される中で、この章では日本の弘法の邪義を破されている。本抄に「此の大師は世間の人人もつてのほかに重ずる人なり」と仰せられているので、鎌倉時代にも相当に崇められていたものとみえる。今日でも、いろいろの面で世にもてはやされており、「〇〇大師」といえば、当然に弘法をさすようにさえなっている。しかし、仏法のことについては「もつてのほかにあらしき事どもはんべり」なのである。

第四熟蘇味、醍醐を盗む等

六波羅蜜經ろくはらみつぎきやうと涅槃經ねはんぎやうとに五味の譬たとえがあるので、その両方を引いてみよう。六波羅蜜經にいわく「所謂八万四千の諸の妙法蘊おんなり（中略）撰せんして五分と為す。一には素咀纒そたらん、二には毘奈耶びなや、三には阿毘達磨あびだつ、四には般若波羅蜜多はんにやはらみつた、五には陀羅尼門だらにもんとなり。此の五種の蔵をもつて有情を教化す。（中略）此の五の法蔵譬たとええば乳にゅう・酪らく・生蘇しようそ・熟蘇および妙なる醍醐のごとし（中略）総持門とは譬たとええば醍醐のごとし、醍醐の味は乳・酪・蘇の中に微妙第一にして、よく諸の病もろもろを除き、諸の有情をして身心安樂ならしむ」（大正八卷八六八頁）と。

次に涅槃經を示せば、「善男子、譬たとええば牛より乳を出し、乳より酪を出し、酪より生蘇を出し、生蘇より熟蘇を出し、熟蘇より醍醐を出す。醍醐は最上なり。（中略）善男子、仏もまた是の如し、仏より

十二部經を出生し、十二部經より修多羅しゆたらを出し、修多羅より方等經を出し、方等經より般若波羅蜜を出し、般若波羅蜜より大涅槃を出す。猶醍醐たごの如し、醍醐たごというは仏性に喩うたと」（大正十二卷四四九じ）と。
弘法が法華經を第四に下し、大日經を第五の醍醐とし、天台大師等を盗人扱いしたことは、本文に詳しく論じられているとおりである。なお「開目抄下」では「六波羅蜜ろくはらみつ經は有情の成仏あつて無性の成仏なし何に況や久遠実成いかにいわんくおんじつじようをあかさず、猶涅槃なげん經の五味にをよばず何に況や法華經の迹門・本門にたいすべしや、而るに日本の弘法大師・此の經文にまどひ給いて法華經を第四の熟蘇味じゆくそみに入れ給えり、第五の総持門の醍醐味すら涅槃經に及ばずいかにし給いけるやらん、而るを震旦しんたんの人師争つて醍醐を盗むと天台等を盗人とかき給へり」（御書二二二ごしよににに）と破折されている。

弘法の邪義

弘法の邪義については、本抄では『秘藏宝鑰ひそくほうやく』の「後に望めば戲論けろん」、同じく「無明の辺域むみょうのへん域」、『顕密二教論』の「第四熟蘇味」、同じく「諍つて醍醐を盗んで」等を挙げられている。詳しい仏法上の論議は別にして、もっとも簡単に弘法のごまかしを破折するならば、本抄で述べられているように、それは醍醐を盗む問題である。天台大師の時代には、六波羅蜜經がまだ中国へ渡ってきていなかったのに、天台がそれを盗んで自宗へつけたという、じつにありもしない妄語もうごを並べ立てるから、こんなとんでもない誤りをおかしてしまふのである。

「報恩抄」(御書二一七ページ三二二ページ)には同じく弘法の誤りを破折するのに、いろいろの現証や伝説を挙げて、その虚妄を覆えくつがされている。すなわち一には天長元年二月の大旱魃かんばつの時、人が祈って降った雨を、自分のものにして「弘法の雨」などと名乗っていること。二には弘仁九年の春、天下に疫病が流行した。弘法が般若心経で祈ったら、病気が治るとともに、夜太陽が出て輝き出した。三には弘法が帰朝して真言宗を開こうとした時、朝廷に各宗を集め、智拳ちけんの印を結んで南方に向かったら、口が俄にわかに開いて法身ほつしん仏になった。四には漢土から舟に乗る時に、三鈷さんこを投げ上げておいたら、その願いどおりに高野山で発見された等々。

大体このようなことは、非常識きわまる妄語もうごであって、よくもこんなことで世間の人が迷わされたものだと不思議になるくらいである。しかも、こんな大嘘うそつきのほうが、正しく仏法をひろめる聖僧よりも、はるかに尊敬されたり有名になったりしているのである。仏法はあくまでも「法門をもて邪正をただすべし」(「唱法華題目抄」御書一六ページ)との御遺訓ごいくんどおりに、判断していかなければならないのである。

第二十四章

聖覚房を破す

かかる僻見びやっけんの末へなれば彼の伝法院の本願とがうする聖覚しょうかく房が舍利講しやりこうの式に云く「尊高なる者は不二摩訶衍ふにかえんの仏なり驢牛ろごの三身は車を扶たすくこと能あたはず秘奥なる者は両部・漫陀羅まんだらの教なり頭乗けんじやうの四法は履はきものを採るに堪へず」と云云、頭乗けんじやうの四法と申すは法相・三論・華嚴・法華の四人、驢牛の三身と申すは法華・華嚴・般若・深密經の教主の四仏、此等の仏僧は真言師に對すれば聖覺しょうかく・弘法の牛飼うしかい・履物取者はきものとりにもたらぬ程の事なりとかいて候、彼の月氏だいまんばらもんの大慢婆羅門は生知の博学・頭密二道胸にうかべ内外の典籍てんせき・掌たなごころににぎる、されば王臣頭をかたぶけ万人師範と仰ぐあまりの慢心に世間に尊崇する者は大自在天・婆薢天ばそ・那羅延天ならえん・大覺世尊・此の四聖なり我が座の四足にせんと座の足につくりて坐して法門を申しけり、当時の真言師が釈迦仏等の一切の仏をかきあつめて灌頂する時敷しきまん曼茶羅だらとするがごとし、禪宗の法師等が云く此の宗は仏の頂いただきをふむ大法なりというがごとし、而るを賢愛論師と申せし小僧あり彼をただすべきよし申せしかども王臣万民これをもちゐず、結句は大慢が弟子等・檀那等に申しつけて無量の妄語をかまへて惡口打擲あつくちようちやくせしかどもすこしも命もをしまずののしりしかば帝王・賢愛をにくみて詰つめさせんとし給いしほどにかへりて大慢がせめられたりしかば、大王天に仰ぎ地に伏してなげひての給はく朕ちんはまのあたり此の事をきひて邪見をはらしぬ先王はいかに此の者にたばら誑されて阿鼻地獄あびじごくにをはすらんと賢愛論師の御足にとりつきて悲涙せさせ給いしかば、賢愛の御計はからいとして大慢を驢うまにのせて五竺に面をさらし給いければいいよ

悪心盛になりて現身に無間地獄に墮ちぬ、今の世の真言と禅宗等とは此れにかわれりや、漢土の三階がいぜんし禅師の云く教主釈尊の法華経は第一・第二階の正像の法門なり末代のためには我がつくれる普経ふきようなり法華経を今の世に行ぜん者は十方の大阿鼻だいあび獄に墮つべし、末代の根機にあたらざるゆへなりと申して、六時の礼懺らいさん・四時の坐禅ざぜん・生身仏のごとくなりしかば、人多く尊みて弟子万余人ありしかどもわづかの小女の法華経をよみしにせめられて当坐には音を失い後には大蛇になりてそこばくの檀那だんな弟子並びに小女処女等をもみ食いしなり、今の善導ぜんどう・法然等が千中無一の悪義もこれにて候なり、此等の三大事はすでに久くなり候へばいやしむべきにはあらねども申さば信ずる人もやありなん、

通解

——このような弘法等の邪義邪見の末流であるから、伝法院の本願と号する聖覚房しょうがくぼう覚鏝かくばんが舍利供養式しゃりくようしきの講演で次のようにいつている。「尊高なる者は、不二摩訶衍まかえんの大日如来であり、驢牛ろごの三身の仏などは、その車を引く資格すらない。秘奥ひおうなる教えは、両部の漫陀羅まんだらの教えであり、顕乗けんじようの四法の仏やこれを行じている者は、真言の履取はきものりにもおよばないのである」と。顕乗の四法というのは、法相、三論、華嚴、法華の四人をさし、驢牛ろごの三身とは、法華、華嚴、般若はんにや、深密經の教主の四仏をいう。これらの仏や僧は真言師に対すれば、聖覚房や弘法の牛飼いか履物取はきものりにもおよばないのであると書いてある。

彼のインドの大慢婆羅門だいまんばらもんは、生まれながらの博学で、顕密の二道に通じていたばかりでなく、内道、外

道の典籍てんせきを掌たなごころににぎるように通達つうたつしていた。されば王臣も頭を下げ万人が師範しはんとあおいだのである。しかし、万人からあおがれるあまりに慢心をおこして、世間の人が尊崇しているものは、大自在天・婆釳ばそ天・那羅延天ならえんと、釈尊の四人であるところから、これら四人を自分のすわる座の四本の足としてその上にすわって説法をした。それはちやうど、現在の真言師たちが、釈迦仏等の一切の仏を書き集めて、灌頂かんじょうという真言の儀式を行う時に敷まんだらとしているようなものである。また今の禅宗の法師等がこの宗は仏の頂いただきをふむ大法であるというようなものである。

しかるに、賢愛論師という小僧が、彼の大慢を糾問きゅうもんすべしといったが、王臣万民ともにこれを用いなかった。結局は大慢は自分の弟子や檀那だんなにいいつけて、無量の妄語もうごをかまえて賢愛論師の悪口をいったり、打ちすえたりしたが、論師は少しも命をおしむことなく大慢の邪見を責めたので、帝王はかえって賢愛論師をにくみ、問答をさせて問いつめようとした。ところが結果は逆に大慢が責められたので、帝王は天をおおぎ地に伏して歎いていうのには、「朕ちん、まのあたりこのことを聞いて邪見を晴らすことができたが、先王は大慢にたばらかされたまま死んだので、いまは阿鼻地獄あびじごくにいるであろう」と、賢愛論師の足にとりついて、悲涙ひるいにむせんた。そこで賢愛は大慢を捕らえて馬に乗せ、インドじゆうに顔をさらさせて、つれ歩いたのでいよいよ悪心が強盛になって、生きながら無間地獄むけんじごくにおちてしまった。今の世の真言や禅宗も、これと同じではないか。

中国の三階さんがい禪師がいうには、「教主釈尊の法華経は、第一階、第二階の正像の法門である。末法のためには、自分の作った『普経ふきやう』でなければならぬ。法華経を今の世に行ずる者は、十方の大阿鼻地獄におちるであろう。末代まつだいの機根きこんに合わないからである」といって、六時の礼拝懺悔らいはいさんげや、四時の坐禅ざぜんなどを行

語 訳

い、生き仏のようになって、多くの人から尊敬されていた。弟子も一万余人もできたのであるが、わずかの少女に法華経をもつて三階を責められたので、その場で声が出なくなり、後には大蛇だいじやとなつて、多くの自分の弟子檀那だんなや、少女、処女等を飲み食らつたのである。今の善導ぜんどう、法然等ほうねんの千中無一の悪義もこれと同じである。これらの三つの大悪事は、すでに年久しいことなので、賤しむわけではないが、いわなければ信ずる人もあるであらう。

伝法院 和歌山県那賀郡岩出町根来ねろうにある新義真言宗総本山、大伝法院のこと。根来山と号し根来寺とも呼ばれる。

伝法院ができてから、金剛峰寺との勢力争いが始まり、これが、真言宗古義派と新義派に分裂する端となつた。天承元年（一一三二年）に覚鑊かくばんが鳥羽上皇の勅許を得て高野山に開基した伝法院が始まり。覚鑊はここで伝法会を修していたが、長承三年（一一三四年）に金剛峰寺の座主を兼任したため金剛峰寺衆徒の反対にあい、保延六年（一一四〇年）に衆徒の焼討ちを受けて現在地に逃れた。両者の抗争はその後も続いたが、鎌倉中期に独立して新義真言宗を立てた。

聖覚房（二〇九五年—一二四三年）。平安後期、新義真言宗の開祖覚鑊かくばんのこと。姓は平氏、肥前（熊本県）の人。興教大師おくりなと諡された。平将門の子孫である伊佐平次兼元いさへいじかねもとの子。幼い頃、この世で最も貴い人は仏であると教えられ出家。法相、三論を学び、十六歳の時、仁和寺の寛助僧正かんじよについて剃髪ていはつした。その後、密教を学び、天承元年（一一三二年）高野山に伝法院、密厳院を建て、長承三年（一一三四年）大伝法院兼高野山金剛峰寺の座主となつた。康治二年に風邪がもとで死去した。

舍利講の式 一卷。新義真言宗の祖覺鑒撰。『舍利供養式』ともいう。仏舍利供養の講演をまとめたもの。五編か

らなり、仏舍利が仏の法身の全体であるとし、舍利供養と真言の経を講じて成仏することが示されている。

不二摩訶衍の仏 真言密教の本尊である大日如來のこと。聖覺房（覺鑒）が、舍利供養式に大日如來が最も尊高で

あるとの意で述べた言葉。不二は真言で説く金剛界、胎藏界の両界が不二であることをさし、摩訶衍は大乗の意。

驢牛の三身 真言密教で顕教の仏をけなしていった言葉。驢牛は驢馬と牛のこと。また驢は露に通じて露牛という。顕露の牛、露地の牛の意で、顕教、とくに法華経をさす。

両部・漫陀羅 金剛界曼荼羅と胎藏界曼荼羅のことであり、真言宗の本尊である。金剛頂経の説に基づいて金剛界をあらわしたものを金剛界曼荼羅といい、大日経の説に基づいて胎藏界をあらわしたものを胎藏界曼荼羅という。

顕乗の四法 顕教のうち大乘教に属する法相宗、三論宗、天台宗、華嚴宗のこと。顕乗は密乗に対する語で、顕教の教化方法で悟りを得させること。

大慢婆羅門 南インド摩臘婆国の婆羅門。『大唐西域記』卷十一によると、生まれながら學問に秀でており、内外典を究め、曆法などにも通じていた。また自ら過去・現在・未来のいかなる賢人、哲人よりも優れていると誇っていたが、西インドからきた賢愛論師（跋陀羅樓支）との法論に敗れ、国王によって殺されることになった。しかし、論師の助言で命を救われたバラモンは、これを恥じて血を吐き、見舞いにきた論師を逆に深く恨み、大乘経を誹謗した。その言葉の終わらぬうちに大地が裂け、生身のまま地獄に墮ちたという。

生知 生まれながらにして知っていること。

大自在天 だいじざいてん 梵名マヘーシュバラ (Mahesvara) を音写した摩醯首羅の訳。摩醯湿伐羅、莫醯伊湿伐羅とも書く。色界の頂に住み、三千世界を支配する天。古代インドでは、全世界の造物主とされた。『俱舍論記』等によると、自在天が瞋る時は国土が荒乱するといわれ、暴悪神とされている。仏教では、華嚴経等に説かれ、摩醯首羅天宮で法雲地の菩薩が修行して大自在天に作るとされている。

婆藪天 ばそてん 婆藪天とも書く。梵名ヴァースデーヴァ (Vasudeva) の音写。インドのバラモン教で崇拜されている神。「ばすてん」とも読み、世天と訳す。玄応音義卷二十二では毘紐天 (ヴィシュヌ神 Visnu) の別名とされているが、毘紐天の父またはクリシュナ神 (Krisna) の父との説もある。

那羅延天 ならえんてん 梵名ナーラーヤナ (Narayana) の音写。大力の神。生本、人生本と訳し、堅固力士、金剛力士、人中力士、力士ともいう。『大日経疏』には、毘紐天の別名で、仏の分身であり、迦婁羅鳥に乗って空を行くとある。慧琳音義には、大力で、この神を供養する者は多くの力を得るとあり、『大毘婆沙論』にも同様の大力が示されている。

灌頂 頭に水を灌ぎかけることによって、一定の位につくことを示す儀式。①もとインドの国王即位や立太子の際に行った②大乘仏教では、菩薩が最終の位に入るとき法王の職を受けることを証するという形で行った③密教では、大日如来の五智を表す五瓶の水を用いて、秘密法門の印可伝授、師資面接、法燈の継承をさせるとの意味で行う。

敷まんたら 曼荼羅 壁にかける懸曼荼羅に対して、檀の上に敷く曼荼羅のこと。布でできており、おもに密教で行う結縁灌頂の儀式 (仏縁を結んで印権と真言を授け、頭から水を灌ぐ儀式) の時にこれが敷かれる。

仏の頂をふむ大法 これは『仏祖通載』十三巻にあり、肅宗の乾元二年の条に、肅宗が禅の六祖恵能の衣鉢を迎え

て慧忠禪師えいちゅうぜんしに供養したとき、帝が千福寺せんぷくじにおいて慧忠に無淨三昧むじようさんまいを問うたときの問答にある。すなわち『仏祖通載』十三にいわく「帝又問う、いかんがこれ無淨三昧と。（南陽の慧忠禪師）答えていわく、檀越毘盧だんのつびるの頂上を踏んで行ず」（大正四十九卷五九八頁）と。すなわち禪宗とは仏の頂をふむ邪法である。真言の敷曼荼羅も同じことである。

賢愛論師 「けんあいろんじ」「けんないろんじ」ともいう。梵名はバドラルチ (Bhadraruci) で、音写して跋陀ばだ羅縷支らるしと書く。西インドの論師。

三階禪師 (五四〇年―五九四年)。中国・隋代の三階教の開祖信行のこと。姓は王氏。幼い頃に出家し、經論を学び、淨土の修行を積んだ。相州の法蔵寺で具足戒を受けたが、後にこの戒を捨て、自己の生を受けた時代を末法と観じて末法の時代に相応した三階教を説いた。これは普法宗ともいわれ、開皇九年（五八九年）頃、長安に出て弘教に努め、一時、隆盛をきわめた。著書に『三階位別集録』『対根起行雜録』などがある。

六時の礼懺らいさん 一昼夜を六分した晨朝じんしやう、日中、日没、初夜、中夜、後夜の六時に、仏を礼拝し、罪惡を懺悔すること。

四時の坐禪 一昼夜を四つにわけ、朝、午、昏こん、中夜の四時において坐禪ざぜんをすること。

当坐こえには音を失い後には大蛇になりて 日寛上人は「当坐こえに音を失いしは弟子の孝慈こうじなり。後に大蛇と成りしは師の信行なり。師弟同業どうごうの所感なり。故に合せてこれを挙ぐ」（文段集二八七頁）と述べられている。

講義

この章は真言を破折されるつづきで、弘法こうぼうにつづいて聖覺しょうがくを破されている。「彼の月氏の大慢婆羅門だいまんばらもん」

からは例を示されている。初めに大慢を挙げて、真言と禪を示し、次に三階禪師を挙げて、浄土宗の例とされている。

邪宗教の輩やからのいうことは、いずれにしても経文や道理を無視した邪義であるから、別に驚くことはないが、この聖覚房の悪口などもずいぶんひどいものである。舍利講しゃりこうの式には、仏と教を挙げて対比たいひしているが、これを大聖人は「此等の仏僧は真言師に対すれば」と仰せられているが、このところは「此等の法仏は真言の法仏に対すれば」というべきところではないかとの疑問がおきる。それに対して日寛上人は、顕密ともに三宝は一体であるから、そうされたのであると仰せられている（文段集二八六頁）。真言にいわせれば、「密教の三宝は顕教の三宝に勝れる」となるが、事實は真言密教の三宝などは、日蓮大聖人の真実の仏法の三宝に比べたなら、天地雲泥の相違があつて、問題にならないのである。

邪師の例として引かれた大慢婆羅門だいまんばらもんは、外道の三神と釈尊とを四本の足にして高座を作り、その上で説法したという。これなどは奇想天外の行動のようにも聞こえるが、事實はよくある例で、大聖人の時代には真言と禪がこれと同じであると仰せになっている。

三階禪師信行の妄説もうせつもまた変わっている。第一階、第二階の衆生は、釈迦仏教で救われるが、末法の第三階の衆生は信行が勝手に作った普経でなければならぬという。この教えも中国で一時は相当に流行したようだが、たびたびの弾圧によって、根絶されてしまった。

第二十五章

慈覚を破す

これよりも百千万億倍・信じがたき最大の悪事はんべり、慈覚大師は伝教大師の第三の御弟子なりしかれども上一人より下万民にいたるまで伝教大師には勝れてをします人なりとをもひり、此の人真言宗と法華宗の実義を極めさせ給いて候が真言は法華経には勝れたりとかかせ給へり、而るを叡山えいざん三千人の大衆・日本一州の学者等・一同の帰伏きふくの義なり、弘法の門人等は大師の法華経を華嚴経けごんに劣るとかかせ給えるは、我がかたな方ながらも少し強きやうなれども、慈覚大師じかくの釈をもつてをもうに真言宗の法華経に勝れたることは一定なり、日本国にして真言宗を法華経に勝ると立つるをば叡山えいざんこそ強きかたきなりぬべかりつるに慈覚をもつて三千人の口をふさぎなば真言宗はをもうごとし、されば東寺第一のかたう方人ど慈覚大師にはすぐべからず、例せば浄土宗・禅宗は余国にてはひろまるとも日本国にしては延暦寺えんりやくのゆる許可されなからんには無辺劫経はふとも叶うまじかりしを安然和尚あんねんと申す叡山えいざん第一の古徳・教時きょうじ諍論じやうろんと申す文に九宗の勝劣を立てられたるに第一真言宗・第二禅宗・第三天台法華宗・第四華嚴宗等云云、此の大謬みようしやく釈につひて禅宗は日本国に充滿してすでに亡国とならんとはするなり法然が念仏宗のはやりて一国を失わんとする因縁えんしんは慧心おうじようしゆうの往生要集の序よりはじまれり、師子の身の中の虫の師子を食くらうと仏の記し給うはまことなるかなや。

——これら三宗の悪事よりも、百千万億倍も信じがたい最大の悪事がある。慈覚大師は伝教大師の第三

の弟子であつたが、上一人より下万民にいたるまで、伝教大師より勝れていると思うほどの人であつた。この人は、真言宗と法華宗の実義を学びつくした結果、真言は法華経より勝れていると書きつけた。そして、比叡山三千人の大衆をはじめ、日本国中の学者等が、一人残らず、その邪義に帰伏してしまつたのである。弘法の門人たちは、弘法が法華経は華嚴経にも劣ると書いたのは、自分の師匠ながら少し強すぎるのではないかと思つていたが、慈覚が真言宗は法華経より勝れているといつたので、それが決定的になつてしまつた。

日本国で真言宗を法華経より勝れていると立てる場合に、比叡山こそ強い敵となるべきであるのに、慈覚が叡山三千人の口をふさいだので、真言宗の思いどおりになつてしまつたのである。されば、東寺の第一の味方は、慈覚大師にすぎるものはない。

たとえば、浄土宗や禅宗は、ほかの国では自由にひろまるとしても、日本の国では、延暦寺の許可がなければ、無辺劫を経てもひろまるわけがないのに、安然和尚という叡山第一の古徳が、『教時諍論』という書に九宗の勝劣を立てたが、第一は真言宗、第二は禅宗、第三は天台法華宗、第四は華嚴宗であるとした。この大謬釈によつて禅宗は日本国に充滿して、すでに日本は亡国にならんとしている。

また法然の念仏宗が流行して、一国が失われようとするにいたつた因縁は、慧心の『往生要集』の序から始まつたのである。まことに「師子は、その身中の虫によつて破られてしまふ」と仏は記されているが、もつともなことである。

第三の御弟子 伝教大師の弟子は、義真、円澄、光定、円仁（慈覚）、修円、勤操ごんそうの順であるが、延暦寺座主えんりやくじざすになった順序は、義真、円澄、円仁（慈覚）となるので、第三の弟子と仰せられたのである。

伝教大師には勝れてをします 慈覚は伝教大師の弟子であるが、唐にいた期間は、伝教一年（延暦二十三年七月入唐、二十四年秋帰朝）に対し慈覚は十年（承和五年入唐、十四年帰朝）であり、大師号も慈覚の弟子の相応和尚そうおうわじょうが清和天皇の御母の病氣を祈ったゆえに、円仁に慈覚大師、あわせて最澄に伝教大師をたまわった。また慈覚はその他の点でも、一般に俗受けしたので、当時の人々は伝教大師よりも慈覚のほうがすぐれていると思ったのである。

叡山三千人の大衆 この当時、いつも比叡山ひえいざんに修学している学徒は三千人といわれていた。多数ということ。『二中歴』四に「天台山三千人」とある。

法華経を華嚴経に劣る 弘法は『十住心論』および『秘蔵宝鑰ひそうやく』に、法華経は大日経、華嚴経に劣る第三の戲論けろんであるとしたこと。

叡山第一の古徳 比叡山延暦寺で八先徳を選んだとき、安然あんねんが第一に数えられたので、第一の古徳といわれた。すなわち、『先徳記』にいわく「一に五大院安然先徳、二に飯室先徳いむむろ（前静算ぜんじょうさん、後慈忍ごしにん）、三に楞嚴院先徳りやうごん（前恵心、後覚超かくちよう）、四に丹後先徳たんご、五に金輪院先徳、六に箕尾先徳みのお、七に多武峯先徳たぶみね、八に檀那先徳だんな」と。

教時諍論きょうじしょうろん 一卷。日本天台宗の僧安然あんねんの撰。『教時諍』一卷と対ついになっている。天台密教が最もすぐれた教義であるとの立場から、当時、行われていた教時論（教判論）を概観して、新しい教判説を立てた。

講義

師子の身の中の虫の師子を食う 師子は獅子と同じ。いわゆる獅子身中の虫といい、獅子の身に宿り、体内を食み死にいたらしめる虫。蓮華面經卷上には「獅子はどこで死んでも他の動物はその肉を食べないが、ただ獅子の身中に生じた虫がその肉を食う。そのように、仏法は外部から破壊されないが、内部にいる惡比丘によって破壊される」(趣意、大正十二卷一〇七二頁)とある。その他、仁王經卷下、梵網經下等にも仏法を内部から破壊する者にととえて説かれている。

この章から別して慈覺を破されており、この章はその第一で、真言よどう与同とがの失を顕あらわされている。

天台法華宗の清浄な比叡山はかいを破壊した元凶げんきようは、天台の第二代座主ざすの慈覺であつた。この慈覺の誑惑おうわくは、後に詳しく出てくるが、たとえば、天台宗の安然あんねんによって禪宗がひろめられ、同じく天台宗の慧心しんによって念仏がひろめられるようになったのと同じく、真言の邪法を日本に流行させた重罪は、とくに慈覺なのである。慈覺こそ、身は天台座主でありながら、みずから真言の邪義へ墮おちた師子身中の虫といわざるをえないのである。

日蓮大聖人はそのことを「三大秘法眞承事ほんじようじ」で「叡山ぎざに座主始まつて第三・第四の慈覺・智証・存ぞんの外に本師伝教・義真に背きて理同事勝おうげんの狂言を本として我が山の戒法をあなづり戲論けろんとわらいし故に、存ぞんの外に延曆寺えんりやくじの戒・清浄無染しようじようむぜんの中道の妙戒なりしが徒いたずらに土泥どでいとなりぬる事云うても余りあり歎きても

何かはせん」(御書一〇二三^ヰ)と仰せられ、また、この謗法ほうぼうの罪によって慈覚の死去のありさまが悪かったことを「報恩抄」では「死去の後は墓はかなくてやみぬ」(御書三一〇^ヰ)とも、また「慈覚大師事」では「慈覚大師の御はか墓は・いづれのところに有りと申す事きこへず候、世間に云う御頭くびは出羽の国・立石寺に有り云云、いかにも此の事は頭と身とは別の所に有るか……死の後の恥辱ちじよくは悪人・愚人・誹謗ひぼう正法の人招くわざわいなり」(御書一〇一九^ヰ)とも指摘されている。

第二十六章

慈覚の本師違背の失

伝教大師は日本国にして十五年が間・天台真言等を自見せさせ給う生知の妙悟にて師なくしてさ
とらせ給いしかども、世間の不審をはらさんがために漢土に亘りて天台真言の二宗を伝へ給いし時
漢土の人人はやうやうの義ありしかども我が心には法華は真言にすぐれたりとをぼしめししゆへに
真言宗の宗の名字をば削らせ給いて天台宗の止観・真言等かかせ給う、十二年の年分得度の者二人
ををかせ給い、重ねて止観院に法華經・金光明經・仁王經の三部を鎮護國家の三部と定めて宣旨を
申し下し永代・日本国の第一の重宝・神璽・宝劍・内侍所とあがめさせ給いき、叡山第一の座主・
義真和尚・第二の座主・円澄大師までは此の義相違なし、第三の慈覚大師・御入唐・漢土にわたり
て十年が間・顕密二道の勝劣を八箇の大徳にならひつたう、又天台宗の人人・広修・惟綱等になら
はせ給いしかども心の内にをぼしけるは真言宗は天台宗には勝れたりけり、我が師・伝教大師はい
まだ此の事をばくはしく習せ給わざりけり漢土に久しくもわたらせ給わざりける故に此の法門は
荒唐
あらうちにははしけるやとをぼして日本国に帰朝し・叡山・東塔・止観院の西に総持院と申す大講
堂を立て御本尊は金剛界の大日如来・此の御前にして大日經の善無畏の疏を本として金剛頂經の疏
七卷・蘇悉地經の疏七卷・已上十四卷をつくる、此の疏の肝心の釈に云く「教に二種有り一は顕示
教謂く三乗教なり世俗と勝義と未だ円融せざる故に、二は秘密教謂く一乗教なり世俗と勝義と一体
にして融する故に、秘密教の中に亦二種有り一には理秘密の教諸の華嚴般若維摩法華涅槃等なり但

だ世俗と勝義との不二を説いて未だ真言密印の事を説かざる故に、二には事理俱密教謂く大日教
金剛頂經蘇悉地經等なり亦世俗と勝義との不二を説き亦真言密印の事を説く故に」等云云、釈の心
は法華經と真言の三部との勝劣を定めさせ給うに真言の三部經と法華とは所詮の理は同じく一念三
千の法門なり、しかれども密印と真言等の事法は法華經かけてをはず法華經は理秘密・真言の三
部經は事理俱密なれば天地雲泥なりとかかれたり、しかも此の筆は私の釈にはあらず善無畏三藏の
大日經の疏の心なりとをぼせどもなをなを二宗の勝劣不審にやありけん、はた又他人の疑いをさん
ぜんとやをぼしけん、大師覺の伝に云く「大師二經の疏を造り功を成し已畢つて心中独り謂らく此
の疏仏意に通ずるや否や若し仏意に通ぜざれば世に流伝せじ仍つて仏像の前に安置し七日七夜深誠
を翹企し祈請を勤修す五日の五更に至つて夢らく正午に當つて日輪を仰ぎ見弓を以て之を射る其の
箭日輪に當つて日輪即轉動す夢覺めての後深く仏意に通達せりと悟り後世に伝うべし」等云云、
慈覺大師は本朝にしては伝教・弘法の両家を習いきわめ異朝にしては八大德並に南天の宝月三藏等
に十年が間・最大事の秘法をきわめさせ給える上二經の疏をつくり了り重ねて本尊に祈請をなすに
智慧の矢すでに中道の日輪にあたりてうちをどろかせ給い、歡喜のあまりに仁明天王に宣旨を申し
副
そへさせ給い・天台の座主を真言の官主となし真言の鎮護國家の三部とて今に四百余年が間・
碩学稻麻のごとし渴仰竹葦に同じ、されば桓武・伝教等の日本国・建立の寺塔は一字もなく真言の
寺となりぬ公家も武家も一同に真言師を召して師匠とあをぎ官をなし寺をあづけ給ふ、仏事の木画

の開眼供養は八宗一同に大日仏眼の印真言なり。

通解

——伝教大師は日本国において、十五年のあいだ、天台真言等の仏法を学ばれた。生まれながらの秀れた智慧で、師匠もなくて悟られたのであるが、なお世間の人々の疑いを晴らそうとして唐へ渡り、天台、真言の二宗を伝えたのである。当時の中国の人々においてはいろいろの義があつたが、伝教大師は我が心には法華経は真言に勝れていると思われたので、真言宗の宗の字を削り取り、天台宗の止観・真言等と書かれたのである。十二年のあいだ、二人ずつの年分得度者を勉強させ、重ねて一乗止観院で、法華経、金光明経、仁王経の三部を鎮護国家の三部と定めて、天皇の宣旨を申し下し、日本国の第一の重宝たる神璽と宝剣と内侍所のように、あがめさせられたのである。叡山第一代の座主の義真和尚、第二の円澄大師までは、この義に相違なかった。

第三の慈覚大師は、唐へ渡って十年の間、頭密二道の勝劣を八人の高僧から学んだ。また天台宗のことは広修、惟鐸等に習学したけれども、心の中で思っていたことは、真言宗は天台宗より勝れている、わが師伝教大師は、いまだこのことをくわしく学ばれなかったに違いない、中国には長くいらつしやらなかったもので、この法門はよく知らなかったのだらうと思つて、日本へ帰った。そして比叡山の東塔、止観院の西に、総持院という大講堂を建て、御本尊は真言の金剛界の大日如来とし、この前で大日経の善無畏の疏を本にして、金剛頂経の疏七卷、蘇悉地経の疏七卷、以上合わせて十四卷を著述したのである。

この疏の肝心の釈には「教には二種類があつて、一には頭示教で、いわゆる三乗教をいう。この教では

まだ世俗諦と、勝義諦とが円融していないからである。二には秘密教で、いわゆる一乗教をいう。これは世俗と勝義とが一体になり融合しているからである。その秘密教の中にまた二種類ある。一には理秘密の教で、もろもろの華嚴、般若、維摩、法華、涅槃等である。これらの経には、ただ世俗と勝義との不二を説いて、いまだ真言と密印の事を説いていないから。二には事理俱密の教で、大日経、金剛頂経、蘇悉地経等、いわゆる真言の三部経である。これには世俗と勝義との不二、一体を説き、また真言と密印の事を説いているからである」とある。

この釈の意味は、法華経と真言の三部経との勝劣を定めるのに、真言の三部経と法華経とは所詮の理は同じく一念三千の法門である。しかし、密印と真言等との事法は、法華経には欠けて無く、ただ理秘密のみで、真言の三部経は事理俱密であるから、天地雲泥のように勝れていると書いたのである。しかもこれは自分勝手な意見ではなくて、善無畏三蔵の大日経の疏の心であると書いたが、しかもなお二宗の勝劣に疑問を持っていたのであろうか、はたまた他人の疑いを晴らそうと思ったのであろうか、慈覚の伝には、次のように書かれている。

「慈覚は二経の疏を作り、功を成しおわって、心中ひとり思うのに、この疏は仏の意にかなうかどうか。もし仏意に通じないならば、世に流布するのはよそう。そこで仏像の前に安置し、七日七夜、心をこめて深い祈りをつくした。すると五日目の五更にいたって夢をみた。その夢は、正午になって太陽をあおぎ見て、弓でこれを射ると、その箭が太陽に命中し、太陽は動転しておちた。夢がさめてのち、自分の釈は深く仏意に通達したと思い、後世に伝えるべしと決意した」というのである。

慈覚大師は、日本においては伝教、弘法の両大師の教えを習いきわめ、唐へ渡ってから、八大徳を始

め、南インドの宝月三蔵等に十年の間、最大事の秘法を習いきわめたらうえ、二経の疏を作ったのである。しかも重ねて本尊に祈請をなしたところ、智慧の矢が中道の太陽にあたり、驚き歓喜のあまりに仁明天皇に奏聞し、宣旨を申しそえて、天台の座主を真言の官主となし、真言の三部経を鎮護国家の三部といい出して以来今日まで四百余年のあいだ、その流れを汲む学者は稻や麻のように多く、これを渴仰する輩は竹葦のように多かったのである。されば桓武天皇や伝教大師等が日本国に建立された寺塔は、一つ残らず真言の寺となってしまった。公家も武家も一同に真言師を召して師匠とおおぎ、官位を与え、寺をあずけている。仏事の本像画像の開眼供養も、八宗とも一同に大日仏眼の印と真言で行うようになってしまった。

十五年が間 伝教大師が二十二歳のとき、延暦七年（七八八年）、比叡山にはじめて一乗止観院（根本中堂）を建ててから、延暦二十三年（八〇四年）三十八歳で入唐するまでのあいだである。朝廷から下された公驗文には「国昌寺の僧最澄、平安東獄比叡峰に住し、精進練行十有五年、念誦の秘法を搜り、天台の高蹤を慕う。延暦二十三年、歳甲申に在り四月、詔を報じ海を渡る道を求め、台州国清寺に詣る」とある。

漢土の人人はやうやうの義 中国では、あるいは真言がすぐれ、あるいは法華がすぐれ、あるいは真言と法華は同じとか、あるいは理同事勝などの、いろいろな義があったこと。

真言宗の宗の名字をば削らせ 伝教大師は、いつも天台宗の名のみ出され、真言宗の宗の名はけずって「天台宗の止観・真言」等としている。たとえば『山家学生式』には「天台法華宗年分学生式一首……凡そ法華宗天台の年

分……一十二年山門を出でず両業を修学せしめん。凡そ止観業の者は年々毎日、法華・金光・仁王・守護・諸大乘等、護国の衆経を長転長講せしめん。凡そ遮那業の者は……」（大正七十四卷六二三頁）とあり、『法華要略集』には「延暦二十五年時に天台宗年分度者二人を賜う。一人は真言業を習い、一人は止観業を学び、永く恆例と爲す。爾後叡山毎年灌頂を修し、兼て両業を勤学せしむ。然れば則ち天台宗止観、真言両業は是れ桓武天皇の崇建する所なり」とあり、また『学生式問答』には「今天台一宗年分の二人は」（『伝教大師全集』卷一、三四一頁）とある。このように宗名は天台宗、法華宗、天台法華宗とのみあり、真言には宗名をつけず、ただ天台宗の一分科として止観業と真言業のことをいつているにすぎない。

十二年の年分得度の者二人 比叡山延暦寺で、止観と真言の両業を伝えるために、その法器を選び年ごとに二人を得度せしめたという。この選ばれた人は、十二年間、山門から出ないで、一人は止観業を修め一人は遮那業を修めた。これを十二年の年分得度という。前項参照のこと。

止観院 一乗止観院といい、比叡山の根本中堂のこと。伝教大師の建立で、本尊は薬師如来である。

金光明経 漢訳に五本ある。①北涼の曇無讖訳の金光明経四卷②梁の真谛訳の金光明帝王経七卷③北周の闍那崛多訳の金光明経更広寿量大弁陀羅尼経五卷④隋の宝貴の合部金光明経八卷⑤唐の義浄訳の金光明最勝王経十卷。現存するのは①④⑤のみ。仏が王舎城耆闍崛山に住していた時に説いたとされる方等部の経。この経は諸経の王であり、護持する者は護世の四天王をはじめ一切の諸天善神の加護を受けるが、逆に、国王が正法を護持しなければ、諸天善神が国を捨ててため、三災七難が起ると説かれている。

仁王経 般若部の結経であり、日本では法華経、金光明経と合わせて護国三部経と称され鎮護国家の経とされた。内容は正法の滅尽しようとする時に起る七難を示し、この災難をまぬかれる法は般若を受持することにあると

し、五忍・十五地等の菩薩の行法を説いている。仁王經には四訳あり、そのなかに後秦代の鳩摩羅什の仁王護国般若波羅蜜經二卷と唐代の不空の仁王護国般若波羅蜜多經二卷がある。不空訳には印・真言があり、東密ではこれを用いる。その他法護訳、真諦訳の各一卷がある。

鎮護国家の三部 法華經、金光明經、仁王經の三經をいう。とくに、これらの三經は、七難を消滅して国家を守護する法を説いているので、伝教大師が嵯峨天皇の弘仁二年七月より、国家守護のために、法華堂において三部を日々輪次に講讀し、長く修したので長講といわれた。

義真和尚 (七八一年―八三三年)。伝教大師の跡を受けて延暦寺第一代座主となった。諡号は修禅大師。『本朝高僧伝』卷五等によると、相模(神奈川県)の生まれで、幼くして比叡山に登り、伝教大師に師事した。延暦二十三年(八〇四年)伝教大師が入唐の際には、唐語ができたため訳語僧として同行。弘仁十四年(八三三年)には自ら戒和上となって、初めて円頓大菩薩戒を円珍(智証)ら十四人に授けた。天長元年(八二四年)勅命によって延暦寺第一代座主となる。著書には『天台法華宗義集』一卷、『大師隨身録』一卷、『雜疑問』一卷などがある。

円澄大師 (七七一年―八三七一年)。比叡山延暦寺の第二代座主。諡号は寂光大師。武蔵(埼玉県)に生まれ、はじめ鑑真和尚の高弟の道忠のもとで学んだが、後に伝教大師に師事し、円教三身・止観三徳の義などを授けられたという。「報恩抄」には「円澄は天台第二の座主・伝教大師の御弟子なれども又弘法大師の弟子なり」(御書三二〇頁)とあり、若干、真言宗の影響を受けていたことがうかがわれる。

八箇の大徳 中国真言密教の八人の師。『元亨釈書』第三の円仁伝の下には十一師を出している。このうち蕭公(蕭慶中)は禅宗であり、志遠、宗頤は天台宗なので、この三人を除いてのこりの八人が真言師である。いわゆる宗叡、全雅、元政、義真、法全、宝月、侃阿闍梨、惟謹である。ゆえに同釈書第六卷では、法全、元政等の八人

の真言師となっている。なお「撰時抄」の次の文に「八大徳並に南天の宝月三蔵等に十年が間・最大事の秘法をきわめ……」（御書二八一頁）と仰せであるが、これは総別を兼ねてあげられたのである。ゆえに慈覚は、顕密二道の勝劣は、別して次下の広修・惟燭等に学んだと読むべきである。

広修（七七一年―八四三年）。中国・唐代、天台宗の僧。至行尊者ともいわれる。姓は留氏。東陽夏崑（浙江省金華府）の人。道邃和尚の弟子となり、天台山禪林寺で天台の教観を学び、法華、浄名、光明、梵網、四分戒本を日々読誦した。後に請われて台州に行き、学堂で止観を講じた。唐・開成五年（八四〇年）、円澄の天台三大部に関する疑問を中心とする三十条に答えた。その内容は唐決に記載されている。

惟燭等 生没年不明。維燭・維離とも書く。中国天台宗の広修の高弟。広修と共に円澄の三十条の質問に回答を与えた。これを澄唐決という。「惟燭等」の等は中国天台宗の志遠、宗穎をさすと思われる。

叡山・東塔・止観院 比叡山は東塔、西塔、横川の三区画にわかれ、東塔は一山の中心で一乗止観院（根本中堂）、戒壇院、大講堂、前唐院、浄土院などがある。三塔の院号は、東塔を一乗止観院といい、西塔を法華宝幢院といい、横川を首楞嚴院という。ここは叡山の東塔にある止観院ということ。

総持院 法華仏頂総持院のこと。比叡山延暦寺の東塔にある九院の一つ。慈覚が仁寿元年（八五一年）に建立。大日如来を本尊としている。

金剛界の大日如来 真言密教の本尊の大日如来には、金剛界と胎藏界の二種がある。慈覚、智証などの台密は金剛界を重視し、弘法などの東密は胎藏界に重きをおく。

善無畏の疏 善無畏が一行をたぶらかして書かせた『大日経疏』二十巻のこと。東密では弘法の伝えた『大日経疏』を用い、台密では、一行の疏に智儼、温古が修正を加えた『大日経義釈』十四巻を用いる。第二十二章「大

日経の疏」の項（三六八頁）参照。

金剛頂経の疏七卷　金剛頂経は、大日経、蘇悉地経そしつじとともに真言の三部経といわれる。金剛頂経には三訳があるが、不空訳の三巻が多く用いられる。慈覚じかくは『大日経疏』にならって、この『金剛頂大教王経疏』七巻をつくつた。

蘇悉地経の疏七卷　蘇悉地経は同じく真言三部経の一つで、唐の開元十四年（七二六年）に善無畏ぜんむいが訳した三巻のものが用いられている。慈覚はこれにより『蘇悉地羯羅経略疏』七巻をつくつた。

此の疏の肝心の釈に云く「教に二種……」慈覚じかくの『蘇悉地経疏』一の文である。

世俗と勝義と　俗諦ぞくたいと真諦しんたいと、という意。すなわち世俗とは世俗諦の略で、世間一般の道理をいう。勝義とは勝義諦のことで、世間一般のことよりもすぐれている仏法の深妙の理をいう。そして世俗と勝義の二理が隔歴きやくりやく不融ふゆうなのを三乗教とし、不二円融しているのを一乗教としている。

大師慈覚の伝　慈覚大師の別伝で、寛平親王かんぴやうの撰。

南天の宝月三蔵　生没年は不明。中国・唐代の訳経僧。南インドの出身で長安の青竜寺に住んでいた。慈覚は入唐した際、この宝月から梵字を学んだとされる。

天台の座主を真言の官主となし　慈覚は天皇の宣旨により、真言の勢いを強めて天台宗を真言宗にかえてしまったことをいう。

碩学せきがくとま稻麻のごとし渴仰かつとうちくい竹葦に同じ　稻も麻も竹も葦も、数が多いことを示す。ここでは、碩学すなわち僧侶を稻麻に、渴仰すなわち信者を竹葦にたとえた。

大日仏眼の印真言なり　木面の開眼供養は、法華経の一念三千の法門に依るべきであるのに、慈覚以来は大日如来

の印・真言で仏像の開眼供養を行うようになったということ。

講義

この章は別して慈覚じかくを破される中の第二で、本師伝教大師に違背いはいした失とがを挙げられている。

伝教大師は……我が心には法華は真言にすぐれたり

伝教大師が法華経は真言に勝れていると考えられていたということが、どうしてわかるかとの問いに對し、日寛上人は、次のように、三つの理由を挙げられている。

一には、法華経をもって宗旨しゅうしとなすがゆえに。『秀句』にいわく「浅きは易く深きは難しとは釈迦の所判なり。浅きを去って深きに就くは丈夫の心なり。天台大師は釈迦に信順し、法華宗を助けて震旦しんたんに敷揚かようし、叡山えいざんの一家は天台に相承し、法華宗を助けて日本に弘通す」と。正しくこの文の意は、大日経等の浅きを去って法華経の深きに就くをもって宗旨しゅうしとしている。ここに勝劣が分明ではないか。二には、大日経等を傍依ぼういとなすゆえに。『守護章』にいわく「今、山家所伝しやでんの円教宗の依経えききやうは、正には法華及び無量義に依り、傍ぼうには大涅槃・華嚴・般若・方等・遮那、一切の円を説く等の諸経諸論に依る」等と。このように法華を正依の経となし、大日経等をもって傍依の経としているから、勝劣はじつにはつきりしてはいないか。三には、略して真言宗の謬あやまりを破すゆえに。『依憑集』の序にいわく「新来

の真言家は則ち筆授ひつじゆの相承そうじようを泯みんじ（なくすこと）」等と。いわんや記十の含光がんこうの物語を、さらに『依憑集』に載のせているところからみても、はっきりしているではないか（以上、文段集二八九ページより）。なお含光の物語とは、不空がインドへ法を求めに帰った時、インドの真言僧から中国の天台大師の教判をインドへ持ってくるように頼まれたということ、不空の弟子の含光が妙楽大師に語ったというもの。（『報恩抄』御書三〇四ページ等）

なお「報恩抄」には「抑そもそも伝教大師いづれの書にかかれて候ぞや」（御書三〇七ページ）と、伝教大師は、法華と真言が等しいなどと書いたものはないと断定されている。しかし実際には、『牛頭決ごずけつ』には「天台所立の十界互具の文と秘密最大三十七尊住心城の文と大道異なりと雖も不思議一なり」（『伝教大師全集』巻五、五四ページ）とか、『学生式がくしやうしき』には「止観と真言と二羽・両輪」などと書かれたものがある。

これに対して日寛上人は、二宗が等しいというのは約教一往やくぎやういっおうの傍義ぼうぎであつて、約部再往やくぶさいおうの正意ではない。約部再往の正義は、法華が勝れ真言が劣ることはいうまでもない。その理由として、一には真言には宗の名をつけず、伝教大師はただ天台法華宗と称された。二には『守護章』に大日経を傍依ぼうえの経とされた。三には『依憑集』に真言を破するゆえに。四には記十を引いて中国の真言の元祖、不空を魯人ろひととされた。五にはそのような含光の物語を、『依憑集』に書き載せられた、等々とされている。（以上、文段集二七六ページ―二七七ページの趣意）

世俗と勝義の融・不融

世俗（世間一般の理）は事であり、勝義（仏法の深理）は理である。慈覚のいわんとするのは理同事勝である。いまその邪義を、日寛上人の文段によって破折する。

一には、真言の三部経の中には、開権顕実の妙理を説いていない。ゆえに二乗作仏の文義もない。このゆえに十界互具の理もない。ゆえに真実の妙理ではない。なぜ法華と理同といえるのか。

二には、衆生の成仏は、ただ十界互具の妙理による。それに対して印と真言というものは、成仏した上で自然に表れるものである。もし十界互具の妙理にかなない、即身成仏するならば、印と真言は自然に具足するものである。そうでなくて、成仏はしたが、印も真言もないなどという仏は、声が出ない仏とか、中風で手足の動かない仏ができたようなもので、そんなことがあるわけがない。ゆえに經典には十界互具があるかないかが問題なのであって、印・真言の有無は問題ではないのである。もし、一々なんでも説いていなければ、その經典が事において劣るというなら、阿含經に説かれている世界建立等は大日經には説かれていないので、それでは大日經は阿含經に劣るのか。

三には、いわんやまた、真言の教えは印・真言を説くけれども、久遠実成の事を説いていない。どうして事において勝れるといえるのか。

四には伝教大師は、法華經を最も勝れた經とし、天台大師も同じである。慈覚はその流れを汲みなが

ら、なぜ本師に違背いはするのか。

五には、伝教は唐へ渡ってわずか一年しかいなかったたので、勉強が足りないとか、天台大師は大日経等がまだ渡ってきていなかったたので、その勝れていることがわからなかったたなどというならば、釈迦・多宝・分身の諸仏はどうか。これらの諸仏が、法華第一と証明したことを、うそだともいうのか。

六には、すべての一代仏教の中に、真言が勝れ、法華が劣るなどという文は、一字一句もないではないか。ゆえに慈覚は現罰こうむを蒙り、あるいは疫病で死んだなどといわれているのである。(以上、文段集二

第二十七章

問答解釈して慈覚を破す

疑つて云く法華經を真言に勝ると申す人は此の釈をばいかがせん用うべきか又すつべきか、答う
仏の未來を定めて云く「法に依つて人に依らざれ」竜樹菩薩の云く「修多羅に依れるは白論なり修
多羅に依らざれば黒論なり」天台の云く「復修多羅と合せば録して之を用ゆ文無く義無きは信受す
べからず」伝教大師云く「仏説に依憑して口伝を信ずること莫れ」等云云、此等の經論釈のごとき
んば夢を本にはすべからずただついさして法華經と大日經との勝劣を分明に説きたらん經論の文と
そたいせちに候はめ、但印真言なくば木画の像の開眼の事・此れ又をこの事なり真言のなかりし已
前には木画の開眼はなかりしか、天竺・漢土・日本には真言宗已前の木画の像は或は行き或は説法
し或は御物言あり、印・真言をもて仏を供養せしよりこのかた利生もかたがた失たるなり、此れは
常の論談の義なり、此の一事にをひては但し日蓮は分明の証拠を余所に引くべからず慈覺大師の御
釈を仰いで信じて候なり。

問うて云く何にと信ぜらるるや、答えて云く此の夢の根源は真言は法華經に勝ると造定めての御
ゆめなり、此の夢吉夢ならば慈覺大師の合せさせ給うがごとく真言勝るべし、但日輪を射るとゆめ
にみたるは吉夢なりというべきか、内典五千七千余卷外典三千余卷の中に日を射るとゆめに見て吉
夢なる証拠をうけ給わるべし、少少此れより出し申さん阿闍世王は天より月落るとゆめにみて耆婆
大臣に合せさせ給しかば大臣合せて云く仏の御入滅なり須拔多羅天より日落るとゆめにみる我とあ

わせて云く仏の御入滅なり、修羅は帝釈と合戦の時まづ日月をいたてまつる、夏の桀・殷の紂と申せし悪王は常に日をいて身をほろぼし国をやぶる、摩耶夫人は日をはらむとゆめにみて悉達太子をうませ給う、かるがゆへに仏のわらわなをば日種という、日本国と申すは天照太神の日天にてましますゆへなり、されば此のゆめは天照太神・伝教大師・釈迦仏・法華経をいたてまつれる矢にてこそ二部の疏は候なれ、日蓮は愚癡の者なれば経論もしらず但此の夢をもつて法華経に真言すぐれたりと申す人は今生には国をほろぼし家を失ひ後生にはあび地獄に入るべしとはしりて候、今現証あるべし日本国と蒙古との合戦に一切の真言師の調伏を行ひ候へば日本かちて候ならば真言はいみじかりけりとおもひ候なん、但し承久の合戦にそこばくの真言師のいのり候しが調伏せられ給し権の大夫人はかたせ給い、後鳥羽院は隠岐の国へ御子の天子は佐渡の嶋嶋へ調伏しやりまいらせ候いぬ、結句は野干のなきの身にをうなるやうに還著於本人の経文にすこしもたがはず叡山の三千人鎌倉攻にせめられて一同にしたがいはてぬ、しかるに（又かまくら日本を失はんといのるかと申すなり、これをよくよく知る人は一閻浮提一人の智人なるべし、よくよくしるべきか）今はかまららの世さかんなるゆへに東寺・天台・園城・七寺の真言師等と並びに自立をわすれたる法華宗の謗法の人人・関東にをちくだりて頭をかたぶけひぎをかがめやうやうに武士の心を取りて、諸寺・諸山の別当となり長吏となりて王位を失いし悪法をとりいだして国土安穩といのれば、將軍家並びに所従の侍已下は国土の安穩なるべき事なんめりとうちをもひて有るほどに法華経を失う大禍の僧ど

もを用いらるれば国定めてほろびなん、

通解

——（編注・前ページ十一行目の「又かまくら……」以下の二行の文Ⅱ（Ⅰ）内Ⅱは御書全集にはないが、掲載した。序講にもあるように、「撰時抄」は御正本と御草案の二本があったと思われる。しかし現在残っている御真筆には、この御文の部分が日蓮大聖人みずから削られていたような筆跡もある。しかし大事な文証もあり、日寛上人も「撰時抄愚記」に引用されているので、括弧を付して掲載した。ただ御文は「一閻浮提一人の智人」であるが、日寛上人の「撰時抄愚記」には「一閻浮提第一の智人」とある）疑っているわく、法華経が真言より勝れているという人は、この釈をどうしたらよいのか、用いるのか、それとも捨てなければならぬのか。

答う、仏は滅後の仏道修行のあり方を示しているには「法によって判断し、人によって判断してはならない」と。また竜樹菩薩は「經典に依っているのは白（正）論で、經典に依らないものは黒（邪）論である」と。さらに天台大師は「經典に合うものはとりあげて用いよ。文もなく義もないものは信受してはならない」と。そして伝教大師は「仏説に依るべきであって、口伝を信じてはならない」等と述べている。

これらの経論釈のとおりであるならば、夢をもとにしてはならない。ただ直接に法華経と大日経との勝負を、明らかに説き示した経論の文こそ大切である。ただし、印と真言がなければ木画二像が開眼できないということは、実に笑止な愚論である。それでは真言宗のない時代には木画の開眼はなかったのか。インドでも中国でも日本でも、真言宗以前の木画の像が、あるいは歩いたとか、あるいは説法したとか、あ

るいは物語をしたなどと伝えられている。かえって印・真言で仏を供養するようになってからは、功德もいろいろなくなってきた。これは常に語り合われていることである。ただし真言が勝れば法華が劣るということが邪義であるということについては、日蓮は明らかな証拠を余所に求める必要がない。慈覚自身の書いたものによって明らかであると思うのである。

問うていわく、どうして明らかなのか。答えていわく、慈覚のこの夢の根源は、真言は法華經に勝ると造り定めた上での夢である。この夢が吉夢なら、慈覚が夢判断をしたように真言が勝れていることになる。ただし、太陽を射ると夢にみたことが、吉夢といえるのか。内典五千、七千余巻と外典三千余巻の中で、太陽を射ると夢にみるのが吉夢だという証拠をうけたまわりたい。こちらから二、三申し上げよう。阿闍世王^{あじやせ}は天より月が落ちると夢にみて、耆婆大臣^{きば}に夢判断をさせたところ、大臣は答えて「仏の御入滅に違いない」といった。また須拔多羅^{しゅばたら}は天より太陽が落ちると夢にみて、みづから夢判断をして「仏の御入滅である」といった。また修羅^{しゆら}は帝釈^{たいしゃく}と戦うとき、まず日月を射るといふ。そして夏の桀王^{けつおう}、殷^{いん}の紂王^{ちゆうおう}という悪王は、常に太陽に弓を引いて身を滅ぼし、国を破ったのである。

また反対に、摩耶夫人^{まや}は、太陽を孕む^{はら}と夢にみて悉達太子^{しつた}をお産みになった。このゆえに仏の幼名を日種^{ひしゅ}というのである。また日本国^{にっぽん}というのは天照太神が日天子にてましますゆえの国名である。されば慈覚の夢は、天照太神、伝教大師、釈迦仏、法華經を射たてまつる矢であり、彼の造った二部の疏^{しよ}も同じなのである。日蓮は愚癡の者であるから経論などくわしいことはわからないが、この夢をもって法華經より真言が勝れているという人は、今生には国を滅ぼし、家を失い、後生には阿鼻地獄^{あび}へおちるといふことは知っているのである。

今ここに現証がある。日本国と蒙古との戦いに、一切の真言師が敵国の調伏じようふくを行って日本が勝つならば、真言は尊いと思うであらう。ただし、承久じようきゆうの合戦には、たくさん真言師が、鎌倉幕府の権ごんの大夫たゆう義時よしときを調伏しようと祈ったが、祈られたほうが大勝利し、祈ったほうの後鳥羽院は隠岐おきの国へ、御子の天子は佐渡等の島々へ流されて、逆に調伏されてしまった。結局は、野干やかんは自分が鳴くために他の動物に殺されるようなもので、「還著げんじやく於本人」の経文に少しも違わず、比叡山三千人の僧徒は、鎌倉に攻められ、一同に従属されてしまった。

それでも（また、鎌倉は日本を滅亡させようと祈るのかというのである。このことを、よくよく知っている人こそ、世界でただ一人の智人であるということをよく知らなければならぬ）今は鎌倉の世が盛んになったため、東寺とうじ、比叡山おんじようじ、園城寺、奈良七寺の真言師等と、それに自分の立場を忘れた天台法華宗の謗法ほうぼうの徒が、関東に落ち下っては、頭を下げ、ひざをかがめて、さまざまに武士に取りいつている。そして、諸寺、諸山の別当べつとうとか長吏ちやうりなどという官位をもらい、朝廷を滅亡させた悪法をとりだして国土安穩あんゐんを祈っているのを、將軍家ならびに家来の侍さむらい以下は、そのうちに国土は安穩になるだろうと思っているかもしれないが、法華經を失う大謗法の僧たちを用いれば、国が滅亡することは間違いないであろう。

語訳

「法によつて人に依らざれ」 涅槃經ねはんに説かれている法の四依の一つ。法の勝劣浅深、判釈には仏の説いた経文に依るべきであり、人師、論師の我見の説などに依るべきでないことを示した文。法の四依とは、そのほかに「義に依つて語に依らざれ」「智に依つて識に依らざれ」「了義經りようぎに依つて不了義經に依らざれ」がある。いずれも仏滅

後に仏道を修行する人が必ず遵守すべきものである。涅槃經には、この法の四依のほか、人の四依も説かれている。

竜樹菩薩の云く「修多羅……」 竜樹菩薩の『十住毘婆沙論』第七の分別法施品第十三の文。

修多羅 梵名スートラ (sūtra) の音写。經文、經典のこと。素多覽ともいう。即ち仏の説法を後世に伝える章句のことで、三藏、五藏、十二部經の一つ。

天台の云く「復修多羅……」 天台大師の『法華玄義』十の上の文。經論と合する義は用いていくが、經論に文証も義もないのは信じてはいけないということ。

伝教大師云く「仏説に……」 伝教大師の『法華秀句』下の文。仏説經名示義勝二の末文で「誠に願わくは一乗の君子、仏説に依憑して口伝を信ずることなかれ。誠文を仰信して偽会を信ずることなかれ」(『伝教大師全集』卷三、二四五)の文。

ついでとして「つきさして」の音便で、適切に指示することをいう。

鳥瀝
をこの事 おろかなこと。

或は行き或は説法し或は御物言あり 「法蓮抄」に「優填大王の木像は歩をなし摩騰の画像は一切經を説き給ふ」(御書一〇四四)と仰せである。また『元亨釈書』卷二十八には、和州葛木尼寺の弥勒像が盜難にあつた時、声を發して警備を呼んだことや、遠州鶴田寺の薬師像が、水底から「我を取れ、我を取れ」と声を發して発掘されたことなどが述べられている。

内典五千七千余卷 内典とは仏教經典のことであり、それが五千卷または七千卷あるといわれている。智昇の『開元釈教錄』には七千四十六卷とあり、また田照の『貞元錄』には七千三百九十九卷となっている。「法華經題目

抄」には「像法に入つて一十五年と申せしに後漢の孝明皇帝・永平十年丁卯の歳・仏經始めて渡つて唐の玄宗皇帝・開元十八年庚午の歳に至るまで渡れる訳者・一百七十六人・持ち来る經律論一千七十六部・五千四十八卷・四百八十帙、是れ皆法華經の經の一字の眷属の修多羅なり」(御書九四二頁)と仰せられている。また『開元録』の終わりには、五千四十八卷は入蔵の実数で、一千九百八十卷は闕本の数で、合わせれば七千二十八卷であると
いつている。

天より月落る 大涅槃經にいわく「阿闍世王」都て如来の涅槃を覚知せず。涅槃の夜夢に月落ち地中より日出ずるを見る。乃至すなわち諸臣を召して、具さにこの夢を陳べ、これは何の祥ぞや。臣、王に答えていわく、これ仏涅槃不祥の相なり」(大正十二卷九一二頁)と。

耆婆大臣 梵名ジューヴァカ(Jivaka)の音写。活、命、寿命等と訳す。釈尊在世當時の名医。頻婆娑羅王と棕女との子。得叉尸羅国の阿提梨賓迦羅について医学を七年間学んで摩訶陀国に帰る。頻婆娑羅王、阿闍世王の帝医となる。仏教を深く信じ、阿闍世王に大臣として仕えている時、王が父を殺し、母を殺そうとし、ために身に悪瘡ができて苦しむのを見て、王に懺悔を勧め、釈尊に帰依させた。頻婆娑羅王の子無畏王と王舎城の娼女婆羅跋提との子との説もある。

須拔多羅天より日落る 竜樹菩薩の『大智度論』第三にいわく「須跋陀梵志年百二十歳にして五神通を得……(夢に)日墮ち地破れ、大海の水渴き、大風起こつて須弥山を吹き破散するを見、覺めて恐怖す(中略)善知識天有り、上より来下し須跋陀に語つて言く、汝恐怖することなかれ、一切智人有り仏と名づく、後夜半まさに無余涅槃に入る……」(大正二十五卷八〇頁)と。

修羅は帝釈と合戦 帝釈は欲界の第二、忉利天の主であり、忉利天中の三十三天を統領している。釈提桓因ともい

う。修羅は十界の一で法華經序品には婆稚、佉羅耆駄、毗摩質多羅、羅睺の四阿修羅王を説く。羅睺阿修羅は、障持の意で、日月に障りをなすのでこの名がある。増一阿含經卷第三には「広長八万四千由延、その口の縦広千由旬（中略）日月を触れ犯さんと欲するとき、その身を倍して化し十六万八千由旬なり日月の前に往くに日月恐怖して本処に安んぜず（中略）また光明なし」とある。また「帝釈は修羅と戦うときは四天王、日月を先鋒として、その光は修羅の眼を射る」などとある。これらのことから、修羅は帝釈と戦うとき、まず日月を射るといわれたものであろう。

夏の桀 桀王は、中国・古代夏王朝（紀元前十二世紀）最後の王。名を履癸という。『史記』によると、不道德で酒池肉林をきわめ、暴悪で人民を苦しめた。忠臣竜蓬が諫めたが用いず頭をはねた。殷の湯王に滅ぼされた。殷王朝最後の紂王と共に悪王の代表とされている。

殷の紂 紀元前十一世紀頃、中国・殷王朝最後の王。名は受、死後、辛とされた。悪王の名が高く、臣下の言に耳をかさず農民を重税で苦しめ、周の武王に滅ぼされて殷王朝は崩壊した。後、中国・夏の桀王と共に、桀紂と称され、悪王の譬に用いられるようになった。

天照太神の日天にて 天照太神はその名を大日靈貴といい、日神といわれている。日神出生の本国なるゆえに日本国と称するという。

天照太神・伝教大師・釈迦仏・法華經 法華經も日天子である。ゆえに法華經藥王品第二十三にいわく「又、日天子の（中略）如し」（妙法蓮華經並開結六〇〇頁）等と。所持の法華經がすでに日天子であるから、能持の伝教大師も日天子となるのである。

権の太夫 北条義時のこと。建保五年（一二二七年）、右京権の太夫に任ぜられた。

御子の天子 第八十二代後鳥羽天皇の第三の皇子が順徳天皇で、承久の乱のとき佐渡に流された。

野干やかんのなきの身にをうなる 野干やかんは、狐に似て木にのぼり、色は青黒い獣で、群行して夜鳴くという。そのため

に、かえって犬などに存在を知られて食われてしまう。真言の邪法で祈れば、かえって、みずから禍わざわいをまねくことにたとえたもの。

還著於本人 法華經觀世音菩薩普門品第二十五にある句で、「還かえつて本人に著きなん」(妙法蓮華經並開結六三四頁)

と読む。法華經の行者を謗そしり、害する者は、かえって、みずからの身にその罰をうけることになるという意。真言の悪法で呪咀じゆそすれば、かえって呪咀したものが罰をうけるということ。

講義

この章では、問答解釈のうえから、慈覚を破されている。

宗教の勝劣は夢によって決定されるのではない。その基準は、經文により、道理により、現証によつてのみ決定されるのである。

ゆえに釈尊一代の經典のうえからみても、一念三千の法理のうえからみても、功德と罰という現象のうえからみても、法華經が最も勝れ、真言などは七重の劣となるのであるが、これはすでに詳しく説かれてきたところである。

夢とわれわれの生活との関係

夢には実体がないから、迷いを夢に譬え、悟りを寤に譬える。「当体義抄」には「人夢に種種の善惡の業を見・夢覺めて後に之を思えば我が一心に見る所の夢なるが如し、一心は法性真如の一理なり夢の善惡は迷悟の無明法性なり」(御書五一〇ヅ)と仰せであり。これによれば、夢を捨てて寤を基にしなければならぬ。

しかし、さらにその根本を論ずれば、夢も寤もその体は一であり、無明と法性も体一となる。「三世諸仏總勘文教相廢立」には「夢の時の心を迷いに譬え寤の時の心を悟りに譬う……九界の生死の夢見る我が心も仏界常住の寤の心も異ならず九界生死の夢見る所が仏界常住の寤の所にて變らず心法も替らず在所も差わざれども夢は皆虚事なり寤は皆実事なり」(御書五六五ヅ)と仰せである。

法華經の安樂行品第十四には、大御本尊を受持し、信心修行に励む者の功德を「若し夢の中に於いても但妙なる事を見ん」(妙法蓮華經並開結四六九ヅ)と説かれている。すなわち、夢で十信に入り、十住、十行、十回向、十地と修行が進み、ついには夢で妙覺の位に入ると、これは實際にも功德を受けるのである。日常生活が功德に満ち溢れてこそ、そのような幸福の夢をみるようになるのである。反対に謗法を犯すと不幸になり、不幸になれば不幸の夢ばかりみるのである。「開目抄下」に「いたうの大惡人ならざる者が正法を誹謗すれば即時に夢みて・ひるがへる心生ず」(御書二三一ヅ)と仰せである

が、これは涅槃經に説かれてゐる原理で、折伏を受けた時に、反対して正法を誹謗すると、その人が過去世に謗法の罪がなければ、すぐに夢に羅刹らせつを見、羅刹から信仰しなければ命を断つぞとおどされ、恐ろしくなつて、夢がさめてすぐに入信するといふのである。

しかし慈覺の夢のごときは、太陽を弓で射落とすといふような、凶夢中きやうむちゆうの大凶夢である。こんなことが真言宗の正しい証拠であるなどといふのは、よほどの悪人でなければ、いえないことであらう。

木画もくえの像の開眼かいげんの事

木像や画像が生身の仏として、一切衆生を即身成仏せしめる大御本尊と顕れることは、次の御書に明示されるとおりである。「四条金吾釈迦仏供養事」に「国土世間と申すは草木世間なり、草木世間と申すは五色の氤絵具のぐは草木なり画像これより起る、木と申すは木像是より出来しゅつたいす、此の画木に魂魄こんぱくと申す神たましいを入るる事は法華經の力なり天台大師のさとりなり、此の法門は衆生にて申せば即身成仏といはれ画木にて申せば草木成仏と申すなり」(御書二一四五頁)と。

この御文に「法華經」と仰せられるのは、寿量品文底の大御本尊である。「観心本尊抄」には「詮ずる所は一念三千の仏種に非ずんば有情の成仏・木画二像の本尊は有名無実なり」(御書二四六頁)と仰せられ、「開目抄上」には「一念三千の法門は但法華經の本門・寿量品の文の底にしづめたり」(御書一八九頁)と仰せられている。このように、日蓮大聖人の仏法においてのみ、草木成仏も、木画二像の成仏

もあるのである。

しからば木画の像が「或は行き或は説法し或は御物言ものがたりあり」ということはどう拝すればよいのか。これはあくまでも正像時代にどのように言い伝えられ、また書物に記されていることであり、その木画の像の利益を強調されたものであろう。それに対して末法の大御本尊の功德は、凡夫を一人のこらず即身成仏させるという大功德なのである。仏像が歩いたり、説法を始めたりしても、肝心の悩める衆生に功德が顕れなければ、なんにもならない。

「観心本尊抄」に、妙楽の釈を引いて「一身一念法界に遍あまねし」（御書二四七ページ）と仰せのように、事行の一念三千の大御本尊により、われわれ凡夫といえども即身成仏の大益だいやくをえて、一身一念が全宇宙に遍満するのである。

ゆえに死んだ先祖をも成仏させることができるのであり、三大秘法の大御本尊の眞の法力、仏力によれば、全人類の永遠の平和と幸福を築くことができるのである。

これをよくよくしる人は一閻浮提一人の智人等

「開目抄下」に「無眼の者・一眼の者・邪見の者は末法の始の三類を見るべからず一分の仏眼を得るもの此れをしるべし」（御書二二九ページ）と仰せられ、また「慈覚大師事」には「三千年に一度花開くなる優曇花うどんげは転輪聖王てんりんじょうおう此れを見る。究竟くきやう円満の仏にならざらんより外は法華經の御敵は見しら不知知さんな

り、一乗のかたき夢のごとく勘^{かんが}へ出して候」(御書一〇一九頁)と仰せである。深く、これらの御文の意を案ずるならば、三類の敵人を知り、これを出^いでさせ、しかもこれを粉碎された「一閻浮提一人の智人」とは、末法の御本仏の異名というべきである。ゆえに、日蓮大聖人こそ、末法の御本仏であられることが御文によって明々白々なのである。

第二十八章

閻浮第一の法華經の行者

亡国のかなしき亡身のなげかしさに身命をすてて此の事をあらわすべし、国主世を持つべきなら

ばあやしとおもひてたづぬべきところ^尋にたださんげんのことばのみ用いてやうやうのあだをなす、

而るに法華經守護の梵天・帝釈・日月・四天・地神等は古の謗法をば不思議とはをばせども此れを

しれる人なければ一子の悪事のごとくうちゆるして、いつわりをろかなる時もあり又すこしつみし

らする時もあり、今は謗法を用いたるだに不思議なるにまれまれ諫曉^{かんぎょう}する人をかへりてあだをな

す、一日・二日・一月・二月・一年・二年ならず数年に及ぶ、彼の不輕菩薩の杖木の難に値^あいしに

もすぐれ覺徳比丘^{かくとくびく}の殺害に及びしにもこえたり、而る間・梵釈^{ぼんしやく}の二王・日月・四天・衆星・地神等

やうやうにいかり度度いさめらるれども・いよいよあだをなすゆへに天の御計^{おんはから}いとして隣国の聖人

にをほせつけられて此れをいましめ大鬼神を国に入れて人の心をたばらかし自界^{じかい}叛逆^{はんぎやく}せしむ、

吉凶^{きつきよう}につけて瑞大^{きざし}なれば難多かるべきことわりにて仏滅後・二千二百三十余年が間いまだいでざる

大長星いまだふらざる大地^震しん出来せり、漢土・日本に智慧すぐれ才能いみじき聖人は度度ありし

かどもいまだ日蓮ほど法華經のかたうどして国土に強敵多くまうけたる者なきなり、まづ眼前の事

をもつて日蓮は閻浮提^{えんぶだい}第一の者としるべし、仏法日本にわたて七百余年・一切經は五千七千・宗は

八宗十宗・智人は稻麻^{とうま}のごとし弘通は竹葦^{ちくい}にいたり、しかれども仏には阿弥陀^{あみだ}仏・諸仏の名号には

弥陀^{みだ}の名号ほどひろまりてをはするは候はず、此の名号を弘通する人は慧心^{えしん}は往生要集をつくる日

本国・三分が一は一同の弥陀念仏者・永観は十因と往生講の式をつくる扶桑三分が二分は一同の念
仏者・法然せんちやく選 択をつくる本朝一同の念仏者、而れば今の弥陀の名号を唱うる人人は一人が弟
子にはあらず、此の念仏と申すは雙観經・観經・阿弥陀經そうかん かん あみだの題名なり権大乘經の題目の広宣流布す
るは実大乘經の題目の流布せんずる序にあらずや、心あらん人は此れをすひしぬべし、権經流布せ
ば実經流布すべし権經の題目流布せば実經の題目も又流布すべし、欽明きんめいより当帝にいたるまで七百
余年いまだきかずいまだ見ず南無妙法蓮華經と唱えよと他人をすすめ我と唱えたる智人なし、日出
でぬれば星かくる賢王けんおう来れば愚王ほろぶ実經流布せば権經のとどまり智人・南無妙法蓮華經と唱え
ば愚人の此れに随はんこと影と身と声と響ひびきとのごとくならん、日蓮は日本第一の法華經の行者なる
事あえて疑ひなし、これをもつてすいせよ漢土月支かんどがつしにも一閻浮提えんぶだいの内にも肩をならぶる者は有るべ
からず。

通解

——その亡国の悲しさ、亡身のなげかしさに、身命を捨てて、その邪義邪見を明らかにしていこう。国
主たる者が世たもを持つことを願うならば、そのような意見を不審に思つて、尋ね求めなければならぬはず
である。ところが、たださんげんのことばのみを用いて、さまざまの迫害、弾圧を加えてきた。

しかるに、法華經守護の梵天ぼんてん、帝釈たいしやく、日月、四天、地神等は、昔の謗法ぼうぼうをば、不都合ふつごうとは思われたが、
これを謗法であるといつて責める人もいなかったのので、一人しかない子が悪いことをしても、おおめに見

て許しておくように、知らぬふりをして許したこともあったし、また少しは誠めて思い知らせる時もあった。しかし今は謗法の徒を用いることさえ不思議であるのに、たまたま諫曉する人に対し、かえって迫害を加える。それも一日二日、一月二月、一年二年だけでなく、数年におよんでいる。彼の不輕菩薩が、杖木を加えられる難を受けたのよりもひどく、覺徳比丘が殺害されるにいたったのにも越えている。

その間、梵天、帝釈の二王、日月、四天、衆星、地神等は、さまざまに怒りをなして、たびたび諫められたが、いよいよ迫害を加えるので、天の御はからいとして、隣国の聖人に命令してこれをいましめ、大鬼神を国内に入れて人の心をたばらかし、内乱を起こさせた。吉につけ凶につけて、瑞が大きいければ難も多いのが道理であつて、仏の滅後二千二百三十余年の間、いまだ出たことのない大きな彗星や、いまだ揺れたことのないような大地震が起きた。中国にも日本にも智慧が勝れ、才能の高い聖人は、たびたびあつたけれども、いまだ日蓮ほど法華經の味方となつて、国土に多くの強敵をつくつた者はない。まず眼前の事実をもつて、日蓮は世界第一の者であることを知るべきである。

仏法が日本に渡つて七百余年、一切經は五千、七千卷、宗は八宗、十宗もあり、智人は稻麻のごとく多く、その弘通の盛んなことは竹葦のようである。しかれども仏といへば阿彌陀であり、諸仏の名号といへば、彌陀の名号ほど弘まっているものはない。この名号をひろめた人は、まず慧心先徳であり『往生要集』を作つて日本の三分の一が念仏者になつた。次に永観が、『往生十因』、『往生講の式』を作つて、日本の三分の二を念仏者にしてしまった。そして法然は『選択集』を作り、日本国一同を念仏者にしてしまったのである。だから、今の彌陀の名号を唱える人々は、一人の弟子ではない。この念仏というのは、実雙觀經、觀經、阿彌陀經の題名である。このように権大乘經の題名が広宣流布しているということは、実

大乘經たる法華經の題目が流布するための序ではないか。心ある人は、このことを推察しなさい。權經が流布すれば実經が流布するはずであり、權經の題目が流布すれば、実經の題目もまた流布するはずである。

欽明天皇きんめいていより、当帝とうていにいたるまで七百余年の間に、いまだ南無妙法蓮華經と唱えよと、他人にすすめ、みずからも唱えた智人は聞いたことも見たこともない。太陽が出れば星は隠れる。賢王けんおうが来れば愚王ぐわうは滅ぶ。これと同じで、実經が流布すれば權經は止まり、智人が南無妙法蓮華經と唱えれば、愚人がこれに随うであろうことは、影と身が相応あいじ、声と響きが相応するようなものである。日蓮は日本第一の法華經の行者であることは、あえて疑いのないところである。これをもって中国にもインドにも、全世界の中にも肩を並べるものはありえないということを推察すべきである。

語 訳

度度いさめらる 正嘉元年の大地震、正嘉二年の大風、正嘉三年の大飢饉ききん、正元元年の大疫病、正元二年の大疫
病、文永の大彗星すいせい、その他の天変地天をさす。

吉凶きつこうにつけて瑞大きざしなれば 「呵責かしやく謗法滅罪抄ぼうぼうめつざい」には「瑞相ずいそうと申す事は内典・外典に付いて必ず有るべき事の先に現

ずるを云うなり……去る正嘉元年太歳丁巳八月二十三日・戌亥いぬいの刻の大地震と、文永元年太歳甲子七月四日の大彗星、此等

は仏滅後二千二百余年の間・未だ出現せざる大瑞なり、此の大菩薩の此の大法を持ちて出現し給うべき先瑞なるか……誰か知らん法華經の滅不滅の大瑞なりと」(御書二二八頁)と。これは釈尊の法華經が滅して、日蓮大聖人の三大秘法が広宣流布する瑞相であるとの御教示である。

八宗十宗　八宗とは、三論、法相、華嚴、俱舍、成実、律宗の南都六宗に、天台、真言を加えて八宗。さらに
禅、念仏を加えて十宗。

雙觀經・觀經・阿弥陀經　法然が『選択集』に定めた、浄土の三部經である。雙觀經とは仏説無量壽經ともいい
曹魏の康僧鎧の訳。浄土真宗では大無量壽經ともいう。二卷なので雙卷とか雙觀という。その内容は四十八願に
よせて阿弥陀仏の因果を明かしたもの。觀經とは觀無量壽經一卷で、劉宋の曇良耶舍訳。その内容は、韋提希の
請いで頻婆娑羅王を救うために弥陀の浄土を示したもの。阿弥陀經は一卷で鳩摩羅什訳と玄奘訳などがある。そ
の内容は、弥陀の浄土は西方十万億土にあるということを示している。

日出でぬれば星かくる　日蓮大聖人の三大秘法の大仏法が出現すれば、いつさいの法は光を失う。『大智度論』に
いわく「衆星日光既に出づれば則ち没して現ぜざるが如し」と。また『続高僧伝』の天台智者伝にいわく「今日
出でて星収り、巧みを見て陋きを知る」と。『輔正記』にいわく「日出ずれば星隠れ、巧みを見て拙きを知る」
と。

講義

仏法は機によらず、時によるべきである。末法になると釈尊の白法が隠没し、わが国の仏教界には念
仏、禅、真言という邪宗教が横行し、民衆は不幸につぐ不幸の連続で、ついには身を滅ぼし国が滅びよ
うというところまできた。いったい、末法には、いかなる仏が出現し、いかなる仏法によって、民衆は
幸福になれるのであろうか。

前章までの破邪につづき、この章からは顕正であつて、正とはすなわち最大深秘じんひの大法である。それを人法にわけると末法流布の正体、本門の本尊・妙法蓮華經の五字は所持しよじの法であり、日蓮大聖人が能持のうじの人であらせられる。能持の人はすなわち末法下種の教主である。いま当抄の意は、能持、所持の中に於いては、能持の人をもつて表おもてとされている。たとえば「法妙なるがゆえに人貴たつとし」（御書二五七八ページ）の意のごときものである。そしてこの章から第三十五章にいたるまで三義を示して、日蓮大聖人が末法下種の教主であることを顕されているのである。

その三義とは一には、日蓮大聖人は閻浮えんぶ第一の法華經の行者として前代未聞みもんの大法を弘通されるゆえである。二には、日蓮大聖人は閻浮第一の智人なるゆえ、すなわち瑞相ずいそうの根源を知っておられるゆえであり、そして三には、日蓮大聖人は閻浮第一の聖人なるゆえに、かねてから自他の兵乱を知っておられるゆえである。ゆえに、日蓮大聖人は末法下種の教主であり、末法下種の人本尊なのである。

欽明きんめいより当帝にいたるまで七百余年……智人なし等

先に本抄で「南無妙法蓮華經と一切衆生にすすめたる人一人もなし、此の徳はたれか一天に眼を合せ四海に肩をならぶべきや」（第十四章、御書二六六ページ）と仰せの辺は、いまの御文の「欽明きんめいより当帝にいたるまで七百余年いまだきかずいまだ見ず南無妙法蓮華經と唱えよと他人をすすめ我と唱えたる智人なし」の御文と、まったく一致している。

しかし本抄には「日本国に仏法渡わたて七百余年、伝教大師と日蓮とが外は一人も法華經の行者はなきぞかし」(御書二六六ページ)との仰せもあり、法華經の行者は日蓮大聖人に限らず、伝教大師もそうであるように思われる。

それについて日寛上人は像法当分に約するとき、伝教大師も法華經の行者である、とされている。なぜなら伝教大師は像法時代としては、時にかなった如説修行によせつしゆぎょうの行者であつたからである。しかし、もし末法に相對する時は、眞の法華經の行者ではない。これには二つの意味があり、その一は像法時代は法華經の正しく流布すべき時代でなかつたからである。それは同じく本抄に「法華經の流布の時・二度あるべし所謂いわゆる在世の八年・滅後には末法の始の五百年なり、而るに天台・妙樂・伝教等は進んでは……退いては……」(御書二六〇ページ)と仰せのとおりである。そして二には、伝教大師は南無妙法蓮華經と一切衆生にすすめなかつた。ゆえに眞の法華經の行者ではないのである。(以上、文段集二九四ページ・二九五ページの趣意)

なお欽明天皇の十三年(五五二年)に仏教が伝来してから、日蓮大聖人の建長五年(一二五三年)の立宗までが、ちょうど七百年である。日蓮大聖人は本門戒壇の大御本尊を建立され、法体の折伏を成就されたが、いま日蓮大聖人の立宗七百年を期して、創価学会が折伏の大行進を起し、以来、世界広宣流布が徐々に進展しているというこの現実を見る時、七百年という時の不思議な一致を痛感するものである。

一閻浮提の内にも肩をならぶる者は有るべからず

何をもって、日蓮大聖人が一閻浮提第一の法華經の行者であり、一閻浮提の内に日蓮大聖人と肩をならべる者がいないということを知ることができるであろうか。

日寛上人は、これについて、「顕仏未来記」の御文を挙げられている。すなわち「顕仏未来記」にいわく「疑つて云く如来の未来記汝に相当れり、但し五天竺並びに漢土等にも法華經の行者之有るか如何、答えて云く四天下の中に全く二の日無し四海の内豈両主有らんや」(御書五〇八^ビ)と。また『法華文句記』には「世に二仏無く、国に二王無し、一仏の境界に二つの尊号無し」云云(大正三十四卷一六四^ビ)とある。これをもって、日蓮大聖人はまさしく末法の御本仏であられることを明らかに知るべきである。

そして、また「報恩抄」には「法華經の行者・漢土に一人・日本に一人・已上二人釈尊を加へ奉りて已上三人なり」(御書三一〇^ビ)と仰せである(以上、文段集二九五^ビの趣意)。すなわち、法華經の行者とは仏の異名であり、末法の法華經の行者とは、末法の御本仏の異名なのである。

第二十九章

閻浮第一の智人

問うて云く正嘉の大地しん文永の大彗星はいかなる事によつて出来せるや答えて云く天台云く「智人は起を知り蛇は自ら蛇を識る」等云云、問て云く心いかん、答えて云く上行菩薩の大地より出現し給いたりしをば弥勒菩薩・文殊師利菩薩・觀世音菩薩・藥王菩薩等の四十一品の無明を断ぜし人人も元品の無明を断ぜざれば愚人といはれて寿量品の南無妙法蓮華經の末法に流布せんずるゆへに、此の菩薩を召し出されたとはいはれざりしという事なり、問うて云く日本漢土月支の中に此の事を知る人あるべしや、答えて云く見思を断尽し四十一品の無明を尽せる大菩薩だにも此の事をしらせ給はずいかにいわうや一毫の惑をも断ぜぬ者どもの此の事を知るべきか、問うて云く智人なくばいかでか此れを対治すべき例せば病の所起を知らぬ人の病人を治すれば人必ず死す、此の災の根源を知らぬ人人がい祈のりをなさば国まさきに亡びん事疑いなきか、あらあさましやあらあさましや、答えて云く蛇は七日が内の大雨をしり鳥は年中の吉凶をしる此れ則ち大竜の所従又久学のゆへか、日蓮は凡夫なり、此の事をしるべからずといえども汝等にほぼこれをさとさん、彼の周の平王の時・禿にして裸なる者出現せしを辛有といふし者うらなつて云く百年が内に世ほろびん同じき幽王の時山川くづれ大地ふるひき白陽と云う者勘えていはく十二年の内に大王事に値せ給うべし、今の大地震・大長星等は国王・日蓮をにくみて亡国の法たる禅宗と念仏者と真言師をかたふどせらるれば天いからせ給いていださせ給うところの災難なり。

——問うていわく、正嘉しょうかの大地震と、文永の大彗星すうせいとは、なぜ起きたのか。答えていわく、天台は「智人は将来起ることを知り、蛇はみずから蛇のことを知っている」といつている。

問うていわく、それはなにを意味するのか。答えていわく、上行菩薩が大地より出現されたことを、弥勒菩薩、文殊師利菩薩、観世音菩薩、藥王菩薩等の、四十一品の無明むみょうを断じた菩薩たちも元品がんぽんの無明をまだ断じていなかったたので愚人といわれ、寿量品の南無妙法蓮華經を末法に流布せしめるために、上行菩薩を召し出されたのだとは知らなかったということである。

問うていわく、日本、中国、インドの中にこのことを知っている人があるか。答えていわく、見惑けんわく、思惑しわくを断じ尽くし、四十一品の無明を断ち切った大菩薩さえも、このことをご存知なかった。いかにいわんや、少しの惑わくをも断じていない者たちが、このことを知りえようか。

問うていわく、智人がいなければ、どうして大災難を対治たいじできようか。たとえば、病の起る原因を知らない人が、その病人をなおそうとすれば、必ず病人は死んでしまう。この大災難の根源を知らない人々が祈りをなしたならば、国はまさに滅びることは疑いない。まことにあさましい限りである。

答えていわく、蛇は七日の内の大雨を知り、鳥はその年の吉凶きつぎょうを知るといふ。これは蛇は大竜の家来であり、鳥は長年の学の結果によるのであろう。日蓮は凡夫であるから、そのことを知る由もないが、汝等に、ほぼこのことを教えさそう。

彼の周の平王の時に、頭を禿かぶろにして裸はだかになっている者が出現したが、辛有しんゆうという人が、それを占うらなつていうには「百年の内に世が滅びるであろう」と。同じく周の幽王ゆうわうの時に、山や川が崩くずれ大地震があった。白

陽という者が考えていうには「十二年の内に大王は事に遭うであろう」と。さて今の大地震と、大彗星は、国王が日蓮をにくみ、亡国の邪法たる禅宗と念仏宗と真言宗の味方をするので、天が怒られて起こさせたところの災難なのである。

語 訳

四十一品の無明 円教の菩薩が断ずる四十二品の無明のうち、最後の元品の無明を除いた四十一の無明のこと。十住・十行・十回向・十地・等覺の各位の一々にあらわれる無明をいう。

元品の無明 衆生の本然にそなわっている根本の迷いのこと。元品は根本または元初の意。無明は迷いで、物事が明らかにみえないこと。①勝鬘經によると、無始無明住地の惑のこと。貪瞋癡などの煩惱と相応して起こる無

明を四住地（見一処住地・欲愛住地・色愛住地・有愛住地）の惑、煩惱と相応せず独り起こる無明を無始無明住地の惑とする。この無始無明住地は最勝の力を持ち一切の煩惱の根本となり、如来の悟りの智慧のみがこれを断ずることができ②『大乘起信論』の根本無明。無明は不覺の義。一法界（真如）の理に達しない故に忽然として差別の念が起る。この起念は他の法によって生ずることがないので「忽然」といい、一切の染法の源となる。

『大乘起信論義記』卷下本には、根本無明は①の無始無明住地と同義であると説く③天台によると、無明は中道実相（諸法の真実の姿は非有非空の中道であるとの意）の理を障げる惑のことで、円教では四十二品の所断の無明を立てる。この円教の四十二品のうち最後の無明を元品の無明といい、最も微細で深遠なものである。一切衆生の迷いの根本で、等覺位の最後心（無余涅槃に入る直前の心）に顕れる妙覺智によって断ずることができる。①の無始無明住地の惑を詳細に分類したもの④日蓮大聖人によると、南無妙法蓮華經という真如の理に対する根本的な

迷いのこと。元品の法性に対する語。性悪と同義。妙覺の位にも猶なほそなわっているが、御本尊に対する信によつて元品の無明を対治することができる。

壽量品の南無妙法蓮華經 日蓮大聖人があらわされた三大秘法の大御本尊。

此の事を知る人あるべしや 日寛上人は「今いま謂いく、只これ瑞相の謂いを指しして『此の事』というなり。謂く、地震、長星は滅後の瑞相なり。本化の涌出は在世の瑞相なり」(文段集二九六ぶ)と仰せである。

見思 見思惑、塵沙惑、無明惑を三惑というが、見思とは見思惑のこと、見惑、思惑に分けられる。我見、辺見等の妄見を見惑といい、世間の事物に対する貪欲、瞋恚の妄情を思惑という。

蛇は七日が内の大雨をしり 「開目抄下」には「蛇は七日が内の洪水こうすいをしる竜の眷属なるゆへ鳥は年中の吉凶をしり過去に陰陽師おんようしなりしゆへ」(御書二二三ご)と仰せである。無量義經にも「譬たとえば龍子始めて生まれて七日しちにちに、即ち能く雲を興し亦能く雨を降らすが如し」(妙法蓮華經並開結一〇六め)などとある。

周の平王の時 周の平王は中国・周の第十三代の王(在位は前七七一年—前七二〇年)で生没年不明。第十二代幽王ゆうおうの子。幽王が異民族の侵入によって殺されたため、即位して都を洛邑に東遷した。これ以後を東周と呼び、周は天下を統治する力がなくなり、春秋・戦国の戦乱時代となった。

幽王の時 幽王ゆうおうは平王の前の王で、西周最後の王であり、在位十一年で滅びた。本文の「山川くずれ崩」等は、『史記』に出ている。「幽王の二年・西周の山川皆震ふるう。伯陽甫はくやうふが曰いわく『周將まさに亡びんとす』夫それ天地の氣其の序を失せず、若し序を過あやまつ時は民之れ乱るるなり。乃至夫れ国は必ず山川に依る。山崩くずれ川竭つくるは亡国の徴しるしなり。川竭る時は必ず山崩る、若し国の亡ぶる十年に過ぎざるは数の紀なり」と。

これより日蓮大聖人が閻浮^{えんぶ}第一の智人であることを明かされている。「委細^{いさい}に三世を知るを聖人と云う」(御書九七四頁)と仰せのとおり、三世にわたる因果のうえから、災難の起る原因を知り、さらにまた災難対治の方法を知る人が聖人であり、智人なのである。

「智人は起を知り蛇は自ら蛇を識^しる」について、日寛上人は次のように述べられている。一義にいわく、但^{ただ}仏の智人のみ本化^{ほんげ}の智人の出現を知る。迹化^{しゃつけ}の愚人は本化の智人の出現を知らないのである。一義にいわく、但^{ただ}仏の智人のみ自らの仏の智を知る。蛇は自ら蛇足を知るようなものである。仏の智者は近きをもつて遠きを推し、現在から未来を知る。譬^{たと}えば雨の猛^{たけ}きを見て竜の大なるを知り、華の盛んなることを見て池の深きことを知るようなものである。今またこのとおりであつて、本化出現の大瑞を見て、寿量品の妙法が末法に流布することを知るのである。これすなわち仏の智である。仏の智人のみ自らこの智を知り、迹化の愚人は知らないのである……と。「聖人知三世事」にいわく「予は未^{いま}だ我が智慧^{ちえ}を信ぜず然^{しか}りと雖も自他の返逆^{ほんぎやく}・侵逼^{しんびつ}之を以て我が智を信^あず敢^{あえ}て他人の為に非ず」(御書九七四頁)と(以上、文段集二九六頁の趣意)。このように智人とは仏のことなのである。

第三十章

智人たるの証文

問うて云くなにをもつてか此れを信ぜん、答えて云く最勝王經に云く「惡人を愛敬あいぎょうし善人を治罰するに由よるが故に星宿及び風雨皆時を以て行われず」等云云、此の經文のごときんば此国に惡人のあるを王臣此れを帰依きえすという事疑いなし、又此の国に智人あり国主此れをにくみてあだすという事も又疑いなし、又云く「三十三天の衆咸忿怒みなふんぬの心を生じ變怪流星墮へんげおち二の日俱時ぐじに出で他方の怨賊来りて国人喪乱そうらんに遭わん」等云云、すでに此の国に天變あり地天ちようあり他国より此れをせむ攻三十三天の御いかり有あること又疑いなきか、仁王經に云く「諸の惡比丘びく多く名利みょうりを求め国王太子王子の前に於て自ら破仏法の因縁破国の因縁を説く其王別わきまずして信じて此語を聴く」等云云、又云く「日月度を失い時節反逆はんぎやくし或は赤日出いで或は黒日出いで二三四五の日出で或は日蝕しよくして光無く或は日輪一重二重四五重輪現じゅうりんげんず」等云云、文の心は惡比丘びく等・国に充滿して国王・太子・王子等をたばらかして破仏法・破国の因縁をとかば其の国の王等此の人になばらかされてをぼすやう、此の法こそ持仏法の因縁・持国の因縁とをもひ此の言ことばをを納な行なをこなうならば日月に變あり大風と大雨と大火等出来し次には内賊と申して親類より大兵乱おこり我がかたうどしぬべき者をば皆打ち失いて後には他国にせめられて或は自殺し或はいけどりにせられて或は降人となるべし是れ偏ひとえに仏法をほろぼし国をほろぼす故なり、守護經に云く「彼の釈迦牟尼如来所有の教法は一切の天魔外道惡人五通の神仙皆乃ないし至少分をも破壊はえせず而るに此の名相の諸の惡沙門あくしやもん皆悉く毀滅きめつして余り有ること無からしむ須弥山しゆみせん

を仮使^{たとい}三千界の中の草木を尽して薪^{たきぎ}と為し長時に焚焼すとも一毫^{ごう}も損すること無し若し劫火起りて火内^{うちよ}従り生じ須臾^{しゆゆ}も焼滅^{しょうめつ}せんには灰燼^{かいじん}をも余す無きが如し」等云云、蓮華面經に云く「仏阿難^{あなん}に告わく譬^しえば師子^{しし}の命終^{みょうじゆう}せん^しに若しは空若しは地若しは水若しは陸^{しやう}所有の衆生敢て師子の身の穴^{けく}を食わず唯師子自ら諸の虫を生じて自ら師子の穴を食うが如し阿難^{あなん}我が之の仏法は余の能く壞^{やぶ}るに非ず是れ我法の中の諸の惡比丘我が三大阿僧祇^{あそうぎこうしやくぎやうどんく}積行勤苦し集むる所の仏法を破らん」等云云、經文の心は過去の迦葉^{かしやう}仏釈迦如來の末法の事を訖哩^{きりき}枳王^きにかたらせ給い釈迦如來の仏法をばいかなるものがうしなうべき、大族^{だいぞく}王の五天の堂舎を焼き払い十六大国の僧尼を殺せし漢土の武宗皇帝の九国の寺塔四千六百余所を消滅せしめ僧尼^{そうに}二十六万五百人を還俗^{げんぞく}せし等のごとくなる惡人等は釈迦の仏法をば失うべからず、三衣を身にまとひ一鉢を頸にかけ八万法藏を胸にうかべ十二部經を口にずうせ^誦ん僧侶が彼の仏法を失うべし、譬^しへば須弥山^{しゆみせん}は金の山^{こがね}なり三千大千世界の草木をもつて四天六欲に充滿^{じく}してつみこめて一年二年百千万億年が間やくとも一分も損ずべからず、而るを劫火をこらん時須弥の根より豆計^{ばか}りの火いでて須弥山をやくのみならず三千大千世界をやき失うべし、若し仏記のごとくならば十宗・八宗・内典の僧等が仏教の須弥山をば焼き払うべきにや、小乗の俱舎^{くしゃ}・成実^{じやうじつ}・律僧等が大乗をそねむ胸^{むね}の瞋^{しんに}恚^には炎なり真言の善無畏^{ぜんむい}・禪宗の三階等・淨土宗の善導等は仏教の師子の肉より出来せる蝗虫の比丘なり、伝教大師は三論・法相・華嚴等の日本の碩德^{せきとく}等を六虫とかかせ給へり、日蓮は真言・禪宗・淨土等の元祖を三虫となづく、又天台宗の慈覺^{じかく}・安然^{あんねん}・慧心^{えしん}等は法

華経・伝教大師の師子の身の中の三虫なり。

此等の大謗法の根源をただす日蓮にあだをなせば天神もをしみ地祇ちぎもいからせ給いて災天さいようも大に起るなり、されば心うべし一閻浮提いちえんぶだい第一の大事を申すゆへに最第一の瑞相ずいそう此れをこれり、あわれなるかなや・なげかしきかなや日本国の人皆無間大城に墮おちむ事よ、悦よろこばしきかなや・樂たのしいかなや不肖ふしようの身として今度心田に仏種をうえたる、

通解

——問うていわく、何をもつてこれを信ずることができなのか。

答えていわく、最勝王経には「悪人を愛敬あいぎやうし、善人を罰することによって、星宿や風雨が順調でなくなる」とある。この経文のとおりであれば、この日本の国に悪人がおり、王臣がその悪人に帰依きえしていることは疑いない。またこの国に智人があり、国主がこれを憎み迫害を加えていることも、間違いない。また同じく最勝王経には「三十三天の衆が、みな怒りの心をおこしているから、怪あやしい流星がおちたり、二つの太陽が同時に出たり、他国の怨賊おんぞくが攻めきたって国中が戦乱のちまたになるであらう」とある。すでに日本の国には、天変もあり地天ちようもある。また他国より蒙古が攻めきたっている。三十三天の怒っていることも、疑いないであらう。

仁王経には「もろもろの惡比丘びくが、多くの名誉や利益を求め、国王、太子、王子の前において、みずから仏法を破失する因縁や、国を破る因縁を説く。その王はこれをわきまえないで、惡比丘を信じ、その語を聞いている」とあり、また「日月が度を失って不規則になり、時節が逆になったり、あるいは赤い日、

黒い日、あるいは二三四五の日が出たりする。あるいは日が蝕^{しよく}して光がなく、あるいは太陽に輪が一重二重に出たり、四五重輪が出たりする」とある。

これらの経文の心は、悪比丘等が国に充滿して、国王、太子、王子等をたぶらかして破仏法、破国の因縁を説く、その国の王等はこの悪人にたぶらかされて、この法こそ持仏法の因縁であり、持国の因縁であろうと思い、そのことばを用いていくなれば、日月に變があり、大風と大雨と大火等が起こり、次には内賊といって親しい中から大兵乱が起こり、自分の味方をする者などをみな打ち殺してしまい、のちには他国に攻められて、あるいは自殺し、あるいは生け捕りにされ、あるいは降人として敵にとらわれるであろう。これはひとえに、仏法を滅ぼし国を滅ぼすゆえである。

守護經にいわく「彼の釈迦牟尼如来^{しゃかむににょらい}のたもつところの教法は、一切の天魔^{てんま}、外道^{げどう}、悪人、五神通をえた神仙のような敵はこれを少しも破壊^{はかい}することができない。しかし、名ばかりの悪僧が、ことごとく仏法を破り滅してしまふであろう。須弥山^{しゆみせん}を、たとえ三千世界の中の草木をぜんぶ集めて薪^{たきぎ}として長時間焼いたところで、須弥山は少しも損じない。しかし、もし劫火^{ぐうか}がこの地の内より生じたならば、たちまち焼滅し、その灰さえ残らないであろう」と。

蓮華面經^{れんげめんきやう}にいわく「仏が阿難に告げていうには、たとえば師子^{しし}が死んだ時に、もしは空、もしは地、もしは水、もしは陸地に棲んでいる、いかなる動物もあえて師子の肉を食べようとしない。ただ師子がみずからの死体の中にもろもろの虫を発生して、この虫が師子を食うのである。阿難よ、それと同じようにわが仏法も外部から破ることはできないが、仏法中の悪比丘が、仏が三大阿僧祇劫^{あそうぎこく}にもわたって行を積み、勤苦^{ごんく}して集めたところの仏法を破るであろう」と。

この経文の心を述べるならば、過去の迦葉仏が釈迦如来の末法にその仏法をいかなる者が滅すかということ^{まりき}を訖哩枳王に説かれたところによれば、かの大族王^{だいぞくおう}は全インドの寺院を焼き払い、十六大国の僧尼を殺した。また中国の武宗皇帝は九国の寺塔四千六百余力を消滅させ、僧尼二十六万五百人を還俗^{げんぞく}させたが、このような悪人は、釈尊の仏法を滅失することはできない。三衣^{さんね}を身にまとい、一鉢を頸^{くび}にかけ、八万法蔵を胸に浮かべ、十二部経を口に誦^{じゆ}す僧侶たちが、仏法を破り失うであらう、と。

たとえば須弥山^{しゆみせん}は金の山である。三千大千世界の草木を、四王天より六欲天まで、いっぱいにつめて、一年二年、百千万億年のあいだ焼いても、一分も焼け損ずることはない。しかし、劫火^{ごうか}がおきる時には、須弥山の山のふもとから豆つぶばかりの火が出て、須弥山を焼きつくすのみならず、三千大千世界をも焼き失うのである。

仏の予言のごとくであるならば、十宗、八宗といわれる仏門の僧たちが、仏教の須弥山を焼き払うのである。小乗の俱舎^{くしゃ}、成実^{じやうじつ}、律の僧たちが大乘を嫉^{ねた}む胸の怒りは炎^{ほのお}である。真言の善無畏^{ぜんむゐ}、それに禅宗の三階等や浄土宗の善導等は、仏教の師子の肉から発生した蝗虫^{いんむし}のような坊主である。伝教大師は三論、法相^{ほつそう}、華嚴^{けごん}等の日本の高僧等を、六匹の虫と書かれた。日蓮は真言、禅宗、浄土宗の元祖を三匹の虫と名づける。また天台宗の慈覚、安然、慧心^{えしん}は法華経、伝教大師の師子の身の中の三虫である。

これらの大謗法^{ほうぼう}の根源を糾明^{きうめい}する日蓮に、迫害を加え怨嫉^{おんしつ}をいなくことにより、天神も光をおしまれ、地の神も怒られて、災天^{さいよう}も大いにおこるのである。されば心得なさい。一閻浮提^{えんぶだい}第一の大事を申すゆえに、最第一の瑞相^{ずいそう}がここにおきたのである。あわれなるかな、なげかしきかな。日本国の人^{にほんこくに}はみな無間大城におちることよ。悦^{よろこ}ばしいかな、楽しいかな。不肖^{ふしやう}の身としてこのたび心田に仏種を植えたことよ。

最勝王經 さいしょうおうぎょう

詳しくは金光明最勝王經といい、金光明經のこと。現存三訳がある。「悪人を愛敬し……」の文は、

義淨訳の金光明最勝王經第八卷の正法正論品第二十の文。(大正十六卷四四三頁)

又云く「三十三天の……」 同じく金光明最勝王經第八卷の文。(大正十六卷四四三頁)

三十三天 欲界六天の第二で須弥山の頂上にある。中央が帝釈天。その四方に各八天あるので三十三天となる。詳しくは第三章の「忉利天」の項(二〇八頁)参照。

仁王經 仁王經は前出(四〇七頁)。引用の文は、羅什訳のもので「諸の惡比丘……」は屬累品第八(大正八卷八四四頁)にあり、国主が智人を惡み惡人に帰依する文証である。「日月度を失い……」は奉持品第七の文(大正八卷八四三頁)であり、天の瞋りの文証である。

守護經 守護經は前出(三七九頁)。「彼の釈迦牟尼如来……」は、阿闍世王受記品第十の文。(大正十九卷五七三頁) 名相の諸の惡沙門 名前や姿形ばかりの多くの惡僧。

蓮華面經 二卷。中国・隋代の那連提耶舍訳。未来世の仏法の様相を予言した經。仏が三カ月後に涅槃に入るため毘舍離を出発して拘尸那城に向かう遊行中に、阿難に対して説いた。最初に僧俗の墮落を説き、次に仏法が闕寶国に伝えられて興隆することを述べ、そして、寐岐曷羅俱邏という惡王が仏鉢を破壊し、それと共に仏法が世界から消滅すると説いている。

訖哩枳王 きりき 梵名クリキ(Kiki)を音写して、訖哩季、訖栗枳、訖哩吉、吉利とも書き、作事と訳す。王は迦葉仏の父で、『俱舍論』には「大象・井・麴しやう(むぎこがし)・栴檀せんたん・妙園林・小象・二獼猴(猿)・広堅衣・鬪諍の十種

の夢を見た」(趣意)とあり、『俱舍論記』には、これを聞いた迦葉仏が「此れ当来釈迦遺法の弟子の先兆を表するなり」と説いたという。これは「訖利季王」の夢として知られている。また守護国界主陀羅尼経では、二つの夢(彌猴、白象)を見たとある。

大族王 古代インドの磔迦国の王。『大唐西域記』巻四によると、才知があり、勇烈で、近隣の諸国を帰属させていた。ある時、仏法を習おうとして俊徳の僧を推薦させたところ、昔、僕であった僧が推挙されてきたため、敬う心をなくし、仏法を廃して僧を追放した。そして、仏法を崇敬していた摩訶陀国の幼日王を攻めたが、敗れて捕らえられた。幼日王の母の助命により許されて迦涇弥羅国に行き、国王の厚いもてなしを受けたが、後に国王を殺害した。更に健駄羅国を攻めて王臣を殲滅して約千六百もの寺塔を破壊し、民の大半を殺戮した。その年のうちに死に、無間地獄に堕ちたといわれる。

十六大国 釈尊在世の時代、インドにあった十六の大国のこと。長阿含経巻五には①鸯伽 (Anga) 国②摩竭提 (Magadha) 国③迦尸 (Kāśī) 国④居薩羅 (Kosāla) 国⑤拔祇 (Vṛjī) 国⑥末羅 (Malla) 国⑦支提 (Ceti) 国⑧拔沙 (Vatsā) 国⑨居楼 (Kurū) 国⑩般闍羅 (Pañcālā) 国⑪頗婆波 (Āśvakā) 国⑫阿般提 (Avantī) 国⑬婆蹉 (Vansā) 国⑭蘇羅婆 (Śūrasenā) 国⑮乾陀羅 (Gandhāra) 国⑯劍洴沙 (Kamboja) 国を挙げている。その他経論によって諸説がある。

武宗皇帝 (八一四年―八四六年)。中国・唐第十五代皇帝(在位八四〇年―八四六年)。第十二代皇帝穆宗の第五子。即位後、念仏を重んじていたが、道教を尊崇するようになり、会昌五年(八四五年)に大規模な仏教弾圧を断行し、多数の寺を壊し大量の僧尼を還俗させた。これを、「会昌の廃仏」とい、三武一宗(北魏の太武帝・北周の武帝・唐の武宗と後周の世宗をさす)の法難の一つにあたる。彼が仏教弾圧を行ったのは寺塔の建立と僧尼の免税が国家

財政を疲弊させたこと、仏教教団内部の腐敗墮落などが原因であつたといわれる。

須弥山しゆみせんは金の山こがね

竜樹の『大智度論』には「五色須弥山に近づけば自らその色を失い、みな同じく金色となるがごとし」(大正三十五卷三三三)とあり、僧肇そうじやうの註維摩經ちゆういまいきやうには「須弥山は天帝釈の所住の金剛山なり」(大正三十八卷三

三三三)とある。

三千大千世界 仏教の世界観で、三千世界、大千世界ともいう。古代インド人の描いた宇宙観を用いたもの。

『俱舍論』くしやろん

卷十一、雜阿含經ぞうあこんぎやう卷十六などによると須弥山しゆみせんを中心として、九山八海くせんはつかい、四大洲があり、これを小世界

という。この世界を千集めたものを小千世界といい、小千世界を千集めたものを中千世界という。中千世界を更に千集めたものを大千世界と呼ぶ。この大千世界は小・中・大の三種の千世界から成るので三千大千世界といひ、一仏の教化する範圍とされる。

四天六欲 四天とは須弥山の四面の中腹にある四王天(持国天・增長天・広目天・多聞天)の主で、仏法を護持する四人の天王のこと。それぞれ一天下を護っており、帝釈天の外将である。六欲とは六欲天のこと。四王天、忉利

天、夜摩天、兜率天、化樂天、他化自在天の六つをいう。つまり四天六欲で天界全体の意味となる。

劫火ごうか 成住壞空じやうじゆくわうくうの四劫ごうのなかの第三の壞劫えごうの時に起る大の三災(火・水・風)のうちの火災のこと。世界を滅却

する大火災をいう。

講義

さきに大地震と大彗星すうせいのいわれを問われたのに対し、その瑞相ずいさうは禪、念仏、真言という亡国の惡法を

重んじ、三大秘法を建立される日蓮大聖人を迫害するゆえ、天が怒って起きるところの大難であると答えられたのに対して、この章ではその証文を述べられている。

その文証として、さいしやうおうきやう最勝王経、にんのう仁王経、しゆご守護経、れんげめん蓮華面経等を引かれている。これらはともに、禅、念仏、真言が亡国の悪法である証文である。

ゆえに御書には、「諫曉八幡抄」(御書五八五頁)、「御義口伝上」(御書七二三頁)、「秋元御書」(御書一〇七三頁)等々各所に、真言は亡国、禅は天魔、念仏は無間むけん地獄等と仰せられているが、日寛上人はそれは一往であって、再往はこれらの三宗が無間、三宗が天魔、三宗が亡国であるとされている(文段集二九八頁)。無間地獄へは墮おちるが、天魔でもない、亡国でもないということはありえない。地獄へおとす悪法は、天魔でもあり亡国でもあるということである。

師子の身の中の虫

「師子身中の虫」とは、一般にもよく使われることわざである。蓮華面経の文によると、師子は死んでもほかの動物がよりつかないほど、力もあり權威もあると考えられている。しかし、いかに師子に力があっても、その身中に発生する小虫によって、食いつくされてしまうという。ゆえに力もない、權威もない存在ならば、身中の虫を待つまでもなく外敵に滅ぼされ、押し潰つぶされてしまう。いまの創価学会は文字どおり宗教界の王者である。いかなる邪宗の教団にも、創価学会と戦うだけの力はない。ゆえ

に、もし創価学会を害する力があるとすれば、それは師子身中の虫以外には、なにものもないであろう。

本抄に示されているように、伝教大師は奈良の六宗を、六匹の虫とされた。日蓮大聖人は真言、禪、浄土の元祖を三虫とし、また天台宗の慈覚、安然、慧心を法華經の三虫とされている。これらはみな仏教の中から仏教を破り、天台宗の中から法華經を破ったものである。また「日興遺誠置文」^{にっこうゆいかいおきもん}には「偽書を造つて御書と号し本迹一致の修行を致す者は師子身中の虫と心得可き事」(御書一六一七頁)ときびしく戒め^{いまし}られている。日蓮大聖人の滅後このような師子身中の虫が数多く発生した。その一つが現在の身延派であり、さらに最近になって偽日蓮宗が数多く発生しているが、みな害虫であることに変わりはない。

最近でも、日蓮宗身延派のある学者は「四箇の格言が、そのまま今日も生きていると思うものがある」とすれば、ナンセンスである」というような、日蓮大聖人の邪宗破折の大師子吼を否定する暴言を吐いている。また日蓮門下と称しながら、「現代は折伏に^{しやうじゆ}あらずして摂受である」とかいたりするものも多い。さらにもっと甚^{はなは}だしいのは、師敵対の五老僧以来の本尊雜乱であろう。このような邪宗日蓮宗の徒もまた、末法の仏法の中の師子身中の虫というべきである。

第三十一章

閻浮第一の聖人

いまにしもみよ大蒙古国・数万艘の兵船をうかべて日本をせめば上一人より下万民にいたるまで一切の仏寺一切の神寺をばなげすてて各各声をつるべて南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經と唱え掌を合せてたすけ給え、日蓮の御房・日蓮の御房とさけび候はんずるにや、例せば月支のいう大族王は幻日王に掌をあはせ日本の宗盛はかぢわらをうやまう、大慢のものは敵に随うという・このことわりなり、彼の輕毀大慢の比丘等は始めには杖木をととのへて不輕菩薩を打ちしかども後には掌をあはせて失をくゆ、提婆達多は釈尊の御身に血をいだししかども臨終の時には南無と唱えたりき、仏とだに申したりしかば地獄には墮つべからざりしを業ふかくして但南無とのみとなへて仏とはいはず、今日本国の高僧等も南無日蓮聖人ととなえんとすとも南無計りにてやあらんずらんふびんふびん。

通解

——いまに見ているがよい。大蒙古国が数万艘の兵船をうかべて、日本へ攻めてくるならば、上一人より下万民にいたるまで、いっさいの仏寺やいっさいの神社をば投げすてて、おのおの声を合わせて南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經と唱え、手を合わせて「たすけたまえ、日蓮の御房、日蓮の御房」と叫ぶようになるであらう。たとえばインドの大族王は幻日王に手を合わせ、日本の平宗盛は梶原景時を敬ったようなものである。このように、大傲慢をきわめるものは、逆に敵に従わなければならないというのが道

理である。

不輕菩薩を輕んじ迫害を加えた大慢の比丘たちは、初めには杖や木を用意して不輕菩薩を打ったが、後には手を合わせて、その誤りを悔い改めた。提婆達多は釈尊の御身から血を出すほどの危害を加えながらも、臨終の時には「南無」と唱えた。「南無仏」といえば、地獄へはおちないですんだのに、謗法の罪業が深く、ただ「南無」とだけ唱えて、「仏」とまでいえなかった。いま日本国の高僧たちも、「南無日蓮聖人」と唱えようとしても、南無だけで終わるのではなからうか。かわいそうなものである。かわいそうなものである。

語訳

幼日王 幼日王ようぢおうと同一人物といわれる。六世紀以後の摩訶陀国の王といわれ、深く仏法に帰依した。那爛陀寺ならんだじに一院を造築し、その落慶には全インドの僧が集まり、壯麗をきわめた。『大唐西域記』によると、隣国の磔迦国の大族王が因果の道理を無視して仏法を破壊し、幼日王を討とうとしたが、大族王が攻め込んだ時、国中の者が一致団結して大族王を生け捕りにした。幼日王は極刑にしようとしたが、幼日王の母の慈悲で放たれた。大族王は各国を流浪後、迦淫弥羅国かしゆみらを奪い、西方の健駄羅国けんだらを侵略し、王を滅ぼし民衆を殺し寺塔、伽藍がらんを壊して帰国したが、年の改まらないうちに死んだ。その時に天変地異が並び起こり、証果の人はこれを判じて大族王が無間地獄に堕おちて永く惡道を流転する兆きざしとしてあわれんだという。

宗盛は景時かちわらをうやまう 『平家物語』には「元暦二年九郎大夫判官義経、大臣殿父子（平宗盛と宗清）を具足し奉って鎌倉へこそ下されけれ、梶原平三景時向て大臣殿父子請取奉りて源二位殿の亭へ入れ奉る。向なる座に居

奉りて床を隔て対面あり」とある。すなわち平宗盛は、平家が壇の浦で滅びたとき、捕らえられ鎌倉に送られた。一度は梶原景時に助けられたが、のちに京都に送られ、近江の篠原で斬られた。

講義

これより日蓮大聖人が末法下種の教主であることを顕される中の第三として、日蓮大聖人が閻浮第一の聖人であることを明かされている。閻浮第一の聖人とは、末法の御本仏の御事である。「聖人知三世事」には「聖人と申すは委細に三世を知るを聖人と云う」（御書九七四ページ）と仰せられ、外道の聖人、小乗の聖人、通教、別教、法華経迹門、本門と挙げ終わって「日蓮は一閻浮提第一の聖人なり」（御書九七四ページ）と断定されている。

提婆達多は釈尊の御身に……

三逆罪を犯した提婆達多は、臨終のときに南無仏といおうとして、ただ南無とのみ唱えて生身のまま無間地獄に堕ちたという。増一阿含経四十七にいわく「提婆達兜火のために焼かる所すなわち悔心を発し、如来の所において正に南無仏と称せんと欲す、しかるに究竟せず適に南無と称することを得、すなわち地獄に入る」（大正二卷八〇四ページ）と。また天台大師の『法華文句』四には「調達（提婆達多のこと）臨終に南無と称し、いまだ仏と称するを得ず、すなわち地獄に堕つ」（大正三十四卷五七ページ）とある。そ

れと同じように、いま日本国の高僧も臨終の時に心から悔いて南無日蓮大聖人と唱えようとするが、結局、地獄へ堕ちてしまふだろうと仰せなのである。

また「南無日蓮聖人となえんとすとも南無計りにてやあらんずらんふびんふびん」との仰せは、じつに絶対の御確信に立たれてのおことばである。真実の末法の御本仏にあらずして、なぜこのように断言できようか。日蓮大聖人こそ、末法に三大秘法を広宣流布される御本仏であらせられるのである。

「御義口伝」に「南無とは梵語なり此には帰命と云う、人法之れ有り人とは釈尊に帰命し奉るなり法とは法華經に帰命し奉るなり」(御書七〇八頁)と仰せのように、「南無」とは人本尊、法本尊に帰依したてまつることをいうのである。ゆえに「南無釈尊」といわないで、「南無日蓮聖人」と唱えるからには、法本尊もまた「釈尊の法華經」ではなくて、南無妙法蓮華經の大御本尊でなくてはならない。

ゆえに「經王殿御返事」には法の面から「仏の御意は法華經なり日蓮が・たましひは南無妙法蓮華經に・すぎたるはなし」(御書一一二四頁)と仰せであり、さらに「觀心本尊抄」では、より簡潔に「彼は一品二半此れは但題目の五字なり」(御書二四九頁)と仰せなのである。

第三十二章

聖人たるを広く釈す

外典に曰く未萌^{みぼう}をしるを聖人という内典に云く三世を知るを聖人という余に三度のからみようあ

り一^{ひとつ}には去^いし文応元年^{太歳庚申}七月十六日に立正安国論を最明寺殿^{さいみょうじどの}に奏^{そう}したてまつりし時宿谷^{やどや}の入道に

向つて云く禅宗と念仏宗とを失い給うべしと申させ給へ此の事を御用いなきならば此の一門より事

をこりて他国にせめられさせ給うべし、二には去^いし文永八年九月十二日申^{さる}の時に平左衛門尉に向つ

て云く日蓮は日本国の棟梁^{とうりよう}なり予を失なうは日本国の柱樞^{はしら}を倒すなり、只今に自界^{じかい}反逆難^{はんぎやくなん}とてどし

うちして他国^{たこく}侵逼難^{しんびつなん}とて此の国の人人・他国に打ち殺さるのみならず多くいけどりにせらるべし、

建長寺・寿福寺・極楽寺・大仏・長楽寺等の一切の念仏者・禅僧等が寺塔をば^焼やきはらいて彼等が

頸^{くび}をゆひのはまに^{由比浜}て切らずば日本国必ずほろぶべしと申し候了ぬ、第三には去年^{文永十一年}四月八日左

衛門尉に語つて云く、王地に生れたれば身をば随えられたてまつるやうなりとも心をば随えられた

てまつるべからず念仏の無間獄・禅の天魔^{てんま}の所為なる事は疑いなし、殊に真言宗が此の国土の大な

るわざはひにては候なり大蒙古を調伏せん事・真言師には仰せ付けらるべからず若し大事を真言

師・調伏するならばいよいよいそいで此の国ほろぶべしと申せしかば頼綱^{よりつな}問うて云くいつごろよせ

候べき、予言く経文にはいつとはみへ候はねども天の御気色^{みけしき}いかりすくなからず・きう^急に見へて候

よも今年はすごし候はじと語りたりき、此の三つの大事は日蓮が申したるにはあらず只偏^{ひとえ}に釈迦如

来の御神^{たましひ}・我身に入りかわせ給いけるにや我が身ながらも悦び身にあまる法華経の一念三千と申す

大事の法門はこれなり、經に云く所謂諸法如是相と申すは何事ぞ十如是の始の相如是が第一の大事にて候へば仏は世にいでさせ給う、智人は起をしる蛇みづから蛇をしるとはこれなり、衆流あつまりて大海となる微塵みじんつもりて須弥山しゆみせんとなれり、日蓮が法華經を信じ始めしは日本国には一滯たい・一微塵みじんのごとし、法華經を二人・三人・十人・百千万億人・唱え伝うるほどならば妙覺の須弥山ともなり大涅槃だいねはんの大海ともなるべし仏になる道は此れよりほかに又もとむる事なかれ。

通解

——外典げてんにいわく「将来に起きることを知るのを聖人という」と。内典にいわく「三世を知るを聖人という」と。

日蓮には三度の大功績がある。一には、去る文応元年七月十六日に、「立正安国論」を最明寺入道時頼さいみんじにゆうどうときよりにたてまつった時に宿谷やどやの入道に向かつて「禅宗と念仏宗は捨てなさいと執權時頼しつけんときよりに忠告しなさい。この意見を用いないならば、北条の一門から内乱がおき、ついには他国から攻められるであろう」といったことである。

二には、去る文永八年九月十二日の夕刻ゆふこく、平左衛門尉へいざえもんじように向かつて「日蓮は日本国の棟梁とうりようである。日蓮を失うということは日本国の柱を倒すことになる。ただいまに自界叛逆じかいはんぎやくなんとて、一族の同士打ちが始まり、そのうえ他国侵逼難たこくしんびつなんといつて、この国の人々が他国から打ち殺されるのみならず、多く生け捕りにされるであろう。建長寺、寿福寺、極樂寺ごくらくじ、大仏殿、長樂寺などの一切の念仏者や、禅僧などの寺院を焼き払つて、彼らの首を由比ゆひの浜で斬らなければ、日本の国は滅びるであろう」といったことである。

そして三には、去年の文永十一年四月八日に、平左衛門尉に「鎌倉幕府の代に生まれあわせた以上は、身は幕府に随えられているようであるが、心まで随っているのではない。念仏は無間地獄、禪は天魔の所為であることは疑いない。ことに真言宗がこの日本の国土の大なる禍いである。大蒙古の調伏を真言師に仰せつけてはならない。もしこの大事を真言師が調伏するならばいよいよ急いでこの国が滅びるであろう」と申したところ、頼綱は「いづごろ寄せてくるであろうか」と聞いた。そこで日蓮は「経文には何時とは書いてないが、天のようすから怒りが少くないように思う。襲来しゅうらいの時は迫っていて、恐らく今年を越すことはあるまい」と答えたのである。

この三つの大事は、日蓮が述べているのではない。ただひとえに釈迦如来のお心が、わが心に入り替わられてのことであろう。わが身ながらも喜びが身にあまる思いである。法華経の一念三千と申す大事の法門がこれである。法華経方便品の「いわゆる諸法の是かくの如き相」というのはいかなる意味か。十如是の初めの「相如是」が第一の大事であるから、仏は世に出現されるのである。「智人は将来の起こることを知り、蛇は自ら蛇を知る」というのがこのことである。多くの流れが集まって大海となる。わずかの塵ちりがつもって須弥山しゆみせんとなる。日蓮が法華経を信じ始めたことは、日本の国にとっては一つの涕しずく、一つの微塵みじんのようなものであるが、その結果、一人、三人、十人、百千万億人と唱え伝えていくならば、やがて妙覺の須弥山ともなり、大涅槃ねはんの大海ともなるであろう。仏になる道はこれよりほかに求めてはならないのである。

を見るを、名づけて聖臣となす云云」(大正四十六卷二五頁)と。文選もんぜん四十四にいわく「明者は危ふきを無形に見、智者は福を未萌に規はかる」(『文選』六、一六八頁、集英社)とある。外典とは、仏教典以外の書であり、ここでは『説苑』や『文選』をさす。

内典に云く三世を知るを聖人という「内典」とは何を指すのか詳つまびらかでないが、天台大師の『摩訶止観』卷二上には「云何ぞ諸の聖人、三世の心を知らん」(大正四十六卷一五頁)等とある。内典とは仏法の經典をいう。聖人は仏の異名である。すなわち仏教では、過去、現在、未来の三世を知っているのを聖人といい、仏というのである。

三度高名のかうみよう 三度の手柄てがら、功名のこと。日蓮大聖人の三度にわたる国主諫曉と、その予言的中のこと。

最明寺殿 (一二二七年—一二六三年)。北条時頼ときよりのこと。最明寺で出家したので、最明寺殿、最明寺入道殿と呼ばれた。鎌倉幕府第五代執権。時氏ときうじの子。母は安達景盛あだちかげもりの娘(松下禅尼まつしたぜんに)。初め五郎と称し、後、左近将監さこんのしょうげん・相模守さがみのかみに任ぜられた。兄経時つねときの病死によって北条氏の家督かどくを継ぎ、寛元四年(一二四六年)執権となる。前將軍藤原頼経よりつねと通謀して自ら執権たらんと企てた名越光時の陰謀を察知して、光時を伊豆に流し、頼経を京都に追放した。宝治元年(一二四七年)外舅がいきゅうの景盛はかと謀はかって三浦氏を滅ぼし、建長元年(一二四九年)引付衆ひきつけを設けて訴訟制度の能率化を図る等、幕政の刷新に努力を傾けた。宋僧道隆どうりゅうについて禅法を受け建長寺を建立した。

宿谷やどやの入道 生没年不明。宿谷左衛門入道光則のこと。鎌倉時代の武士。日蓮大聖人の「立正安国論」を時頼にとりついだ人。宿屋入道、宿屋光則、宿屋禅門とも呼ばれる。光則は諱いみな、法名は最信。鎌倉幕府の臣で、執権北条時頼と時宗の側近として仕えた。『吾妻鏡』卷五十一には弘長二年(一二六三年)十一月、時頼の臨終に際して最後の看病のため出入りを許された七人の中にあげられている。日蓮大聖人は文応元年(一二六〇年)七月十六日、

当時、寺社奉行であった宿屋入道を通じて「立正安国論」を前の執権時頼に提出され、また蒙古の牒状が到来した文永五年（一二六八年）八月二十一日、同十月十一日等に書状を送り、北条時宗へのとりつぎを望まれている。もと極楽寺良観に帰依し律と念仏を信受していたが、文永八年（一二七一年）の竜の口の法難の際、日朗等の五人の弟子を自邸の土牢に入れた時、かえって日朗に折伏され、改宗して大聖人の信仰に入ったと伝えられる。

禅宗と念仏宗とを失い給うべし　日蓮大聖人は安国論において念仏を一例とされ、全邪宗を打ち破られた。ここで禅宗を入れられたわけは、諸宗の中で、禅宗こそ執権北条時頼の帰依していた邪宗であるゆえと考えられる。したがって安国論を時頼に取り次いだ宿屋入道に向かって「禅宗と念仏宗は、とくに止められよ」といわれたのである。「報恩抄」には「国主（北条時頼のこと）は禅宗を尊む日蓮は天魔の所為（そい）というゆへに我と招ける・わざわひなれば」（御書三二二二）と仰せである。

平左衛門尉へいさゝもんじょう（一二九三年）。平頼綱たいらのよりつなのこと。平盛時の子。執権北条時宗、貞時の二代に仕え、北条得宗家の家司

（執事）、侍所の所司（次官）として軍事、警察、政務を統轄し、鎌倉幕府の実力者として権勢をふるった。極楽寺良観など諸宗の僧と結びつき、文永八年（一二七一年）九月十二日には、軍勢をつれて松葉ヶ谷の草庵を襲い、竜の口で大聖人の頸を斬ろうとしたが果たせず、佐渡に流罪した。文永十一年（一二七四年）四月八日、佐渡から帰られた大聖人と対面し、蒙古の来襲の時期を尋ねている。弘安二年（一二七九年）には捕らえられて鎌倉に連行されてきた熱原の農民信徒に拷問を加え、三人を斬首、他を追放処分にしている。弘安七年（一二八四年）貞時が執権となった時、内管領となり、評定衆の秋田城介や安達泰盛を滅ぼし（霜月騒動）権力を独占したが、永仁元年（一二九三年）反逆の罪によって、頼綱、資宗父子は斬首、長子の宗綱も佐渡流罪となった。

日蓮は日本国の棟梁なり　日蓮大聖人が主師親の三徳を具備された末法の御本仏なることを明かされている。御文

は、とくに主徳をあらわされている。棟梁がなければ家はたもたない。「種種御振舞御書」には「日蓮によりて日本国の有無はあるべし、譬へば宅に柱なければ・たもたず人に魂なければ死人なり、日蓮は日本の人の魂なり平左衛門既に日本の柱をたをしぬ」(御書九一九六)と仰せられている。

自界反逆難

仲間同士の争い。内乱。自国内の戦争などの難のこと。薬師経の七難の第一。日蓮大聖人は文永八年

(一二七一年) 九月十二日に御勘気をうけられ、翌文永九年二月十一日に北条時宗の兄時輔が六波羅で反乱し、北条一門の同士打ちが起こった。

建長寺 神奈川県鎌倉市にある臨済宗建長寺派の本山。鎌倉五山の首位。巨福山と号す。建長元年(一二四九年)

第五代執権北条時頼が建立を発願し、宋僧蘭溪道隆を開山として同五年(一二五三年)に完成した。仏殿は丈六

の地藏を本尊とし、脇士に千体の小地藏を置く。『吾妻鏡』の建長五年十一月二十五日の条には落慶の様子が

「建長寺の供養なり。丈六の地藏菩薩をもつて中尊となし、また同像千体を安置す。相州(北条時頼)殊に精誠を

凝さしめたまふ……願文の草は前大内記茂範朝臣。清書は相州。導師は宋朝の僧道隆禅師……」(『全譯 吾妻鏡』

五卷二二五六、新人物往来社)と記されている。

寿福寺 神奈川県鎌倉市にある臨済宗寺院。正治二年(一二〇〇年)北条政子の発願によって建立。栄西が開山。

初期の禅宗の発展に重要な位置を占めた。『吾妻鏡』の正治二年(一二〇〇年)閏二月十三日の条には「龜谷の地

を葉上房律師栄西後に僧正に昇るに寄付せられ、清浄結界の地たるべきの由、仰せ下さる。午の刻、結衆等その地に行道

す。施主監臨したまふ。所右衛門尉朝光、御輿に供奉す。義清飯屋を構へ、珍膳を儲くと云々。未の刻、堂舎寺な

営作の事始なり。善信・行光等これを奉行す」(『全譯 吾妻鏡』二卷三八四六、新人物往来社)と寿福寺の造営の

始めについて記している。開山の栄西は『興禅護国論』巻上に「戒律は是れ令法久住の法なり。今此の禅宗は戒

律を以って宗となす」(大正八十卷七)と述べており、寿福寺では戒律が重んじられたと思われる。

極楽寺^{ごくらくじ}

神奈川県鎌倉市にある真言律宗の寺院。靈鷲山感応院、または靈山寺と号す。奈良の西大寺の末寺。『元亨釈書』、縁起等によると、正元元年(一二五九年)創建。幕府の重臣北条重時が子の長時、業時の協力を得て開き、弘長元年(一二六一年)十二月、長時が良観を招いた。建治元年(一二七五年)三月、火事で堂舎が灰塵^{かいじん}に帰し、後に復興された。弘安四年(一二八一年)蒙古国調伏の祈禱を行ったことから北条時宗によって祈願寺となり、元弘二年(一二三三年)には後醍醐天皇の勅願寺となる。また、極楽寺は飯島津Ⅱ和賀江島を管轄し、六浦で通行税を徴収する特権を得ていた。

大仏 大仏殿のこと、大靈山淨泉寺と号する。建長寺の持分である。大仏は座像長三丈六尺といわれ、阿弥陀仏であるから念仏宗である。寛元元年(一二四三年)に、淨光が建立した。

長楽寺 神奈川県鎌倉市の淨土宗寺院。法然の孫弟子智慶^{ちぎょう}の開基。当時、鎌倉七大寺の一つに数えられたが、現在は荒廃し、昔の面影はなくなっている。日蓮大聖人は文永五年(一二六八年)十月十一日、当寺に対しても「立正安国論」の予言が的中したことに鑑^{かん}み、すみやかに実法、実経に帰依するように勧めた手紙を出されている。

第三には去年^{文永}四月八日「三度の高名」の第三番目。文永十一年(一二七四年)二月十四日に御赦免^{ごしゃめん}、三月八日に赦免状が佐渡に着き、三月十三日に佐渡を發^たたれ、三月二十六日に鎌倉に入られ、四月八日に平左衛門尉に對面、諫曉されたこと。

妙覺の須弥山 妙覺は菩薩の修行位である五十二位の最高位。これを最高峰の須弥山にたとえられたもの。

この章は、日蓮大聖人が一閻浮提^{いちえんぶだい}第一の聖人であらせられることを、広く釈されている。聖人とは三世を知ること、また将来の起こることを知ってその対策をもっていること等については、すでに述べてきたとおりである。

「種種御振舞御書」には「去^いぬる文永五年後の正月十八日・西戎^{さいじゅう}・大蒙古国より日本国をを^襲そうべきよし牒^{ちようじよう}状をわたす、日蓮が去ぬる文応元年^{太歳庚申}に勘^{かん}えたりし立正安国論今すこしもた^違がわらず符合^{ふごう}しぬ、此の書は白樂天が樂府^{がふ}にも越へ仏の未来記にもをとらず末代の不思議なに事かこれにすぎん、賢王^{けんおう}・聖主の御世^{みよ}ならば日本第一の権^{けん}状^{じよう}にもをこなわれ現身に大師号もあるべし」(御書九〇九^二頁)と仰せである。「仏の未来記」とは本抄にも詳しく論じられているように、正像末の三時にわたる釈尊の予言である。いま安国論はその「仏の未来記にもをとらず」と仰せられているのである。そのことを「立正安国論奥書」には「此の書は徴^{しる}有る文なり」(御書三三^三頁)と仰せである。

只今に自界反逆難とて

北条一門には、この同士打ちが多かった。「佐渡御書」には「宝治^{ほうじ}の合戦すでに二十六年今年二月十一日十七日又合戦あり」(御書九五七^二頁)と仰せである。「今年」というのは、文永九年であって、次の

御書の合戦もこれと同じである。すなわち「日妙聖人御書」にいわく「当世は世乱れ去年より謀叛の者・国に充満し今年二月十一日合戦、其れより今五月のすゑ・いまだ世間安穩ならず」（御書一二一七ページ）と。

宝治ほうじの合戦とは、日蓮大聖人が聖寿二十六歳の宝治元年六月五日、鎌倉幕府の執権しつけんたる北条時頼によつて、三浦泰村やすむら（若狭守わかさのかみ）が滅ぼされた戦いくさのことである。すでに三浦一族は北条氏と姻戚いんせき関係を結び、泰村は承久じようきゆうの乱に奮戦し、一門に豪族ごうぞくも多く、莊園しようえん数万町といわれていた。しかし謀叛むはんの疑いをかけられて兵乱となり、安達景盛かげもり（城等じようら）はかねて三浦の勢威を恐れていたもので、これを攻め、時頼もまた三浦を討たしめたので、一族ごとく滅亡した。「兄弟抄」の「わかさ若狭のかみ守が子となりし」（御書一〇八四ページ）等との仰せがこれである。

次の文永九年二月十一日、十七日の合戦は、日蓮大聖人を佐渡へ流罪した翌年に、たちまちに起きた内乱である。北条時頼は長子時輔ときすけをおいて次子の時宗に家督かどくをゆずつたため、時輔は六波羅ろくはらの南方にて、時宗を誅殺ちゆうさつしようと謀はかった。しかし事が発覚して、二月十一日には鎌倉において一味が殺され、十五日には早馬が京都へ着き、六波羅北方の義宗が急に南方の時輔を攻めて一族を滅亡させた。

「聖人御難事」に「平等も城等も」（御書一一九〇ページ）と仰せであるが、この平と城の二家が、大聖人御在世中には最も強大な権力者であった。宝治の合戦で三浦を攻め滅ぼした安達景盛は、秋田城じようのすけ介という官位についた。代々この一族が城介の官位を世襲せしゆらしたので、この一族を「城等じようら」という。安達一族

もまた北条氏と重々の姻戚関係を結び、強大な勢力となり、「平等」の平左衛門と権勢を競っていたのである。弘安五年、安達宗景が秋田城介に任ぜられたが、宗景は狂奢な性格で、姓を源氏と改めたりした。平左衛門は執権貞時にすすめて、叛逆の恐れありとし、弘安八年十一月十七日、これを攻めて安達一族をことごとく誅戮した。

次の「平等」の平左衛門は、執権の執事と、侍所の所司という権力の座におり、前記のように競争相手となる権力者を次々と覆滅して、ひとり強大をきわめていた。しかも、日蓮大聖人の御一生を通じて迫害、弾圧を加え、第二の高名も、第三の高名も、平左衛門を諫められたものである。平左衛門は大聖人の教えを用いないのみか、弘安二年の熱原の法難には、二十人の農民を捕らえて自宅の牢に入れ、ついに三人の首を斬り、十七人を追放するという弾圧を加えた。その結果は大聖人の御予言のとおり、熱原法難の十四年後の永仁元年に、謀叛の罪によって、一族ことごとく誅戮されたのである。これすなわち法華の嚴罰以外の何物でもないのである。

彼等が頸をゆひのはまにて切らずば

由比が浜で念仏者や禅僧らの首を斬れとの経文の根拠は、涅槃經にある。すなわち、「仏がその昔に大王と生まれ仙予といった。その時に婆羅門が大乘を誹謗するのを聞いて、その命を断った。仙予国王はこの因縁によって、これより後には地獄に堕ちないのである」(趣意)と。また「有徳王の時代に覚

徳比丘とくびくという正法の行者があつた。その時に多くの破戒の比丘があつて、覺徳比丘を責めた。有徳王は護法のために、悪比丘と戦つて全身に傷を受けて戦死し、阿閼あしやくぶつ仏の国に生まれて、彼の仏の第一の弟子となつた」(趣意)と。

「立正安国論」には「釈迦の以前仏教は其の罪を斬ると雖も能忍のうにんの以後経説は則ち其の施せを止む」(御書三〇ページ)と仰せである。これについて、「釈尊以前は邪宗の徒を斬つたが、釈尊以後においては、その布施ふせをとどめるべきであつて、本抄のように由比が浜で首を斬つてはならないではないか」という疑問がおこる。これに対し日寛上人は、その施をとどめるとは為人いにしつだん悉檀に約し、首を斬れとは対治たいじ悉檀に約すのである。涅槃經の文に両意があるから、それぞれ一意に拠よつたのであるとされている。(文段集三〇二ページ)

また「治部房御返事」に「又法華經のかたきとなる人をば父母なれども殺しぬれば大罪還かえつて大善根となり候」(御書一四二六ページ)との御文があるが、これも本抄の意と同じで、謗法の心を殺すということなのである。

殊に真言宗が此の国土の大なるわざはひ

三度の高名のうち第一回と第二回は、ともに念仏と禪を破されたのに、なぜ第三回は別して真言を破されるのか。それに対して日寛上人は「三沢抄」の「法門の事はさ佐渡どの国へながされ候いし已前の法門

は・ただ仏の爾前の経とをぼしめせ」(御書一四八九)との御文を挙げられ、次のように述べられている。

ここに二義があり、一には所破しよは、二には所顕しよけんである。所破というのは佐渡以前ははまだ真言を破されていないからであって、その次の文に「此の国の国主我が代をも・たもつべくば真言師等にも召し合せ給はんずらむ、爾その時まことの大事をば申すべし、弟子等にもなひ内内申すならばひろうしてかれらしりなんず、さらば・よもあわじと・をもひて各各にも申さざりしなり」(御書一四八九)と仰せのうちに、真言を国主諫曉かんぎようの時に破折されようと思つて、佐渡以前においては弟子たちにもいわれなかったのである。

次に所顕というのは、いまだ三箇の秘法を顕されなかったからである。ゆえにまた次の文に「而しかるに去る文永八年九月十二日の夜たつの口にて頸をはねられんとせし時より・のちふびん後なり、我につきたりし者どもにまこと真の事をいわざりけるとをもうて・さどの国より弟子どもに内内申す法門あり、此れは仏より後迦葉・阿難・竜樹・天親・天台・妙楽・伝教・義真等の大論師・大人師は知りてしかも御心みこころの中に秘せさせ給ひし、口より外には出し給はず」(御書一四八九)と仰せのとおりである。

佐渡以後にもつぱら真言を破されて、三箇の秘法を顕されるのである。たとえば釈尊が、法華にいたって初めて三乘(声聞、縁覚、菩薩)を破して一仏乗を顕し、また迹を破して本を顕すのと同じである。爾前にぜんの中には、このような破顕の二義はない。佐渡以前はまたこれと同じであるゆえに「ただ仏の

爾前の経」と仰せられているのである。もし通じて、これを論ずれば、爾前は未顕真実であり、佐渡以前も未顕真実なのである。（以上、文段集三〇四ページの趣意）

日蓮大聖人滅後に兼知未萌が符合したこと

日蓮大聖人は、三度の国主諫曉により、自界叛逆と他国侵逼を予言された。その御予言どおりに、佐渡御流罪後、百日目の文永九年二月十一日に北条時輔を誅殺するという内乱が起き、同じく三年後、文永十一年十月と、さらに七年後の弘安四年七月には、元の大軍が来襲するという大戦乱となった。これはいずれも御生前のことである。

ここにおいて日寛上人は「三度の兼知、毫末も差わず、豈大聖人に非ずや。佐渡御書七十九に云く『現世に云をく言の違はざらんをもて後生の疑をなすべからず』等云云。此に於て暫時、筆を閣いて紅涙白紙を点ず」（文段集三〇四ページ）と仰せである。

さて日蓮大聖人の滅後においても、やはり予言が的中して今日にいたっているのである。日寛上人の「撰時抄愚記」によって、その概要を見てみよう。「下山御消息」に「教主釈尊より大事なる行者を法華経の第五の巻を以て日蓮が頭を打ち十巻共に引き散して散散に蹋たりし大禍は現当二世にのがれがたくこそ候はんずらめ」（御書三六三ページ）と仰せのように、このような乱暴の限りをつくした平左衛門頼綱は、宗祖滅後十二年にして一類が皆滅亡した。そのいきさつは、本章ですでに述べたとおりであるが、

弘安八年には秋田城じょうのすけ介の安達宗景が叛逆はんぎやくの罪で誅殺され、平左衛門はこれよりただひとり強大な権力

者となったが、ついにこれも叛逆はんぎやくの陰謀いんぼうが発覚して、永仁元年に父子ともに殺戮さつりくされ一族は滅亡した。

ここにおいて日寛上人は、平左衛門が首を斬られたのは、日蓮大聖人のお顔を打ったゆえであり、最愛の次男安房守が首を斬られたのは、安房の国の大聖人の御首をはねんとしたゆえである。また長男が佐渡へ流されたのは、大聖人を佐渡へ流したゆえであると仰せである。

それに対し、平左衛門が首を斬られたのは、熱原法難の三烈士を斬ったからではないかという疑問がおきる。「上野殿御返事」には「あつはらのものどもの・かくをしませ給へる事は・承平しょうへいの将門まさかど・天喜

の貞当さだとうのやうに此の国のものどもは・おもひて候ぞ、これひとへに法華経に命をすつるがゆへなり、ま

つたく主君にそむく人とは天・御覧あらじ」(御書一五七五)と仰せであり、日興上人の本尊脇書わきがきにも

「駿河国富士下方熱原郷の住人、神四郎、法華宗と号して平左衛門尉が為に頸くびを刎はねらるる三人の内な

り。平左衛門入道、法華宗の頸を切るの後十四年を経て、謀叛むはんを企くわだつる間、誅ちゆうせられ、其の子孫、跡あと

形かたも無く滅亡し畢おわぬ。徳治三年戊申卯月八日、日興在判」つちのえさるうづきとお認めしたたである。以上のように平左衛門の

滅亡は熱原法難の現罰なのである。

これに対し日寛上人は、現報には遠近おんこんがあり、遠因は日蓮大聖人を打った罰であり、近因は熱原の信

徒殺害にあるが、日興上人は近く現報を論じられ、いま本抄では遠くこれを論じるのであるといわれ

ている。(以上、文段集三〇五頁―三〇六頁の趣意)

十如是の始の相如是が第一の大事

この御文は解しがたく、知りがたいため、古来、多くの解釈がある。いま日寛上人の「撰時抄愚記」から、その大意を取って次に示そう。

まず多くの釈を挙げると、一にはいわく「如来の出世は衆生本具の仏知見を、開示悟入せしめんがためである。しかるに如来は、衆生の仏知見を開くべき先相を照見して出世し給う。ゆえに相如是が第一の大事という」と。二にはいわく「十如是の中において、初めの如是相は別して実相の義を顕し、三千皆実相、相々宛然、深旨灼然である。ゆえに如是相が最も肝要であり、ゆえに第一の大事という」と。三にはいわく「事に即して真、当位即妙は法華の深旨、円宗の洪範である。ゆえに相如是が第一の大事という」と。四にはいわく「わが祖は台家理具の分齊を簡び、一念三千、事々互具を顕す。ゆえに相如是が大事という」と。五にはいわく「仏が出世し、善惡の因果をもつて、未来作仏の記を授けたまう事も、しかしながら諸の法相の隠顕を能く明らかに照見したまう上の事なるがゆえに、相如是が大事という」(文段集三〇八頁)等々である。

それに対して日寛上人は、相とは、前相であり、瑞相である。ゆえに通じて一切にわたるといえども、別していまいうところの相如是とは、正しく本化の涌出を指して、相如是と名づけ、また出世の大事と名づけるのである。すなわち本化の涌出は、寿量の妙法の末法流布の瑞相なるがゆえである。ゆえ

に「智人は知を知る」等の文を引かれて、この義を証されるのである。

「呵責謗法滅罪抄」かしやくほうぼうめつざいしょうに

「されば法華經序品の六瑞ずいは一代超過ちようこうの大瑞だいずいなり、涌出品ゆじゆつぽんは又此れには似るべ

くもなき大瑞なり」(御書一一二九ズ)と仰せであるが、ここに仰せの大瑞とは相如是のことである。涌出品には「無量千万億の大衆の諸の菩薩は(中略)四方の地震裂して皆中より涌出せり(中略)是の諸の菩薩衆本末の因縁あるべし無量徳の世尊唯願わくは衆の疑を決したまえ(中略)爾の時に釈迦牟尼仏、弥勒菩薩に告げたまわく、(中略)乃いまし能く仏に是の如き大事を問えり」(妙法蓮華經並開結四八〇ズ四八四ズ)とある。弥勒は本化の出現を問うている。仏が答えて「是の如き大事」といつてゐる。ゆえに本化の出現を「大事」と名づけていることは明らかである。

日蓮大聖人はなぜ「第一の大事」と仰せられたか。およそ「第一」とは最極さいごくの義である。ひろく出世の大事を論ずるに三意がある。一には迹門の顕実を出世の大事となす。二には本門の寿量の顕本を出世の大事となす。三には文底の秘法を出世の大事となす。「三大秘法抄」の「法華經を諸仏出世の一大事と説かせ給いて候は此の三大秘法を含めたる經にて渡らせ給えばなり」(御書一〇二三ズ)との仰せがこの意である。そしてこの第三が最極の義である。本化の涌出はこの第三の最極の秘法の末法流布の瑞相である。ゆえに「第一の大事」というのである。

次に、「智人は知を知る」の文を引かれているのは、いかなる意味か。答う、この文には面裏めんりがある。文の裏の意は迹化しやつけが知らないことをいい、文の面の意は、ただ仏のみ能く知ることをいう。今の引用は

この辺であり上行菩薩等が大地より出現したもうを、仏は元品がんぽんの無明むみょうを断つゆえに智人であり、寿量品の南無妙法蓮華經を末法に流布するために、この菩薩が出現したということを仏が知っていらっしゃるということである。（以上、文段集三〇八ページ〜三〇九ページの趣意）

第三十三章 日本第一の大人

問うて云く第二の文永八年九月十二日の御勘氣の時はいかにとして我をそん^損せば自^じ他^たのいくさを
こるべしとはしり給うや、答う大集經^五に云く「若し復^{また}諸^{もろ}の刹^{せつ}利^り国^{こく}王^{わう}諸^{しよ}の非法^{ふぽう}を作^なし世尊^{せそん}の声聞^{しやうもん}の
弟子^{のうらん}を悩^{なや}乱^{らん}し若しは以て毀罵^{きめ}し刀杖^{とうじやう}をもて打斫^{うち}し及び衣鉢^{いふく}種^{しゆ}種^ぐの資具^{しぐ}を奪^{うば}ひ若しは他^たの給施^{きゆうせ}に留難^{るなん}
を作^なす者有^あらば我等^{われら}彼^かをして自然^{じねん}に卒^{にわか}に他方^{おんてき}の怨敵^{おんてき}を起^{おこ}さしめ及び自界^{じかい}の国^{こく}土^どにも亦^{また}兵起^{へい}り飢疫^{きえき}
飢饉^{ききん}非^ひ時の風雨^{ふうう}鬪^{とう}諍^{じやう}言^{ごん}訟^{しやう}讖^{しん}謗^{ぼう}せしめ、又其^{また}の王^{わう}をして久^くしからずして復^{また}当^{まさ}に己^{みづか}れが国^{こく}を亡^な失^しせしむ
べし」等云云、夫^それ諸^{しよ}經^{きやう}に諸^{しよ}文^{ぶん}多^{おほ}しといえども此^この經^{きやう}文^{ぶん}は身^みにあたり時^{とき}にのぞんで殊^{こと}に尊^{そん}くをばう
るゆへにこれ^{これ}をせん^{せん}しいだす、此^この經^{きやう}文^{ぶん}に我^{われ}等^らとは梵^{ぼん}王^{のう}と帝^{たい}釈^{しやく}と第六^{だいろく}天^{てん}の魔^ま王^{わう}と日^に月^{げつ}と四^し天^{てん}等^らの三
界^{さんかい}の一切^{いっけつ}の天^{てん}竜^{りゆう}等^らなり、此^こ等^らの上^{うへ}主^{しゆ}・仏^{ぶつ}前^{ぜん}に詣^{かけ}して誓^{ちか}つて云^いく仏^{ぶつ}の滅^{めつ}後^ご・正^{しやう}法^{ぽう}・像^{ざう}法^{ぽう}・末^ま代^{だい}の中^{ちゆう}に
正^{しやう}法^{ぽう}を行^{おこな}ぜん者^{もの}を邪^{じや}法^{ぽう}の比^ひ丘^{きやう}等^らが国^{こく}主^{しゆ}にうつたへば王^{わう}に近^ききもの王^{わう}に心^{しん}よせなる者^{もの}・我^{われ}がたつとし
とをもう者^{もの}のいうことなれば理^り不^ふ尽^{じん}に是^ぜ非^ひを糾^{ただ}さず・彼^かの智^ち人^{にん}をさんざんとはぢ^ぢにをよばせなんと
せば、其^その故^こともなく其^その国^{こく}ににわかに大^{だい}兵^{へい}乱^{らん}・出^{しゅ}現^{げん}し後^ごには他^た国^{こく}にせめらるべし其^その国^{こく}主^{しゆ}もうせ
其^その国^{こく}もほろびなんずととかれて候^{こう}、いたひとかゆきとはこれなり、予^よが身^みには今^{こん}生^{しやう}にはさ^させる失^{とが}
なし但^た国^{こく}をたす^{たす}けんがため生^{せい}国^{こく}の恩^{おん}をほうぜんと申^{まを}せしを御^ご用^{よう}いなからんこそ本^{ほん}意^いにあらざるに、
あま^{あま}さへ召^めし出^でして法^{ぽう}華^か經^{きやう}の第五^{だいご}の卷^{くわん}を懷^{かい}中^{ちゆう}せるをとりい^いだしてさんざんとさいなみ、結^{けつ}句^くは
小路^{せうろ}渡^{わたり}をわたしなんとせしかば申^{まを}したりしなり、日^に月^{げつ}天^{てん}に処^{しよ}し給^{たま}いながら日^に蓮^{れん}が大^{だい}難^{なん}にあ^あうを今^{こん}度^ど

代
かわらせ給はずば一つには日蓮が法華經の行者ならざるか忽に邪見をあらたむべし、若し日蓮・法
華經の行者ならば忽に国に^驗しを見せ給へ若ししからずば今の日月等は釈迦・多宝・十方の仏を
たぶらかし奉る大妄語^{だいもうご}の人なり、提婆^{だいば}が虚誑罪^{こかうざい}・俱伽利^{くぎやり}が大妄語^{だいもうご}にも百千万億倍すぎさせ給へる大
妄語の天なりと声をあげて申せしかば忽に出来せる自界^{ほんぎやく}叛逆難なり、されば国土いたくみだ^乱れば我
身はいうにかひなき凡夫なれども御經を持ちまいらせ候^{ぶんざい}分齊は当世には日本第一の大人なりと申す
なり。

通解

——問うていわく、第二の諫曉^{かんぎょう}、文永八年九月十二日の御勘氣^{ごかんき}の時は、日蓮を失うと内乱がおき、他国
から攻められるとは、どのようにして知ることができたのか。

答う、大集經にいわく「もしまた、もろもろの刹帝利種^{せつていりしゆ}の国王が、もろもろの非法をなし、世尊^{しよもん}の聲聞
の弟子を悩乱^{のうれん}させ、または悪口をいって刀杖^{とうじやう}で打ち、衣鉢^{えはつ}や種々の資具^{しぐ}を奪ったり、他の布施供養^{ふせくよう}するも
のに妨害^{ぼうがい}を加える者があれば、われらは、自然のうちにすみやかに他国の怨敵^{おんてき}をおこさせ、また自国の内
にも兵乱をおこさせ、疫病や飢饉^{ききん}や時にあらざる風雨や種々の争いを生じさせ、またその王をして久しか
らずして己^{おの}れの国を失わさせるであらう」と。

諸經に諸文が多いとはいえ、この經文は身にあたり、時に臨んで、ことに尊く思われるゆえにこの文を
選^{せん}び出すのである。この經文に「われら」とは、梵王^{ぼんのう}と帝釈^{たいしゃく}と第六天の魔王と日月と四天等の三界のいっ
さいの天竜等である。これらの上主たちが、仏前にまいって誓っているには、仏の滅後、正法、像法、

末代まつだいの中に正法を行ずる者を、邪法の比丘等が国主に訴えれば、王に近い者や王に心をよせている者たちは、自分が尊いと思つてゐる僧たちの訴えであるから、理不尽りふじんにも是非を糺たださずに、その智人をさんざんとはずかしめれば、理由もなくその国に、にわかに大兵乱が出現し、後には他国から攻められて、その国主も滅び、その国も滅びるであらうと説かれてゐる。

「かけば痛し、かかざれば痒かゆし」というのはこのことである。日蓮が身には今生には大した失はない。ただ国をたすけんため、生まれた国の恩を報ぜんために申すことを、用いられないことこそまことに不本意である。その上さらに召し出して、法華經の第五の巻を懷中ふところから取り出して、さんざんに打ちつけ、最後は小路を引き回しなどしたので、「日天も月天も天におりながら日蓮が大難にあうのを見て、このたび取つて替わらないのは、一つには日蓮が法華經の行者ではないのか、もしそうなら、たちまちに邪見を改めなければならぬ。しかも日蓮が法華經の行者であるならば、たちまちに国にしろしを見せるべきである。もしそうでなければ、今の日月天は、釈迦、多宝、十方の仏をたぶらかす大妄語の人である。提婆だいばの虚誑罪こおうざい、俱伽利くぎやりの大妄語よりも百千万億倍も過ぎた大妄語の天となるではないか」と声を上げて言つたところ、たちまちに出現した自界反逆難ほんぎやくである。されば国土が大変に乱れたれば、わが身はいうにかいなき凡夫であつても、法華經を持つからには、当世には日本第一の大人であると申すのである。

語訳

大集經だいしゅうきやうに云く「若し……」大集經五十とあるが、これは大集月藏經第五十三の呪輪護持品第十五の文。(大正十

刹利國王せつりこくわう 刹利とは、刹帝利といい、クシャトリア (Kṣatriya) のこと。刹利種、王種などともいう。古代インド

の身分制度であるカースト(四姓)制で、第二位にあった者。主に王族、武士層によって構成されている。本来はバラモン(司祭)より下位に置かれていたが、仏教興起時代には、バラモンの支配力が衰え、クシャトリアが社会的実力を持って台頭してきた。

衣鉢種種しぐの資具 僧侶のもつ三衣一鉢や、その他の僧の修行、生活に必要な資材道具のこと。

法華經の第五の巻 法華經勸持品かんじほん第十三が含まれている。勸持品には、末法の法華經の行者に、必ず三類の強敵がきそいおこることが書かれている。

小路こうちをわたし 鎌倉の小路、若宮の小路などをひきまわされたこと。

提婆が虚誑罪だいは こいうざい 虚誑罪は十惡の一つ。惡心をもって他人をあざむくことであり、とくに提婆達多だいは だつたは仏法不信でありながら「われは仏果をえた」等と妄語もうごし、阿闍世王あじやせなどを味方にして、三逆罪を犯した。

俱伽利がくぎやり大妄語 俱伽利とは梵名コーカリーカ (Kokālika) の音写。瞿伽梨、瞿伽利、九伽利などとも書き、漢訳して惡時者、牛守という。釈迦族の出身。雑阿含經卷四十八等によると、提婆達多だいは だつたの弟子であり、釈尊の制止も聞かず、舍利弗、目連を惡欲があると難じた。その報いによって、身に惡瘡を生じて大蓮華地獄に墮ちたという。

講義

この章は、日蓮大聖人こそ日本第一の大人たることを顕されている。「大人」とは「大聖人」という

ことである。ゆえに「開目抄上」には「仏世尊は実語の人なり故に聖人・大人と号す、外典・外道の中の賢人・聖人・天仙など申すは実語につけたる名なるべし此等の人人に勝れて第一なる故に世尊をば大人とは・申すぞかし」(御書一九一頁)と仰せである。この御文と、いまの「当世には日本第一の大人なり」の御文と合わせ拝するならば、日蓮大聖人がみずから御本仏であると宣言されていることは明らかである。ところが身延派とか池上派とか仏立宗などという邪宗日蓮宗は、このような明文にも迷つて、「日蓮大菩薩」などとしているのである。これみな師子身中の虫である。

いたひと^痛か^痒ゆきとはこれなり

「かけば痛しかかざれば痒し」という譬^{たと}えである。日蓮大聖人の予言が符合^{ふごう}すれば日本の国が滅びることになるし、符合しなければ、大聖人が法華經の行者であり末法の御本仏であることが顕れないで終わってしまう。日本の国が滅びることは何としてでも避けなければならないが、仏法の正義は断じて示さねばならないとの御心情がにじみ出ている御文である。

日蓮大聖人の時代には、大聖人の祈りによって亡国の悲運からはまぬかれたが、たとえ本門戒壇の大御本尊がいます日本の国であっても、あまりにもその謗法^{ほうほう}が過ぎれば亡国となるのである。そのことは御書に「かかる日蓮を用いぬるともあしく^悪うやまはば^敬国亡ぶべし、何に況^{いか}や^{いなん}数百人ににくませ二度まで流しぬ、此の国の亡びん事疑いなかるべけれども且く禁をなして国をたすけ給へと日蓮がひかれればと

そ今までは安穩にありつれども・はうに過ぐれば罰あたりぬるなり」〔種種御振舞御書〕御書九一九（一）との仰せからも明らかである。

すなわち、日蓮大聖人の滅後六百数十年にして、あまりにもその謗法が過ぎ、ついに第二次世界大戦の敗戦により国が滅びたのである。しかるに大御本尊の大功德は、そのような逆縁ぎやくえんの衆生、逆縁の国土にもかえって変毒へんどく為薬いやくの大功德を生じさせ、創価学会の出現とともに、広宣流布が着々と実現しつつあるのである。

「若し日蓮・法華經の行者ならば忽に国に験しるしを見せ給へ」との仰せどおり、日本の国には内乱が相つぎ、ついには世界の国々を敵として戦って敗れるという「国にしるし」が顕れた。もししからは広宣流布という「国にしるし」が顕れないわけがない。もし創価学会がなければ、広宣流布もなく、日蓮大聖人のすべての兼知未萌けんちみぼうが大虚妄となるところであつた。ここに創価学会の重大な使命があると信ずるのである。

第三十四章

外難を遮す

問うて云く慢煩惱まんぼんのうは七慢・九慢・八慢あり汝が大慢は仏教に明すところの大慢にも百千万億倍す
ぐれたり、彼の徳光論師は弥勒菩薩みろくぼさつをれせず・大慢婆羅門だいまんばらもんは四聖を座とせり、大天は凡夫ぼんぶにして
阿羅漢あらかんとなる・無垢論師むくろんしが五天第一といひし、此等は皆阿鼻あびに堕ちぬ無間の罪人なり汝いかでか
一閻浮提いちえんぶだい第一の智人となれる地獄に堕ちざるべしやおそろしおそろし、答えて云く汝は七慢・九
慢・八慢等をばしれりや大覺世尊は三界第一とならせ給う一切の外道が云く只今天に罰せらるべ
し大地われて入りなんと、日本国の七寺・三百余人が云く最澄法師さいちようは大天が蘇生そせいか鉄腹てつぷくが再誕さいたんか等
云云、而りといえども天も罰せずかへて左右を守護し地もわれず金剛こんどうのごとし、伝教大師は叡山えいざんを
立て一切衆生の眼目となる結句七大寺は落ちて弟子となり諸国は檀那だんなとなる、されば現に勝れたる
を勝れたりという事は慢ににて大功德なりけるか、伝教大師云く「天台法華宗の諸宗に勝れたるは
所依の經に拠よるが故に自讃じさん毀他たならず」等云云法華經第七に云く「衆山の中に須弥山しゆみせんこれ第一なり
此の法華經も亦復かくの如し諸經の中に於て最もこれ其の上かみなり」等云云、此の經文は已説いせつの華
嚴・般若はんにや・大日經等、今説の無量義經、当説の涅槃經ねはん等の五千・七千・月支がつし・竜宮・四王天・忉利
天・日月の中的一切經・尽十方界の諸經は土山・黒山・小鉄围山てつちせん・大鉄围山のごとし日本国にわた
らせ給える法華經は須弥山しゆみせんのごとし。

又云く「能く是の經典を受持すること有らん者も、亦復またまた是くかの如し、一切衆生の中に於て亦これ

第一なり」等云云、此の經文をもつて案ずるに華嚴經を持てる普賢菩薩・解脫月菩薩等・竜樹菩薩・馬鳴菩薩・法藏大師・清涼國師・則天皇后・審祥大德・良弁僧正・聖武天皇・深密般若經を持てる勝義生菩薩・須菩提尊者・嘉祥大師・玄奘三藏・太宗・高宗・觀勒・道昭・孝德天皇、真言宗の大日經を持てる金剛薩埵・竜猛菩薩・竜智菩薩・印生王・善無畏三藏・金剛智三藏・不空三藏・玄宗・代宗・慧果・弘法大師・慈覺大師、涅槃經を持てる迦葉童子菩薩・五十二類・曇無讖三藏、光宅寺の法雲南三北七の十師等よりも末代惡世の凡夫の一戒も持たず一闡提のごとくに人には思はれたれども、經文のごとく已今當にすぐれて法華經より外は仏になる道なしと強盛に信じて而も一分の解なからん人人は、彼等の大聖には百千万億倍のまさりなりと申す經文なり、彼の人人は或は彼の經經に且く人を入れて法華經へうつさんがためなる人もあり、或は彼の經に著をなして法華經へ入らぬ人もあり、或は彼の經經に留逗のみならず彼の經經を深く執するゆへに法華經を彼の經に劣るといふ人もあり、されば今法華經の行者は心うべし、譬えば「一切の川流江河の諸水の中に海これ第一なるが如く法華經を持つ者も亦復是くの如し、又衆星の中に月天子最もこれ第一なるが如く法華經を持つ者も亦復是くの如し」等と御心えあるべし、当世日本國の智人等は衆星のごとし日蓮は満月のごとし。

も百千万億倍も勝れている。彼の徳光論師は弥勒菩薩を礼拝しなかつたし、大慢婆羅門は四人の聖人を柱として、その上にすわったという。また大天は凡夫でありながら阿羅漢と名のり、無垢論師はインド第一といった。これらのものはみな、阿鼻地獄におち無間地獄の罪人となった。汝は何ゆえに一閻浮提第一の智人と名のるのか。地獄におちないわけがない。じつに恐ろしいことである。

答えていわく、汝は七慢、九慢、八慢等を知っているのか。釈尊は三界第一と名のられた。これに對していつさいの外道は、ただいま天に罰せられるであろう、大地が割れて入るであろうなどといった。日本国においては奈良の七寺の三百余人が「最澄法師は大天の生まれかわりか、鉄腹婆羅門が再誕したのか」等といった。しかし天も罰することなく、かえって左右を守護し、地も割れないで、金剛のごとくであった。伝教大師は比叡山を立てて、一切の衆生の眼目となった。結局、伝教を非難した奈良七大寺は伝教大師に降伏して、その弟子となり、諸国の人々はみな檀那となったのである。されば事実勝れていることを勝れているということは、慢に似てじつは大功德となるのである。

伝教大師は「天台法華宗が諸宗より勝れている」ということは、依りどころとする法華經が勝れているからである。ゆえに自讃毀他ではない」といつている。また法華經第七には「多くの山の中では須弥山が第一である。この法華經も同じで、多くの經典の中において、もっともその上にあるのである」とある。この經文は、已説の華嚴、般若、大日經等や、今説の無量義經、それに当説の涅槃經等の五千、七千、インド、竜宮、四王天、忉利天、日月の中的一切經およびそのほか十方世界のあらゆる経々は土山、黒山、小鉄围山、大鉄围山のようなものであるが、日本へ渡った法華經は、須弥山のようなものであるとの意である。

また同品に「よくこの經典を受持するものも、またこのとおりであって、一切衆生の中においてまた第一である」とある。この經文から考えてみると、華嚴經けだんを持つている普賢菩薩ふげん、解脫月菩薩げだつがつ等や、竜樹菩薩りゅうじゆ、馬鳴菩薩めみやう、法藏大師ほうぞう、清涼國師せいりやうこくし、則天皇后すくねみかど、審祥大德しんじやうだいとく、良弁僧正らうべんそうぢやう、聖武天皇等や、また深密じんみつ、般若經はんにやを持つている勝義生菩薩しょうぎしやう、須菩提尊者しゆぼだい、嘉祥大師かじやうだいし、玄奘三藏げんじやうさんざう、太宗、高宗、觀勒かんろく、道昭、孝德天皇等や、更に真言宗の大日經を持つている金剛薩埵こんどうさつた、竜猛菩薩りゆうみゆう、竜智菩薩りゆうち、印生王いんしやうおう、善無畏三藏ぜんむいさんざう、金剛智三藏こんどうちさんざう、不空三藏ふくうさんざう、玄宗、代宗、慧果けいか、弘法大師、慈覺大師等や、それに涅槃經ねはんを持つている迦葉童子菩薩かしようどうじ、五十二類、曇無讖三藏どんむせんさんざう、光宅寺の法雲こうたくじほううん、南三北七の十師等よりも、末代惡世の凡夫で、一戒も持たず、一闡提いつせんたいのように人には思われているが、經文どおりに已今当いこんとうに勝れている法華經より外は仏になる道なしと強盛かうじやうに信じて、しかも一分の解げもない人々の方が、彼の大聖等より百千万億倍も勝れているという經文である。

それらの人々は、あるいは、法華經へ移るために彼の經々にしばらく人を入れる人もあり、あるいは彼の爾前經しやうぜんきやうに執著しやくちやくして法華經へ入らぬ人もあり、あるいは彼の經々にふみとどまるのみならず、彼の經々に深く執著するゆえに、法華經を彼の經より劣るという人もある。さればいま法華經の行者は、譬え「いつさいの川流、江河の諸水の中にあつて、海が第一であるように、法華經を持つ者もまたまた同じである。また多くの星の中に、月天子がもつとも第一であるように、法華經を持つ者もまたまた同じである」とあるが、この經文のように心得るべきである。当世日本國の智人等は、多くの星のようなものであり、日蓮は満月のようなものである。

慢煩悩まんぼんのう

他人を輕蔑けいべつして自身を恃たのみ、心がおごり高ぶる煩悩のこと。慢煩悩には、七慢・八慢・九慢などの種々の分類がある。

七慢 七種の慢のこと。自己を實際以上に高く見せようとすることを慢という。慢・過慢・慢過慢・我慢・増上慢・卑慢・邪慢の七つ。①慢。劣れる他人に対して自分が勝れると思い、等しい他人に等しいと思うこと②過慢。他人に等しいのに自分が勝れると思い、他人が勝れているのに自分と等しいと思うこと③慢過慢。他人が勝るのに自分がより勝れると思うこと④我慢。自分勝手な意見に執着すること⑤増上慢。法理などをいまだ得ていないのに得たと思うこと⑥卑慢。他人の方がはるかに勝るのに自分は少ししか劣っていないとすること⑦邪慢。自分は徳がないのに徳のあるように見せること。『品類足論ほんるいそくろん』卷一（大正二十六卷六九三頁）等に説かれている。

九慢 九種の慢のこと。『俱舍論』卷第十九（大正二十九卷一〇一頁）に説かれる。①我慢類。我と等しいものなかでは、我が勝れていると思うこと②我慢類。我よりも勝れている者に対して、我と等しいと思うこと③我慢類。我よりも多分に勝れているものに対し、自分は少し劣れると思うこと④有勝我慢類。実際には他は我より勝れているのに、謙遜をよそおって他は我より勝れていると思うこと⑤有等我慢類。他は我と等しいと思うこと⑥有劣我慢類。等しいのに他が我より劣れると思うこと⑦無勝我慢類。他は我よりも勝れることはないと思うこと⑧無等我慢類。他が我と等しいことはないと思うこと⑨無劣我慢類。実際には他は我よりも勝れているのに、謙遜をよそおって他が我よりも劣れることはないと思うこと。

八慢 慢を八種に分けたもの。『成実論』卷十（大正三十二卷三一四頁）にある。①慢。他人より劣っているのに自分の方が勝れていると思ひ高ぶること②大慢。対等の立場にありながら、自分のほうが勝れていると思ひ高ぶる

こと③慢慢。自分が他人よりも勝れていることを鼻にかけて相手を見下すこと④我慢。五陰すべて我であるとみること⑤増上慢。まだ悟りを得ていないのに得たとしていつわり高ぶること⑥不如慢。他人が自分より多分に勝れているのにその差は僅かであると思い高ぶること⑦邪慢。実際には自分には徳がないのにあると思い高ぶること⑧傲慢。善人や勝れた人に対して礼をなさず尊敬しないこと。

徳光論師は弥勒菩薩を礼せず 徳光論師は、生没年不明。インドの論師。梵名グナプラバ (Gunaprabha) を音写して瞿拏鉢刺婆と書き、その漢訳。『大唐西域記』巻四によると、幼少の時から英才で、博識碩学を誇っていた。大乘経を学んでいたが、奥義を究めないうちに『毘婆沙論』を見て小乗に転じ、数十部の論をつくって大乘を批判した。しかし、大乘、小乗の疑いが解けなかったので天軍羅漢に解決を請い、羅漢の神力で天宮に登り、弥勒菩薩に対面した。徳光が弥勒を礼拝しないので、羅漢がその慢心の非を責めると、自分は出家の弟子であるが弥勒は出家の僧ではないため礼拝しないと答えた。弥勒菩薩は徳光の慢心の姿を見て、法器にあらざると知り、法を教えなかったので、徳光はついに自分の難問を解決することができなかったという。

大天は凡夫にして阿羅漢とななる 「大天」(摩訶提婆のこと)については『大毘婆沙論』などに述べられている。在俗のとき三逆罪をおかし、父母および阿羅漢を殺した。その滅罪のために摩訶陀国の鷄園寺で出家した。ことば巧みに人々の尊敬を得たことをよいことにして、また五悪見と慢心を生じて自分から阿羅漢を得たと称した。臨終は悲惨であった。

無垢論師が五天第一といふし 無垢論師とは五、六世紀頃の小乗の論師。梵名はヴィマラシトウラ (Vimalamitra) とし、無垢友と訳す。『大唐西域記』巻四によると、インドの迦淫弥羅国の人。説一切有部に属し、広く衆経、異論を学んだ。世親の『俱舍論』に論破された衆賢の教義を再興し、大乘の名を絶やして世親の名声を滅

ぼそうと誓いを立てた。しかし、その誓願の終わらぬうちに舌が五つに裂け、後悔しながら無間地獄に墮ちたといわれる。

大覺世尊は三界第一となのらせ給う 釈尊は長阿含經、瑞應經などに「天下唯我独尊」といい、法華經譬喻品第三にも「今此の三界は 皆是れ我が有なり 其の中の衆生は 悉く是れ吾が子なり（中略）唯我れ一人のみ 能く救護を為す」（妙法蓮華經並開結二三三頁）等といっている。

鉄腹が再誕か 鉄腹とは南インドの僞慢の外道である提舍のあだな。腹に一切の智慧を入れていたのでふくれて破裂することを恐れ、腹に鉄の板を巻いていたという。

伝教大師云く「天台法華宗の……」 伝教大師の『法華秀句』卷下仏説諸經校量勝五の文。（『伝教大師全集』卷三、

二五三頁）

法華經第七に云く「衆山の……」 法華經第七卷の藥王品第二十三の文（妙法蓮華經並開結六〇〇頁）。衆山とは、土山、黒山、小鉄圀山、大鉄圀山、十宝山の五山をいう。

竜宮 竜族の王城のこと。竜樹菩薩伝には、竜樹が仏法の奥義を知ろうとして苦悩していた時、これを見た大竜菩薩は、竜樹を大海の竜宮に案内し、七宝蔵の中から大乘經典を与えたとある。

土山・黒山 古代インドの世界観では須弥山を中心に九山八海があるといわれる。土山、黒山はその九山の一つであり、須弥山の外輪山に相当するもの。法華經藥王品第二十三には、この山々と須弥山を相對して述べている。

又云く「能く是の經典……」 法華經藥王品第二十三の十喻の文。（妙法蓮華經並開結六〇一頁）

清涼国師（七三八年―八三九年）。澄觀のこと。唐代華嚴宗の第四祖。姓は夏侯氏、字は大休。十一歳で出家し、法華經をはじめ大乘の諸經論を研究し、大曆十年（七七五年）に妙樂について天台の止觀を学び、更に多くの名師

を訪ねて広く内外の諸経論を修めた。その後、五台山華嚴寺（清涼寺）で学徒のために華嚴経を講じ、述作に励んだ。正統華嚴学の復興および弘教に功があったとして、皇帝から清涼法師、続いて清涼国師の号を受けた。著作には、『華嚴経疏』六十卷、『華嚴経随疏演義抄』九十卷、『華嚴経五蘊観』一卷などがある。

勝義生菩薩

解深密経の対告衆。

二教論指光抄には報身如来が法相宗の深密の三乗を説いた時の対告衆とある。また解深密経卷二無自性相品には、勝義生菩薩は釈尊に「釈尊はなぜ一切法は皆自性無く、生も無く、滅も無く、

本来寂靜、自性涅槃であると説いたのか」（趣意）と尋ね、釈尊はこの質問に答えて密意（本意）を説き明かしたとある。

須菩提尊者

梵名スブーティ（Subhūti）の音写。須浮帝、須扶提とも書く。釈尊十大弟子の一人。三周の声聞のうち中根の四大声聞の一人。舎衛城の長者鳩留の子。負黎婆羅門の子として生まれたためその名を負黎（Brāhmin）

という。智慧聡明で及ぶ者がなかったが、性質が偏頗で、見るものすべてに怒りをおぼえたという。家を出た後、祇園精舎で釈尊に会い即座に弟子となった。『法華文句』には「須菩提これ空生と翻ず」とあり、阿羅漢果を得た須菩提はよく空理に通じ、解空第一と称せられた。また法華経譬喻品第三の三車火宅の譬を聞いて開三顯一の旨を領解し、信解品第四で長者窮子の譬によって領解の旨を述べた。ついで授記品第六では迦旃延、迦葉、目犍連と共に仏の授記を受けている。

金剛薩埵

密教を相承した八人の祖師のうちの第三祖。金剛手とも秘密主ともいう。大日経の対告衆で、大日経を

結集して竜樹に伝えたとされる。金剛界曼荼羅では三十七尊の一つで、胎藏界曼荼羅では金剛手院の主尊となっている。

竜智菩薩

生没年不明。南インドの人。真言宗付法第四祖。竜樹から密教の付法を受け、金剛智に付嘱したとい

う。数百年に及ぶ長寿をたもったとされるが、実在は疑問視されている。真言宗では、竜樹は迦那提婆に頭教を、竜智に密教を付嘱したとする。

印生王 二世紀頃、中インド僑薩羅羅國の王。引正王とも書く。仏教を信じ、竜樹に深く帰依していた。

玄宗・代宗 いずれも唐代の真言宗の外護者。

迦葉童子菩薩 梵名ボーディサットウヴァカーシャパ (Bodhisattva Kāśyapa)。涅槃經卷二十三迦葉菩薩品第十二の対告衆。迦葉童子、迦葉菩薩ともいう。摩訶迦葉とは別人。涅槃經では仏に三十六の質問を發しているが、爾前經の会座にもつらならず、法華經の会座にももれた拮拾 (涅槃經) の機根の者。

五十二類 仏の涅槃の会座に集來した五十二の異類の衆生のこと。『涅槃經疏』卷一にある。五十二衆ともいう。釈尊が雙林で入滅しようとした時、諸大比丘、諸比丘尼、諸菩薩、諸優婆塞、諸優婆夷など五十二の異類の衆生が、その放光を見て涅槃會上に參集した。

曇無讖三蔵 (三八五年—四三三年)。曇無讖のこと。梵名ダルマラクシャ (Dharmarakṣa)。中インドの涅槃學派の僧。十歳の時に出家し、達摩耶舎について小乗を学んだ。しかし、白頭禪師から授けられた樹皮の涅槃經本を見て大いに驚き、自ら悔い大乘に転向した。以後、大乘經典を求めて龜茲國を訪れ、また姑蔵に入り、河西王蒙遜の厚遇のもとに諸大乘經を訳すが、その数六十余万言ともいわれ、主なものに大般涅槃經四十卷、方等大集經二十九卷、方等大雲經四卷、方等王虛空藏經五卷、海竜王經四卷、金光明經四卷、悲華經十卷、菩薩地持經八卷等がある。宋・元嘉十年 (四三三年)、更に梵本を集めようと西國に向かったが蒙遜の遣わした刺客に殺された。

譬えば「一切の川流……」法華經藥王品の十喩のうちの第一、水の譬えの文。(妙法蓮華經並開結六〇〇節)
又衆星の中に月天子……法華經藥王品の十喩のうちの第三、衆星の譬えの文。(妙法蓮華經並開結六〇〇節)

この章は外難を遮しやされる段である。すでに日蓮大聖人は一閻浮提いちえんぶだい第一の法華經の行者であり、第一の智人であり、第一の聖人であり、第一の大人である等と述べられてきた。それに対して、そのことは仏教に明かすところの大慢より百千万億倍もすぎていると非難ひなんしているのである。そうした論難を破折はしやくされているのである。

「現に勝れたるを勝れたりという事は慢ににて大功德なりけるか」と。じつに日蓮大聖人が第一の聖人、智人、大人であらせられることは、現にそのように勝れているからなのである。そのゆえは日蓮大聖人は久遠くおん元初がんじよの自受用身じじゆうしんであり、事行の一念三千、人法にんぽう一箇いつかの南無妙法蓮華經の大御本尊の御当体であらせられるからである。

日蓮大聖人がそのように勝れているから、その大聖人の教えを信じ、大御本尊たみを持ち、南無妙法蓮華經と唱えるわれわれ末弟もまた一切に勝れているのである。本文に示されているように、華嚴宗、真言宗その他の各宗を信じている人たちは、いかに世間的には高位高僧であつても、持つところの經典が低級であるから、その思想も人格も低級になつてしまふのである。

御書に「法妙なるが故に人貴し」「〔南条殿御返事〕御書一五七八（一）と仰せであり、さらに「日蓮は一閻浮提第一の聖人なり（中略）此れ偏に日蓮が貴尊なるに非ず法華經の御力の殊勝なるに依るなり、身を

挙げれば慢ずと想い身を下せば經を蔑る」(「聖人知三世事」御書九七四六)と仰せであるが、これらの御書を合わせ拝すべきである。

彼の人人は或は彼の經經に等

三種の人を示されている。一には爾前經にぜんにしばらく人を入れて後に法華經を信じさせようとする者。これは色心ともに法華經を信ずるようになった者で、三論さんろんの嘉祥かじよう等である。「開目抄下」には「三論の嘉祥かじようは法華玄十卷に法華經を第四時・会二破二えに はにと定れども天台きぶくに帰伏して七年つかへ廢講散衆はいこうして身を肉橋となせり」(御書二一六六)と仰せである。二には爾前經にぜんに執著しゆじやくして法華に入らぬ者。これは心は移っても身の移らない者であり、法相じふさうの慈恩じおん等である。「開目抄下」には「法相の慈恩じおんは法苑林ほうおんりん・七卷・十二卷に一乘方便・三乘真実等の妄言多しもうげん、しかれども玄賛げんさんの第四には故亦両存等こやくりようぞんとうと我が宗を不定になせり、言は両方なれども心は天台に帰伏せり」(御書二一六六)と仰せである。三には爾前經にとどまるのみならず、彼の經に深く執するゆえ、法華經は爾前經より劣るという者。これは色心ともに法華に移らなかつた善導や法然等である。(以上、文段集三二二六の趣意)

第三十五章

現証の文を引く

問うて云く古へかくのごとくいえる人ありや、答えて云く伝教大師の云く「当に知るべし他宗所依の経は未だ最為第一ならず其の能く経を持つ者も亦未だ第一ならず天台法華宗は所持の経最為第一なるが故に能く法華を持つ者も亦衆生の中に第一なり、已に仏説に拠る豈自歎ならんや」等云云、夫れ麒麟の尾につけるだにの一日に千里を飛ぶといふ、転王に随える劣夫の須臾に四天下をめぐるというをば難ずべしや疑うべしや、豈自歎哉の釈は肝にめいずるか若し爾らば法華経を経のごとくに持つ人は梵王にもすぐれ帝釈にもこえたり、修羅を随へば須弥山をもになひぬべし竜をせめつかはば大海をもくみほしぬべし、伝教大師云く「讃むる者は福を安明に積み誇る者は罪を無間に開く」等云云、法華経に云く「経を誦誦し書持すること有らん者を見て輕賤憎嫉して結恨を懷かん乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」等云云、教主釈尊の金言まことならば多宝仏の証明たがずば十方の諸仏の舌相一定ならば今日本国の一切の衆生・無間地獄に墮ちん事疑うべしや、法華経の八の卷に云く「若し後の世に於て是の經典を受持し誦誦せん者は乃至諸願虚しからず、亦現世に於て其の福報を得ん」又云く「若し之を供養し讃歎すること有らん者は当に今世に於て現の果報を得べし」等云云、此の二つの文の中に亦於現世・得其福報の八字・当於今世・得現果報の八字・已上十六字の文むなしくして日蓮今生に大果報なくば如来の金言は提婆が虚言に同じく多宝の証明は俱伽利が妄語に異ならじ、謗法は一切衆生も阿鼻地獄に墮つべからず、三世の諸仏もましまさざる

か、されば我が弟子等心みに法華經のごとく身命もおしまず修行して此の度仏法を心みよ、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

通解

——問うていわく、昔もそのようにいった人がいるのか。

答えていわく、伝教大師は「まさに知るべし、他宗の依りどころとする經は未だ最も第一ではない。したがって能くその經を持つ人も第一ではないのである。天台法華宗は、持つところの經が最も第一であるから、よく法華經を持つ人もまた衆生の中の第一である。このことは、すでに仏説によるのであって、自分勝手にほめたたえているのではない」といつている。麒麟の尾についた蜉蝣は、一日に千里を飛ぶといひ、轉輪聖王に随っている劣夫は、瞬時に世界中をかけめぐるといふことを難じたり疑うものはないであろう。「あに自歎ならんや」といふ釈を肝に銘ずるべきである。そうであれば、法華經を經のとおり持つ人は、梵天にもすぐれ、帝釈にも越えているのである。修羅を従えれば須弥山をも荷い、竜を使えば大海も汲み乾すことができるのである。

伝教大師は「法華經を、讃める者は福を須弥山のごとく高く積み、謗る者は無間地獄へおちる大罪をつくる」と。法華經には「法華經を誦誦し書持する人を見て、輕んじたり賤しめたり、憎んだり嫉んだり、恨みをいだく、その人は命が終わって阿鼻地獄へおちるであらう」と。教主釈尊の金言が眞実ならば、また多宝仏の証明も違わず、十方の分身の諸仏の舌相がそのとおりであるならば、いま日本国の一切衆生が無間地獄へおちることは疑いないのである。

法華經の卷八には「もし後の世においてこの經典を受持し誦誦する者は、諸願が虚しからず、また現世において、その福報を得るであろう」とあり、また「もし法華經を供養し讚歎する人は、まさに今世において現の果報を得るであろう」とある。この二つの文の中に、「亦於現世・得其福報」の八字と、「当於今世・得現果報」の八字の以上十六字の文が虚しくて、日蓮が今生に大果報を得なければ、如来の金言は提婆達多の虚と同じになり、多宝如来の証明は俱伽梨の妄語に異ならない。そうであれば謗法の一切衆生も阿鼻地獄にはおちないし、三世の諸仏もないことになってしまう。されば我が弟子等よ、試みに法華經のとおり身命もおしまず修行して、このたび仏法を試みてみよ。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

伝教大師の云く「当に知るべし……」 伝教大師の『法華秀句』下の仏説十喻校量勝六の末文（『伝教大師全集』卷

三、二五七頁）。法華經藥王品第二十三の十喻によせて法華の最勝を述べた文である。

麒麟の尾につけるだにの一日に千里を飛ぶ 麒麟とは、一日に千里も走るといふ駿馬のことで、中国の想像上の動物。

物。蜚とは、人畜に寄生して血を吸う虫。すなわち、飛べない蜚でさえ、麒麟の尾にとりついていれば、一日に

千里も飛ぶことができる。『事文類聚後集』には「蒼蠅は飛ぶこと十歩に過ぎず、自ら麒麟の尾について乃ち千

里の路を騰る」とある。

転王に随える劣夫の須臾に四天下をめぐる 転輪聖王は、一瞬の間に四天下をめぐることをできるといふ。劣夫と

いえども転輪聖王にしたがえば、同じく一瞬に四天下をめぐることをできるのである。竜樹の『大智度論』九に

仏の神力を説いて「たとえば転輪聖王飛行するに一切の當従及びもろもろの象馬衆畜みなまた随い去るがごと

く……」(大正二十五卷一二三六) などとある。

修羅しゆらを随へば須弥山しゆみせんをもになひぬべし 雜譬喻經ぞうひゆには「(修羅は) 四大海水膝ひざを過ぐる能わずして大海中に立ち、身

須弥しゆみを過ぎて手山頂てとうりに拠りて忉利天とうりを下觀す」(大正四卷五二六六) とある。

竜りゆうをせめつかはば大海をもくみほしぬべし 竜王のすむ竜宮には、宝の兩珠があつて、旱珠かんを入れれば海水が減じ、満珠を入れれば海水が満ちてくるという。

伝教大師云く「讚あんみようむる者は福を安明あんみように積み誘そしる者は罪を無間に開く」 伝教大師の『依憑天台集えひよう』の文である

(『伝教大師全集』卷三、三六四頁)。安明あんみようとは須弥山しゆみせんのことで、無間とは無間地獄のことである。すなわち三大秘法の大御本尊を讚歎さんたんするものは須弥山のように大きな福運をわが身につみ、大御本尊を誹謗するものは無間地獄におちるという意である。また日寛上人は、御本尊を讚歎するのにこの文を引かれる意は、自受用身じじゆうしん即一念三千なるゆえであると仰せである。(文段集三二三六)

法華經に云く「經を讀誦ひゆし……」 法華經譬喻品第三の文。(妙法蓮華經並開結二四一頁)

十方の諸仏の舌相 法華經神力品第二十一の十神力の第一の吐舌相とぜつそうである。諸仏の広長の舌相は、法華經が虚妄ではないことを示している。

法華經の八の卷に云く「若し……」 法華經の第八卷、普賢菩薩勸發品第二十八の文。(妙法蓮華經並開結六七〇頁) 又云く「若し……」 同じく法華經勸發品の文。(妙法蓮華經並開結六七二頁)

日蓮今生に大果報なくば…… 日寛上人は「既にこれ閻浮第一えんぶの法華經の行者なり。既にこれ閻浮第一の智人なり。既にこれ閻浮第一の聖人なり。既に末法下種の教主と顕れ給えり。豈大果報に非ずや」(文段集三二三六) と仰せである。

この章は「現に勝れたる」といわれるその文証を引かれている。「法華経を経のごとくに持つ人は梵王にもすぐれ帝釈にもこえたり」の御文について、日寛上人は、梵王に勝れるとは親の徳であり、帝釈に越えるとは主徳である。そして師の徳は略されているが、前章の終わりの「日蓮は満月のごとし」は師の徳であると示されている（文段集三二三）。ここにおいて、「法華経を経のごとくに持つ」とは、大御本尊を日蓮大聖人の教えどおりに持つことである。そうすれば梵王にも勝れ、帝釈にも越えて、親の徳、主の徳をそなえ、さらに満月のごとき師徳をもそなえるのである。「法妙なるが故に人貴し」（御書一五七八）であって、大御本尊の功德により、われわれのごとき幼稚貧窮の徒も、すなおに信心、折伏に励んでいくならば、あらゆる社会、あらゆる職場において、なくてはならない存在となり、民衆の依怙依託となっていくのである。

現世に於て其の福報を得ん等

すでに本抄では、日蓮大聖人が兼知未萌の聖人であられるがゆえ、御在世中においても自界叛逆、他国侵逼とすべての御予言が的中したことを述べられた。さらに滅後の未来においてもまた、大聖人の御予言に寸分の違いがなかったことも本講義ですでに触れたとおりである。「法蓮抄」には「近き現証を

引いて遠き信を取るべし」(御書一〇四五^ヰ)と仰せられ、また「法門申さるべき様の事」には「小事たる今生の御いのりの叶はぬを用つてしるべし・大事たる後生叶うべしや」(御書一二六八^ヰ)と御指摘である。さらに「三三蔵祈雨事」には「日蓮仏法をこころみるに道理と証文とはすぎず、又道理証文よりも現証にはすぎず」(御書一四六八^ヰ)とも、また「顕立正意抄」には「設たとい日蓮富楼那ふるなの弁を得て目連もくれんの通を現かんずとも勘かんうる所当らずんば誰か之を信ぜん」(御書五三七^ヰ)とも仰せである。

要するに正しい仏法によってわれわれの願いがこの世においてかない、絶対の幸福を実現することができるのである。いま信心に折伏に励んでいても、さまざま不幸や悩みがあるかもしれないが、これらの一切の悩みを解決していくために、信心しているのである。ゆえに日蓮大聖人の仰せのごとく「我が弟子等心みに法華経のごとく身命もおしまず修行して此の度仏法を心みよ」の大精神をもって、何があっても強くたくましく進んでまいりたい。

第三十六章

御身の符合を明かす

そもそも

抑此の法華經の文に「我身命を愛せず但無上道を惜しむ」涅槃經に云く「譬えば王使の善能談論して方便に巧なる命を他國に奉るに寧ろ身命を喪うとも終に王所説の言教を匿さざるが如し智者も亦爾なり凡夫中に於て身命を惜まざる大乗方等如來の秘藏一切衆生に皆仏性有りと宣説すべし」等云云いかやうな事のあるゆへに身命をすつるまでにてあるやらん委細にうけ給わり候はん、答えて云く予が初心の時の存念は伝教・弘法・慈覺・智証等の勅宣を給いて漢土にわたりし事の我不愛身命にあたるか、玄奘三藏の漢土より月氏に入りしに六生が間・身命をほろぼししこれ等か、雪山童子の半偈のために身をなげ、藥王菩薩の七万二千歳が間・臂をやきし事かなんどもをひしほどに經文のごときんば此等にはあらず、經文に我不愛身命と申すは上に三類の敵人をあげて彼等がのりせめ刀杖に及んで身命をうばうともみへたり、又涅槃經の文に寧ろ身命等ととかれ候は次下の經文に云く「一闍提有羅漢の像を作し空処に住し方等經典を誹謗す、諸の凡夫人見已つて皆眞の阿羅漢是れ大菩薩なりと謂わん」等云云、彼の法華經の文に第三の敵人を説いて云く「或は阿蘭若に納衣にして空閑に在つて乃至世に恭敬せらるること六通の羅漢の如き有らん」等云云、般泥洹經に云く「羅漢に似たる一闍提有つて惡業を行ず」等云云、此等の經文は正法の強敵と申すは惡王惡臣よりも外道魔王よりも破戒の僧侶よりも、持戒有智の大僧の中に大謗法の人あるべし、されば妙樂大師かいて云く「第三最も甚し後後の者は轉識り難きを以ての故なり」等云云、

法華經の第五の卷に云く「此の法華經は諸仏如来の秘密の藏なり、諸經の中に於て最も其の上かみに在り」等云云、此の經文に最もつとも其在そのかみ上ありの四字あり、されば此の經文のごときんば法華經を一切經いただきの頂いただきにありと申すが法華經の行者にてはあるべきか、而るを又国王に尊重せらるる人人あまたありて、法華經にまさりてをはする經經ましますと申す人にせめあひ候はん時、かの人は王臣に御ご帰依きえあり法華經の行者は貧道ひんどうなるゆへに、国こそつてこれをいやしみ候はん時、不輕菩薩のごとく賢愛論師がごとく申しつをらば身命に及ぶべし、此れが第一の大事なるべしとみへて候此の事は今の日蓮が身にあたれり、予が分齊ぶんさいとして弘法大師・慈覺大師・善無畏三藏・金剛智三藏・不空三藏などを法華經の強敵なり經文まことならば無間地獄は疑なしなんと申すは裸形あかはだかにて大火に入るはやし須弥しゆみを手にとてなげんはやすし大石を負うて大海をわたらんはやすし日本国にして此の法門を立たてんは大事なるべし云云。

靈山淨土の教主釈尊・宝淨世界の多宝仏・十方分身の諸仏・地涌千界の菩薩等・梵釈・日月・四天等・冥みように加くし願けんに助け給はずば一時一日も安穩あんゑんなるべしや。

通解

——そもそも、この法華經の文には「われ身命をおしまず、ただ無上道を惜しむ」とある。また涅槃經ねはんには「たとえば談論にすぐれ交渉にたくみな王の使いが、王の命をうけて他国に行つたときには、むしろ身命をうしなつても必ず王からのことばをかくさずに述べて王命をはたすように、仏法をひろめる智者も

また同じである。凡夫のなかにあつて身命をおしまずに如来の秘要の蔵である大乘方等の教え、すなわち一切衆生にみな仏性があるという法門を宣説しなさい」等と説かれている。

どのような理由があつて、身命まで捨てなければならぬのであろうか。くわしく、うけたまわりたいものである。

答えていうには、私が初心のころの考えでは、伝教大師や、弘法、慈覚、智証などが、勅命を受けて中国に渡ったことが、我不愛身命にあたるのではないかと思つていた。また、玄奘三蔵が中国からインドに行くのに、六度も生命をうしなつたことが、そうではないのかとも思つた。さらに、雪山童子が半偈のために身体を投げたことや、薬王菩薩が七万二千歳のあいだ、臂を焼いたことなどではないのか等と考へたのであるが、経文によれば、これらのことではないのである。

経文に我不愛身命とあるのは、その前に三類の敵人をあけて、彼等が悪口したり迫害したり、ついには刀や杖で傷つけ、身命までも奪うであらうと説かれている。また、涅槃經の文に、むしろ身命をうしなうとも、と説かれているのは、その次の経文に「一闍提があり、羅漢の姿をして、静かな所などに住み、大乘方等經典を誹謗する。多くの凡夫は、その邪惡な人を見て、みな眞の阿羅漢であり、大菩薩であらうというであらう」と書かれている。また、その法華經の経文に、第三の敵人を説いているのには「あるいは静かな所に住み三衣を身につけ、世の人々から六神通をえた羅漢のようになやまわれている者がいる」等とある。また、般泥洹經には「羅漢に似た一闍提があつて、惡業をはたらいっている」等と説かれている。

これらの経文によれば、正法の強敵というのは、惡王や惡臣よりも、外道や魔王よりも、また破戒の僧侶よりも戒律を固く持ち智者といわれる高僧のなかに、大謗法の人がいるということである。ゆえに、妙

樂大師は「第三が最も邪悪である。後々の者はなかなか邪見を見破れないからである」といつている。

また、法華經の第五の卷には「この法華經は、諸仏如来の秘密の宝蔵である。ゆえに、あらゆる經々のなかで、もつとも上に位する」と説かれている。この經文には「最在其上」という四字がある。ゆえに、この經文のとおりであるならば、法華經を一切經の頂にあるという人が、法華經の行者といふべきではないか。しかるに、国王に尊重される人々がたくさんいて、法華經よりもすぐれている經々があるという者たちと法論するとき、その者たちは王臣の帰依があるが、法華經の行者は貧道なので、国中の人々がこぞって法華經の行者をいやしむときに、不輕菩薩や賢愛論師のように、強く破折するならば、身命におよぶ大難がおこるであろう。これが、第一の大事であると書かれているのである。

このことは、いまの日蓮の身に符合している。日蓮の分齊として、弘法大師や、慈覺大師や、善無畏三蔵、金剛智三蔵、不空三蔵などを、法華經の強敵であり、經文が真実であるならば無間地獄におちることは疑いないなどというのは……、赤裸のまま大火に入ることとはやさしい、須弥山を手にとって投げることやさしい、また大石を背負って大海原を渡ることもやさしいことであるが、日本国でこのようにいうことは、大事なのである。

靈山淨土の教主釈尊、宝淨世界の多宝仏、十方分身の諸仏、地涌千界の菩薩、梵天、帝釈、日天、月天、四天王などの冥顯のご加護がなければ、一日一時も安穩でいられようか。

語 訳

此の法華經の文に「我身命を……」法華經勸持品第十三の文。(妙法蓮華經並開結四四三六)

無上道 これ以上に勝れたものがないこと。最高、最上の意。有上に対する語。無上、無上宝聚、無上正覺、無上菩提などという。

雪山童子 せつせんどうじ 釈尊が過去世で修行していたときの名。涅槃經卷十四に出てくる。釈尊が過去世に雪山で菩薩の修行をしていた。そこで木の実を食べ、思惟坐禪して無量歳を経た。ある時、帝釈天が羅刹らせつ（鬼）に化身けしんして現れ、童子に向かつて過去仏の説いた偈を「諸行無常・是生滅法」と半分だけ述べた。これを聞いた童子は喜んで、残りの半偈を聞きたいと願い、この身を捨て、羅刹に食べさせることを約束して後の半偈の「生滅滅已・寂滅為樂」を聞き終え、その偈を石、壁、樹、道に書写してから高い樹に登り、身を投げた。その時、羅刹は帝釈天の姿に戻り、童子の体を受け止め大地に置き、その不惜身命の姿をほめて、未来に必ず成仏するであろうと説いて姿を消したという。

藥王菩薩の七万二千歳が間・臂ひじをやき 藥王は衆生に良藥を施して、心身の病を治す菩薩。法華經藥王菩薩本事品第二十三には、過去世に一切衆生喜見菩薩として日月淨明德仏のもとで修行し、ある世では身を焼き、また次の世では七万二千歳があいだ臂ひじを焼いて燈明として仏に供養したことが説かれている。

三類の敵人 三類の強敵ともいう。仏滅後の惡世に法華經の行者を種々の形で迫害する敵人のこと。法華經勸持品第十三に説かれる。妙樂大師は『法華文句記』卷八のなかで、勸持品の文から三類に約している。①俗衆増上慢ぞくしゆぞうじようまん（法華經を弘める者に対して惡口罵詈めり等したり刀杖を加えたりして迫害する、仏法に無智な在家の人）②道門増上慢どうもんぞうじようまん（邪智で心が曲がり、覺りを得たと錯覺している我慢の心の強い出家者）③僭聖増上慢せんしやうぞうじようまん（山林に住み衣を着て、眞実の仏道を行じたと思い込み、人を輕蔑し自らは利益のみにとらわれ、しかも在家に法を説き、世間から敬われ、権力を利用して正法を弘める者を迫害する出家者）の三つ。

阿蘭若^{あれんにや} 法華經勸持品第十三の文。無事閑静処^{ぶじかんじょうしよ}と訳す。人里をはなれた山寺などで、僭聖増上慢が人々に邪法を説

く場所。

納衣^{のうえ} 法衣の一種。人の捨てた布を拾い集めて洗濯し、これを縫いつくろって作った法衣。納はつくろうの意。

「衲衣」とも書く。汚い布切れを集めて作るので糞掃衣^{ふんぞうえ}ともいう。また納衣は十二頭陀行^{ずだ}の一つ。

六通^{ろくつう}の羅漢^{らかん} 六神通を得た阿羅漢のこと。六神通は如意神通（自身の変貌が自在でどこにでも行ける）、天眼通（遠近大

小にかかわらず何でも見える）、天耳通（何でも聞こえる）、他心通（他人の考えがわかる）、宿命通（衆生の過去世の生涯

がわかる）、漏尽通（一切の煩惱を断じ尽くすことができる）をさす。阿羅漢は声聞の最高位（無学）。宿命通までの五

通は外道の仙人でも成就できるが、第六通の漏尽通は阿羅漢位でなければ成就できないので、六神通を得た阿羅

漢を六通の羅漢という。

般泥洹經^{はつないおん} 大般泥洹經六卷のこと。中国・東晋代の法顕の訳。釈尊の入涅槃のありさまとその時に説かれた説法を

記した涅槃經の漢訳の一本。北凉代の北本・大般涅槃四十卷のうち、前十卷に相当する。

妙樂大師かいて云く「第三最も……」妙樂大師の『法華文句記』の文。

法華經の第五の巻に云く「此の法華經……」法華經第五卷、安樂行品第十四の「誓願安樂行」の文。（妙法蓮華經

並開結四六五六一）

貧道 僧がみずからを呼ぶ謙称^{けんしょう}。すなわち道を修めることが、きわめて貧しいという意からいわれる。

宝浄世界 東方にある多宝仏の本国。東方宝浄世界という。法華經見宝塔品第十一には、「東方の無量千万億阿僧

祇の世界に、国を宝浄と名づく」（妙法蓮華經並開結四〇二六一）とある。

すでに日蓮大聖人が末法の御本仏であり、一閻浮提第一の智人であり、聖人であり、大人であることを明かされてきたが、この章は、最後に、釈尊の予言に日蓮大聖人の御身が符合することを明かされている。その予言として法華經勸持品第十三の「我身命を愛せず」の文と、涅槃經の「譬えば王使の善能談論して……」の文を挙げられている。いずれも三類の強敵と、身命を捨てて戦い抜くという経文である。

「身命を捨てる」とはいかなる意味か。それは本文に示されているように、時によって異なるのである。ある時には万里の波濤を渡って、教えを求め、經典を求めることであり、またある時には、半偈のために身を投げたり、七万二千歳の間、臂を焼くことが身命を捨てることになる。しかしながら末法の日蓮大聖人にとっては、三類の強敵と戦うことがこれにあたるのである。われわれは日蓮大聖人の眷属であるゆえ、われわれの身命を捨てるのも、三類の強敵との戦いにあることはいうまでもない。

創価学会の実践活動

日蓮大聖人の滅後七百年になろうとしているが、この間に大聖人の仰せのごとく、身命を捨てて三類と戦ったのが、わが創価学会である。初代牧口会長の不惜身命の戦いについて、戸田前会長は次のよう

に述べられている。「創価学会の歴史と確信」にいわく「牧口会長のあの確信を想起せよ。絶対の確信に立たれていたではないか。あの太平洋戦争のころ、腰抜け坊主が国家に迎合しようとしているとき、一国の隆昌のためには国家諫暁こつかんぎようよりないとして、『日蓮正宗をつぶしても国家諫暁をなして日本民衆を救い、宗祖の志をつがなくてはならぬ』と厳然たる命令をくだされたことを思い出すなら、先生の確信のほどがしのばれるのである」(『戸田城聖全集』第三卷一一八頁)と。

さらに戸田前会長はご自身の会長就任のご確信を次のように述べられている。同書にいわく「しかるに、こんどは学会総体に偉大な自覚が生じ、偉大なる確信に立って活動を開始し、次のごとく、牧口会長にこたえることができたのである。『教相面すなわち外用げゆうのすがたにおいては、われわれは地涌じゆうの菩薩であるが、その信心においては、日蓮大聖人の眷属であり、末弟子である。三世十方の仏菩薩の前であらうと、地獄の底に暮らそうと、声高らかに大御本尊に七文字の法華経を読誦したてまつり、胸にかけたる大御本尊を唯一の誇りとする。しこうして、日蓮大聖人のお教えを身をもってうけたまわり、忠順に自行化他にわたる七文字の法華経を身をもって読みたてまつり、いっさいの邪宗を破って、かならずや東洋への広宣流布の使徒として、私どもは、故会長の意志をついで、大御本尊の御前において死なぬのみであります』この確信が学会の中心思想で、いまや学会に瀰漫びまんしつつある。これこそ発迹顕本ほつしやくけんぽんであるまいか」(同前一二〇頁)と。

以上のような決意のもとに、牧口初代会長は軍部、特高警察と戦いつつ、巢鴨すがもの拘置所こうちしよにおいて獄死

され、戸田前会長は出獄されて、じつに八十万世帯の大折伏を成し遂げられたのである。昭和十八年、いよいよ軍部、特高警察の弾圧が開始されようとしているとき、牧口会長はただひとり国主諫曉を叫ばれた。そして門下の弟子に対しては、発迹顕本はつしやくけんぽんを強く要求された。この牧口会長に応えて、戸田会長は昭和二十六年、ようやく学会全体が発迹顕本したとされ、偉大な確信に立って、折伏の太行進の開始を宣言されたのが、前述の一文である。

広宣流布の実現

数百年にわたる弾圧の歴史もようやく終わり、ここに順縁広布の時代を迎え、わが創価学会は五百万世帯の折伏を成し遂げた。しかして昭和三十九年四月一日、二日にわたる、大客殿の落慶法要と、恩師の七回忌を期し、さらに新しい時代への自覚が学会全体にみなぎりつつある。

恩師戸田前会長は、「開目抄」講義に、三類の強敵ごうてきを次のように論じている。「禅、念仏、律、真言等

の既成宗教は、あるいは皇帝との姻戚関係いんせきを結び、あるいは一部の者が政界に進出して腐敗墮落ふはいだらくの先頭に立ち、あるいは大学等を経営して学者ぶりをみせてはいるものの、彼らには民衆の心を動かし、世論を呼び起こすような力があるかどうかはなはだ疑問である。日蓮宗各派と称するものも惰眠だみんを貪り、葬式屋そうしきやに転落した点においてはまったく同じである。むしろ大衆の生活に喰い入っている点では、霊友会、立正交成会、天理教等のごとき、まったくお話にならない愚迷ぐめいの新興インチキ宗教のほう

が一步進んでいるではないか。これとて第三類とは思われない。しこうしてさらに思考するに、世間の人々に指導者として信頼される学者および評論家、文学者および世の指導機関たる一流の日刊新聞の論説などが、その利益および感情等のために官憲等と結んで、下種仏法とその広宣流布への活動に強く攻撃を加える時が現れるとすれば、第三類の強敵出現と断ずることができであろう」(『戸田城聖全集』第六卷四〇〇頁)と。

以上、戸田前会長の論じられたように、われわれの敵は第三類であるが、その正体は寺の中に住んでいる線香臭い坊主ではない。そのような寺や神社は荒廃をきわめ、民衆の心はすでに離れ切っている。いま広宣流布実現の戦いにおける第三類とは、一流の評論家等である。

いままでに、これらの機関が創価学会に対して、攻撃を加えてきたことはしばしばあった。去る五月三日の第二十七回総会において、広宣流布への一つの大事な分野として、政界への関与を表明してから、あらゆる報道機関がこれを取りあげ、国家権力の座にあるあらゆる者がこれに注目し、論評し、驚き、怒り、嫉み等々、さまざまの反応を示しつつある。いよいよ第三類の出現の胎動と断定できよう。

ここに深く思いをいたすべきことは、たとえ第三類が出現しても、いまは順縁広布の時である。いたずらに敵をつくったり、抗争したりすべきではない。「魔及び魔民有りと雖も、皆仏法を護らん」(妙法蓮華経並開結二九五頁)という時代であり、もし広宣流布を妨害するものがあれば、これらの魔および魔

民たちが、仏法を守る働きをなすことを強く確信して進むべきなのである。

此の法門を立てんは大事なるべし

日蓮大聖人の御弘通にあつては、鎌倉幕府から流罪^{るざい}、死罪^{しざい}の迫害^{はくがい}を受け、三類の強敵^{ごうてき}と戦い抜かれて本門戒壇の大御本尊を建立されたことが、「第一の大事」であつた。しかるに、わが創価学会の戦いは、流罪もなければ死罪もない。しからば、何が「第一の大事」かといえば、それは広宣流布の実現である。日蓮大聖人は国家権力と与^{くみ}した全邪宗教の破折を「裸形^{あかはだか}で大火に入る」よりも困難であると仰せられ、「此の法門を立てんは大事なるべし」と仰せられている。ゆえにわれわれにとつても、真実の広宣流布の戦いは、「裸形^{あかはだか}で大火に入る」よりも困難なのである。ゆえに御本仏日蓮大聖人が「冥^{みよう}に加し顕^{けん}に助け」給わんことを確信して、戦い抜く以外にない。

いまここに「撰時抄」講義を終わるにあたり、文化・教育・平和等に仏法を基調とした活動が、今後の広宣流布実現のための、最も重要な戦いであり、御本仏日蓮大聖人から必ずや賞賛^{しょうさん}されるであろうことを確信して筆をおくこととする。

後記

「池田大作全集」刊行委員会

本書は日蓮大聖人の五大部御書の一つ「撰時抄」の講義である。著者は五大部御書のうち、撰時抄の他に「立正安国論」と「報恩抄」の講義を刊行している。なお五大部の他の二編の「開目抄」と「観心本尊抄」については、第二代会長戸田城聖先生の講義があり、著者はそれに加筆して補訂版として昭和四十年に刊行しているが、本全集には収録されない予定である。

本全集の講義編としては、先に御消息文等の短編の御書講義集一編と『立正安国論講義』を上下二巻に分けて刊行しており、本書は講義編の第四冊目であり、全集全体の通巻では第二十七巻になる。

著者が本講義（日蓮大聖人御書十大部講義・第六巻撰時抄）を初めて世に問うたのは、昭和三十九年十一月であった。その年の四月に『報恩抄講義』を上梓^{じようし}しており、その半年後のことである。日蓮大聖人の御述作の順でいうと、「撰時抄」が建治元年で「報恩抄」が建治二年なので、当然、撰時抄が先になるところであるが後になった。そこには著者の深い思いがあったのである。

昭和三十九年という年は、恩師戸田先生が昭和三十三年に逝去^{せいきよ}されて六年後、すなわちその年の四月

二日は恩師の七回忌であつた。

昭和三十五年五月三日に、著者が三十二歳の若さで創価学会第三代会長に就任して以来、いやそれ以前から、恩師亡き後の創価学会の全責任を負つて、あらゆる障魔と戦いながら全学会を日蓮大聖人の仰せのままにリードしゆく著者の脳裏には、つねに恩師戸田城聖先生があつた。その恩師への報恩の赤誠^{せきせい}を込めて、七回忌を期してあえて撰時抄の講義よりも先に『報恩抄講義』を上梓^{じょうし}したのであつた。

ちなみに七回忌法要の席上、著者は『人間革命』発刊の決意を述べており、翌四十年一月一日を期して聖教新聞紙上に連載を開始している。

昭和三十九年は創価学会全体が大きな節を迎えた年であつた。会員数は待望の五百万世帯を突破し、総本山には大客殿が落成し、秋には公明党が結成されるなど、会長就任五周年を前にして、新しい広布の時代に向けて躍動の息吹^{いぶき}に満ちあふれていたのである。その最中に本講義が発刊されたのである。なお、今回、本全集収録に際して、若干の添削^{ほんとく}が施されていることをご了承願いたい。

さて撰時抄は、建治元年、すなわちその前年の三月に佐渡からお帰りになつた日蓮大聖人が、五月に身延へ入山されて、お弟子の育成と末法万年への布石とに本格的に取り組まれ始めた翌年^{あらか}に著された、御本仏としての広宣流布の大宣言書である。

総本山第二十六世日寛上人は「撰時抄愚記」に、「別して末法の時を撰取する両意」として次のよう

に述べられている。

「二には末法に於ては、必ず^{まさ}応に文底^{じんぴ}深秘の大法広宣流布すべし。

二には今末法に於て応に日蓮を以て下種の本尊と為^なすべきなり云云」(文段集二一七頁)

この「両意」のうち二番目の項目については、撰時抄以外にも「開目抄」をはじめ多くの御書に明かされているが、一番目の広宣流布への強き御確信については、撰時抄を除くと余り多くはない。

とくに世界広宣流布への御遺命^{ごゆいめい}ともいえる烈々たる御予言の数々は、撰時抄の最大の特色といってもよいであろう。まことに、日蓮大聖人の全生命を賭^とされた言々句々であると拝されるのである。

たとえば「仏滅後に迦葉^{かしよう}・阿難^{あなん}・馬鳴^{めみよう}・竜樹^{りゆうじゆ}・無著^{むしやく}・天親^{てんしん}・乃至天台・伝教のいまだ弘通しましませぬ最大の深密^{じんみつ}の正法経文の面に現前^{げんぜん}なり、此の深法・今末法の始^{はじめ}五五百歳に一閻浮提^{いちえんぶだい}に広宣流布すべきやの事不審極り無きなり」(御書二七二頁)と仰せである。

この「不審極り無きなり」の一言の中に、御自身が、仏滅後誰人もなしえなかった一閻浮提広宣流布の大業をなす時に遭遇されており、そのお立場にあることの喜びと感動との無量の思いが深く文脈に躍動しているように拝されてならない。

そしてこれらの御本仏の大精神に^{こた}応えて創価学会の出現とその実践があるのである。まことに世界広宣流布は御本仏の遺命であり、創価学会の使命なのである。

そして著者が、その世界広宣流布の最前線に立って、ここ数十年間にわたってその血路を切り拓^{ひら}いて

きたことは紛れもない歴史の事実である。

昭和三十五年五月の会長就任以来、同年十月の第一回南北アメリカ指導を皮切りとして、東南アジアや中近東に、ヨーロッパやオセアニアに、さらにソ連、中国、インドへと、その輝かしい足跡を刻みつけている。その結果、現在では全世界百十五カ国・地域に百二十六万二千人のメンバーが活躍するまじになったのである。そして二十一世紀に向けて、さらに本格的な世界広宣流布への展望が開けているのである。その淵源えんげんとなる御本仏の深き思いがこの「撰時抄」に収まっており、そこを出発として現在の輝かしい姿があるといえるのである。

その意味で、本抄ほど創価学会にとっても、また著者・池田大作にとっても好誼よしみのある御書は他にないといっても決して過言ではないであろう。

総本山第六十六世日達上人は「御書十大部講義・撰時抄」の発刊に序を寄せられ、その中で次のように述べられている。

「要するに、池田先生は、久遠くおん元初がんじよ本因ほんにん妙みょうの南無妙法蓮華經を、今の時に広宣流布せしめようとする念願のほか、なにもないのであります」

そしてそれに応えるような形で、著者は「もとより、広宣流布は仏意による。われらは、この仏意仏勅を奉じ、世界広布を唯一絶対の目標として、死身しんぐ弘法こうぼうの赤誠せきせいを尽くしてきた」と、その心情の一端を述べているのである。（「御書十大部講義・撰時抄」の自序）

およそ世間万般においても「時を知り」「時を得る」ことは肝要である。

とくに仏法においては、そのことが一切の基本になるのである。日寛上人は「撰時抄愚記」の中で「而るに（宗教の）五箇の中に於ては時を以て本と為す。若し時の一字を離れては、これを論ずること能わざるが故なり」（文段集二二三頁）と、時を離れては仏法を論ずることができないとまで強くお示しである。

そして日寛上人は同記の中でさらに「世間の浅き事すら尚此くの如し。況や仏法をや。故に涅槃經第八に云く『時を知る以ての故に大法師と名づく』と云云。文意に云く、時尅相應の道を知るを以ての故に大法師と名づくと云云。大法師とは能く法を説いて衆生を利する故なり」（同頁）と仰せである。

成仏への時尅相應の道を知って、その時に適った法を説いて衆生を利する人が大法師であるとのお言葉である。これは日蓮大聖人の御事を指すものである。その大法師たる大聖人に連なり、仰せのままに行動しているのが創価学会である。今、日本をはじめ全世界で何百万人もメンバーが、各々の宿業を乗り越え、功德を全身に受けて嬉々として信仰の道に励んでいる姿こそ、それをなによりも証明しているものと確信する。

平成四年一月二日

池田大作全集 第二十七卷 講義

発行日 一九九二年二月十一日

著者 池田 大作

発行者 秋谷栄之助

発行所 聖教新聞社

〒一六〇 東京都新宿区信濃町一八
電話〇三―三三三―六一一一（大代表）
振替口座 東京五―七九四〇七

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 大日本製本株式会社

*

定価はケースに表示してあります